

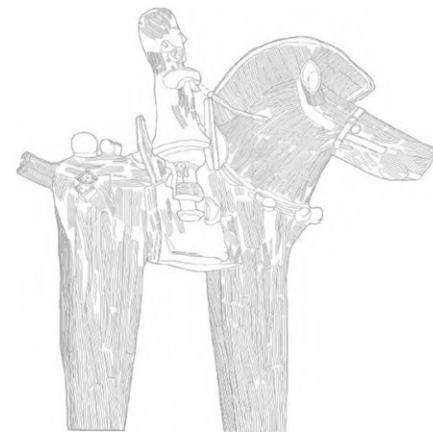


考古学講演会・講座の記録 1

考古学講演会・講座の記録 1



大阪・四天王寺の馬形埴輪



大阪・四天王寺の馬形埴輪

2016

前橋市教育委員会

2016.3

前橋市教育委員会事務局文化財保護課

目 次

1	平成26年度大室古墳の教室事業について	… 1 ~ 16
2	匠の教室・制作品完成記念 考古学講演会 「金井東裏遺跡と大室古墳群」 (右島 和夫：群馬大学講師)	… 17 ~ 32
3	講座・赤城南麓の考古学 2014 『赤城南麓の歴史遺産』 1 「旧石器人の道具箱」 (勢藤 力：伊勢崎市教育委員会) … 33 ~ 48 2 「陥穴と弓矢の狩り」 (大工原 豊：國學院大學講師) … 49 ~ 70 3 「前二子古墳と多田山古墳群のもがり屋」 (深澤 敦仁：群馬県教育委員会) … 71 ~ 83 4 「藤岡でつくられた前二子古墳の須恵器」 (藤野 一之：坂戸市教育委員会) … 85 ~ 101 5 「寺と役所」 (出浦 崇：伊勢崎市教育委員会) … 103 ~ 121 6 「古代群馬の鉄生産」 (笛澤 泰史：群馬県教育委員会) … 123 ~ 134	
付録	「史跡散策 赤城山南麓の大室古墳群と赤堀茶臼山 古墳を歩く」 (前原 豊：前橋市教育委員会) … 1 ~ 四	

1 本書は、2014年（平成26）年度に「前二子古墳等 歴史活き活き！史跡等総合活用整備事業」『大室古墳の教室』で開講した考古学講演会・講座の発表をまとめた記録集である。

2 本書の編集は前原 豊（文化財保護係専門員）が行った。

3 講演会・講座の文章化については、中島侑子（文化財保護係嘱託員）が行った。

4 本書の作成にあたっては、大室古墳の教室・ボランティアの阿部上枝、柴崎まさ子、内藤貴美子、中澤アイ子、三木かほり、峰岸あや子・吉田京子、吉田 進・吉田真理子の協力があった。

5 講演会・講座については講演内容と配布レジュメを掲載し、当日使用したスライドについては、紙数の都合から割愛した。

「大室古墳の教室」事業について

1 事業名称

史跡前二子古墳等・地域の特性を活かした史跡等総合活用支援事業「大室古墳の教室」

2 目的

史跡整備が完了した大室古墳群の一部は大室公園として整備されましたが、当初計画された資料館等のガイダンス施設の建設は実現していません。そこで国庫補助事業で「大室古墳の教室」事業を計画しました。事業の内容は体験学習・考古学講座・資料展示等とし、大室資料館が開館するまでの間、この場所で事業を実施し、広く大室古墳群の活用を図っていくことを目的とします。

3 事業費

5,000,000円（50%国庫補助対象）
平成26年度～28年度3カ年事業

4 開催した普及事業

（1）小学生夏休み森の考古学教室

第1回 勾玉つくり①

会場：民家園東のM-4号墳の木陰
日時：平成26年8月7日（木）9:00～12:00
参加者：20名

第2回 勾玉つくり② 会場：民家園主屋

日時：平成26年8月8日（金）9:00～12:00
参加者：10名

第3回 墳輪つくり① 会場：民家園離れ

日時：平成26年8月14日（木）9:00～12:00
参加者：18名

第4回 墳輪つくり② 会場：民家園離れ

日時：平成26年8月15日（金）9:00～12:00
参加者：13名

第5回 鏡つくり 会場：民家園離れ

日時：平成26年8月21日（木）9:00～12:00
参加者：19名

第6回 馬具つくり 会場：民家園離れ

開催：平成26年8月22日（金）9:00～12:00
参加者：16名

（2）講座・赤城南麓の考古学2014「赤城南麓の歴史遺産」 会場：民家園離れ

第1回 赤城南麓の旧石器時代

『旧石器人の道具箱』

講師：勢藤 力氏（伊勢崎市教育委員会）

日時：平成26年8月30日（土）9:30～11:30

参加者：24名

第2回 赤城南麓の縄文時代

『陥穴と弓矢の狩り』

講師：大工原 豊氏（國學院大學講師）

開催日時：平成26年9月6日（土）9:30～11:30

参加者：26名

第3回 赤城南麓の古墳時代

『前二子古墳と多田山古墳群のもがり屋』

講師：深澤 敦仁氏（群馬県教育委員会）

日時：平成26年9月13日（土）9:30～11:30

参加者：33名



講座・赤城南麓の考古学2014（民家園離れ）

第4回 赤城南麓の古墳時代

『藤岡でつくられた前二子古墳の須恵器』

講師：藤野 一之氏（坂戸市教育委員会）

日時：平成26年9月20日（土）9:30～11:30

参加者：30名

第5回 赤城南麓の奈良・平安時代『寺と役所』

講師：出浦 崇氏（伊勢崎市教育委員会）

日時：平成26年9月27日（土）9:30～11:30

参加者：26名

第6回 赤城南麓の奈良・平安時代

『鉄をつくる』

講師：坂渕 泰史氏（群馬県教育委員会）

日時：平成26年10月4日（土）9:30～11:30

参加者：25名

（3）匠の教室

第1回 装飾須恵器をつくる

会場：民家園主屋・離れ

講師：桜岡 正信氏（公財・群馬県埋蔵文化財調査事業団）

石井 政幸氏（一心堂主宰）

日時：平成26年10月10日（金）から10

月16日（木）まで9:00～16:00

申込：24名 延べ人数：136名



距の教室・装飾須恵器をつくる（民家園主屋）

第2回 繩文耳飾りをつくる

会場：民家園離れ

講師：松村 和男氏（公財・群馬県埋蔵文化財
調査事業団）

日時：平成 26 年 10 月 25 日（土）から
10 月 26 日（日）まで 9:00～16:00

申込：19名 延べ人数：31名

第3回 古墳時代の馬具をつくる

会場：民家園離れ

講師：杉山 秀宏氏（（公財・群馬県埋蔵文化財
調査事業団）

日時：平成 26 年 11 月 7 日（金）から
11 月 11 日（火）まで 9:00～16:00

申込：24名 延べ人数：39名

第4回 須恵器窯詰め

会場：鼻毛石町一心窯

日時 平成 26 年 11 月 29 日（土）9:00～12:00
参加者 15 名

第5回 須恵器窯焼成と耳飾り覆い焼き

会場 鼻毛石町一心窯

日時 平成 26 年 12 月 7 日（日）～8 日（月）
9:00～11:00（27 時間連続焼成）

参加者数 27名

第6回 須恵器窯出し

会場：鼻毛石町一心窯

日時 平成 26 年 12 月 13 日（土）9:00～14:00
参加者 15 名

（4）匠の教室制作品完成記念考古学講演会

演題：『金井東裏遺跡と大室古墳群～5世紀後半から6世紀前半の上野地域』

講師：右島和夫氏

（県文化財審議会委員・群馬大学講師）

日時：平成 27 年 2 月 7 日（日）14:00～16:00

会場：前橋市総合福祉会館多目的ホール

参加者：220 名

（5）大室はにわ館設置

準備期間：平成 26 年 8 月 23 日（土）～
10 月 31 日（金）の土・日

スタッフ：市民ボランティア

開館期日：平成 26 年 11 月 1 日

設置場所：民家園土蔵（西大室町 2510）

展示面積：1階 24 m²・2階 24 m² 計 48 m²

開館期日：4 月～12 月：木から日曜日・祝日
1 月～3 月：土・日曜日・祝日・
年末年始は休館 9:00～16:00

展示資料：大室古墳群や大室公園内の調査での



土蔵を改装した大室はにわ館外観



大室はねむ館 1階の埴輪展示

出土品・前二子古墳石室復元市民プロジェクト
参加の市民ボランティア制作品。東京
福祉大学柴田研究室制作教材の3D映
像による大室古墳群の紹介。体験コー
ナーなど

入館者数：11月 1,039名・12月 250名

(6) 「大室こふんの藤棚」の設置

位置：公園民家園北、小二子古墳南
規模：10m×10m、ベンチ 6脚（150cm角）
目的：一般市民の休憩用と小学生の体験学習施
設に活用のため。
設置経過：平成 26 年 11 月 13 日～12 月 2 日(火)
スタッフ：市民ボランティア

(7) ユニット・ハウスの設置

位置：公園民家園北、小二子古墳南
規模：大・3連棟 1 棟（5.7m×7.2m）、
小・1 棟（5.4m×2.8m）

目的：収蔵展示施設。大室古墳の語り部用
設置日：平成 26 年 10 月 9 日

5 来年度に向けて

今年度は、初年度のため手探り状態で進行させ
た。来年度は、一層の施設整備を図るとともに、
有効活用を図って行きたい。平成 27 年度は平成
26 年度事業をベースとしながらも、より市民が文
化財に興味を抱ける事業を計画し、具現し、文化
財保護思想の啓蒙を積極的に図っていきたい。



大室こふんの藤棚

『大室はにわ館』展示品一覧表

No.	名称	種別	点数	高さ (cm)	遺跡名	原品所蔵	備考
1	人が乗る馬形埴輪	埴輪	1	99	後二子古墳	四天王寺	市民プロ
2	人が乗る馬形埴輪	埴輪	1	80	東毛養護学校	群馬県	市民プロ
3	馬形埴輪	埴輪	1	111	内堀4号墳	前橋市教委	市民プロ
4	馬形埴輪	埴輪	1	98	内堀4号墳	前橋市教委	市民プロ
5	人面付器台	埴輪	1	60	下郷天神山古墳	群馬県教委	市民プロ
6	石見型埴輪	埴輪	1	104	前二子古墳	前橋市教委	市民プロ
7	石見型埴輪	埴輪	1	110	前二子古墳	前橋市教委	市民プロ
8	石見型埴輪	埴輪	1	126	石見遺跡	東博	市民プロ
9	石見型埴輪	埴輪	1	128	蛭里4号墳	羽曳野市教委	市民プロ
10	須恵器・提瓶	土器	1	25	前二子古墳	前橋市教委	市民プロ
11	須恵器・高杯形器台	土器	1	36	前二子古墳	前橋市教委	市民プロ
12	須恵器・筒形器台	土器	1	58	前二子古墳	前橋市教委	市民プロ
13	須恵器・提瓶	土器	1	26	前二子古墳	前橋市教委	市民プロ
14	須恵器・高杯形器台	土器	1	39	前二子古墳	前橋市教委	市民プロ
15	馬具・f字形鏡板	金銅製品	1	17	前二子古墳	前橋市教委	市民プロ
16	馬具・劍菱形杏葉	金銅製品	1	23	前二子古墳	前橋市教委	市民プロ
17	装身具・丸玉、小玉	ガラス製品	1	1	前二子古墳	前橋市教委	市民プロ
18	鏡・珠文鏡	金銅製品	1	11	前二子古墳	前橋市教委	市民プロ
19	馬具・双葉劍菱形杏葉	金銅製品	1	19	前二子古墳	前橋市教委	市民プロ
20	須恵器・高杯	土器	1	13	前二子古墳	前橋市教委	市民プロ
21	須恵器・甕	土器	1	16	前二子古墳	前橋市教委	市民プロ
22	須恵器・直口壺	土器	1	23	前二子古墳	前橋市教委	市民プロ
23	土師器・高杯	土器	1	16	前二子古墳	前橋市教委	市民プロ
24	土師器・高杯	土器	1	12	前二子古墳	前橋市教委	市民プロ
25	土師器・高杯	土器	1	13	前二子古墳	前橋市教委	市民プロ
26	土師器・高杯	土器	1	13	前二子古墳	前橋市教委	市民プロ
27	土師器・脚付壺	土器	1	33	前二子古墳	前橋市教委	市民プロ
28	土師器・杯	土器	1	6	前二子古墳	前橋市教委	市民プロ
29	円筒埴輪	埴輪	1	61	前二子古墳	前橋市教委	原品
30	円筒埴輪	埴輪	1	64	中二子古墳	前橋市教委	原品
31	円筒埴輪	埴輪	1	60	中二子古墳	前橋市教委	原品

No.	名称	種別	点数	高さ (cm)	遺跡名	原品所蔵	備考
32	円筒埴輪	埴輪	1	53	後二子古墳	前橋市教委	原品
33	円筒埴輪	埴輪	1	40	小二子古墳	前橋市教委	原品
34	人面付円筒埴輪	埴輪	1	56	中二子古墳	前橋市教委	市民プロ
35	人面付円筒埴輪	埴輪	1	68	大塚越7号墳	玉村町教委	市民プロ
36	小像付円筒埴輪	埴輪	1	57	後二子古墳	前橋市教委	市民プロ
37	小像付円筒埴輪	埴輪	1	47	上綱引4号墳	前橋市教委	市民プロ
38	馬形埴輪	埴輪	1	50	白藤4号墳	前橋市教委	市民プロ
39	装飾付筒形器台	須恵器	1	57	羽根戸古墳	伊勢神宮	市民プロ
40	子持鰐付壺	須恵器	1	17	羽根戸古墳	伊勢神宮	市民プロ
41	筒形器台	須恵器	1	44	川上古墳	さぬき市教委	市民プロ
42	甌	須恵器	1	18	川上古墳	さぬき市教委	市民プロ
43	装飾付筒形器台	須恵器	1	54	金崎古墳	島根市教委	市民プロ
44	装飾付筒形器台	須恵器	1	58	前二子古墳	前橋市教委	市民プロ
45	装飾付筒形器台	陶質土器	1	49	福泉洞11号墳	釜山市	市民プロ
46	装飾付筒形器台	陶質土器	1	48	福泉洞32号墳	釜山市	市民プロ
47	装飾付壺	陶質土器	1	30	月城路11-1号墓	慶州	市民プロ
48	装飾付高杯	陶質土器	1	28	鷦林路302号墳	慶州	市民プロ
49	冠	青銅製品	6	38	金冠塚古墳	東博	市民プロ
50	騎馬人物像	新羅土器	1	20	韓国金海得山里	韓国	慶州新羅窯
51	騎馬人物像	新羅土器	1	18	韓国 金鈴塚	韓国	慶州新羅窯
52	双羊尊	新羅土器	1	19	韓国	韓国	慶州新羅窯
53	台付壺	新羅土器	1	18	韓国	韓国	慶州新羅窯
54	車輪付双角杯	新羅土器	1	23	韓国	東博	慶州新羅窯
55	装飾付高杯	新羅土器	1	20	韓国	韓国	慶州新羅窯
56	装飾付壺	新羅土器	1	14	韓国	韓国	慶州新羅窯
57	装飾付高杯	新羅土器	1	9	韓国	韓国	慶州新羅窯
58	心葉形杏葉	青銅製品	1	15	綿貫観音山古墳	文化庁・県博	市民プロ
59	馬形埴輪	埴輪	1	52	白藤4号墳	前橋市教委	市民プロ
60	ナイフ形石器	石器	10		内堀遺跡群	前橋市教委	内堀遺跡群Ⅸ
61	斧形石器	石器	2		内堀遺跡群	前橋市教委	内堀遺跡群Ⅷ
62	石鐵	石器	10		内堀遺跡群	前橋市教委	内堀遺跡群Ⅳ
63	石匙	石器	3		内堀遺跡群	前橋市教委	内堀遺跡群Ⅳ

No.	名称	種別	点数	高さ (cm)	遺跡名	原品所蔵	備考
64	石斧	石器	5		内堀遺跡群	前橋市教委	内堀遺跡群IV
65	繩文土器	土器	20		内堀遺跡群	前橋市教委	内堀遺跡群IV
66	器台	土器	1		内堀遺跡群	前橋市教委	内堀遺跡群IV
67	甕(樽系)	土器	1		内堀遺跡群	前橋市教委	内堀遺跡群IV
68	甕(赤井戸系)	土器	1		内堀遺跡群	前橋市教委	内堀遺跡群IV
69	甕(十王台系)	土器	1		内堀遺跡群	前橋市教委	内堀遺跡群IV
70	壺	土器	1		内堀遺跡群	前橋市教委	内堀遺跡群IV
71	鉢	土器	1		内堀遺跡群	前橋市教委	内堀遺跡群IV
72	台付甕	土器	1		内堀遺跡群	前橋市教委	内堀遺跡群IV
73	土製玉	土製品	1		内堀遺跡群	前橋市教委	内堀遺跡群IV
74	勾玉	石製品	1		内堀遺跡群	前橋市教委	内堀遺跡群IV
75	管玉	石製品	1		内堀遺跡群	前橋市教委	内堀遺跡群IV
76	勾玉	土製品	2		内堀遺跡群	前橋市教委	内堀遺跡群IV
77	手捏土器	土製品	12		内堀遺跡群	前橋市教委	内堀遺跡群IV
78	土製紡錘車	土製品	5		内堀遺跡群	前橋市教委	内堀遺跡群IV
79	土製匙	土製品	1		内堀遺跡群	前橋市教委	内堀遺跡群IV
80	土製算盤玉	土製品	1		内堀遺跡群	前橋市教委	内堀遺跡群IV
81	土製算盤玉	土製品	2		内堀遺跡群	前橋市教委	内堀遺跡群IV
82	土製算盤玉	土製品	3		内堀遺跡群	前橋市教委	内堀遺跡群IV
合計		150 点					

※市民プロ…前二子古墳石室復元市民プロジェクト参加市民ボランティア制作品である。

※内堀遺跡群IV…前橋市教育委員会1991『内堀遺跡群IV』に掲載資料

※内堀遺跡群V…前橋市教育委員会1996『内堀遺跡群V』に掲載資料

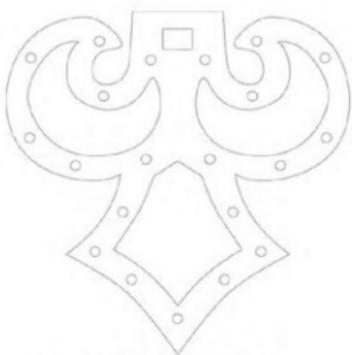
大室古墳の教室 「匠の教室」装飾須恵器をつくる



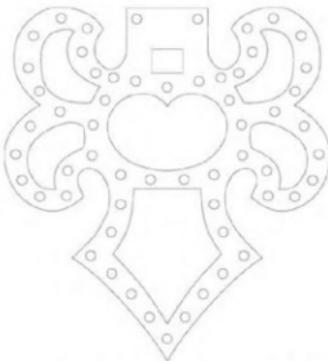
「匠の教室」制作予定須恵器

No.	名称	出土地	意匠	所在地	時期	高さ	文献
1	筒形器台	獅子塚古墳	筒部4単位、脚部5単位	福井県若狭町	6C前	50	中村浩 1992MUSEUM501
2	筒形器台	權現山古墳	透孔4単位	茨城県小美玉市	6C前	37	權現山古墳2000玉 里村教委
3	筒形器台	鎧塚古墳	突起、組紐文	岐阜県岐阜市	5C前	46	考古学雑誌
4	筒形器台	上野古墳	勾玉、円形貼付	佐賀県佐賀市	6C前	38	中村浩2000古墳出 土須恵器集成
5	子持装飾 台付壺	伝長船大塚古墳	人3、人2、人 1、人2	岡山県長船町	6C後	48	装飾須恵器展1995 No.16 長船町史
6	子持装飾 台付壺	獅子塚古墳	馬6匹	福井県若狭町	6C前	44	中村浩 1992MUSEUM501
7	子持装飾 台付壺	西宮山古墳	子畫4、立つ人2、 組み合う人2、 座す鹿と追うイヌ 2、手を出す人1、 荷を背負う人1、 株で荷を担ぐ人2、イ ヌ1、欠損2	兵庫県たつの市	6C前	38	京都国立博物館
8	子持装飾 台付壺	岩橋千塚古墳群	勾玉、円形貼付、 円管文、イヌ2匹	和歌山県和歌山市	6C前	55	装飾須恵器展1995 No.29
9	子持台付 壺	向山古墳	壺6	島根県鹿島町	6C後	56	装飾須恵器展1995 No.58
10	子持台付 壺	上野遺跡	壺4	鳥取県倉吉市	7C	51	装飾須恵器展1995 No.60
11	子持壺	上野遺跡	壺4	鳥取県倉吉市	7C	41	装飾須恵器展1995

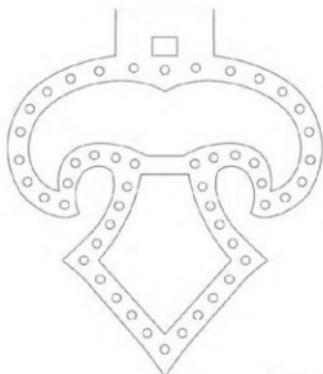
大室古墳の教室 「匠の教室」 双葉剣菱形杏葉をつくる



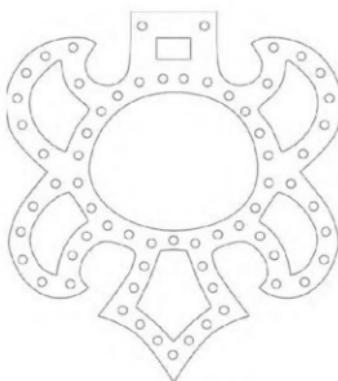
01 福井県 十善の森古墳



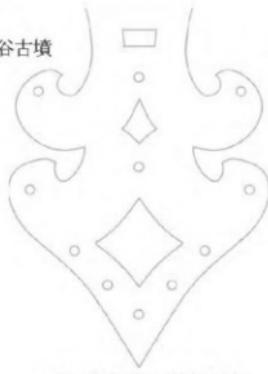
03 出土地不明 國學院大學蔵



02 福井県 大谷古墳



04 韓国 松鶴洞 1 A-1号墳



05 群馬県 恵下古墳

匠の教室・装飾須恵器をつくる

2014/10/10-10/15



装飾須恵器の制作風景（大室民家園主屋）



装飾須恵器の制作風景（大室民家園主屋）



装飾須恵器の制作風景（大室民家園主屋）



装飾須恵器の制作風景（大室民家園離れ）



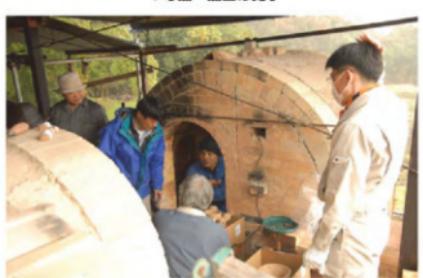
装飾須恵器の制作風景（大室民家園離れ）



装飾須恵器の制作風景（大室民家園主屋）

匠の教室・装飾須恵器窯詰め（鼻毛石町一心窯）

2014/11/29



匠の教室・装飾須恵器窯焚き（鼻毛石町一心窯）

2014/12/7-12/8



1号窯 窯焚き（鼻毛石町一心窯）



1号窯 窯焚き（鼻毛石町一心窯）



2号窯 窯焚き（鼻毛石町一心窯）



2号窯 窯焚き（鼻毛石町一心窯）



多量の薪を投入



煙突の速乾



窯の隙間を詰める



焚き口の閉鎖

匠の教室・装飾須恵器窯出し（鼻毛石町一心窯）

2014/12/13



1号窯 焼き上がり



2号窯 焼き上がり



1号窯 制作品搬出



制作品を囲んでのひととき



石井改幸講師からの講評



窯の清掃



作品を囲みながら煮込みうどんで昼食



窯出しのスタッフ

匠の教室・縄文耳飾りをつくる（民家園離れ）

2014/10/25-10/26



松村和男講師による講義



形をつくる



2回めに挑戦



真剣なまなざしで制作



完成



完成！



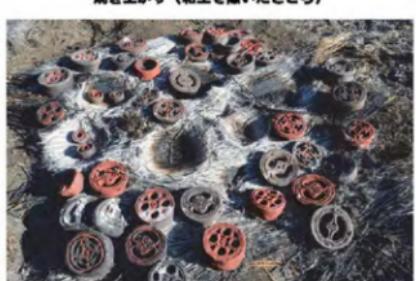
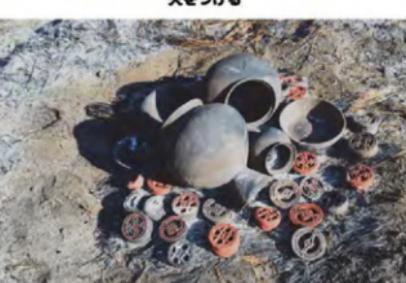
講師制作の耳飾り



講師制作の漆器

匠の教室・縄文耳飾り覆い焼き

2014/12/7-12/8



匠の教室・双葉剣菱形杏葉をつくる（民家園離れ）

2014/11/7-11/11



杉山秀宏講師による講義



制作方法の講義



制作のようす



板をかしめる



綱板を被せる



木の棒で綱板をくぼめる



出来ました！



講師制作の双葉剣菱形杏葉

2 匠の教室制作品 完成記念考古学講演会

「金井東裏遺跡と大室古墳群」

(右島 和夫:群馬大学講師)

金井東裏遺跡と大室古墳群

右 島 和 夫 (群馬大学講師)

はじめに

今日の話題の一つは、渋川市の金井東裏遺跡です。この遺跡は、平成 24 年の終わりからずっと調査を継続しており、大変話題になっています。それともう一つが大室古墳群です。

この二つに何か関係があるのかということになりますが、先日 Facebook を見ていたら、金井東裏遺跡がすごく話題になっているので、前橋市教育委員会の方はそれを前橋市の大室古墳群と結びつけて今回の講演会を企画し、沢山の人に来てもらおうと知恵を絞ったのではないか、みたいなことが書いてありました。しかし、そうではなくて、この二つの話題には、実際に大いに関係があります。

どう関係があるのかということ、榛名山の大噴火があったのは、6 世紀の初めを前後するくらいの時期、今から約 1500 年前のことです。大噴火というのは、皆さんご存知だと思いますけど、噴火が 1 度あるとそれで終わりではなく、かなりの期間活動が続いていることをご存知かと思います。例えば、先年の三宅島噴火では、噴火があって、一旦、東京の方へ避難されてきた人は、戻って行かれまるまでにはかなりの期間がかかりました。その間、噴火活動が大小織り交ぜて継続していたわけです。それよりも 1500 年前に起こった榛名山の噴火は、三宅島の数倍いや数十倍の規模のものでしたから、かなりの期間、活動が継続したものと考えられます。火山学の人の現在の見解では、非常ににはっきりわかる噴火だけでも 15 回あったと考えられています。

金井東裏遺跡と榛名山噴火

金井東裏遺跡で見つかった甲（よろい）を着ていた男性は、噴火火砕流の直撃を受けて亡くなったと考えられています。それは、その時の最初の噴火から 3 番目に起こった噴火に伴う火砕流です。火砕流というものは、私たちは雲仙の普賢岳の噴火でその実際を知るようになりました。それまでは、多くの人は、火山が噴火でドーンと鳴り響き、火山灰が降ってきたり、軽石が飛んできたりと思っていたのですが、そうでない噴

火というのをテレビで目の当たりにしました。そして、非常に恐ろしい噴火のしかたとわかりました。火砕流は地を這うように、時速は 100km 以上です。場合によつては新幹線並みのスピードで、襲ってくるという状態なわけです。ですから噴火があつても大丈夫というかなり離れた高台で、普賢岳噴火のようすを取材、報道していた人々は、火砕流がその場所まで、その場所まで一気に飲み込んでしまつたわけです。金井東裏遺跡の甲着装男性は、そうした火砕流噴火の直撃を受けて犠牲になつてしまつたわけです。6 世紀初めの頃の榛名山の噴火活動が開始されてから少し経つた時期の出来事ということになります。

そういう中での事ですけれど、その後も含めて 15 回噴火がありましたので、金井東裏遺跡の調査地点では一連の噴火で積もつた火山噴火堆積物が 1m 弱くらいの厚さで存在していました。

この 6 世紀の初めにあった噴火がしばらくして収まると、この金井東裏遺跡の人々は、大被害をこうむつたにもかかわらず、復興を開始したと思われます。火山灰が積もつてから、金井東裏遺跡では 10 年、20 年経つてからかと思いますが、かすかな痕跡から生活が徐々に始まつていったことがわかります。ところが、復興が少しずつ進行している中、榛名山は、再度大噴火を起します。6 世紀中頃のことです。この噴火は、2m 前後の軽石層が堆積するものでした。

金井東裏遺跡の甲を着た人骨

金井東裏遺跡の一帯では、2 度の大噴火の大被害を受けたことになり、両者併せて 3m 近い火山噴出物で甲着装男性の時期の地表面は完全にバッカされてしまつたわけです。

金井東裏遺跡から見つかった人骨は、九州大学の人骨の専門の田中良之先生が鑑定を進めています。火山災害によって犠牲になった人骨は 4 体見つかっています。その人たちについて継続して講べているところですが、甲着装男性は、40 代前半で、身長は 164cm ということがわかりました。これは、当時の平均的成人男性にくらべて少し高身長になります。身長から言え

ることは、西日本の人たちの身長は高くて、東日本の人たちの方が低かったという特徴があります。

さて、男性は40代で災害にあったわけですから、5世紀後半に生まれて生きてきた人ということになります。ずっと瀬川の地で生まれ育ったどうかというのは、今問題になっているところですが、少なくとも5世紀後半に生まれ、活躍した人と考えていいでしょう。

この5世紀後半という時期は、金井東裏遺跡の周辺一帯に人々が新たに移り住むようになった時期に当たります。調査で見つかっている古い遺跡はいつかといふと、弥生時代までです。弥生時代まで金井東裏遺跡一帯に人々が住んでいたのですが、古墳時代に入る空白期が続きます。ですから甲斐妻女性とともに金井地区で暮らしていた人々は、その男性も含めて別の場所から、金井の地へ移動してきたと考えるのが正しいところです。なぜこの地区に移ってきたかということが問題になります。

火山灰

新たにこの地に移り住む大きなきっかけは、馬の生産が大いに関係していたと考えられます。なぜ分かるかといふと、火山の最初の噴火があった時には、5～10cmくらい厚さで火山灰が降下しました。非常に細かいものですから、それが地面に堆積し、しばらくして雨でも降ると、湿気が灰の層全体に及びますから、ちょっとぬかるんだような状態になります。そういうのが毎日一面に広がった状態だったわけです。最初の火山灰噴火の際には、人々の命に関わるようなことはあまりなかったようです。

私は小学生の時に浅間山の大きな噴火を経験しましたけど、皆さんの中にも群馬にずっと居られる人で、私と同世代の方は、そのことをよく覚えておられると思います。私の育った伊勢崎市の付近でも、すごく白くなった記憶はあります。それでも、それは数ミリと言ってもいいかなと思います。ということは、榛名山噴火で10cm以上積もったわけですから、それはものすごい噴火だったわけです。当時、それを経験した人は、生まれて初めてのことだったと思います。自分の住んでいる所の身近な山が大噴火したわけですから、恐怖に慄いたことは間違いないでしょう。

馬の飼育

積もった火山灰が湿っているので、その上を歩くと少し沈みます。その結果、歩いた足跡が遺跡からたくさん出てきました。足跡の数だけで、1500個以上に

のぼります。小道がずっと枝分かれして、ムラからいくつも残がっています。そこを歩いている足跡が沢山でできたわけです。全体に人々は低い方へ向かっているので、山から離れる方向へと足跡が連なっています。山から離れて、安全な場所へ避難しようとして歩いていたことが分かります。人間の足跡と一緒に馬の足跡(蹄跡)も残っていました。

小道から馬の蹄跡が見つかることの事実は、人が引いていたと考えていいと思います。人々の移動に、馬も引き連れていたと考えられます。馬が人の言うことを聞いたという事になります。私も馬について、本で読んだり、馬を実際に飼っていた人から話を聞く機会がありました。

もしかすると皆さんの中に農家の出身の方で、家で馬を飼っていたよという方はいらっしゃいますか? 見回したところ、ずいぶん居ますね。そうすると馬の性質について、私は見てきたようなことを言っていますが、実際には接したことなく、動物園で見たり、那須のりんどう湖ファミリー牧場に行って乗ったりとそのくらいなんです。馬というものは聞いてみると、誰の言う事でも聞くというものもない。それから人を見るというのがすごくあるということなので、馬が実際に移動するというは飼っている人と一緒に居たからだということがわかります。それで、野生の馬というものはとても人が近づいて、よしよしなして出来る代物ではないというのを考えました。そういうことでいくと、金井東裏遺跡で見つかった馬は、きちんと生まれてから飼育をして、それで人の言う事をきちんと聞けるように育てた馬、調教した馬と言いますか、そういうものだったと言うことがわかります。

朝鮮半島から渡って来た馬

次は、群馬県の地域に馬がずっといたのか、さらには、日本列島にずっといたのかといふと、5世紀前半に馬が日本列島に入ってきたということがだんだん分かってきました。ですから元々は日本には馬はいなかったので、新たに朝鮮半島から入ってきた。勝手に、馬だけで来るということは考えられないでの、馬を連れて人がやってきたという風に考えて間違いないところです。

それで馬を飼っていた人に教えてもらった話では、例えば船を操る人が頼まれて馬を乗せてやってくるということでは、絶対だめだそうです。船に乗せること自体が、馬にとっては普段の生活とはまったく違うので、精神状態が穏やかでないわけで、それで何とか

いう事を聞いておとなしくさせるには、飼っていた人、その馬を育てた人などの馬を育てる専門家が一緒に来ないと、海を渡って来られないと考えられるわけです。

5世紀になると日本列島の人たちは朝鮮半島に頻繁に行き来していましたから、その中で馬というのが、すごく便利な役に立つ動物だというのを目の当たりにしました。また当時はいうと、もう一つの大きな役割は、軍事的な役割です。当時の騎馬軍團が存在したと考えられますが、現在の朝鮮半島の北寄りの地域は乗馬の技術に非常に優れた人々が住んでいる高句麗という地域になります。現在の北朝鮮に近い地域が該当します。そこでは、非常に早くから馬が使われていました。それで古墳時代の頃ですけれど、高句麗は勢力を持って、徐々に朝鮮半島を南へ南へと進出してこうとしていました。その人々が最大の武器にしていたのが馬だったのです。

高句麗の都があったのは、現在北朝鮮と接する中国の吉林省、遼寧省あたりとなります。古い方だと濱州という呼称を聞いたことがあるかと思いますが、それが現在の吉林省の地域になります。それから遼寧省、現在の旅順とか大連とか瀋陽(奉天)が、これに属しています。時には、これらも含めて高句麗という国家が存在していました。そこに広開土王(好太王)という有名な王がいた時期に、当時、日本列島の主要部分は倭と呼ばれていましたが、その倭国が朝鮮半島に入ってきたので、それで戦ったという記事が、吉林省集安市の広開土王碑(414)に刻まれています。その時代は、今お話をしている1500年前よりも更に古い1600年前に近い時期の出来事です。その時は日本列島には馬はないかったため、列島から出かけていった人々は甲冑を身に着けて戦い、相手は馬に乗った戦法なので、倭国にとっては不利な戦いだったと思います。このとき強烈な印象を受けて、馬というのは凄い威力を持っているのだというのを知る機会の一つになったと思います。それで倭国の人たちは馬を非常に望むようになったわけです。そうした中で待望の馬が朝鮮半島から入ってきたというわけです。

最初、西日本に馬が入ってきて、あまり時間が経たないうちに群馬の地にも入ってきます。東日本の中では、非常に早い登場です。群馬県と名前が付いているくらいですから、馬とまったく関係ないかというと、この群馬県の馬は大いに馬と関係する地域であるという風に思って間違いないと思います。

古代の馬の産地

古代律令制は、中央に馬を納める指折りの国がありまして、群馬もその中の一つになります。では、馬を納める国で有名なのはどこかというと、信濃、それから甲斐、今の山梨県の地域ですけど、それに上野で、この3ヵ国は非常に馬の産地として有名です。その始まりは、5世紀後半まで遡ることがだんだんとわかつてきました。金井東裏遺跡は馬を群馬で生産し飼育する始まりの遺跡の一つという風に思ってもらうといいかなと思っています。

榛名山麓の遺跡群

次に5世紀後半の有名な遺跡、金井東裏遺跡もそうですが、もう一つ県内で有名なのが、旧群馬町の井出という所から保渡田という所にかけて、大型前方後円墳3基からなる保渡田古墳群です。この大型前方後円墳が造られた時期に、金井東裏遺跡に人々が移り住み、馬の生産を始めた、その中に甲冑装男性もいたかもしれません。ほとんど同じ時期に、高崎寄りの榛名山麓の旧群馬町、旧箕郷町地城には、保渡田古墳群に関わる群馬の中では一番大きな勢力が存在したわけです。

渋川寄りの地域と、高崎寄りの地域という二つ地域圏が存在したわけです。両者は、場所が違うだけで、土地の条件はよく似ています。いずれも山麓地帯になりますから、多くの部分は少し高台の土地になります。この場所でお米を作るしたら、川が流れている低いところになります。

それから当時は堤防がありませんから、川というものは動きますので、そうすると平地が川の周りにずっと出来てきます。そういう意味で、川があったら、皆さん土地をずっと見て、ここの所は川が流れていたために出来た平地だなと思っていただくと、ここはまさしくそういう所に当たります。

古利根川の流路

利根川は古墳時代には広瀬川、それから桃木川、その辺りを行ったり来たりしています。前橋の街中に元気21がありますけれど、そこから急に北に向かって落ちていくのが分かりますか?

50号の所から急に落ちていく、あれが古墳時代の利根川の川岸になります。そこからずっと北に行くとよく分かるのは、前橋の上綾井町の付近で、赤城方面に向かって大きく上がる所がわかりますか?そこが、利根川の流路の反対側の縁になります。その間を利根川は、往ったり、帰ったりを繰り返し、広大な流域を形

成したわけです。水量の多さと、流域の広さでいったら、利根川が日本で一番大きな川になります。

そういう大きな川、現在とは異なる、前橋市街地の北側を北西から南東に流れていることも念頭におきながら話を更に進めていきたいと思います。

馬の生産

それで、今ちょっと話を戻しますと、高崎の保渡田古墳群の周辺では、周りのところは、ちょっと高い所です。川に面するこのような部分が、馬を生産するのにはすごくいい条件なんだそうです。

この間、私は静岡県の沼津という所に行ってきました。そこになぜ行ったかというと、江戸時代の幕府直営牧、馬を生産する所がありました。私はよく知らないままに牧というのは廻し施設が、すなわち現代の牧場みたいな施設があって、その中で馬を飼育していくんだなという風に考えていたら、それはとんでもない間違いでした。馬を育てるというのは、極端に言うならばほったらかしだそうです。例えば川が流れていると川を越えていかないので、そこが境界になります。それから大きな土地の中で、山極の一一番縁の所に土手を造るとその先へは行きません。反対側は谷や小川が流れている所があれば、その間で暮らすわけですが、勝手に暮らして、勝手に妊娠して、勝手に生んで、ということらしいです。

その馬をある時期になると専門家が追い込んでいて、その中から良い馬を選んでいくそうです。その選んだ馬を調教していくということです。だから普段は野放し状態で、選んだ所から飼育が始まるそうです。追い込んでといって、馬を選んでいくのは、かの有名な野馬追い(現在では、相馬野馬追いがよく知られています)だそうです。あれは戦争みたいにテレビでは、なっていますけど、本当はそうじやなくて、馬を飼っている所から、追い込んでいて、馬を引き抜いて、人が使えるような馬に育てるためにやる。それが野馬追なんそうです。要するに野にいる馬を追い込んでいくということだそうです。そういうので見るとものすごく広い牧だと言われている所に馬は暮らしていたようです。そうした土地条件に群馬が非常に恵まれていたので、これは馬を育てるのには良い所だという風に馬の専門家が思つたんだろうなあと思います。今日の和の大室古墳群が所在する赤城山南麓の地帯も馬の生産には非常に良い土地だと思いますので、榛名山麓と同様、赤城山南麓にもきっと牧があったと思っています。

そうした新たな歴史展開の中で、上毛野の地域の重要性が高まつていったのが、5世紀後半のことだったわけです。

保渡田古墳群

5世紀後半の上毛野では、最も有力な勢力だったのが保渡田古墳群と考えてよろしいかと思います。そこで、保渡田古墳群そのものについて少し考えてみたいと思います。

保渡田古墳群には3つの大型前方後円墳があるとお話ししました。井出二子山→保渡田八幡塚→保渡田美姫塚の順番に造られていました。同じ時期に一度に造られたわけではなくて、3つが順番に同程度の大きさで造られました。ということは、地域の代々の王の墓だと思ってもらえばよろしいかと思います。

その中の2番目の王の墓となる保渡田八幡塚という古墳が、金井東裏遺跡の甲着装男性とほぼ同じ世代の人が埋葬されていると考えられます。八幡塚古墳に葬られた人はどういう人だったか?私は、金井東裏遺跡の人には、会うことができましたのでよく知っているんですけど、八幡塚には会っていないので、どういう人か詳しくはわかりません。八幡塚古墳は、非常に規模の大きい前方後円墳ですので、地域の最上位の支配者層であることがわかります。それで、金井東裏遺跡の人がどんな位の人だったのかを考えていくとき、一つのヒントになるのが、甲を着ていたということです。

精巧な小札を使った甲

金井東裏遺跡の男性が着ていた甲は、小札甲という形式です。チョッキみたいな雰囲気の鉄で作ったものになります。男性は小札甲を身に纏い、溝の中に走ったようにして前のめりに倒れた状態で発見されました。初めにこれを見た時、荒ぶる榛名山の神に、噴火をおさめるよう祈っているところとも考えられました。しかし、よく調べて行くと、そういう風に見えるんですけど、左側の構築に寄りかかった姿勢で、もたれかかるようにしていました。それから膝の位置が前後にちょっとずれています。ですからどうも祈っているのではない。それから、新幹線のようなスピードで火伴流が襲って来ていますから、そんな余裕は無かったという風に考えられます。加えて、この金井東裏遺跡の位置からは、榛名山は全然見えないです。もし山の神に祈るには、カミ様が見える所でよろしくと言わないか効果目がないでしょう。

それで、この男性が纏っている小札甲ですが、小さ

い長方形の鉄板、だいたい1000枚くらいですけども、それを穿孔されている小さい穴を通したヒモなどで縫じ合わせて、それで一つの甲に仕上げています。それには、すごい専門的で、高度な技術が必要になります。一枚一枚の鉄板は同じ形ではないと駄目です。縫じ合わせていった時に、ガタガタしたのでは役に立ちません。これは、上毛野の地で製作したのではないかと考えています。当時の金属加工技術の先進地は、近畿地方、今の大坂・奈良の辺りにそうした遺跡が結構見つかっていますので、そこで作られたものがもたらされている可能性があります。

金井東裏遺跡の男性これを保持していたわけですが、普通はこういうものは集落遺跡からは出土しません。では、この種の甲はどこで見つかるかというと、古墳の埋葬施設から、副葬品として出土するのがほとんどです。金井東裏遺跡と同じ墳で、小札甲を副葬品として持っている古墳は非常に限られており、間違いない地域の中でも一番大きい古墳、つまり前方後円墳と考えたらいいと思います。あるいは、前方後円墳でない例も少しありますが、その場合も次のランクの帆立貝式古墳や大型円墳からです。群馬で例をあげると、保渡田八幡塚古墳や保渡田古墳群で最初に造られた井出二子山古墳の副葬品の中にありました。また、両古墳に規模的には伯仲する高崎市八幡町の平塚古墳からも見つかっています。

金井東裏遺跡の男性は、前方後円墳に代表される地域の支配者層と同じ甲を持っていましたことになります。男性は少なくとも渋川の地域の中ではかなり有力な人であったと考えられます。その人がたまたま、これは完全に偶然のことですけども、1500年の眠りから醒めたという感じです。

彼が現代に再登場したことには、いくつかの偶然が重なったと言えます。一つはバイパス(上信自動車道)の設計で、男性が倒れていた場所に線が引かれ、発掘調査が行われたことです。次に、男性はなぜ残ったかというと、遺跡内を東西に貫く自然の構がありまして、そこは周りの地面より1m以上低くなっています。その中に落ちていたわけです。そのため、被災後にさらに強力な火砕流が襲ったわけですが、それには吹き飛ばされることがなかったのです。被災した火砕流に遭遇した時、男性が構の近くを歩いていたことも偶然かも知れません。

金井東裏遺跡の墳の上毛野 金井東裏遺跡の男性が生まれ、生きてきた5世紀後半の上毛野全体を見て

みると、その墳は地域全体の中では、赤城山南麓から西毛の地域に非常に有力な豪族がいました。群馬の西寄りの地域が非常に優勢だったと言つていいでしょう。では、東毛は泣かず飛ばずであったのかというとそうではなくて、東毛もきちんと遺跡がありますし、古墳もありますが、より西毛の方が優勢な時代と思つてもららうといいと思います。その理由が馬です。上毛野で馬生産が始まり、育てるには赤城山麓とか榛名山麓とか、少し山がらの方が合っているという事があつて、西毛の地域でそういう新しい動きがあつたという風に考えてもららうといいと思います。

畿内と東国をつなぐ交通網

江戸時代に東と西をつなぐ幹線道路は、中山道と東海道でした。中山道は、内陸と考へてもらえばいいんですが、中の山づたいに通つて、奈良や京都の都と東国を結ぶ道ということです。中山道のルートは、それ以前に存在しており、古代では東山道駿路と呼ばれていました。東へ向かう内陸ルートということになります。それに対して東海道駿路があり、東へ向かう海沿いルートと考えてもらえばいいかと思います。

東山道ルートは馬が出てこないと難しいルートです。言いかえるなら、馬の登場によって可能になるルートです。それに対して東海道ルートは、実際にはかなり船を使いました。馬が登場する以前は東海道ルートの方が、東西を結ぶ重要ルートとして機能していましたことがわかります。

畿内から東山道ルートをずっと来ると信濃から上毛野に入ってくるところが碓氷峠となります。江戸時代には碓氷関でしたが、西からの関東への玄関口になっていました。このルートの成立とともに西毛の地域が非常に重視されてくる流れに結びついていたと考えられます。そして、畿内と東国を結ぶこのルートが成立してくるのが、信濃(特に伊那谷)、上毛野に馬が登場し、急速に普及する5世紀後半の時期と考えているところです。

その理由として、この時期の代表的な古墳の所在地の問題があります。

まず、当時の上毛野を代表する古墳としては、保渡田古墳群があります。ちょうど同じ墳、下毛野では、小山市の北西方に摩利支天塚古墳が登場します。一方、武藏で、現在の行田市にさきたま古墳群形成の端緒をなす稻荷山古墳が登場するのもほぼ同じ時期です。これらの所在地を律令制の東山道駿路との位置的関係で見ていくと興味深いことに気づきます。

律令制の東山道駅路のルートは、上野国から下野国へと抜けて、さらに駿奥へと向かっていました。その幹線ルートに併せて、新田郡、今の太田市の所で幹線ルートから分岐して武藏国へと向かうルートがあり、武蔵路と呼ばれています。最近の発掘調査で本線とともに、この支路も次々と見つかっています。

保渡田古墳群、摩利支天塚古墳はこの幹線ルートに近い位置にあり、また、稻荷山古墳は武蔵路に近いところにあります。

5世紀後半の時期、隣り合う上毛野、下毛野、武藏のそれぞれで、地域を代表する大型前方後円墳が新たに登場してくる流れは注意する必要があります。しかも、後の東山道駅路のルートに近いところに占地している共通性も偶然の一挙とは思えません。この時期、東山道駅路の前身に当たる古東山道ルートとでも呼べるような内陸ルートが成立した可能性が非常に強いと考えられます。

この時代を大きくリードしていたのが畿内地域(現在の奈良・大阪)を直接基盤にしていたヤマト王権と称されている大勢力です。その王権が東国と直接手を結ぼうと考え、その上で関東地方や東北地方にさらに直接的影響力を深めていこうとしたわけです。

稻荷山古墳の鉄劍銘として「私の家は、祖先以来代々、ヤマトの大王に杖刀人の首としてお仕えしてきました」と記されていましたが、これは大王の近衛兵みたいなものです。このことは、東国の在地首長がヤマト王権の大王と直接繋がっていたことになります。古東山道ルートが新たに開かれるのも、畿内と東国との新たな関係性の創出を背景としていたことがわかります。

保渡田古墳群の勢力が主導していた上毛野の金井東裏遺跡をはじめとして各地で馬生産が組織的に開始されたのも、上記のような畿内と東国との新たな関係性の中ではじめて理解できるところです。

ヤマト王権地城は、東国への影響力を一段と強めようとする思惑を持っていたわけですから、顧役だった保渡田古墳群の勢力が噴火によって大打撃を受けたわけですから、噴火は思惑を促進させるチャンスと受け止めたかもしれません。

北関東の5世紀後半から6世紀前半の前方後円墳

ここでは、金井東裏遺跡の時代の北関東の古墳の動向についてもう少し整理しておきます。

まず、下毛野の摩利支天塚古墳ですが、これが5世

紀後半に登場したあと、引き続いて6世紀の初めには琵琶塚古墳がすぐ隣りに築造されます。大室古墳群の前二子古墳に近い時期だと思います。現在、小山市は両古墳の木をかなり伐採しましたので、古墳の姿を非常にはっきりと見ることができますようになりました。墳丘がすごくよく残っており、いずれも墳丘全長120mほどの下毛野では最も規模の大きい古墳です。琵琶塚古墳のあとは、その北側の一帯に6世紀から7世紀にかけての有力古墳が次々と造られていき、下毛野の中核地城になっていったことがわかります。そのきっかけとなったのが、摩利支天・琵琶塚古墳だったわけです。

埼玉古墳群でも同じことが言えます。この古墳群に足を運ばれた方は多いかと思います。ここは、さきたま古墳群全体が史跡公園の中にあるわけですが、当然初めから古墳がたくさんあったわけではなく、最初にここを墓域にしようと考えたのが稻荷山古墳になるわけです。それが5世紀後半のことです。次に二子山古墳というさきたま古墳群でいちばん大きい前方後円墳が造られます。これはだいたい群馬の大室古墳群の中二子古墳や藤岡市七興山古墳に近い時期・規模です。いずれにしても北武藏の地域の代表的な古墳群の頭だしと下毛野地城、さらには上毛野地城の頭だしとが同時期だというのは注意する必要があります。二子山古墳以後も6世紀から7世紀にかけて有力古墳が連続と造られ続けていくのは、下毛野と同様です。

そうして見てみると、保渡田古墳群では3基造られた後が続かないというのが対照的です。この場合、榛名山大噴火の影響を考慮する必要があると思います。そこが、上毛野の歴史動向の重要なポイントになるかと思います。

上毛野では、6世紀初めに榛名山大噴火があった直後くらいの時期、横穴式石室を持つ古墳が一気に出てきます。短期間にまとまって出てきますが、出現の仕方が非常に興味深いところです。榛名山麓の地域には出てこないからです。ここは榛名山噴火の被害を一番大きく受けた地域です。保渡田古墳群の所は、とともに噴火の被害を受けました。あまり被害を大きく受けていない地域では、前方後円墳に新スタイルの横穴式石室を伴って一斉に出てくるわけです。それが上手い具合に周りにずっと出てくるのが分ります。

前方後円墳を中心とし、具体的に見てみましょう。まず本日の主役の前二子古墳があります。それから前橋にはもう二つあります。一つは当会場から東へ行くと正円寺というお寺が桃木川の左岸の堤之下町にありま

す。このお寺の背後に正円寺古墳という前方後円墳があり、横穴式石室を伴っています。非常に立派な石室でしたが、今は入口の所が崩れ、入れません。それからもう一つ、ほぼ同じ時期に中央大橋を渡った右側に王山古墳という前方後円墳があります。これも上毛野で一番古い横穴式石室を有する前方後円墳になります。

保渡田古墳群は全部舟形石棺という石棺で一人の人を埋葬すると終わるという形式ですが、横穴式石室は、地域の王が亡くなったのをきっかけに古墳が造られ支配者が埋葬されますけれど、その後も近親者が亡くなると追葬ということで、扉を開けて入って行くという、全く新しいやり方になりました。

これら以外には、旧利根川(現広瀬川)の中流域から西毛地域にかけて認められるところで、逆に東毛地域ではほとんど確認することができません。

それにしても、何故、横穴式石室が群馬の地域に短期間に採用されたのか、その解答は休憩の後、お話したいと思います。

～ 休憩 ～

榛名山噴火と横穴式石室の登場

榛名山噴火を前後して歴史の流れに変化がおこつたわけですが、火山の噴火というのは大きな流れから言つたらほんの一線が入っただけです。

保渡田古墳群では最後の薬師塚古墳が、榛名山の噴火の頃は造りかけだったわけです。薬師塚をほんのちょっと造っているところで噴火があり、残りは噴火の後に造つたことが分かつてきました。

そこで、二子山・八幡塚古墳と比較してみるとわかるのですが、両墳とも非常に力を入れてすごい古墳を造っています。薬師塚の場合、築造途中で大噴火に遭遇したため、豪族の基盤となるような所がすごいことになってしまったわけです。二子山・八幡塚に比べモチベーションが下がっているなど感じます。やる気は噴火前はあり、墳丘の大きさも両墳に併伸する100mほどですが、埴輪の並び方はまばらで、両墳にしっかりとあった葺石も施されていません。

薬師塚の完成は噴火後の6世紀初めですが、その時には、前二子古墳、王山古墳、築造二子塚古墳等が造り始められているか完成しているかという時期です。同じ時期、保渡田の人たちは、旧米通り舟形石棺を横穴式石棺に納めました。これに対し、前二子古墳等では、非常に大きな石を駆使して、新しい技術で最新の

横穴式石室を造っています。主客逆転ではないですが、明らかに保渡田古墳群以外の勢力が伸長していくのが読み取れます。

前二子古墳の横穴式石室

次に前二子古墳を中心に、もう少し詳しく古墳の中身を見ていきたいと思います。

前二子古墳は、上毛野の地で最初に造られた横穴式石室を持つ古墳の一つです。その最も大きな特徴は、それ以前の古墳にくらべたら、使っている石の量も、大きさも全然違うわけです。それ以前の技術力だけでは、この新しい古墳づくりは不可能と考えられます。それまでの上毛野の地で古墳づくりにたずさわっていた人たちに新しい技術を持った人たちが加わることによってはじめて完成できたと言えます。すなわち、今までにない大きな石を持ってくるとか、それを積み上げて石室をつくるとか、こうした新しい技術が必要になってきたわけです。

ところで、古墳の流行が堅穴式から横穴式に変わったから、うちでも早速、横穴式にしようという具合に簡単にいきません。関東地方のいづれの地域でも前二子古墳と同じ時期に横穴式石室が採用されたわけではありません。例えば、さきたま古墳群では、6世紀後半にならないと横穴式石室は採用されません。上総・下総や常陸の地域もほぼ同様です。上毛野の地域の採用が早かったわけです。

石室に納められた、たくさんの土器

前二子古墳の石室には、四神で飾られていた器物をはじめとしてたくさんの須恵器・土師器が納められていました。これらが石室の中に納められていた様子は、前橋市民の有志によって制作された復元品が石室内に置かれているので、様子を確認することができます。土器は被葬者と一緒に納めるのは、横穴式石室とともにに入ってきた新しい葬法です。こういう土器は何に使つたかというと、そこに食べ物を供えて、それであの世に行つても困らないようにという中国思想の影響を受けたもので、朝鮮半島までは伝わっており、日本列島に入ってきたのはおおよそ6世紀初めくらいからです。前二子古墳もその一つです。

調査で見つかるのはこの土器だけですが、ここにいろんな食物が載っていたのではないかと思います。

王山古墳

群馬県庁の北側の中央大橋で利根川を渡った右手

にあるのが王山古墳です。最初の発掘は昭和47年に行われました。尾崎喜左雄先生が担当をされ、私は大学の最上級生として参加しました。今は当時の面影が残っていますが、すごい古墳だったのだと思います。発掘調査時、墳丘表面を葺石がひっしり施されているのが見られましたので、その時は見ただけでクラクラしてしまうような前方後円墳でした。葺石の一つ一つは座布団みたいを感じ、抱えるとかなりの重さでした。それで約76mの墳丘全体を造っていましたから、すごい手間がかかっています。

主体部の横穴式石室は、すでに天井石を失っていましたが、壁石はよく残っていました。前二子古墳と同じ6世紀初頭の所産で、総社古墳群の中では形成の早い段階に属しています。王山古墳の前代には遠見山古墳という5世紀後半の前方後円墳があり、また後には総社二子山→愛宕山→宝塔山→蛇穴山古墳と地域屈指の有力墳が連続と続きます。ここは築山東麓の末端に位置しますが、山麓の真下の部分に比べたら、被害はそれほど大きくなかったと考えたらよいかと思います。

築瀬二子塚古墳

次に上毛野で最も古い横穴式石室と考えられる築瀬二子塚古墳を見てみます。この古墳は、安中の原市という所にあります。碓氷峠を越えて松井田から安中へと入った所が原市です。国道18号線でいうと礪部温泉に下りていく一つ先の信号が「築瀬」という場所で、そこに築瀬二子塚はあります。前二子古墳よりちょっと古いかかもしれません。榛名山の噴火との関係が微妙ですけれど、いずれにしても新しい古墳造りが入ってきたその中の代表的な一つになります。碓氷川のすぐ川べりにあるので、そこから石を運び込んで造る利便性を考慮しての占地であると思われます。

この古墳もそろそろ安中市による史跡整備が完成します。この古墳の場合、一軒のお宅で土地を所有していましたが、それを市に売却してくれましたので、ほぼ完全に古墳を残すことができました。整備前は太い孟宗竹の鬱蒼とした竹林だったのですが、その竹をすべて伐採しましたので、古墳の全貌が観察できる良い眺めになっています。磧辺温泉へ行きながらちょっと寄ってもらといいかもしれないです。

横穴式石室登場の背景

6世紀初頭の榛名山の大噴火後、上毛野の中・西部地域に一齊に横穴式石室を主体部とする前方後円墳

が登場してくることを確認しました。それでは、この6世紀初頭の時期というのはどういう節目に当っていたのかということが大事になってきます。まず気づくのは、ヤマト王権の大王の墓が、堅穴式から横穴式に変わるのがこの時期だったことです。これは、当時の日本列島のいちばん中心的な勢力の最上位層(大王、後の天皇)の墓、すなわち前方後円墳に横穴式石室が採用されるようになります。ということは、上毛野での登場も日本列島の中核地域での公式採用との関係性の中で考えていく必要があるかと思います。

前述しましたように、榛名山の噴火が上毛野地域に与えた影響は非常に大きいものでした。ただし、噴火のダメージを受けたのは限られた地域でしたから、逆にこのことをきっかけに新たに飛躍してきた勢力も存在したと考えられます。それを象徴的に示しているのが初期の横穴式石室を採用した前方後円墳の勢力だったと考えられます。その場合、ヤマト王権と軌を一にしての採用だったことは、王権とのつながりの強さを物語っています。噴火直前までの中馬の組織的生産が開始され、内陸の直接ルート(古東山道ルート)により東国への拠点・要衝地帯として結びつくようになったわけです。この王権と上毛野の新たな関係性は、噴火後も新たな勢力によって引き継がれたことを、横穴式石室の共有、築瀬二子塚の古東山道ルートの要の地点の占拠等が如実に物語っています。否、むしろさらに関係性を強めていったと考えるのが当を得ていると言えるでしょう。

七奥山古墳

5世紀後半から6世紀前半の東国・上毛野の歴史動向を探っていく上で、もう一つ重要な古墳があります。それは藤岡市白石に所在する6世紀前半の七奥山古墳です。西から流れてくる鶴川と南から流れてくる鮎川の合流点付近にあり、墳丘長145m、高さ16mの、この時期東日本でも最大級の前方後円墳です。墳丘に対しては本格的な発掘調査が行われていないので、不明確な部分も多いですが、近くの藤岡歴史館に展示されている埴輪は巨大で見事なものです。主体部は横穴式石室で間違いないところです。

古墳の所在地は、古代の緑野郡に属しています。これは、古墳時代の時期には、緑野屯倉と称されています。それは何かというと、ヤマト王権の直轄地のことです。上毛野の中で、もう一步踏み込んで直に結び

つく地域が出てきたことを示しています。これは上毛野だけのことではなくて、そうした屯倉が、古代史研究の中では、これを前後した時期に各地に置かれるようになることがよく言われています。

このような新しい流れは、ヤマト王権が列島の一元的支配を目指していくちょうど途中の姿として見て取ることができます。

おわりに

金井東裏遺跡の最初の現地説明会は、平日にもかかわらず午前9時から午後の途中まで、およそ3000人近くの人が見学に来られ、警察からはお咎めをもらってしまいました。道路も大渋滞になり、どうにも身動きが取れないまま遺跡の近所のみなさんから苦情が殺到したためです。また調査は続いているが、なかなか皆さんに一齊に見てもらう機会は難しいのですが、近くまで来られた折には、渡りから吾妻方面への県道蘇でやってますので、ちょっと立ち寄ってもらつたらよろしいかと思います。

それと県立小児医療センターの東隣りにある群馬県埋蔵文化財調査センター発掘情報館には、金井東裏遺跡についての速報展示があります。

一方、大室古墳群の見学は毎日可能です。古墳群の一角の赤城型民家園の土蔵を改装した「大室はにわ館」が開設されています。実際の古墳群を見学するのと併せて、こちらも見ていただくとよろしいかなと。実際を見てもらうのが一番楽しいことですから、古墳見学のきっかけにしていただければと思います。これで時間になりましたので、終わらせていただきます。

【質疑応答】

Q1 横穴式石室を持つ古墳。これがちょうど変わり目になるということは、要するに大和朝廷との関係がかなり濃いと思いますが、かつて豊城入彦命について何年か前に話題となったことがあると思うんですけど、その豊城入彦命は崇神天皇の長男ですよね？

そういう人達が繋がってきて、豊城入彦命の孫、彦狹嶋王、彦狹嶋王の子・御諸別王とかという繋がりがありますね。そういう支配的なものがどのくらいの強さを上野に、毛野の先祖だろうという風に思っております。

それともう一つが、アーネスト・サトウが明治

13年に見学をされていますね。それで日本旅行記の中で書かれているんですけど、結果的には日本書紀の年代の所はもう少し検討が必要であろうというような事が文書に残っているんですが、大和朝廷との関わりをちょっとお話をいただきたいと思います。

A1 今、ちょっと宣伝も兼ねてなんですが、県立歴史博物館が完全休館に入っています。なぜ完全休館をしているかというと、大改修を行って、従来の展示を大きく変えようとしているわけです。

その一つの大きなコンセプトとして、古墳時代にもっと光を当てていこう計画しています。これは、大澤知厚さんもやっていることですが、群馬県の人たちは、自分の暮らしている地域を足元から見つめなおして、その価値を正しく認識し、そこから群馬のよさを発信していくこうと言う考え方方に呼応するものです。

群馬県は全国で知名度最下位と言われていますけれど、代わりにぐんまちゃんが1位になりました。もう一度群馬の歴史を、古い時代から見直す中で、それを博物館でも活かしていくこととで、私も新しい博物館作りに関わらせてもらっています。

現在、古代史・考古学の研究者が集まって展示構想について議論していますが、今質問された問題と同じように、何故、上毛野の地域は非常に濃密な古墳時代だったのか？わが氏族の先祖は、崇神天皇の長男・豊城入彦命で、それがそもそも始まりなのだ。だから大和とも繋がりが非常に深いという上毛野氏の氏族伝承が、日本書紀等に出てくるわけです。これはお家自慢あんまり当にならないのかというと、その時代の正史に堂々と書かれていることに注目する必要があるかと思います。日本書紀が出来たのは奈良時代ですけれど、この時、上毛野氏が堂々と自らの歴史を語っていたことは、ある程度そうした歴史性が認められていた可能性があると考えてもよいかと思います。

本当に崇神天皇の長男が来たかどうかは別問題です。畿内との繋がりが特に深かったという点を注意したいと思います。その意味では古墳時代の始まりの時、大前方後円墳、大前方後方墳が出てきて、三角縁神獣鏡という重要な副葬品が関東の中では格段に多い数をなぜ群馬が持っている

のかというが疑問にも関係するかと思います。

太田天神山古墳という東日本最大の前方後円墳には、長持形石棺という畿内の天王の墓に使われた石棺と同じものが出土しています。太田天神山の石棺は絵図と破片しか残っていないんですが、伊勢崎市のお富士山古墳には完全な形で展示してあります。一度機会があったら見ていただきたいと思います。お富士山古墳の長持形石棺より一回り大きいものが天神山古墳にもあったことがわかります。この石棺は群馬に住んでいた人には技術的に到底製作出来なかつたため、おそらく畿内の天王の石棺を作っていた人が、群馬に派遣されている可能性があります。では、せっかく来たんだから埼玉にも寄って造つていけば良かったのではとか、栃木にも寄つて造つていけば良かったじゃないかとか、と思いますが、その造つていかなかつた差に注目する必要があります。

だから、横穴式石室も畿内で言うと、天王の埋葬施設として採用しようという流れが始まるわけですけれど、その流れにすぐ応えて、「埋葬施設と言ったら横穴式石室だろ！」みたいに言われるようになった時には、群馬も一緒に入れているというパイプを持っていたこと、そこがすごく重要だと思います。そういう意味で、繋がり方の中に、さっきおっしゃられたようなことがベースとしてあった可能性があるということを、従来の展示では前面に打ち出していなかつたのですが、今回はこの点に重点を置こうとしているところです。虚見深く、わかりやすい展示にしたいと考えていますので、リニューアルオープンのあかつきには是非来ていただきたいと思います。

Q2 群馬には渡来人がたくさん入っています。その馬の先進的なものも取り入れるのも韓国の方から入ってきたという事ですけど、直接、日本海側の新潟方面から来たのか、大和政権から派遣されて群馬に来たのか教えてください。

A2 その問題は研究者の間でもかなり議論になっています。かつてはヤマト王権と繋がりの深い地域に送り込んでいくという流れをすごく重く見る立場が多く、直接に朝鮮半島と地域の豪族が繋がるというのは重く見ないという傾向がありました。近年、それでは説明できない部分というのが見えてくるようになりますし、例えば上毛野の場合もいろんなことが見えてきており、それが奈良

や大阪には出土しないのに群馬で見つかるみたいなことがあつたりします。

新潟はともかく北陸の福井県などは朝鮮半島と非常に濃いつながりがある地域として存在しています。そうするとそこには日本海の流れの中で直接来ている人達も当然いたという。それから本来こちらからも朝鮮半島へ行きますので、そういう意味でそういう人達によって招かれてくるということもあつたでしょう。それからこの間シンボジウムで話したんですけど、私の母親方は伊勢崎市(旧境町)で日野屋という商店で味噌・醤油・塩・たばこ・菓子など売つていたんですけど、明治時代に近江から境町に来て商売を始めたのです。近江商人という方が結構関東に来ていまして、群馬にもずいぶん近江から商人の人が来ているんですね。それで一回だけ来るのではなくて、今度はうちの曾おじいさんが評判を聞いて近江から群馬に来ます。あるいは、群馬にいる近江商人同士が協力し合う、というようなことも頻繁にあつたようです。

古墳時代も渡来人は渡来人の情報網というのを持っている可能性があります。人と人との行き来は、評判を聞いて来る人、移民で日本に来る人ももいますよね。1回だけじゃなくて、その後を頼って、母や兄弟などの情報が地元に入ってくるとか、いろんな形であったと考えいいでしょう。その中には、ヤマト王権の政治的意図によって入ってくるケースも当然あつたと思います。

金井東裏遺跡と大室古墳群

右島和夫

1. はじめに

平成 24 年 11 月 19 日に、6 世紀初頭とされる榛名山噴火火碎流の直下から甲着装古墳人が発見された渋川市金井東裏遺跡は、当時のテレビ・新聞等で大きく取り上げられ、話題となった。

この一連の噴火活動は、山麓一帯を中心に壊滅的に近い大被害をもたらしたことが、数多くの発掘調査によって明らかにされてきている。

噴火直前の時期、榛名山東南麓に当たる高崎市街地の北西部から旧群馬町、同箕郷町南部にかけての一帯は、墳丘長 100m 前後の 3 基の大型前方後円墳(古い方から順に井出二子山古墳、保渡田八幡塚古墳、保渡田薬師塚古墳)が機的に築造されており、当時の上毛野地域の最有力勢力の直接的基盤となっていたことがわかる。古墳時代の代表的豪族居館とされている三ツ寺 I 遺跡は、古墳群の目と鼻の先の至近にあり、この勢力の権力基盤の強固さを如実に物語る。

金井東裏遺跡の甲着装古墳人は 40 代前半の男性である。おそらく保渡田古墳群の被葬者と同じ 5 世紀後半の時期を生きた人物であったことは間違いない。しかも、当時地域の最有力者層が所有していた最新式の小札甲を 2 領も所有(1 領は胄とともに身に着け、もう 1 領は持参)していたことから、保渡田古墳群の被葬者に匹敵する支配者層で、榛名山北東麓一帯を押さえていた可能性が考えられている。

5 世紀後半の時期は、榛名山の南～東～北東麓の一帯が飛躍的な展開を遂げた時期である。その動きをリードしていたのが、保渡田古墳群の勢力であり、今回見つかった甲着装古墳人だったと考えていいだろう。その場合、この新たな、飛躍的動向の背後には、ヤマト王権との新しい結びつきが存在したことが指摘されている。渡来人がこの動きに深く関与していたことも基本的には同じ流れの中で理解することができる。

その絶頂期のさなかに当たる 6 世紀初頭の時期に、突然の榛名山大噴火が襲ったわけである。さらに、その 30～40 年後、ダメを押すかのように再び榛名山の大噴火が襲うことになる。この 2 度目の噴火の場合は、特に被害がひどかったのは、金井東裏遺跡を含む榛名山の東～北東麓方面である。

金井東裏遺跡の周辺一帯を見渡してみると、噴火後の顕著な遺跡として知られているのは、7 世紀後半に属する虚空蔵塚古墳、金井古墳である。保渡田古墳群周辺の場合も、6 世紀中頃の中規模墳が井出二子山古墳の隣接地で確認されているが、往時の面影にはほど遠い。山麓一帯のダメージの大きさを物語るものである。

ところで、大室古墳群の前二子古墳が築造されたのは、ちょうど榛名山の大噴火があった直後の時期である。ちょうど同じ時期、あたかも噴火の大被害を受けた地域を取り囲むように比較的大型の前方後円墳が中・西毛地域に成立する。前橋市正円寺古墳、前橋市王山古墳、安中市簗瀬二子塚古墳、富岡市一ノ宮4号墳等である。これらがいずれも新しい主体部形式である横穴式石室を一斉に採用している点は注意する必要がある。なお、高崎市八幡観音塚古墳の南東に近接して所在する八幡二子塚は、周辺一帯では、5世紀後半の平塚古墳と6世紀末ないし7世紀初頭の観音塚古墳の間を埋める、強いて言うならば、上記の一連の前方後円墳に列する存在である可能性が非常に強い。

このように、上毛野地域の中・西部における榛名山大噴火を挟んで、ほとんど時をおかずにつながったまったく新しい造墓活動上の大変化には、榛名山大噴火が大きな契機となっている可能性が考えられてくるところである。

以下、6世紀初頭の榛名山噴火を挟んでの上毛野地域中・西部の歴史動向を具体的な遺跡、古墳を見ながらたどってみることにしよう。

2. 榛名山噴火以前

- (1) 金井東裏遺跡の調査とその意義
- (2) 5世紀後半の上毛野地域、東国

3. 榛名山噴火以後

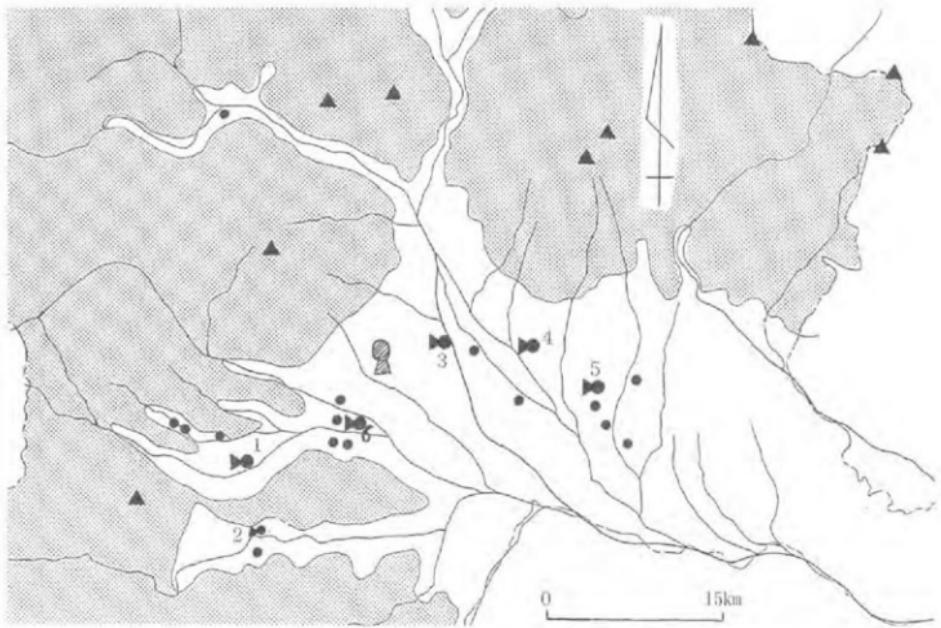
- (1) 6世紀初頭の横穴式前方後円墳の諸例
- (2) 織内における大王墓への横穴式石室採用の動き
- (3) 緑野屯倉と七輿山古墳 一中二子古墳の評価を視野に一

4. おわりに

〈参考文献〉

- 前原豊『東國の大豪族の威勢 一大室古墳群』新泉社
- かみつけの里博物館『はるな30年物語。』
- 右島和夫・若狭徹・内山敏行編『古墳時代毛野の実像』雄山閣
- 右島和夫・千賀久『列島の考古学 古墳時代』河出書房新社
- 近刊予定 右島『群馬古墳物語』上・下(仮題)上毛新聞社

上毛野地域の主要古墳 变遷



上野地域の初期横穴式石室 1. 萩瀬二子塚 2. 一の宮4号墳 3. 王山 4. 正円寺 5. 前二子
6. いき幡二子塚
中央の斜線の前方後円は、保渡西古墳群

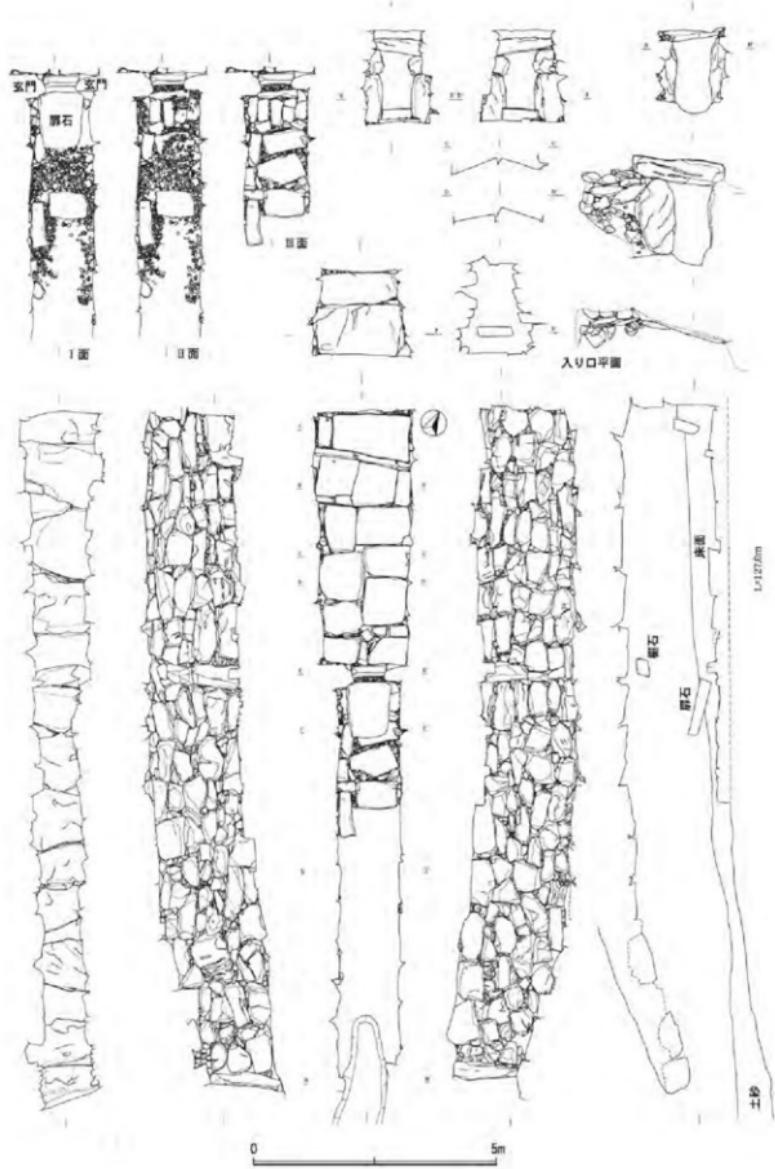
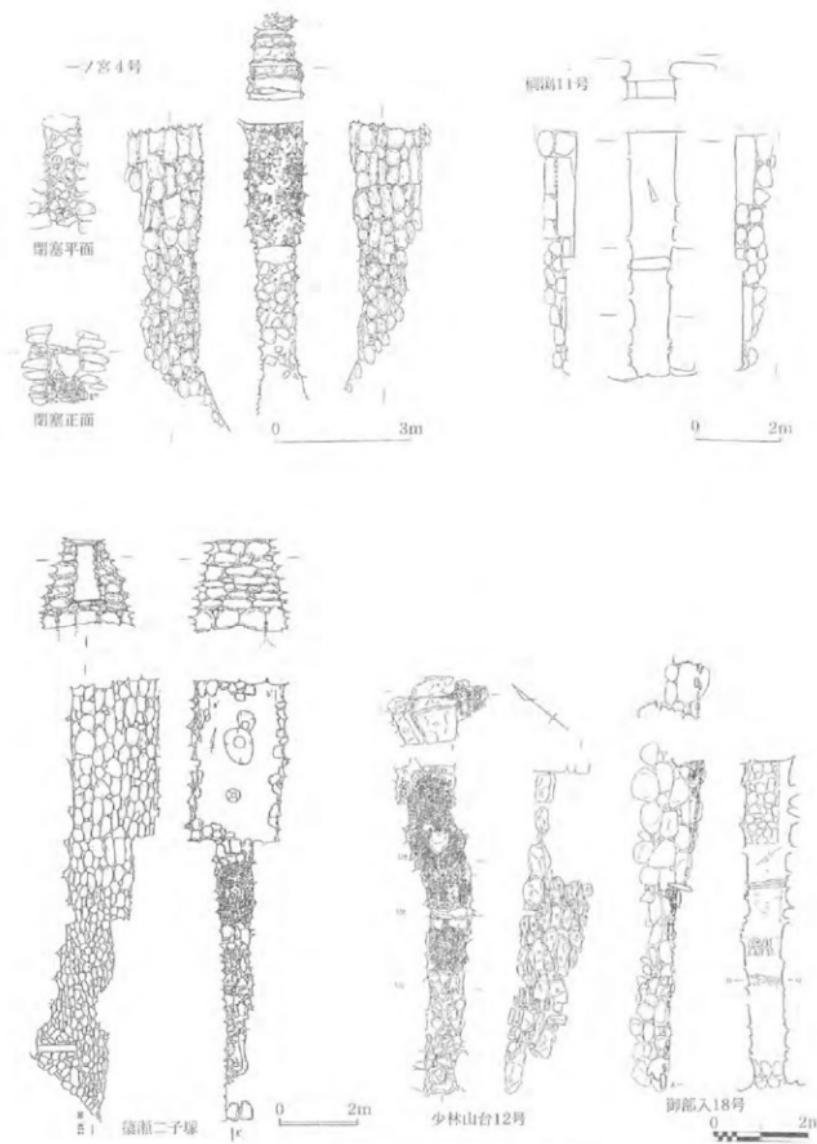


Fig. 2 前二子古墳の石室



第3図 西毛地域の初現期横穴式石室
(少林山台12号のゆがみは、後世の地すべりの結果である)

3 講座・赤城南麓の考古学2014 『赤城南麓の歴史遺産』

- 1 「旧石器人の道具箱」(勢藤 力:伊勢崎市教育委員会)
- 2 「陥穴と弓矢の狩り」(大工原 豊:國學院大學講師)
- 3 「前二子古墳と多田山古墳群のもがり屋」
(深澤 敦仁:群馬県教育委員会)
- 4 「藤岡でつぐられた前二子古墳の須恵器」
(藤野 一之:坂戸市教育委員会)
- 5 「寺と役所」(出浦 崇:伊勢崎市教育委員会)
- 6 「古代群馬の鉄生産」(笹澤 泰史:群馬県教育委員会)

旧石器人の道具箱

勢 藤 力（伊勢崎市教育委員会）

はじめに

みなさんのお手元のほうに資料のほうをお配りさせて頂いていると思うのですが、最後のページに今日、お話をさせていただく遺跡の分布地図があります。ちょうど真ん中ちょっと左側の所に桐生市って書いてあって、その左側に赤城山という山があります。今日お話をさせていただくのは、この赤城山の南麓に広がる地域です。こういう地域に大昔の人がどういう暮らしをしていたかというお話をさせていただきたいと思っています。できるだけ分かりやすくお話をさせていただければと思っていますので、よろしくお願ひします。

今日、お話する内容ですが、最初に旧石器時代の研究というものはどのようにされているかについて簡単にご説明します。その後、どのような気候条件のもとに当時の人たちが住んでいたかというお話をします。次に、赤城山とその南麓の地域の地形の様子についてご説明します。その次に群馬県内の旧石器時代の遺跡があり、その研究がどのようにされてきたかということについてご説明します。そして最後に、2万年くらい続いた旧石器時代という時代を群馬県では今、5つの時期に分けています。古いものからⅠ期～Ⅴ期の5つの時期について説明したいと思います。さらに時間ががあれば、群馬県内にこの時代の代表的な遺跡が2つあります、この2つの特徴的な遺跡群をご紹介したいと思っています。

群馬県の旧石器時代研究

まず、旧石器時代研究についてですが、この赤城南麓の地域は、いわゆる関東ローム層と呼ばれている赤土の地層になっています。そしてその赤土というのは、火山灰が降り積もってそれが土と混ざって土になっていくので、とても強い酸性の土壤になっています。そのため、骨や木といった有機物は年月とともにみんな朽ちて無くなってしまいます。だから、旧石器時代の遺跡からは、骨や木でできたものがほとんど残らず、石でできた石器が残っているのみということが非常に多くなります。

このような理由から、旧石器時代の遺跡を発掘し、研究し、調査するときには、出土した石器の作り方や使われ方を研究していく、その当時の人たちの生活を復元

していきます。

ここに3つ石器があります。これは、ナイフ形石器という石器です。主におよそ2万8千年前から1万8千年前に使われていた石器です。それより新しい時代にも使われていますが、主体的に使われていたのはこの時代になります。このナイフ形石器は、木の柄に括り付けて、槍のようになっていますね。ナイフ形石器だから、使われ方はナイフと同様だろうと考えがちですが、「形」という字が付いているように、形がナイフに類似している石器という意味です。使われ方としては、ナイフのように切ったり、刺したりするのではなく、槍先として使ったり、あとは物をこぼげ落とすための道具に使ったりいろいろな使われ方をしています。これが一番古い現階の石器です。次のこちらが石槍って書いてありますが、槍先形尖頭器と呼ばれている物です。これはおよそ1万8千年前から1万6千年前に使われていた石器です。更に新しい時代になると、細石刃と呼んでいる長さが5cmから10cmくらいの石器が使われるようになります。細石刃は、およそ1万6千年前から1万4千年前に使われていたもので、鹿の角や骨に切れ目を入れて、そこにはめ込んで使います。時代が新しくなるにつれ、一個の道具を作るための必要な原石の大きさがどんどん小さくなっています。効率的のレリーフ作り方を開拓していくわけです。また、ナイフ形石器や石槍は、象や鹿を獲るのに槍を刺した後引き抜くと、刃こぼれを起こしたり、動物の脂で切れ味が悪くなったりします。そのため、縁のところを打ち欠いて新しい刃を作り出すので、だんだん石器が小さくなっています。しかし、細石刃はそういう脂が付いたり、刃こぼれを起こしたりした刃だけを抜いて、新しい刃を装着すれば、すぐにまた使えます。非常に便利で効率的な道具を生み出しています。1万数千年前の人々が、こうして道具をどんどん改良していくということがお分かりいただけると思います。

ナイフ形石器には、杉久保系や茂呂系など製作技術の違いで種類が分けられ、時期ごとに特徴的に使われています。特に国府系ナイフ形石器は、主に西日本で作られている石器で、群馬県にはほとんど入ってきていたなかった石器の技術です。それが渋川市の上白井西伊熊遺跡で

國府系ナイフ形石器を製作していたことがわかりまして、旧石器時代の研究者の中で話題になりました。

旧石器時代の気候

次に、旧石器時代という時代は、どういう気候だったかということをお話します。この時代は全世界的に氷河期と言っていた時代にあたります。みなさんも映画やテレビなどで氷河期を再現した映像を観たことがあって、氷河期の世界のイメージがあると思います。自分も子供の頃は、氷河期と言えば氷で覆われた、南極か北極みたいな世界で毛皮を身にまとった原始人が、マンモスみたいな大型の動物を追いかけているというようなイメージでしたわけですが、実際には、どうだったのでしょうか。

ここに旧石器時代の気候についてのグラフがあります。下は3万年前、上が現代となっていて、旧石器時代は1万数千年のこの辺までです。このくねくねと曲がっている線がその時期の気候を表しています。左が寒いで右が温暖になっているので、線が左に寄っている時期は寒くて、右に寄っている時期は暖かいということです。見ていただくとわかるとおり、一番古い3万から2万7千年前の頃は暖かい時期です。それが徐々に寒くなってきて2万から1万8千年前くらいの時に一番寒くなっています。また暖かくなっています。この頃の日本は、海面が下がり陸地の部分が増えます。そのため、当時の日本列島は、北海道とサハリン、シベリアが陸続きになり、本州と四国九州が陸続きになっていました。そのため、日本海は湖の様な状態でした。

伊勢崎市に北関東自動車道の伊勢崎インターチェンジがありますが、その北側に三和工業団地が隣接しています。その発掘調査をした時に、およそ2万5千年前の地層から当時の自然環境が復元できる資料が発見されています。それは樹木や草花などの花粉です。これを分析してみると当時のこの地域の風景は、沼のような湿地があって、エゾマツなどの針葉樹林が広がっていただと考えられます。さきほど、氷河期は南極や北極のような風景のイメージだったと話しましたが、全くそのような風景ではなく、現在より7度くらい平均気温が低い気候であったと考えられます。なので、氷河期のこの地域は、現在の尾瀬ヶ原くらいの気候であったとイメージしていただけたらいいかなと思います。この写真は、北海道の上川町の浮島湿原の風景ですが、このような風景が当時のこの地域に広がっていたということです。

赤城山南麓の地形

次に、赤城山とその南麓の地域の地形の様子について

ご説明します。この写真は、皆さんご存知の赤城山です。手前を上武道路が走っています。現在は、このあたりを北関東自動車道が走っていて、ここに伊勢崎インターチェンジがあり、先ほどお話しした三和工業団地がここに広がっています。

かつて、赤城山は活火山でした。50万年くらい前に噴火活動が始まった時の赤城山は、きれいな円錐形で富士山のような形をしていました。それが2、30万年前に大爆発を起こしたことによって山の上の部分が崩れ、現在のような裾野が長い姿になったといわれています。また、その時に崩落し、南麓に土砂が堆積して出来たのが「流れ山」と呼ばれる小さい独立丘陵です。前橋市の橋山や前橋市と伊勢崎市の境にある多田山などがあります。

こちらの地図をご覧ください。今お話しした多田山はここです。このような独立丘陵が赤城山南麓にはたくさんあります。そして赤城山南麓の東部には色が塗られている部分ですが、大間々町、現在は合併してみどり市になっていますが、ここを頂点として、扇の形をした地形が広がっています。これを大間々扇状地と呼んでいます。この扇状地は、渡良瀬川によって形成されたものです。現在、粕川が流れている場所を昔、渡良瀬川が流れていました。そして、渡良瀬川が東にだんだんと流れを変えいくことにより、この扇状地の地形を作りました。扇状地形西側の茶色く塗った部分が、およそ5万年前に出来た桐原面と呼んでいる面です。現在の粕川から早川までの間になります。一方、こちらの緑色で塗った部分が、およそ2万年前に出来た藏原面で、早川から金山丘陵の西側までの範囲です。旧石器時代の遺跡として全国的に有名な岩宿遺跡はここにあります。

赤城山の南側の地形は、赤城山が崩れて出来たこの赤城斜面の独立丘陵を持つ地形と、大間々扇状地という地形で構成されています。

群馬県の旧石器遺跡

次に、群馬県内での旧石器時代遺跡とその研究についてお話しします。

最初に1949年に、これは皆さんご存知だと思いますが、笠懸町、現在のみどり市で相沢忠洋さんが岩宿遺跡を発見しました。これが、旧石器時代が日本にすることを証明した最初の発見です。その後、1950~60年代に相沢さんによって赤城山麓の遺跡の調査が行なわれています。少し間が空きまして、80年代くらいになりますと、関越自動車道や国道50号線より南の上武国道などといった大規模な開発が増えてきます。これらの開発に伴う発掘調査がされるようになってきて、それに伴って、旧石器

の遺跡も多く発見されるようになってきました。特に上武国道の発掘調査では、大間々扇状地桐原の遺跡が多く調査されました。90年代以降は、更に上信越道とか長野新幹線とか北関東自動車道、国道50号線以北の上武国道などで大規模な発掘調査が行われおり、旧石器時代の遺跡の数がどんどん増えています。遺跡数については、1965年に発行された『日本の考古学』第1巻には、全国の旧石器時代の遺跡の数が359遺跡収録されています。そして、そのうち47遺跡が群馬の遺跡で、全国の一割以上の遺跡が群馬で見つかっていたことがわかります。その後、大規模調査が始まった1980年代末になると群馬県内には150遺跡あると報告されています。

更に2008年に岩宿フォーラム実行委員会が群馬県内の旧石器時代遺跡の集成を行い、325遺跡あることがわかりました。このことから、1960年代から2000年代までのおよそ40年間で、かなりの膨大な数に遺跡数が増えていることが分かっています。

こちらの群馬県の地図を見ていただくと、この黒い点は旧石器時代の遺跡です。これを見ていただくと、赤城山の南麓に遺跡が多く、密集しているのが分かるかと思います。これが上武国道で、これが北関東自動車道です。さらにこれが、上信越道で、これが北陸新幹線、こちらが関越自動車道です。何が言いたいかというと、旧石器時代の遺跡は特に大規模な工事に伴う大規模な調査をした場所で見つかりっているということです。なぜかというと、旧石器時代の発掘調査は、最初にお話ししたように石器しか出土しないことが多く、規模の小さい発掘調査をするとそれだけ当たる確率が低くなります。逆に大規模な発掘調査では当たる可能性が高くなるということで、この分布地図のようなことになってしまいます。ただし、もちろん大規模な発掘調査をしても、もともと旧石器時代の遺跡がない場所では石器は見つかりませんので、赤城山南麓にこれだけの遺跡が密集して見つかりることは、この地域に当時、多くの人々が生活していた証拠であるといえます。

この写真が関東ローム層の地層です。今、皆さんが生活している地面から3mくらい掘り下げる、その断面を見ています。基本的に、人為的に掘り返したりとか、大きな地震で地面が崩れたりしない限りは、地層の一一番に一番新しい時代の土が堆積し、一番下に一番古い時代の土が堆積します。関東ローム層の中には、いろいろな火山灰が含まれます。例えば、浅間一板鼻黄色絆石という火山灰は、このⅢ層としている層の土を分析すると検出される火山灰で、この浅間山が噴火してこの火山灰を降下させた時期が約1.6～1.4万年前であるとわかっている

ので、この層から出土した石器もその時期のものであるということになります。

これから、時期ごとに石器の特徴を見ていきたいと思います。最初に、群馬県では旧石器時代を5つの時期に分けているとお話をしましたが、そのうちの一番古い時期であるⅠ期の石器から見ていきたいと思います。

I期の石器

このⅠ期という時期は、およそ3万5千年前から2万8千年前の時期です。地層でいうと、ここの暗色帯と呼ばれる地層から出土します。先ほど見ていたいた5種類のナイフ形石器の中でも、戴冢系ナイフ形石器と杉久保系ナイフ形石器というものが出土する時期になります。写真の石器の中で、こちらのヘン先のような形の石器が戴冢系ナイフ形石器です。そしてこちらの細長い石器が杉久保系ナイフ形石器です。これらに、この石斧という石器が伴って出土します。この斧は部分的に磨かれているというのがこの時期の特徴です。また、この時期は、塊状ブロック群というものが発見される時期になります。これが発見された遺跡の代表的なものが、伊勢崎市の下触牛伏遺跡です。塊状ブロック群については最後にお話します。ちなみに、今見ていたいたいるこの写真の石器は、前橋市の内堀遺跡で出土したもので、この内堀遺跡がどこにあるかというと、実はここの大内堀地内なんです。先ほど、発掘調査の担当をされていた前原さんから教えていただいたのですが、この黒曜石製の石器はそちらの門の所から出土したそうです。それ以外の石器は、そちらの白い壁の建物の場所から出土したそうです。これが一番古い3万5千年前から2万8千年前の時期の石器群の特徴です。

先ほどから自分一番古い石器群は3万5千年前と言っていますが、16,6年くらい前までは日本には50万年前とか60万年前の遺跡があると言われていました。それが前期旧石器捏造問題、新聞やテレビでご存知の方も多いと思いますが、結局、それらの遺跡がすべて捏造されたものであるということになっています。そのため、今では、群馬県内だと3万5千年前くらいが一番古いということでお話をさせてもらっています。

II期の石器

次が、II期という時期になります。およそ2万8千年前から2万3千年前になります。この時期は、茂呂系ナイフ形石器が主体になってきますが、この時期の地層には始良丹沢火山灰という火山灰が含まれます。桜島のある鹿児島湾北部に位置する始良カルデラの大爆発によっ

で飛んだ火山灰で、東北地方南部まで降下しています。

この時期は、前半と後半の二つに分かれます。前半の代表が、大胡町、現在の前橋市にあります大胡駅の少し北西にある埴中真木B地点遺跡です。一方、後半の代表は、伊勢崎市の大上遺跡で、北関東自動車道の建設に伴い発掘調査されました。場所は、北関東自動車道と両毛線が交差あたりです。

前半の甲真木B遺跡は、茂呂系ナイフ形石器にⅠ期の内堀遺跡で出土していた杉久保系ナイフ形石器が伴っています。前の時期の型式がまだ残っているということです。それが後半の大上遺跡になると茂呂系ナイフ形石器が主体になっています。徐々に石器組成が変わっているという事です。

Ⅲ期の石器

Ⅲ期は、2万3千年前から1万8千年前になります。切出系ナイフ形石器や角錐状石器が、出土する時期です。そして、先ほども少しお話したとおり、西日本では、瀬戸内技法による国府系ナイフ形石器が出土する時期です。このⅢ期は、赤城南麓だけでなく、群馬県内でも、遺跡数がひじょうに少ない時期で、その規模もかなり小さなものになります。

先ほど、一番早い時期になるとお話ししていましたが、この時期なので、そのことも遺跡数の少なさなどに關係するのかなと思っています。

～休憩～

休憩中にご質問があったのですが、渋川市の上白井西伊熊遺跡で国府系ナイフ形石器が発見されたのがちょうどさつきまでお話をいたしましたが、およそ2万3千年前から1万8千年前の時期になります。そこで、他の遺跡からこのような瀬戸内技法を使う技術がほとんど見つかっておらず、なぜその上白井西伊熊遺跡だけでこの技法によるナイフ形石器を作る技術が見つかっているかということですが、今はまだよくわからず、県内外の研究者たちが研究中です。

Ⅳ期の石器

次は、Ⅳ期になります。1万8千年前から1万6千年前になります。Ⅳ期の特徴としては槍先形尖頭器という石器が出現する時期だということです。この写真は新里村、現在の桐生市にある武井遺跡から出土した槍先形尖頭器です。この遺跡からは10万点以上の石器が出土したと言われていますが、あまりにも数が多くて、全体の

規模がいまだにつかみ切れません。発掘調査は明治大学が調査した部分と新里村が調査した部分があり、私も所属している岩宿フォーラム実行委員会のメンバーが少しづつ資料整理をし、秋のシンポジウムの時に何度かその成果を発表させてもらっています。

去年、岩宿博物館で武井遺跡発掘60周年を記念した企画展を開催しました。これがその時の展示図録ですが、この表紙にある石器全部がこの武井遺跡から出てきた槍先形尖頭器です。もちろん、これでも全体の一部なんですが、武井遺跡は、その規模の大きさと出土した石器石材の多様さで全国的に有名な遺跡です。その辺の話を最後にさせてもらおうと考えています。

Ⅴ期の石器

最後に、Ⅴ期、一番新しい時期です。1万6千年前から1万4千年前の細石刃という石器が主に使われている時期です。最初に話した一番技術の発達をしたというか、一つの石からより多く石器が作れて、効率的に石器が使えるというのを考え抜いた石器の作り方です。こちらの写真をご覧ください。上は太田市の八ヶ入遺跡、下は三和工業団地遺跡からそれぞれ出土した石器です。この細石刃を作る技術の伝播には、北回りと南回りのルートがあります。北関東や東北地方を中心とした北回りと九州や西日本を中心とした南回りのルートです。その2つの技術が交わる地元がちょうど赤城南麓です。そして、北回りのルートの代表例が八ヶ入遺跡、南回りのルートの代表が三和工業団地遺跡になります。

この図をご覧ください。細石刃を製作する技法が3種類あります。まず一つ目は矢出川技法といい、南回りのルートの製作技法です。三和工業団地遺跡でもこの技法で作られた石核が出土しています。稜柱形細石刃核と呼ばれるこの石核は、このように逆四角錐の様な形になります。次に、ホロカ技法ですが、これは北回りのルートの技法になります。この技法の石核は、船底形細石刃核と言い、このようにかまばこを逆さまにしたような形をしています。最後の剥離技法も北回りのルートになります。この技法は、このように木の葉のような形に原石の形を整えてから、細石刃を作り出すために叩く面、打面を作るために削片と呼ばれる破片を剥がします。

以上、3つの細石刃技法を簡単にご紹介しましたが、最後の細石刃を剥がす工程を見ていたら、3種類の技法すべてが、1か所にいくつもの矢印が書いてありますが、目的剥片である細石刃を剥がすために大きく打点、叩くポイントを変えずに次々と剥がしていることがわかつていただけたかと思います。

ここまで、Ⅰ期からⅤ期までの5つの時期について、群馬県の旧石器時代遺跡を簡単にご紹介しました。Ⅲ期のところで少し遺跡の数が減りますが、この赤城山麓では、一番古いⅠ期からⅤ期までにかけて、すべての時期に人々の営みが存在しています。これは、この地域が旧石器人が生活するのに適した場所だということと言えます。地形のところでお話したように、赤城山南麓には、赤城山の崩壊で出来た小高い山がいくつも存在し、大間々扇状地の広く平坦な地形には、沼や池がいくつも点在しています。例えば、天ヶ池や男井戸といったものが並びます。これらは、赤城山に降った雨が地面の中を通って、この地域で湧き水として出てくるのが、ちょうどこの標高の地点になります。これが、湧水池や湧水点と呼ばれているものです。このような場所には、飲み水を求めて、ナウマンゾウやオオツノジカといった大型動物が集まっています。それを、小高い山の上から見張っていた旧石器人がみんなで槍を手に持ち、追いついて、この沼地に追い込んでいきます。そして、動物の足元を取らせておいて、とどめを刺し、みんなでムラへ持ち帰る。このような生活を送るのに、この赤城山南面の地域は良い立地条件であったと考えられます。そのようなこともあり、この地域に非常に遺跡の数が多くたりとか、これからお話しするような大規模な遺跡が出来たりしたのではないかと思います。

下触牛伏遺跡の環状ブロック群

一つ目の遺跡は、下触牛伏遺跡です。先ほど5つの時期に分けた中で一番古いⅠ期の時期の遺跡です。場所は、伊勢崎市の波志江沼の北に位置します。現在、県の障害者スポーツセンターになっている場所で、すぐ東を国指定史跡である女郷が南北に走っています。現在、あかぼり花し・うぶ園としてしょうぶの花が咲く時期には大勢のお客さんが訪れます。

下触牛伏遺跡の発掘調査は、1983年と84年にされています。旧石器時代の調査は2,500m²という広さで調査されています。ここの大くなっている部分が調査区で、ここの大い小小な点々が出土した石器です。黒い点が輪のような形になっているのがわかるかと思いますが、これが重要なところです。発掘調査した時点では、2年に分けて調査したので、この平面図も2つに分かれています。発掘調査終わった後、図面を整理していく、分かれている平面図をつなげたところ、輪のように石器が出土していたことがわかりました。この図がそれで、直径およそ50mあります。この輪の中でも、石器がたくさん密集している部分をブロックと言いますが、このブロック

が數珠のように20個くらい続いています。この青い丸がブロックで直径5~10mほどになります。一方、輪の中にも3か所石器が集まってブロックが形成されています。これがⅠ期の時代の特徴のところでもお話しした環状ブロック群というものです。環状に石器の集まり、すなわちブロックがいくつも繋がったものなので環状ブロック群という名前で呼んでいます。これが日本で最初に見つかったのが、この下触牛伏遺跡なのです。この発見以来、日本各地でこのⅠ期に相当する時期に環状ブロック群が確認されるようになりました。この赤城山南麓地域でも、多くの環状ブロック群がみつかっています。前橋市では、多田山丘陵上の今井三駒堂遺跡や今井見切塚遺跡のほか、荒砥北三木堂遺跡、内堀遺跡があります。また、伊勢崎市では、三和工業団地遺跡のほか、北関東自動車道に伴う発掘調査で調査された天ヶ堤遺跡や波志江宿遺跡、大上遺跡などでみつかっています。

この図をご覧ください。青く塗られた石器ブロックが、輪のように繋がっていますが、この部分を円環部と呼んでいます。そして、赤く塗られた石器ブロックは、円環部とは違い、真ん中に集まっているブロック群なので、中央部と呼んでいます。例えば、円環部のこのブロックとこのブロックは隣り合っていない、離れた場所にあります。では、この2つのブロックがまったく同時に存在していたとなぜ言えるのでしょうか。例えば、同じ地層の中にあっても、一人の人が、こちらの石器は今年2014年にここ置いていて、あちらの石器は、去年置いていたという可能性もあります。そして更にこの石器は、一昨年置いていたかもしれないということです。さきほどから、簡単に私が円のように繋がったと言っていますが、これらの石器ブロックが同時にあった証拠があります。その証拠というのは、こちらのブロックから出た石器とあちらのブロックから出た石器とを合わせてみると、ぴったりとくっつきました。ということは、元々一つの石だったものをこちらで割って、もちろん石器を作るために割るんですが、割れた破片の一部をあちらに持つて行ったということです。この2つの石の破片はもちろん同時に存在していたわけですし、それらを含む2つブロックも同時に存在していたと言えるのです。このような石器の接合関係が、隣接したブロック同士と円の対面に位置するブロック同士とかで見つかって、接合する石器同士を線で結ぶと線があちこちに引かれ、非常にたくさんある接合関係があることがわかりました。このことから、環状ブロック群を形成しているブロックたちは同時に存在していて、円を描くような特殊な形状をしていたと言えるわけです。

では、下触牛伏遺跡の環状ブロック群から出土した石器についてお話しします。環状ブロック群は中央部と円環部があるとお話しし、これらは時期的には同じ時期にあったものと考えられます。この写真がそれぞれの部分から出土した石器ですが、違いがわかるでしょうか。中央部で出てくる石器と円環部で出てくる石器はちょっと種類が違っています。円環部では、黒色安山岩を主な石材としていて、藝術系ナイフ形石器が主体となります。一方、中央部では、黒色頁岩製の杉久保系ナイフ形石器や石刃がみられます。この違いはそれぞれのブロックでの人の行動の違いであったと考えられます。

旧石器時代の人たちは、狩猟生活をしていたわけですが、そのため一か所に定住せず、獲物を追いかけて移動して暮らしていました。そのため、彼らの住む家は持ち運びに便利で、簡単に作れて、簡単に解体できる、テントのようなものでした。その後、時代が変わり、定住生活をするようになると、竪穴式住居といったしっかりした住居をつくるようになります。旧石器時代の家のほとんどは、基礎の掘り込みがなく、発掘調査をしても住居の痕跡がほとんど見つかっていません。建物自体は木や毛皮などでできているので、土の中で朽ちてしまい、残ることはめったにありません。現在、研究者の間では、環状ブロック群の円環部のブロック、石器の集中している場所が家の建っていた場所を示していると考えられています。家中もしくは前で、石器作りをしていたため、家があった場所に石器ブロックが形成されるというわけです。そして、中央部の石器ブロックは、この環状の集落に住む人々の共同広場で、獲ってきた獲物を解体し、焚き火をして、肉を焼いたりしていた場所だと考えられています。この写真が環状ブロック群を形成した集落の復元想像図です。20個くらいのブロックがあったので、家が20軒建っていたことになります。そうするとだいたい一軒に4.5人住んでいたとすると、一つの集落で100人くらいの人が住んでいて、みんなで共同して大きな象や鹿などを捕まえて、ここでみんなで解体して分け合って暮らしていたのではないかというふうに考えられています。

武井遺跡の石櫛材

もう一つのお話がIV期、槍先形尖頭器の時期です。さきほど、その時期のお話の中でも、10万点以上の石器が出土していく、いまだに全体像が分かっていないと言っていた武井遺跡についてです。場所はさきほどお話ししたように、この地図のここがちょうど峯岸山丘陵、小菊苑有名な所です。武井遺跡はその裏のここになります。これが調査区の図面です。この黒い点々が全部石器の出土

位置を表していますが、このように数が分からないくらいに黒く塗りつぶされている場所があります。この遺跡から出土した石器の多さがこの図からもわかつていただけるでしょうか。この中に、この写真の様な大量の槍先形尖頭器も含まれているわけです。

この図をご覧ください。武井遺跡はここにあります。武井遺跡のあるこの地域は、チャートという石が地元で採れる石です。武井遺跡から出土した石器のおよそ半数がこのチャート製のものでした。また、利根川の上流には、黒色安山岩と黒色頁岩という石の産地があります。それが利根川を下ってきて、武井遺跡の周辺の河原でも採取できました。これら二種類の石で全体のおよそ15%を占めています。以上のチャート、黒色安山岩、黒色頁岩は、地元で採取できるため、在地系石材と言います。一方、非在地系石材の代表が黒曜石です。長野県の和田岬や霧が峰、麦草岬など、このあたりに黒曜石の原産地があります。また、栃木県の高原山、ここでも黒曜石が取れます。さらに、ずっと南に下りてきて、静岡県の柏根や柏崎、さらに海の向こうの神津島、これらの場所で产出された黒曜石が、はるばる群馬県の赤城南麓にある武井遺跡に持ち込まれていました。この時期、神津島は現在と同じように日本列島と陸続きじゃなかったと思いますので、旧石器人も船を使って行き来していたようです。この図からもわかるように、神津島は武井遺跡から250kmくらい離れています。柏根や柏崎で150km、高原山で70~80km離れています。そして、黒曜石の中で大半を占めているのは長野県産のものですが、長野県でも100km離れています。

さらに、黒曜石以外では、栃木県産と考えられる珪質頁岩や珪質凝灰岩、茨城県のトロトロ石、千葉県横浜産の珪質頁岩、東北地方の硬質頁岩など、多岐にわたる石材がさまざまな地域から武井遺跡に持ち込まれていました。もちろん、高速道路も車もない時代ですので、こぶしくらいの大きさの石をいくつ持って、中難ぎで何人か受け渡ししていたのかもしれません、武井遺跡に石が集まってきたというわけです。今でも、自分は車でも静岡県まで行くのはかなり大変だと思ってしまいます、旧石器人たちは、地元でもチャートや黒色安山岩、黒色頁岩といいたいいろいろな石が採取できるのに、更に良質の石を求めて遠方に出かけていたのでしょう。このように石を通じて人と人の交流があったということが、この地図から分かるのではないかと思います。

おわりに

3万数千年前からこの赤城南麓の地域に先人たちが暮ら

らしていて、それがずっと今まで続いてきた中で、自分たちの今の暮らしはあるのではないかと思います。最初のほうでもお話ししましたが、大きな開発に伴う発掘調査がないとこういった遺跡の発見がしづらいという現実はありますが、開発でどんどん失われていく遺跡や文化財を守り、後世に残していく必要があります。

また、次世代の子供や孫たちに、このような先人たちの作ってきた歴史の上に自分たちは立って、現在の自分たちの生活がある、ということをしっかりと伝えていかなくてはいけないと思いますので、今日お話をさせていただいた中で、もし面白いなと思われた事がありましたら、ぜひ家に帰って、ご家族の方にもお話をいただけたら幸いですので、よろしくお願ひします。拙い話で申し訳ありませんでしたが、これで終わりにさせていただきます。ありがとうございました。

【質疑応答】

Q1 先生の写真に中で、これは意識して捨てたものが溜まったところを我々が目に見えることになったのか、それとも生活様式や気候が変わって、そのとこに捨てて他のとこに移ったために、那があるか、その辺はどのように推測できるか？

A1 石器の散らばり方を見ると片付けて、一ヶ所に山にしたとか、後穴掘って埋めたような出方がありません。どっちかっていうと石器を作るとそのまま状態が多いので、ほとんど片付けではないと思います。

大阪の翠島園遺跡では、師匠が弟子に石器の作り方を教えた跡がみつかっているのですね。すごく上手に作った石器が下にあり、その後それを見ながら一生懸命真似して製作した破片が出てきました。弟子は、失敗を繰り返したので多量の破片が出るのですね。それが上に積もってきて上手な製品の上に下手な破片がいっぱい積もっているんですね。これからも、当時の人たちは、割った石器のかけらを片付けるとか、そういうことはしないで、そのまま放置して、別の場所に移ったと思います。

Q2 下触牛伏遺跡では、100人くらいの人間が生活した跡との話でしたけど、少ないグループで何度も生活をした跡とは考えられないか。

A2 お話しのようにも石器の接合がかなり広範囲に頻繁に多量にみられたことから、一度に生活をした跡と考えられます。100人くらいと言ったのは、ナウマンゾウ一頭獲るとそれくらい人が、一週間くらい生活できるらしいんですね。100人が全部大人じゃなくて子供もい

ました。また、ゾウなどの大きな獲物を獲るためにには、大人数の大人の男性が必要になるので、大きな集落が必要になった時期であると考えています。

Q3 今もこの下触牛伏遺跡は保存されていますか？

A3 現在は、この上にリハビリセンターの建物が建設されました。一部グラウンドで残っているかもしれません。開発に伴う調査では、高速道路や新幹線、建物を造る開発があり、記録を保存するため発掘調査が行われます。消えてしまう遺跡の記録を写真とか図面とかで残すために発掘やっています。

基本的には、発掘した遺跡は残さず開発をします。貴重な遺跡の場合は、史跡に指定されて保存されます。甲を来た人骨の出た茨城県の金井東裏遺跡みたい遺跡はなかなかありません。とくに下触牛伏遺跡は後で整理作業に入り、図面整理をしていて分かったため、分かった頃にはもう建物の建設が開始された状態でした。

Q4 製作するときに取った石器っていうのは持ち運びするのでしょうか？それとも、そこに置きっぱなしで、行った先で新しい石器を作るっていうのでしょうか？

A4 石器は、狩りのために使う道具ですね。だからこういう集落から出てくる石器っていうのは、使えないものが残されるケースが多いです。うまく作り上げた製品、真ん中付近のレベルで作った槍形尖頭器とかは狩場へ持っていく、そこで使います。そこで壊れたり、折れたりしますので、折れればその狩場で捨ててしまい、またま残ってまだ使える場合は持ち帰ってきて次のところにその製品だけは持っていくと考えられます。

Q5 石器の強度ってどんなものですか？実際当時の骨が出た場所で、熊がいたのか象がいたのかわからないのですけど、強度がないと人間襲われてしまうと思うんです。どのくらいの強度があって、もし分かれれば熊がいたとして熊に対抗できるような強度があったのですかね？石の強度、武器の強度ですね。

A5 ちょっと時代が違いますが、縄文時代になると弓矢の石鏃は猪の体の中から出でたりします。骨に深く入り込んでいるので、強度的には強いと思います。とくに黒曜石なんかは、ガラスのような鋭い上に脆くないのを選んだりすれば、かなり強い強度の石器が作れると思います。使い方実験するために切ってみたり動物に刺したりして、そのどんな痕跡が残るかっていう実験はあります、石器が強度の実験はあまり聞いたこと無いですね。

Q6 赤城南麓は全国的に見て当時は生活環境というの
は良かったのですか？

A6 非常に良かったと思いますね。ほかには、神奈川県
の相模原でも大きな遺跡が見つかっています。群馬県だ
けが良かったってわけじゃなくって、高台があつて、そ
ばに低地がある少し台地になる部分が大きな遺跡が残り
やすい場所ですね。千葉県にもあります。まあ後は何回
も言うようですが、大きな開発がないとなかなか見つ
からないので多摩ニュータウンなど大きな開発があると
ころがそういうのが見つかっています。ただ、この赤城
南麓は先ほども言ったように立地条件が非常に整い当時
の人が生活するには適した場所と言えると思います。で
ないと武井遺跡みたいな大きな遺跡は存在しないと思
います。

【引用参考文献】

- (財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団 2005 『群馬の遺
跡1』 旧石器時代 上毛新聞社
- 笠懸野岩宿文化資料館 2005 第40回企画展『環状プロ
ック群—3万年前の巨大集落を追うー』
- 岩宿博物館 2010 第50回企画展『群馬の岩宿時代part
II』
- 岩宿博物館 2012 第54回企画展『人が動く、時代も動
く—東日本の細石刃文化を追うー』
- 岩宿博物館 2013 第56回企画展『巨大遺跡の謎を追う
—武井遺跡発掘60周年—』
- 岩宿博物館・岩宿フォーラム実行委員会 2013 岩宿フ
ォーラム2013/シンポジウム『槍先形尖頭器文化の大規
模遺跡と遺跡の広がり—武井遺跡発掘60周年—』予稿
集

「旧石器人の道具箱」

勢藤力（伊勢崎市教育委員会）

旧石器時代研究とは？

- ・赤城南麓の旧石器時代の遺跡は、関東ローム層と呼ばれる地層から発見される。関東ローム層は、火山灰が堆積し土壤化してきたものであるため、酸性度が強く、木や草、骨や角、皮などでできたものを腐らせてしまう。そのため、遺跡から発見されるものは石で作られた石器だけである。
- ・旧石器時代を研究するには、石器がどのような形をしているのかという観察から始まり、どのように作られ、使われたのか、時期や地域によってどのように異なるのかという研究が生にされる。
- ・当時の生活は、狩りを生業としていたため、石器もそのための道具であったものが多く見つかる。ナイフ形石器や槍先形尖頭器、細石刃は旧石器時代を代表する石器であるが、これらの多くは、狩りの道具である槍先として使われたと考えられる。そのため、これらのはずれかはどの遺跡でも発見されており、旧石器時代研究の中心となっている。
- ・旧石器時代に登場した石器は主に、ナイフ形石器、石槍、縄石刃と年代を追って順に登場した。ナイフ形石器は、以下の 5 種類がある。

杉久保系ナイフ形石器：材料となる石刃の根元の部分と先端をわずかに調整加工して作る

茂呂系ナイフ形石器：石刃を断ち切るように調整加工を加えた石器

国府系ナイフ形石器：横に幅広い一定の形の剥片を連続して剥ぐ「瀬戸内技法」によって材料を得て作られる

鼓塚系ナイフ形石器：形が一定でない幅が広い剥片を利用し、平坦な加工で作られたもので、時期的に古い

切出系ナイフ形石器：形が一定でない幅が広い剥片を利用し、急角度の調整で加工されたもので時期的に新しい。

- ・旧石器時代の石槍は「槍先形尖頭器」と呼ばれることが多い。一般的には表裏面を覆うような平坦な加工で作られた木の葉の形をした石器であるが、片面あるいは周辺のみに加工したものもある。

- ・細石刃は、長さ 2~3 cm で幅 5 mm 程度の小形の石器で、それ自体には形の違いは少ないが、細石刃を剥ぎ取るための石核の特徴によって分類される。

旧石器時代の気候と自然環境

- ・旧石器時代は気候的には地球全体が寒冷な氷河期にあたる。その開始は 200 万年前と言われ、寒冷な気候の氷期と比較的温暖な気候の間氷期とか數万から数十万年という長いサイクルで交互に訪れた。

- ・最終氷期であるヴュルム氷期は、約7万年前に始まり、1万年前まで続いた。約3万年前から2万7千年前の気候は比較的温暖で、その後徐々に寒冷化し、約2万年前から1万8千年前には最も気温が低下した。このころの気候は、現在より平均気温で7度ほど低かったといわれている。これをヴュルム氷期最寒冷期と呼び、現在の尾瀬ヶ原の気候に相当する。
- ・最寒冷期には、海面が現在より約100mも低下し、本州・四国・九州は陸続きになり、大きな島であった。また、北海道はサハリンやシベリアと陸続きとなって、大陸から突き出た半島のようであった。
- ・三和工業団地Ⅰ遺跡（伊勢崎市）では当時の自然環境を復元できる資料が発見された。約2万5千年前の地層からトウヒ属に含まれるアカエゾマツ、エゾマツ、トウヒなどの樹木花粉のほか、湿地部に生えるカヤツリグサなどの草本花粉がみつかった。アカエゾマツやエゾマツは北海道に、トウヒは関東・中部山地などの山岳地帯に自生する常緑針葉樹であり、それが標高の低い伊勢崎に存在していた。

赤城山と大間々扇状地の形成

- ・かつて、赤城山は活火山であった。50万年前に噴火活動が始まった時には富士山に似た円錐形の山であったのが、2、30万年前に大規模な爆発が起こり、それにより山体崩壊が起こり、巨大な岩も押し流す「岩屑なだれ」が発生した。その規模と破壊力はすさまじく、山麓を一気に下り、広い裾野と「流れ山」と呼ばれる小高い丘陵を形成した。前橋市の橋山、前橋市と伊勢崎市の境にある多田山、伊勢崎市の権現山などが代表例である。
- ・大間々扇状地は、赤城山南麓の南東側に広がる。大間々町を扇状地の先端として南北20km、東西10kmの範囲に広がり、南は埼玉県境の利根川まで、西は粕川、東は太田市金山丘陵に接している。大間々扇状地を形成したのが、渡良瀬川である。はじめ渡良瀬川は扇状地内を南下して利根川に流れ込んでいたが、徐々に流れを東に移していく。大間々扇状地には形成時期の異なるいくつかの段丘面があるが、大きく桐原面と藪塚面の二つの段丘面に分けることができる。
- ・桐原面は5万年前に渡良瀬川が離水して陸化した扇状地で、粕川・早川間に広がっている。このころの渡良瀬川は、早川より東の藪塚付近を流れている。
- ・藪塚面は早川から金山丘陵の西側に広がる扇状地で、2万年前に陸化した。これ以後、渡良瀬川は金山丘陵の東側へ大きく流路を移し、現在に至っている。

群馬の旧石器時代遺跡とその研究

- ・1949年の岩宿遺跡の発見によって、日本の旧石器時代の調査や研究は始まった。
- ・1950~60年代：岩宿遺跡発見者の相沢忠洋によって赤城山麓の遺跡が精力的に調査された。1965年発行の『日本の考古学』第1巻には、全国の旧石器時代の遺跡が359遺跡収録されているが、そのうち群馬の遺跡は47遺跡が掲載されており、1割以上を占めていたことになる。
- ・1980年代：関越自動車道（赤城山西麓や沼田盆地）、上武国道（大間々扇状地桐原面）などの大規模な開発の伴う大規模な発掘調査が始まった。1980年代末には群馬県史や岩宿遺跡発掘40周年記念事業などで、県内の旧石器時代遺跡が約150遺跡あるとされた。

- ・1990～2000：上信越自動車道（鈴川流域）、長野新幹線（榛名山南麓）、北関東自動車道（赤城山南麓）、上武国道（赤城山南麓）などの大規模開発に伴う発掘調査が増加した。2008年に岩宿フォーラム実行委員会で県内の旧石器時代遺跡の集成を行ったところ、325遺跡（縄文時代草創期も含む）あることがわかった。

群馬の旧石器時代の変遷

- ・石器が発見される地層は、石器群の年代を決定する重要な情報になる。

I層：縄文時代の土器や石器が含まれる軟らかい褐色土層

III層：浅間一板鼻黄色軽石（As-YP）が含まれる明黄褐色ローム層

IV層：浅間一大窪沢第1・2軽石（As-Ok1・2）が含まれる黄褐色ローム層

V層：浅間一板鼻褐色軽石群（As-BP）が含まれる黄褐色ローム層

VI層：浅間一室田軽石（As-MP）が含まれる褐色ローム層

VII層：暗色帯と呼ばれる暗褐色軟質ローム層。上部には始良Tn火山灰（AT）が発見される。

- ・旧石器時代は、日本列島に人が住み始めた約3.5万年前から縄文時代の始まる1.4万年前までの2.1万年間である。県内の当該期の遺跡は、発見された地層や石器の特徴から5つの時期に区分している。

I期：最古の石器群であるI期の石器群は、暗色帯であるVII層から発見され、年代は約3.5万年前から2.8万年前までの時期である。

内堀遺跡（前橋市）では、黒曜石製の鼓塚系ナイフ形石器と刃先の磨かれた石斧が発見され、30mほど離れた地点から杉久保系ナイフ形石器も発見されている。

なお、I期は、環状ブロック群が発見される時期である。

II期：茂呂系ナイフ形石器が生体となる時期で、VII層の暗色帯とVI層から発見される石器群である。年代的には約2.8万年前から2.3万年前までで、前半期と後半期に区分される。

前半期は、横元の基部にえぐりのある特徴的な形の茂呂系ナイフ形石器が生体となり、鼓塚系ナイフ形石器がわずかに伴う。また、石斧はほとんど発見されなくなる。大上遺跡（伊勢崎市）第3文化層で、3,453点という充実した石器群が発見されるなど、赤城山南麓で多数の遺跡が発見されている。

後半期は、黒曜石製の小形茂呂系ナイフ形石器が中心となる時期で、皮なめしの道具である捶器が発見される遺跡が多い。堀越甲真木B遺跡（前橋市）はその典型的となる石器群である。

III期：切出系ナイフ形石器や角錐状石器を伴う時期であり、西日本では瀬戸内技法による国府系ナイフ形が発達する。V層から発見され、約2.3万年前から1.8万年前の石器群である。縦に細長い石刃を素材としてナイフ形石器を作る前後の時期と異なり、横長の剥片をナイフ形石器等に利用することが多く、峯山遺跡（太田市）第1文化層がその典型である。ただし、この時期は、群馬全体で遺跡数が少なく、その規模も小さいのが現状である。

※上白井西伊能遺跡（渋川市）第2文化層では、原石から作られた瀬戸内技法の多数の接合資料が発見され、話題となった。

IV期：石槍（槍先形尖頭器）が徐々に発達する時期で、IV層から石器群が発見される。約1.8万年

前から 1.6 万年前の石器群で、10 万点を超える石器が出土した武井遺跡（桐生市）が全国的に有名である。

V期：細石刃を中心となる時期で、Ⅲ層から石器群が発見される。約 1.6 万年前から 1.4 万年前の石器群で、細石刃を製作する技術は約 2 万年前にシベリアで完成したとされる。この技術は、日本には北海道や東北地方を中心とした北回りのルートと九州や西日本地方を中心とした南回りのルートの 2 つの方向から流入し、群馬では、これら両方のルートによる技術が伝播している。北回りルートの典型例は、ハケ入遺跡（太田市）で、細石刃や細石刃核のほか、荒屋型彫器や搔器、削器を伴う。一方、南回りルートの典型例は、三和工業団地Ⅳ遺跡（伊勢崎市）で細石刃の石材には黒曜石が使用されている。

下触牛伏遺跡の環状ブロック群

- ・伊勢崎市下触町にある下触牛伏遺跡は、1983・4 年、県の身体障害者スポーツセンターの建設に先立って発掘調査がおこなわれた。
- ・その後の報告書作成のための整理作業中に、石器の出土状況の図面を張り合わせたところ、直径 50m のドーナツ状の出土状況が現れた。石器の接合作業の結果、一定のブロックに接合資料がまとまっており、その場所で石器作りがおこなわれていたと理解される一方、離れたブロック同士の石器が接合することもあった。このことはそれらのブロックが同時期に存在したこと示している。
- ・この石器群は「暗色帯」と呼ばれる層の中央付近から出土している。全体で 2,039 点の石器が発見され、杉久保系ナイフ形石器・藪塚系ナイフ形石器・石斧・削器・搔器が発見された。これらの特色は、旧石器時代最古の時期、I 期の典型である。
- ・石器群の分布は、直径 5~10m ほどの石器のまとまり「ブロック」が 20 ヶ所ほど円形に連なっている。この「円環部」の内側にも数ヶ所のブロックがあり、これを「中央部」とする。「円環部」では、利根川で採取可能な黒色安山岩を主な石材とし、藪塚系ナイフ形石器が主体となる。一方、「中央部」では、同じく利根川で採取可能な黒色頁岩製の杉久保系ナイフ形石器や石刃がみられる。ブロックの性格の明らかな違いが見て取れる。
- ・以上のことから、下触牛伏遺跡のムラの様子を復元してみると、「円環部」は、一般的な生活の場であり、ブロックの位置が住居の存在を表していると考えられる。一方、「中央部」は人々が集まってきてたき火をしていたような共同の広場であったと想像できる。
- ・下触牛伏遺跡での発見により、群馬県内はもとより、関東地方一円、全国で同様のブロック群が発見されるようになり、このようなものを「環状ブロック群」と呼ばれるようになった。（1989 年：14 ヶ所、1993 年：39 ヶ所、現在：100 ヶ所以上）

槍先形尖頭器の巨大遺跡—武井遺跡—

- ・桐生市新里町にある武井遺跡は、1953 年に明治大学によって学術調査による発掘調査が始められた。翌 1954 年には大量の槍先形尖頭器が発見され、1980 年代から 90 年代にかけては、新里町教育委員会（現桐生市教育委員会）により大規模な発掘調査がおこなわれ、膨大な量の槍先形尖頭器石器群が発見された。また、2010 年以降、明治大学を中心とした武井遺跡群調査団による学術調

査がおこなわれている。これまでの調査の結果、武井遺跡からは槍先尖頭器の時期の石器が、約12万点発見されており、全国的に見てもこの膨大な点数は驚異的で、まさに「巨大遺跡」といえる。

- ・武井遺跡出土石器の石材をみてみると、地元の石材であるチャートが半数を占め、利根川で採取できる黒色頁岩と黒色安山岩が15.6%、長野県を中心とする黒曜石が25%も含まれていた。そのほか、栃木方面と考えられる珪質頁岩や珪質凝灰岩類、東北地方の硬質頁岩、茨城のトロトロ石（安山岩系）房総半島の珪質頁岩など、多様な産地の石材が利用されている。黒曜石は科学分析により正確にその産地を突き止めることができる。
- ・1900年代に発掘された黒曜石製の槍先形尖頭器247点を分析したところ、長野県産の黒曜石が94%を占めていた。腰訪星ヶ塔が45%と最も多く、次いで和田小深沢が25%、男女倉が6%、麦草峠が17%となっていた。さらに、栃木県高原山産の黒曜石が5%あったほか、箱根越前、伊豆半島の柏峠のものもあり、かなり遠方の黒曜石が利用されていた。なお、明治大学によって発掘調査された石器も一部分析されており、長野県産のものや高原山産のもののほか、箱根越前産のものや伊豆諸島の神津島産のものが発見されている。
- ・武井遺跡で利用されていた石器石材は多種多様で、黒曜石にもさまざまな産地のものが利用されており、数百kmも離れた場所にある石材を利用していたことがわかる。黒曜石についてみると、長野県の黒曜石原産地は、武井遺跡から約100km、箱根や伊豆半島では150km、神津島に至っては250kmほどの距離がある。さまざまな石材があらゆる方面から集められていたことがわかる。この時期の石器作りの中心は槍先形尖頭器であり、これらの石材も槍先形尖頭器を作るために集められたものであると考えられる。
- ・なぜ、原産地を離れた一般的な遺跡の立地している場所に武井遺跡のような巨大遺跡ができるのであるか？原産地で槍先形尖頭器を作つて、平野部に持ち込み、使用するだけであれば、このような巨大遺跡にはならない。石材産地から原石や途中まで作られた未完成品をいったん集め、それを完成品にして周辺の遺跡に分配していた「中継基地」のような役割を武井遺跡がはたしていたのではないかと考えられる。

【出典】

- A：（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 2005 『群馬の遺跡』1 旧石器時代 上毛新聞社
- B：笠懸野岩宿文化資料館 2005 第40回企画展『環状ブロック群－3万年前の巨大集落を追う－』
- C：岩宿博物館 2010 第50回企画展『群馬の岩宿時代 part II』
- D：岩宿博物館 2012 第54回企画展『人が動く、時代も動く－東日本の細石刃文化を追う－』
- E：岩宿博物館 2013 第56回企画展『巨大遺跡の謎を追う－武井遺跡発掘60周年－』
- F：岩宿博物館・岩宿フォーラム実行委員会 2013 岩宿フォーラム2013/シンポジウム『槍先形尖頭器文化の大規模遺跡と遺跡の広がり－武井遺跡発掘60周年－』予稿集



写真1 3種類の石器

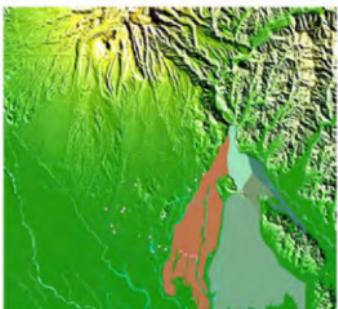


図2 赤城南麓の地形



図1 ヴュルム氷期の日本列島（出典A）



写真2 内堀遺跡出土の石器（出典C）



写真3 大上遺跡出土の石器（出典C）



写真4 堀越甲真木B遺跡出土の石器（出典C）



写真5 奉山遺跡出土の石器（出典C）



写真6 武井遺跡出土の石器（出典C）



写真7 ハケ入遺跡出土の石器(出典D)



写真8 三和工業団地遺跡出土の石器(出典C)



図3 下触牛伏遺跡の環状ブロック群(出典B)



写真9 下触牛伏遺跡中央部出土の石器(出典B)



写真10 下触牛伏遺跡円環部出土の石器(出典B)

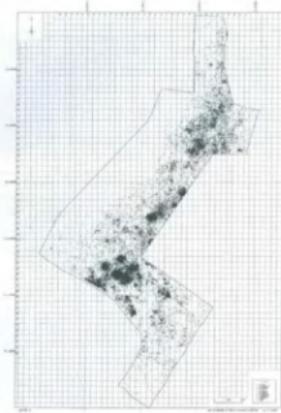
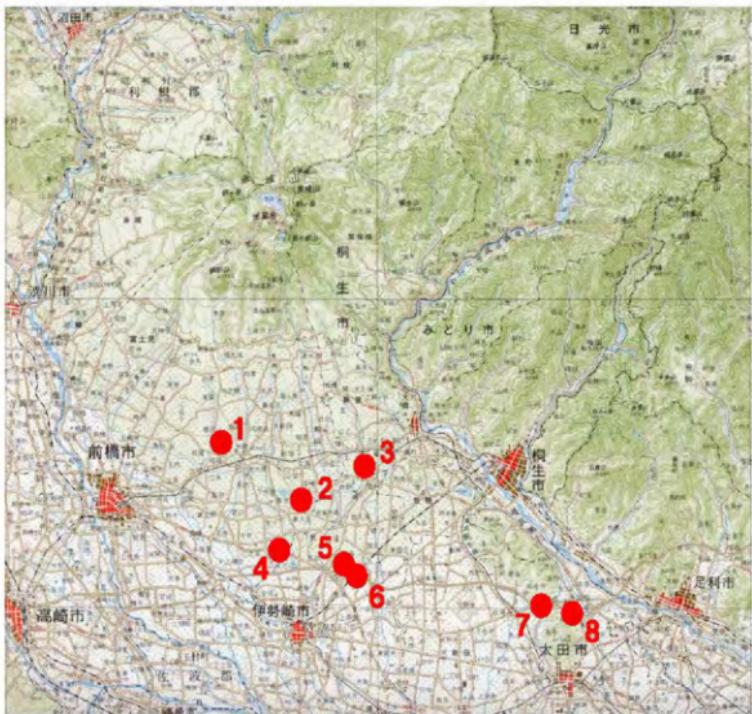


図4 武井遺跡の石器分布図(出典F)



図5 武井遺跡と石器先財産地(出典E)



【今回扱った遺跡位置図】

- 1:堀之内真木子遺跡 2:内堀遺跡 3:武井遺跡 4:下触牛伏遺跡
5:三和工業団地遺跡 6:大上遺跡 7:峯山遺跡 8:八ヶ入遺跡

陥穴と弓矢の狩り

大工原 豊（国学院大學講師）

はじめに—「モノ」と「コト」の考古学—

今回は赤城山麓の縄文時代の狩りということで、この地域ですね、二つの遺跡を取り上げて、皆さんに紹介してみたいと思います。

一つは苗ヶ島大塙遺跡、1994年に旧宮城村から報告書が出ていて。これは現在ドイツ村クローネンベルクのあるところです。そこを造成工事する際に発掘調査して、縄文時代のいろいろな遺構や遺物が出土しました。

もう一つは柳久保遺跡群、荒砥小学校の北西にあたる場所で、今は鶴が谷地区になっている場所です。この場所に縄文時代の遺跡がいくつかあり、1980年代に前橋市教育委員会の前原豊さんがずっとここでの調査にたずさわっていました。それで、私も調査を見学に行ったり、石器の実測を手伝わせてもらいました。

実は、この二つの遺跡とも縄文時代の早期中葉（約8千年前）には同時期に縄文人が利用していた場所です。この頃、赤城山麓では陥穴（おとしあな）を使った狩猟が盛んに行われていました。この二つの遺跡について皆さんと一緒に詳しく調べていくことで、縄文人の狩りについて少し考えてみたいと思います。

考古学者というのは、「モノ」すなわち出土遺物については分かれます。石鏃や槍などの石器の種類や、縄文土器が何式であるとかいつ頃使われていたものだとかについては理解できます。あるいは遺跡に掘られた遺構、竪穴住居の跡とか、土坑、貯蔵穴とか、陥穴なども分かります。これらは実態として存在していますから、考古学者はそれを細かく研究します。まず、分類です。どういう形であるか一所懸命に分類します。それが考古学の論文のかたちで、分類が中心で最後に結論めいたことを書いて終わりです。だから一般市民が読んでもちっともおもしろくない。こういった研究は「モノ」の考古学と呼ばれています。考古学の基本は「モノ」の研究なのです。それに対して、狩りといった行為は「コト」なのです。そういう行為については、実はよく分からぬのです。考古学者は、像そうに言いますけど、実際にその証拠に巡りあうことは、なかなかないのです。こういう稀有な

例は、渋川市の旧子持村周辺で確認されています。榛名山の二ッ岳が古墳時代の6世紀に大噴火し、火碎流や大量の怪石に覆われて、人々の生活が突然中断されました。そのため、現場検証ができるんです。現在の事件と同じで、警察の鑑識のような仕事をするのです。考古学者は、6世紀の現場検証をするわけです。それが今ブームになっている金井東裏遺跡です。甲（よろい）を着ていた人間が、溝にうずくままの状態で出土したのです。その隣接地からは、祭祀を行った場所が発見されています。おそらく、火山の噴火を防ぐためにあの場所で、あの地域の豪族が祈りを捧げていて、それで火山災害に遭難してしまったのです。そんなようなことが、実際に確認できたわけです。あの遺跡では「モノ」だけじゃなく、実際に人間がそこにいて、亡くなった時のポーズも分かっているわけだから、もっといろいろな類推ができます。そのため、考古学的に説得力のある説を一般の市民の皆さんにも話すことができるわけです。

ところが、狩りなんて相当分からないんです。例えば、後で言いますが、矢尻、考古学では石鏃と言いますが、三角形で1gあるかどうかの小さな石器です。主に黒曜石とかチャート・黒色頁岩といった硬くて割れ口が鋭利な石を使って、押正剝離で作られた石器です。これが遺跡から出土すると、縄文人が弓矢を用いて狩りをしていたとされてしまう。本当に石鏃は、全部普通の弓矢なのかなとなるわけです。

例えば、小動物の捕獲には仕掛け弓が使われる民族事例がたくさんあります。小動物が柵に引っかかると、小さな矢が発射される仕組みの罠です。その先端には、矢尻のようなものが付いている場合があります。こういう民衆だって、当然縄文人が行っていた可能性があるわけです。そうなると、石鏃が出てきたら、男の狩人が立派な弓矢を携えて狩りをしていたということにならないわけです。女性でも子供でも仕掛け弓は使うことができるのです。だから、そうなると石鏃は狩猟用の男の持ち物とは限らないのです。女性だって使えるわけですから。小動物は女性が獲っていたことも、民族事例ではたくさん

んあります。ここに示したのはアイヌの例と、シベリアの先住民族の例です。多くの民族が仕掛け罠を使用しています。したがって、1万年間続いた縄文時代に仕掛け罠がまったくなかったと考える方が、おかしいと思います。少なくともアイヌは持っているわけですから、縄文時代にもあったと考えておいた方がいいです。

あるいは、最初にアフリカの陥穴獣の様子を描いたイラストを示しました（スライド1左上）。ここでは木の枝などで列状に遮蔽物が作られていて、所々が途切れわざと隙間を開けています。そして、この隙間の所に陥穴を掘ってあります。ここに動物を追い込むわけです。逃げようとして、この隙間を通りようとすると穴に落ちる罠です。典型的な陥穴獣の仕掛けです。また、左下のイラストは北海道の研究者（佐藤孝則氏）が推定して描いたものです。鹿用の陥穴は細く掘ってあり、前足がはまる動きなくなる仕組みです。鹿がスッと入るように作られています。見回りに来るまで生け捕りにしておく仕組みです。右側のイラストは串刺しにする説です。普通はこの方法を考えます。これは相手を殺すことを目的としますから、戦争ではこういう陥穴を作ります。ペトナム戦争では米兵がこれで相当やられています。ところが、この方法だと、血の臭いがするから、キツネとかオオカミなどの肉食動物に先に食べられてしまいます。だから、この方法は、追い込み獣のように、すぐに回収できるような状況じゃなくや具合が悪いわけです。

1 落とし穴による罠獣

苗ヶ島大畑遺跡と柳久保遺跡群の位置と概要

それでは、二つの遺跡について、少し詳しく見ていいたいと思います。スライド2右は、苗ヶ島大畑遺跡と柳久保遺跡群の位置を示したものです。

（1）苗ヶ島大畑遺跡 この遺跡は赤城山の裾野のかなり上のほうです。標高でいうと440m～480mです。時期は縄文時代早期中葉～後葉、約8千年前です。この遺跡の遺跡の概要について、スライド2左上に示しました。住居址・竪穴状遺構が2カ所あります。が穴は5基です。ファイヤーピットと呼ばれるもので、トンネル状に作られていて、ここで焼製を作ったり調理を行ったりする施設です。大きな特徴は陥穴が96基も発見されていることです。また、土坑も80基ほどあります。土坑とは貯藏穴、ゴミ穴、墓穴などに使用されたと考えられる直径1m前後の穴です。そして、集石土坑が1つあります。これは石が中に詰まっている土坑で、蒸し焼き料理などのための施設と考えられています。ほかに、斜めに掘られた柱

穴が2つあります。報告書では白い粘土の層まで到達しているから土器作り用の粘土を採掘した穴と推定しています。しかし、粘土採掘のためにわざわざ斜めに穴掘る必要ないと思います。真っ直ぐに上から掘りば良いわけですから、私は、この斜め柱穴は、跡ね上げ用の罠の一部だと考えています。これが苗ヶ島大畑遺跡で発見された遺構です。

これと同じような陥穴群がたくさん発見された遺跡としては、旧宮城村の柏倉芳見沢遺跡などがあります。たぶん同じような性格の獵場だったと思います。この遺跡の標高は500m前後です。このあたりを発掘調査すると同じような遺跡が沢山あると考えています。

（2）柳久保遺跡群 この遺跡群は苗ヶ島大畑遺跡の南約10kmの位置にあります（スライド2右）。この遺跡群には頭無遺跡と下鶴谷遺跡という縄文時代の遺跡があります。頭無遺跡は標高が107～110mです。苗ヶ島大畑遺跡と同じ早期中葉～後葉に縄文人が居住していた場所です。ただし、ここは縄文時代前期と後期にも居住されています。この当たるは赤城南面の扇状地の扇端部にあたるので、伏流した水が湧き出る泉があります。こういう湧水点は、いろいろな時代にも利用されるのです。

頭無遺跡で発見された遺構の概要はスライド2左下に示しました。ここでも陥穴が33基発見されています。また、土坑が8基、石が集められた集石遺構が7基あります。集石の石は焼けているので、バーベキューのような石を使った料理をした遺構とみられます。それと焼土跡が4基です。これも火を焚いた跡なので、調理のための施設と推定されます。

ちなみに、珍しい遺構としては、石器配置遺構が発見されています。これは縄文時代前期のものと思います。打製石斧が2つとか3つとか、赤城山の方向に向かって配列された状態で出土したものです。縄文人が赤城山に対して、何らかの祭祀を行った遺構と推定されます。

おそらく、これと同じような遺跡が一つじゃなくて多数この周辺には存在していたものと推定されています。例えば、その一つは下触牛伏遺跡という遺跡です。現波志江沼の畔に存在する遺跡で、伊勢崎市（旧赤堀町）の群馬県立障害者リハビリテーションセンターのある場所です。そこでも、陥穴がたくさん発見されています。柳久保遺跡群と同じような性格の遺跡です。しかし、残念ながら土地改良事業により、赤城南面のこういった縄文時代の遺跡は、ほとんど調査されずに消滅してしまいました。

（3）陥穴獣の巣場—苗ヶ島大畑遺跡—

それでは、この2つの遺跡がどういう性格の遺跡なのか比較しながら見ていきましょう。まず、苗ヶ島大畠遺跡です。これは遺跡を上空から見た写真です（スライド3左）。地図ではこの辺りに当たります（スライド3左）。遺跡が立地するのは細長い台地で、両側は河川により開拓されています。赤城山麓は侵食を受けて、こういう谷が多いといっています。苗ヶ島大畠遺跡は、こうしたたくさんある台地の一つで発見されました。陥穴群は南から北まで調査区の至るところに存在しています（スライド3右）。それ以外の住居・豊穴状遺構・炉穴・集石土坑といった生活の良いとする遺構の位置も地図の中に示しました。調査区は南北に1kmほどの広範囲に及んでいます、その中でも南の方に集中的に人が住んだ形跡が点在しています。また、調査区北部では完全な形に復元できる大きな土器が、この土坑から一つ出土しています（スライド8参照）。このような大きな完形土器は普通はなかなか出土しません。だから、この土器には大きな意味があると思います。現場検証的に例えれば、物証に相当する重要な資料です。この場所で何が行われていたか、読み解きをする鍵となるものです。

次に、陥穴の形態について見てていきましょう（スライド4）。調査担当の旧宮城村教育委員会の細野高伯さんは、円形のものが古いと考えています。円形のものは深く掘られていて、底面の真ん中には杭が刺さっていた穴が一つあります。次は楕円形と隅丸方形のものです。その次は、小判形と分銅形・長椭円形、そして最も新しいものが長方形とTピット（トラップピット）と呼ばれる長い溝状の穴であると報告書に書いています（スライド4中央上・右）。しかし、細野さんの言う楕円形と小判形が、どのように違うのか私は分かりません。

唯一の根拠は、楕円形の陥穴を壊してTピットが掘られた事例があることです。（スライド4右上・スライド6右下）。考古学では土坑に堆積した土層の觀察から新旧関係を判断してきます。しかし、うまくこのように重なるように陥穴が作られることはないんですね。96基のうち切り合い関係があるのはこれ一つだけですから、この遺跡での確率は1%程度ということになります。

次に陥穴の配列について調べてみましょう（スライド4左）。よく見ると、同じ形で同じ方向を向いている陥穴が、一列になっているグループがいくつか見えてきます。調査区内だけでも3~4つのグループの陥穴群が作られていたらしいのです（線でつなぎだもの）。

これらの陥穴は単体で作られたものではなく、数基がグループとなっているのです。最初にお話したアフリカ

の事例のように、おそらく穴と穴の間には柵のようなもののがあった可能性があるのです。おそらく当時はこの辺りは森林で覆われていたのでしょうから、立派な柵を作らなくても、木と木の間を紐で結ぶても柵の代わりになります。いずれにせよ陥穴と陥穴の間には、シカなどの狩猟対象獸の行動を制約する遮蔽物が設置されていたのでしょう。でも、その痕跡は現在我々が発掘しても見つけることはできません。また、調査区の範囲外へも陥穴群は延びていたと推定されます。その先がどのくらいの長さであったのか分かりません。

このように考古学者は、ここで行われていた‘コト’を知るために、現代でも陥穴獣を行っているアフリカとかシベリアの狩猟民の事例を調べて、縄文時代の狩猟活動を類推するのです。

今、狩猟対象はシカと言いましたが、イノシシの可能性だってあります。ちなみに、シカは‘カノシシ’と言うことがあります、‘シシ’という言葉は、人間の役に立つ食料としての肉を意味する古い言葉なのかも知れません。

溝状のTピットは、イノシシ用としてはどうも形が違うように見えます（スライド4右下）。イノシシは足が短いし、太っているのでこの穴にうまく入りません。ところが、鹿は足が長くて細いからこの穴にスッポリと入ります。この形態の陥穴は、シカ用と考えて間違いないでしょう。また、動物はちょっとした穴だと、跳ね上がるから、工夫が必要になります。底面に杭用の穴がありますが、これは串刺し用じゃないという説があります。枝が邪魔で動物は足を動かせず、ジャンプできないようにするための木を用いた仕掛けの痕跡と考えられています。逆伐木という施設です。木の枝をひっくり返しに地面に差し込んだりする施設です。これは一時的に獲物を生け捕りにしておくための工夫じゃないかと推定されています。底面に穴が開いていたら串刺しだというように単純に考えはダメです。

実際の陥穴の例をいくつか示しました（スライド5・6）。典型的な陥穴は、底面に2つの穴があります。また、真ん中が狭くなる分銅形のものもあります（スライド5右）。このように作った方が、動物の胴体を固定できるのかも知れません。

スライド6左はTピットと呼ぶ陥穴の例です。いかにもシカ用の形をしていますね。シカ用といつてもカモシカを対象にしていた可能性もあり得ます。標高500mくらいだったらカモシカも棲息しています。いずれにしても、足の長い動物用でしょう。ちなみに、縄文時代に

は日本列島には野生のウシもウマもいませんから。

スライド6右は底面の穴の中に小石が詰まつた例です。木の構杭のようなものを入れた後にそれを固定するために、石をぎっしり詰めていることが分かります。また、スライド6右下は、先ほど説明した二つの陥穴が切り合っている例です。土層断面にV字状に違う色の土層が堆積している状態がよく分かります。Tピットが最も新しいという証拠はこういうことから言えるわけです。

また、スライド6右は、先ほどお話しした斜めの柱穴の実測図です。粘土探柵坑ではないと言っていたものです。斜めの柱穴は、住居のそばにあります。このような斜めの柱が立っている場合には、跳ね上げ戻の可能性が想定できます。獲物が戻にかかると跳ね上げて吊るし上げてしまう仕掛けです。この斜めの柱穴が、陥穴がたくさんある場所には作られていなくて、人が居住する場所の近くにあるところが気になります。二つしかないでの難推するしかありません。

なお、民族事例をみると戻の仕掛けは、「落とす」・「跳ね上げる」・「つぶす」の三つです。遺跡では確認することができますが、「つぶす」戻も一般的です。残酷なようですが、石を置いておき、小動物をつぶしちゃうのです。これは食料として肉を得ようとするよりも、テンやイタチなどの毛皮を得ようとする場合、ペッチャンコでいいわけです。ろくに肉量はないですから、それでつぶすんですね。特に、シベリアの先住民が行っています。ミンクとか良質の毛皮のものが対象です。毛皮は高価ですから。つぶす戻は、いっぱい石置いておき、支えの棒が落ちるとグシャンとつぶれるものが一般的です。シベリアは寒いですから凍って板切れの状態になってしまいます。食用の動物のためには、あまりつぶしません。普通は跳ね上げるか、穴に落として、生け捕りにする方法の戻です。やはり新鮮な肉の方が良いわけです。

これは戻の見回り頻度にもよるわけです。戻は毎日見回りに行くのか、数日に一回程度なのかといった見回り頻度で殺してしまうのか、生け捕りにするのか違います。

東北地方のマタギのような狩猟生活を営んでいた人々の生活の様子から、どのくらいのベースで見回っているかを研究している人がいます。けっこう頻繁に見回るので、戻を仕掛けた後は、寝ていればいいのではなくて、毎日かなりの距離を歩き回らなくちゃならないから、相当労働です。とにかく毎日何十kmも歩かなくちゃいけないことになるらしいですね。

陥穴は居住施設ではないので、ほとんど時期を決めることのできる土器は出土しません。したがって、この遺

跡の営まれた時代を決めるのは、隣接地に作られた住居址や堅穴状遺構ということになります（スライド7右）。

住居址は中央奥に火を焚いた炉跡があります。また、柱穴は内側だけでなく、外側にもありますが、規則的ではありません。しかも小規模です。したがって、この住居址は、大人数の家族が、長期間住んでいた施設ではなく、少人数の人間が短期滞在した小屋的なものであったと推定されます。

堅穴状遺構はもっと小規模な遺構で、炉もありません。柱穴も対角線の位置に2つしかありません。おそらく小規模な住居址と同じような性格の小屋的なものだと思います。そんな遺構でも生活の痕跡として、縄文土器片と石器が出土しています。ここからは早期中葉～後葉の条痕文系土器が出土しています（スライド7右上）。それと、打製石斧が出土しています（スライド7右下）。この石器には土を掘った時に生じる磨耗度が観察されません。私はこの打製石斧は、30cmくらいの柄のついた山中を歩行するときに、ブッシュを刈り払うための鉈鎌のような道具と考えています。縄文時代早期後半から前期前半頃にはこうした石器がたくさん出土します。したがって、この時代にはかなりの頻度で、ブッシュの生い茂る原野の中を移動する生活をしていましたと推定されます。

スライド8左に示した土器は、先ほど言いました大形の完形土器です。縄文時代早期で、完形に復元可能な土器はめったに出土しません。この土器は鵜ヶ島台式土器という型式の土器、南関東にはこの土器を作る縄文人が住んでいます。例えば、大宮台地にはたくさん住んでいます。それでも、こんな大形の土器が完形で出土する事例は非常に少ないです。通常は、先ほどの住居址の例のように小さな破片で出土します。しかも、復元できても30cmくらいの中形の土器です。ところがこの土器は50cmもあります。この時代では最も大きい部類の土器になります。この大きな土器は、土坑の中で横倒しなってつぶれた状態で出土しました（スライド8中上）。

これは何を意味しているのでしょうか。通常、こういった完全土器が出土した場合、考古学者はだいたい二つの説を考えます。まず一つの説は墓です。墓の副葬品と考えます。でも、この事例を見てください。土器が真ん中に入っていたら、人間が葬られるスペースがありません。ですから、副葬品説は考えにくくなります。

もう一つあとは儀礼・祭祀用であると考える説です。この土器をここに置くことによって、何らかの儀式を行っていたというものです。しかし、土偶とか石棒のような儀式専用の「第二の道具」（具体的な使用方法が想像で

きないような遺物)がこういった場所から出土すれば、儀式を行っていたという説は説得力があります。

しかし、これは実用品です。実用品がこういう所から出土した時に、無理に儀式に混じる必要はないのです。もっと素直に考えた方がいいと思います。この場合、次に使用するまで一時保管していたものと考えた方がいいと思います。

要するに、この場所にもう一度帰って来て使う予定があったので、一時保管のために穴の中に入れて置いたものと思えるわけです。先ほど言ったように、この時代の人は移動生活をしています。50cmもある大きな土器を背負って遊動生活をするのは、結構大へんなことです。だから、特定の場所でしか使用しない大きな道具は、使う場所に置いていたのではないかと推測します。この大形土器を使うつもりだった縄文人たちは何らかの事情でもこの場所に帰って来られなかつたではないでしょうか。

このような出土状態を、考古学では‘遺棄’と呼びます。往々にして、考古学的に重要な発見は、当時の人々に不測の事態が起つたことによるものです。それは、不幸な出来事であった可能性も高いです。例えば、土器の所有者が亡くなってしまったのかも知れませんし、食糧不足などで、別の場所へ移住しなければならないことがあったのかも知れません。

スライド8右は炉穴です。左上のものは南側に大きな焼石が置いてあり、浅く窪んだ炉穴の中は焼けている事例です。また、右下は典型的な炉穴(ファイヤーピット)です。左側に突出している細長い構造は、煙突のようなトンネルがあった部分で、ここから煙をします。そして、右側の浅い炉穴の部分で火を焚きます。ちょうど、古代のカマドみたいな格好をしています。

この炉穴の起源は南九州で、それが太平洋の黒潮にのって関東地方まで伝わったようです。炉穴は燻製を作る調理施設だと考えられています。たぶん鹿児島の縄文人は黒潮の海で魚を捕り燻製にしていたのです。ちょうど鰯節みたいな保存食を作るわけです。そういう調理方法が南関東地方まで伝わります。特に、大宮台地には多数分布しています。大宮のあるのは縄文時代早期だと海が入り込んでいますから、漁撈活動を盛んに行っているわけです。つまり、炉穴は獣肉用というより、本来は魚の加工用なのですね。したがって、群馬のような内陸部には少ないのです。炉穴は、鶴ヶ島台式土器のような南関東の土器が出土する遺跡に多数存在するのです。以上のことから、ここに陥穴を残した人々は、もともと大宮台地の辺りに住んでいた縄文人なのです。

それでは、なぜ赤城山麓から出土するのでしょうか。この土器の文様は正しい流儀で施文されていますから、明らかに南関東の人たちが作ったとしか思えないのです。だから、私は大宮台地にいた縄文人が、秋から冬の狩猟シーズンに赤城山麓へやってきて、陥穴でシカ獵を行い、この大きな土器でシカ鍋を食べていたと考えています。

このくらいの大形土器だと、20~30人分の食事ができます。当時のムラ人全員がこの土器一つで賄えただしょう。私の説は以上です。

その他、先ほどの炉穴とは別の調理施設があります。石をたくさん使って石焼き芋みたいな調理方法もあるのです(スライド9左)。こういうものを集石と呼びます。穴の中に石が入っているものは集石土坑と呼んでいます。穴に入ってない場合は集石です。この施設は焼けた石をたくさん入れておいて、その間に大きな木の葉で包んだ肉を入れて、そこに水をかけると、蒸し焼き料理ができるわけです。南方の人たちは、頻繁にこの調理方法を行っています。こちらの土坑は石が入っていない(スライド9右)。貯蔵用の土坑と推定されるものです。これは陥穴じゃなくて、人間が生活する際に使うための施設、つまり、居住と関係のある施設なのでしょう。

(4) 苗ヶ島大畠遺跡の出土遺物

次に、ここで使われていた道具について見ていきましょう(スライド10)。左上は、先ほどの大きな土器です。でも、普通は左下にあるような中形の深鉢形土器です。あまり小形の土器というのもありません。余談になりますが、小形土器の出現は、縄文時代前期中葉に墓の副葬用として出現します。墓に副葬するために、専用の小形土器を作ります。でも、普通は中形の深鉢形土器が使用されています。それでも、実験的に中形の土器でイノシシ鍋をやると10人前くらい出来ます。だから大形の土器は、普通の煮炊きよりも盛大な煮炊きを行う時に使うのです。

狩りの根拠となるのは石鏃です。しかし、ここからは石鏃は1点しか出土していません(スライド10中上)。だから弓矢を用いた狩りは、ほとんど行っていなかったと考えられます。それ以外には、先ほど説明したように原野(ブッシュ)の中を移動する際に、手で持つて刈り払うための鎌鎌のような打製石斧です(スライド10右)。また、スクレイバー(削器)と呼ばれる石器も出土しています。これは動物の肉などを切るためのナイフのような道具だと推定されます。しかし、数は少なくて貧弱です。普通の縄文時代の遺跡と比較して、土器や石器の数

量が貧弱なのです。

道具が少ない原因は、二つ考えられます。一つは短期間しか滞在していないかったことによるものです。もう一つはここでは、道具をそれほど使わなくてもいい生活スタイルであったということです。私の脱をとれば、短期間の滞在説ということになります。一年中ここに居住していたのではなく、狩猟シーズンだけしか使っていなかったのでしょうか。住居址も、ここで陥穴瓢を行なう際の休息用の小屋なのでしょう。

普通に生活するために、家族全員がここに住むような居住用の住居ではないと思います。だから炉のない竪穴状遺構のような小さな小屋でも十分だったのです。

これが標高 500m ほどの場所に存在していた苗ヶ島大畠遺跡の陥穴群で行われたことであろうと考えています。

(5) 赤城南麓のベースキャンプ—柳久保遺跡群—

スライド 11 左は柳久保遺跡群を南上空からみた写真です。この写真は調査を行った 1980 年代前半ですから、畑ばかりで、まだ住宅団地は造られていません。赤城山の真南の標高 100m くらいの場所です。

それでは、頭無遺跡を詳しく見てていきましょう。スライド 12 左は真上から遺跡を撮影した航空写真ですが、この中にボツボツと黒く見えるものが陥穴です。それで、先ほどの苗ヶ島大畠遺跡の同じように、一列になっていく陥穴のグループを線で結んでいくと、六ヶ所ほどの陥穴のまとまりがあることが分かります。したがって、頭無遺跡の存在する台地も、縄文時代早期には陥穴瓢を行う場所と決められたのです。居住する場所というよりは、陥穴瓢の製造であったのです。ただし専用と考えられる T ピットは、ここには案外ないです(スライド 12 右)。

この遺跡におけるかに集石遺構があります(スライド 13)。これは、先ほどお話ししたように蒸し焼き料理の施設です。石を焼いて、この間に木の葉に包んだ肉を入れて焼くわけです。水をかけるとジューシーな肉料理が出来上がります。集石が穴の中に入っているれば集石土坑ということになります。機能的には同じようなものと考えられます。

集石遺構は、旧石器時代後半期の武井遺跡(桐生市:旧新里村にあった槍先形尖頭器文化の巨大遺跡)では數十基発見されています。したがって、集石を使った調理方法は、旧石器時代以来の伝統的な調理方法です。土器を用いた調理以外に、いろいろな調理方法があったのです。

(6) 柳久保遺跡群の出土遺物

ここから出土した土器をみると、苗ヶ島大畠遺跡の土器と同じ早期中葉の鶴ヶ島台式土器が存在していることが確認できます(スライド 14 左)。スライド 8 の大形土器と比較してみてください。同じような文様が施文されていることが分かります。それ以外にも尖底土器が確認できます(スライド 14 右)。尖底土器は、調理の時に地面に突き刺して使用する土器です。そのため、中身を入れた状態で置いておくことができません。だから、尖底土器を使用してみたい縄文時代早期には、頻繁に移動する生活をしていたのです。

スライド 15 左は頭無遺跡の遺物分布図です。いろいろな時期の土器を文様により分類し、時期ごとに集計して分布図上に示したもので、この分布図を詳細に分析することにより、どの時期に利用頻度が高かったか、時期により利用されていた場所が違うことなどが分かります。

この分布図は調査担当の前原豊さんが、精力を費やして丁寧にたくさん作成していただいているので、今回はこれをさせていただきました。この中で、枠で囲んで示している第 7 群土器というものの時期が、鶴ヶ島台式土器を中心とした早期中葉の土器群の分布図です。つまり、陥穴瓢の時代のものです。また、第 5 群土器とされるものが、早期前葉の撚糸文土器群で、これもたくさん出土していることが分かります。したがって、この遺跡は早期前葉と中葉の二つの土器群の時期に、最も活発に人間が利用していたことが分かります。

それでは、ここで何をしていったのでしょうか。それを知るために今度は石器の分布図を詳しく見てみましょう(スライド 15 右)。いろいろな種類の石器が出土していることが分かります。しかし、石器だけは詳細な時期が分かりませんので、どの土器群の分布図と重なっているかを調べることにより、ある程度時期ごとの様相が分かります。左上の枠で囲んでいる分布図が石器です。この遺跡から出土した石器の中では最も多いのは石籠であることが分かります。そして、石籠は第 V 群土器や第 VII 群土器と重なるように最も多数出土していることが分かります。苗ヶ島大畠遺跡との大きな違いは、石籠がたくさんあるということです。苗ヶ島大畠遺跡では石籠は 1 点しかないので、したがって、標高 100m の頭無遺跡と、標高 500m の苗ヶ島大畠遺跡では、生活の仕方が違っていたことが分かります。

また、土器の出土量も違います。頭無遺跡では多量存在しています。だから、ここでは煮炊きの頻度が高く、長く滞在していたということになります。こういう場合、

頭無遺跡はベースキャンプといった場所であったことを示しているわけです。おそらく、湧水点もある平坦な場所に、ベースになる場所があり、そこから10km 北方の赤城南面の標高500m の苗ヶ島大畠遺跡まで出掛けて行って、その辺りに陥穴を仕掛けて狩りをしていたといった行動パターンが浮き上がってきます。

10km という距離は、歩いて2 時間ということになります。現存狩猟民の民族事例によると、半径10km が日常生活で活動できる行動半径と言われています。彼らの身体能力は縄文人と変わらないと思いますので、同じ行動半径だったことでしょう。

もう一度スライド2 を見てください。方眼の升目が10km です。柳久保遺跡群（頭無遺跡）と苗ヶ島大畠遺跡がちょうど10km 離れていることが分かります。したがって、陥穴の獵場まで毎日見回りすることが可能な位置関係にあることになります。

柳久保遺跡群では、隣の台地に下鶴谷遺跡があります。この遺跡はどういう性格の遺跡なのか、頭無遺跡と同じ方法で調べてみました。まず遺構の種類を調べてみると、ここには陥穴がないのです（スライド16 左）。また、土器群の分布状態をみると、最も土器が濃密に分布しているのは第IX群土器で、前期後葉の時期のものです。ここにも土坑や住居などの遺構がたくさんありますが、多くは前期のものです。

早期中葉の第VII群土器の分布図を枠が開きました。分布は稀薄ですが、直径80m ほどの環状に土器が分布しています。真ん中が広場のように空いています。しかし、遺構内にはいろいろな時期の土器が混在しているため、早期中葉の遺構を抽出することは出来ませんでした。いずれにしても、この遺跡には陥穴がないので、生活のための居住地であったことは間違いありません。自分たちが生活する場所に陥穴が掘られていたら、危なくしてしまうがない。特に、子供が落ちたら困ります。

次に石器の分布を調べてみましょう（スライド16 右）。何が多いか調べると、やはり石礫です。石礫の分布図は枠で囲んでみました。第7群土器と同じよう分布傾向にあることが分かりますね。したがって、早期中葉の人たちも石礫を使っていたのは間違いないと思います。これは類推です。この状況では確実にこの時期の石礫だとは言えないからです。

下鶴谷遺跡では、いろいろな時期の遺構や遺物が濃密に分布しています。これがベースキャンプの特徴です。住みやすいから、いろいろな時期に縄文人やって来て居住地として利用するのです。そうすると、いろいろな時

期の遺構や遺物がこのように累積していきます。そのため、ここでの何が行われていたのかという特徴は、ばやけてしまっています。

下鶴谷遺跡から出土した土器にも鶴ヶ島式土器が出土しています（スライド17）。この土器も大きいので、シカやイノシシの鍋用の土器でしょう。隣の台地にある頭無遺跡の陥穴で捕獲した「シシ」を捕まえて、下鶴谷遺跡で煮炊きしていたのでしょう。

（7）榛名山麓の弥生時代の陥穴群

後半を再開いたします。少し別の話をします。実は、弥生時代や古墳時代になども、陥穴獵を行っていたことが分かりました。赤城南麓では見つかっていませんが、榛名山麓の高崎市（旧倉渕村）にある水沼寺沢遺跡では、しっかりと長方形に掘られた深い陥穴群が発見されています（スライド18）。この場所はかなり傾斜のきつい丘陵地帯です。そういう所に陥穴が作られているのです。上空からの航空写真を見ると、黒い穴が点々と並んでいることが分かります（スライド19 左）。これが丘陵上にたくさん存在しています。また、平面図をみるとやはり、ここでもいくつかのグループがあり、並んでいたり、まとまって存在していたりしている状態が分かります（スライド19 右）。

とても深く掘ってあるので、今でも人が落ちると、大怪我するような深い陥穴です。このものは四角くて、真っ直ぐにストンと落ちています。底面に穴のある例は少ないことも特徴です（スライド20）。

この遺跡では3世紀末～4世紀初頭の軽石層である浅間C 軽石層が、陥穴の覆土中に堆積していました。したがって、それより前の時代ということになりますから、弥生時代後期くらいの時期のものとみられます。弥生時代になったら、皆水田耕作をしていて、他の生業活動はしていないようなイメージですが、実際はそうではなくて、やっぱり肉を食べているのです。特に、こういう山間部にいる弥生人は、縄文人と同じような陥穴獵を行っていたのです。こうしたことが最近分かってきました。

2 赤城山麓の自然環境

また話を赤城山麓にもどしましょう。スライド21左は、群馬県の植生図です。円で囲んだ部分が、今回の二つの遺跡のある場所です。この植生図が作成された1984年の頃は畑地に区分されています。盛んに養蚕が行われていた頃ですから、桑畠だったみたいですね。それより標高の高い場所は、クロマツーアカマツ植林地帯です。よう

するに、現在の赤城山麓の植生は、みんな人工的なものであり、縄文時代の植生を反映しているわけではないことが分かります。それでは他に縄文時代の植生を探る糸口になるデータはないかと探しました。すると「ミヤコザサ線と積雪分布」という図が見つかりました（スライド21右上）。ミヤコザサは、積雪が50cm以上ある場所に生えていることがお分かりかと思います。苗ヶ島大畠遺跡のある標高500mのあたりでは、積雪量が25cmくらいです。もともと、これは1968年のデータですから、温暖化している現在とは多少違うかも知れません。また、縄文時代前期中葉が最も暖かい時期です。縄文時代早期はそれよりも少し寒い時期です。でも、旧石器時代ほどは寒くはありません。そうすると、ちょうど現在と同じような気候といったところでしょうか。

ただ、ひとつ大きな違いがあります。旧石器時代の最寒冷期（約2万年前）は、日本海は対馬海峡と津軽海峡で太平洋と繋がっているだけです。また、長江（揚子江）は現在、中国南部の上海のあたりに河口があり、太平洋に注いでいます。しかし、最寒冷期には大陸棚が陸地なので、長江は韓国南部の济州島のあたりに河口がありました。また、朝鮮半島と中国大陆の間にある黄海も陸地でした。そのため、黄河は南へ流れ、济州島のあたりで黄河は長江と合流して太平洋に注いでいたのです。そうすると、二つの大河の真水が大量に対馬海峡を通って日本海に注いでいたのです。だから、旧石器時代の日本海は塩分濃度の低い淡水湖のような状態でした。日本海は冷たい湖ですから、水蒸気は全然蒸発しません。したがって、日本海側には豪雪地帯はまだありませんでした。日本列島はシベリアの沿岸州のような気候だったのです。

それが、縄文時代になると、急減に温暖化して海水面も上がりました。長江や黄河も現在の位置に河口ができるようになり、日本海に真水を注ぐ大河はなくなりました。その代わりに暖流の黒潮の流れる位置が北へ移動し、その分流の対馬海峡が、日本海に大量に流れ込むようになります。それで、だんだん日本海が温まっていくわけです。ある程度暖かくなると海水が大量に蒸発するようになります。この湿った冷気が山脈にぶつかり、雪がたくさん降るようになりました。そして、豪雪地帯が誕生します。日本海側に豪雪地帯が出現したのは、縄文時代前期前葉の頃です。ですから縄文時代早期には、まだあまり雪が降ってないのです。

そのため、早期の気温が現在とほぼ同じであったとしても、ミヤコザサ線をそのまま使うわけにはいきません。たぶん早期の降雪量は、この分布図よりも少なかったと

考えたほうがいいですね。

そうは言っても、スライド21右下に示した標高と植生の模式図のように、暖温帯（丘陵帯）常緑広葉樹林と冷温帯（低山帯）落葉広葉樹林の境は、標高500mくらいにあります。この辺りは中間温帯とも呼ばれています。二つの異なる植生の多様な植物の混生林です。雪が降るか降らないかは別として、この中間温帯というエリアに、苗ヶ島大畠遺跡のような陥穴群が作られていましたことに重要な意味があるようです。

実はこの辺りまで森林の下草としてクマザサが繁茂していたと推測されるのです。クマザサはシカ（ニホンジカ）の食糧となるものです。したがって、この中間温帯林のあたりにはシカが相当数棲息していたのではないかたのでしょうか。少しでも、人間が狩猟しなくなると、イノシシもシカも大量に増殖しています。現在は、ピックリするくらいですよね。我々供の頃にはシカやイノシシがこれほどいなかったのです。1984年の植生図のようにも山奥までずっと桑畠があつて、人間がそういう所まで人工化しているときには、野生の動物が山から降りて来ることはなかったのです。畠の耕作を放棄して山が荒れて原野化すると、そこまでが野生のイノシシやシカが降りて来るのはですね。だから、現在は縄文時代に近づいているわけですよ。

縄文時代早期の頃の人口は、相当少なかったと推定されます。たぶん、シカやイノシシの方が人間よりも多く棲息していたでしょう。だから、陥穴獣によりたくさん獲っても、枯渇することはなかったのでしょう。

ところが、同じ群馬県でも西毛地域の安中辺りの台地では、標高200m～300mくらいの台地が広がっています。私は、こういった台地で縄文時代前期を中心とした遺跡の調査を行ってきました。何百ヘクタールという広大な範囲が対象でした。しかし、陥穴を検出したのは2例です。円形の陥穴2基だけですよ。鍋川流域も同じで、陥穴はほとんど見つかっていません。したがって、西毛地域の標高の引くい平坦な台地では、陥穴獣はほとんど行われていなかつたことが分かります。しかし、石鐵はたくさん出土します。ですから、石鐵を用いた狩りは盛んに行うけれど、陥穴の狩りは、標高の高い赤城南麓に限定されていたものと推定されるのです。ただし、先ほど紹介した倉渕の事例がありますから、厚い堅石層に覆われていて、ほとんど調査が行われていない榛名山麓でも、赤城山麓と同じような陥穴獣が行われていたのかも知れません。

以上のように、陥穴の狩場は標高500m前後の中間温

林帶でクマザサが繁茂しているエリアということになります。当然、赤城山の西麓や東麓にも、陥穴群が存在していたと考えられます。しかし、今のところ陥穴獣が盛んに行われていたことがはっきりしているのは、赤城山麓だけです。また、陥穴獣を行うためのベースキャンプは標高100m前後の湧水点のある柳久保遺跡群のような場所ということになります。

陥穴獣が盛んに行われていた時期は、縄文時代早期です。この時期に集中して赤城山麓で陥穴獣が行なわれていたのです。これは、赤城南麓の人々の歴史のなかでは、大きな特徴です。

3 狩猟対象獣の棲息域

スライド22は現在のシカ・カモシカ・イノシシの分布状態を示した地図です。シカは2008年には北毛地域と赤城山麓・桐生を結んだラインまで南下してきています。それと、南毛・西毛地域（多野郡・甘楽郡）にも相当數います。当然、赤城南面には相当数が棲息しています。

カモシカはもっと分布域が広い。これは天然記念物に指定されているため、狩猟も捕獲もできないことによるものです。イノシシの棲息域は県内全域に及んでいます。

スライド22下段にはシカとイノシシの大きさを示してみました。小型のシカはヤクシカという種類で、屋久島などの南方の島々に棲息しているシカです。島西適応して小型化したものです。これに対し、北海道にいるエゾシカは大型です。本州にいるニホンシカは中間のサイズということになります。イノシシとカモシカはこの程度の大きさです。カモシカはニホンシカとほぼ同じです。イノシシは標準的なものを示していますが、個体によっては、相当大型のものもいます。

ニホンシカとカモシカが苗ヶ島大畠遺跡の陥穴獣で捕獲していた動物と考えられます。

4 陥穴に関する考古学的研究

次に、陥穴に関する考古学的な研究事例について、少し紹介してみたいと思います。まず、今村啓爾先生（東京大学名誉教授）の研究をご紹介します。今村先生は磐が丘遺跡（横浜市）の陥穴群を使って、陥穴の分類を行いました（スライド23左）。そして、これらが狩猟用の落とし穴と推定したのです。落とし穴に「陥穴」という用語を用い始めたのも今村先生です。全国各地の陥穴の類例を調べました。さらに、民族誌を調べて、未開社会ではどのような方法で陥穴獣を行っているのかを紹介しました。現在の陥穴研究の原点です。

その後、港北ニュータウン遺跡群（横浜市）での研究があります。横浜市北部に位置する港北ニュータウンでは、昭和30年代から40年代にかけて、住宅地の大造成が行われました。それに伴いたくさんの遺跡が発見され、発掘調査が行われました。

スライド23右のように、早期には東側には、炉穴が集中しています。それに対し、東側には陥穴が集中しています。そして、両者の間には何もないところがあり、2kmほど空白地帯が存在しています。すなわち、炉穴が作られる居住エリアと、陥穴が作られる狩猟エリアは排他的な関係にあることが分かります。この地域をテリトリー（領域）としていた1つの集団の空間利用の在り方が示されていることが明らかにされました。

赤城南麓での標高の高いところにある陥穴群と、低いところにあるベースキャンプの在り方は、この事例を参考にしたもので、大きな違いは、港北ニュータウン遺跡群の場合、標高はほぼ同じで、狩猟エリアと居住エリアを区別していますが、赤城南麓の場合には、標高差によって垂直に空間利用がなされていた点です。

こうした研究が1970年代から80年代にかけて行われていました。その後、佐藤宏之先生（東京大学教授）が多摩ニュータウン遺跡群（東京都）の陥穴群の研究を行いました。ここでは台地や丘陵のほぼ全城が調査されました。そのため、どこにどのくらい陥穴が存在していたか、全体像が把握できたのです（スライド24左）。

地図が小さく分かりにくいですが、港北ニュータウン遺跡群と同じように、遺構の種類ごとに分布図を作成しています。早期中葉の土器（条痕文系土器）、炉穴の分布図（上段）、縄文土坑（陥穴）の分布図（中段）、縄文土坑の密度別分布図（下段）に分けてあります。

佐藤先生はその分布状態から、動物の移動ルートが谷沿いにあり、谷を週って来るので、谷頭の部分に陥穴が仕掛けられていることを突き止めたのです（スライド24中上）。

さらに、時期ごとも調べています。縄文時代の前半期（早期後半～前期）と後半期（中期～？）では、陥穴獣の性格と狩猟システムが異なることを明らかにしました（スライド24右上）。前半期では季節性は未発達で、ほぼ全年陥穴が仕掛けられていたのに対し、後半期には季節性が確立し、設置時期は春・秋に限定されていたと推定しています。また、前半期では対象獣は多種でイノシシもシカも捕獲していたが、後半期では、シカだけを対象にしていたとも考えています。さらに、前半期では狩猟空間が集団全体によって共有されていたのに対し、

後半期では複数家族に占有されていたとも考えています。そして、総括的に前半期は罠を仕掛けで待っている消極的罠獵システムであるのに対し、後半期は追い込みを行う積極的罠獵システムであるとしています。

佐藤先生の言う前半期の様相は、赤城南麓の陥穴獵の段階ということになります。そして、対象獣はイノシシとシカなど多種類で、季節性ではなく周年で罠獵が行われていたことになります。先ほど紹介した細野さんの陥穴変遷案では、円形が古く、その後梢円形と隅丸方形といった二つの系列に分かれ、隅丸方形が長梢円形へと変化と最後は細長いTピットが出現するとされています。二つの系列は、あるいはイノシシ用とシカ用に相当する可能性があります。そして、イノシシ用の系列は消滅し、シカ用だけが残ることになります。単純に比較することはできませんが、赤城南麓でもイノシシ・シカからシカのみへと狩猟対象獣が変化している様子がうかがえます。

佐藤先生は民族事例も紹介しています。スライド24右下はシベリアの例です。左の地図のスケールは10kmです。一つの集団の狩猟領域（テリトリー）は約10 km²×30 km (30,180 ha) です。隣の集団とのテリトリーの境界は尾根線ラインとなっています。このエリアの中に、狩り小屋と一時的滞在用テントの位置が示されています。そして、谷筋に沿って記入された矢印が、見回りする経路になります。そして、この狩猟領域をもっていた集団は數家族程度のもので、さほど大きな集団ではありません。

これを赤城南麓に当てはめると、一時滞留用テントに相当する場所が苗ヶ島大畑遺跡で、狩り小屋が柳久保遺跡群に相当すると考えられます。苗ヶ島大畑遺跡と柳久保遺跡群は同じ集団が残した遺跡という解釈は、こうした民族誌の事例から類推されるわけです。

また、スライド24右下は北アメリカのカリブーを対象とした誘導柵と罠のイラストです。この場合、くり罠ですが、縄文時代ではここに陥穴が掘られているわけです。赤城南麓は場合も、これら類似した誘導柵と陥穴が組み合わさった仕掛け罠が作られていたことでしょう。これは佐藤先生の消極的罠獵に相当するものです。

現在の陥穴研究は、このように遺跡の調査事例と、民族事例を総合的に判断して解釈する方法です。

7 全国の陥穴の事例

陥穴の起源は、旧石器時代まで遡るとされています。今から3万年前に静岡県の初音ヶ原遺跡では陥穴が列になって発見されたと言われています（スライド25左）。相當な深さの円形の穴が掘られているとされています。

ただ、私はこの事例については、半信半疑です。陥穴列も縄文時代よりも大規模なのです。たいした道具も持つておらず、小集団で居住していた旧石器人が、こんな大規模な土木工事ができたのでしょうか？しかも、類例もない。

この陥穴列はキレイ過ぎるのです。地震の地割れだったらどうでしょう。地割れは大きく構造に走っている場合もあれば、部分的に亀裂が生じる場合もあります。その痕跡を発掘したらこうした陥穴列が掘られてしまうことになります。この列は地割れのラインの可能性が否定できないのです。

次は、陥穴が層位的に発見された事例です。栃木県の中村信博さんが調査された登谷遺跡です（スライド25中）。地層の中でいろいろな層振り込み面があるのが確認されました。7期は浅間C軽石層の前後のものです。これは長方形で深い形状のものです。これは先ほど紹介した榛名山麓の水沼寺跡の例と非常に良く似ています。やはり、弥生時代以降になんでも、まだ陥穴獵が行われていたことが分かります。

また、この遺跡で最も古い時期のものは、男体七本桜軽石層（1.2～1.8万年前）の直上で確認される1期の梢円形の陥穴です。この事例から縄文時代草創期には、すでに陥穴獵が始まっていたようです。また、そのすぐ上層ですから早期前葉貝と推定されますが、すでに細い構造のTピットが存在しています。したがって、Tピットは必ずしも新しくはないことが分かります。

もう少し上の地層からは鬼海アカホヤ火山灰と呼ばれる南九州の鬼海が島の火山灰が検出されています。これは現在では約7,300年前のものとされていて、その地層からも陥穴が検出されています（5期）。これは縄文前期前半に相当するものです。

赤城南麓の陥穴は早期中葉なので、男体七本桜軽石層と鬼海アカホヤ火山灰の中間の地層に相当します。登谷遺跡の事例では4期に相当するものです。

このように登谷遺跡では縄文時代草創期から古代に至るまで連続と陥穴が作り続けられていたことが分かります。おそらく、シカがたくさん棲息していたのでしょう。

次は、茨城県ひたちなか市武田西崎遺跡の事例です（スライド25右上）。もう太平洋の近くです。ここでは台地の縁辺に沿って列状に密集して陥穴群がつくられています。ここでは積極的罠獵が行われていたと考えられています。大勢の人たちが勢子となって動物を追い込む方法であったようです。さらに、その外側には崖があります。陥穴に落ちなくとも、崖で立ち止まってくれれば、弓矢

で仕留められるし、落ちてくれればそこでも捕獲できます。二段構えの罠ということになります。

スライド 25 右下は千葉県山田水呑遺跡の例です。湧水点の周りに陥穴をたくさん仕掛けています。水が湧く所に動物がやって来るから、それを対象としたものです。これは頭無遺跡の陥穴に類似しています。

次は陥穴に伴って杭とか逆茂木が確認された事例です。スライド 26 左は北海道美沢 4 遺跡の例です。杭のものは腐っていましたが、杭のあった部分の土が黒く変色していました。逆槍か逆茂木の痕跡と推定されています。また、スライド 26 右は福島県赤沼遺跡の事例で、炭化材がそのまま残っていたものです。杭が斜めにクロスしています。これは逆槍で串刺しになるのではなく、動物の足の動きを封じるための仕掛けと考えられています。このように単なる穴では動物が飛び出してしまうので、動物の足を束縛して動きを封じるために、さまざま工夫がなされていましたと考へておいた方がよいでしょう。

2 弓矢の狩り

(1) 石鎚の出現

今度は石鎚と弓矢の話をしたいと思います。私は縄文時代の石鎚の研究をずっと行ってきました。だから、石鎚を見れば、形状・石材・技術の特徴により、縄文時代のどの時期のものか、あるいはどの地域と関係があるものかなどについては、ある程度判断することができます。でも、本当にどのような狩りに石鎚が使われていたのか分かりません。

スライド 27 左は、縄文時代の草創期の石鎚の例です。現在は草創期の中頃（縄起線文系土器段階）に石鎚が出現すると考えられています。上段は九州の例、下段は本州・四国 の例です。どの地方でも三角形の石鎚が作られていることがお分かりかと思います。こうした形の石鎚が日本で最初の石鎚ということになります。一般的には、出現地は本州で九州はそれよりやや遅れると考えられています。

旧石器時代では、大形のナイフ形石器とか槍先形尖頭器と呼ばれる木葉形の石器が狩猟具でした。これらの石器は投げ槍として使用されたと考えられています。槍を投げても飛距離はたいしたことないので、動物に接近しなければなりません。プロ野球の豪腕投手が投げればいいですけども、そうじゃない我々のような一般人が投げたのでは、同じ距離だって威力がないから刺さらないわけですね。

ところが、弓矢は人間の力をばねで強化してくれるし、

命中精度も良いですから、非力な人間でも獲物を仕留めることができるわけです。このように狩猟方法が大きく変化したのが、縄文時代草創期なのです。

石鎚の形状は基本は三角形で、押圧剥離という技術により製作されています。これはシカの角・骨や硬い木などを細く尖った形に加工して作った工具（加工工具）を、石器に押しつけ、圧力を加えて石を剥ぎ取っていく技術です。旧石器時代の場合のようにハンマーで敲くことはしません。そのため、小さな三角形の画一的な石鎚を量産することができるようになったのです。縄文時代を石器の方から言えば、「石鎚時代」と呼ぶことができます。

(2) 丸木弓と飾り弓

弓の出土例は全国で多数知られています。埼玉県の低湿地の泥炭層の中からは、木器や骨角器などの植物質・動物質の道具がそのままの状態で出土することができます。スライド 27 右は埼玉県後谷遺跡から出土した弓です。こういった弓があるので、縄文時代に弓矢を用いた狩猟が行われていたことは間違いありません。白木に一部に漆が塗られた丸木弓や、細い紐を巻き付けて、赤と黒の漆で塗装した飾り弓があります。ちなみに、青森県八戸市是川遺跡は飾り弓が多数出土していることで有名です。丸木弓は実用弓で、飾り弓は儀礼用の弓だと、これまでには言われておりました。ところが、恩師の小林達雄先生（國學院大學名譽教授）は、それは違うかもしれないと言っています。縄文時代後・晚期では、飾り弓も実用品であったと考えた方がいいと言うのです。飾り弓は出土数が少ないので、それは氷山の一角に過ぎず、たくさん存在していたはずで、実用品であったと考えています。ネズミが 1 四いたらその 100 倍はあると言われていますが、飾り弓もそれと同じだと言うのです。小林先生はこれを「ネズミ一匹百四理論」と言っています。

私もこの説には同感です。確かに縄倉時代でも戦国時代でも、飾り立てた弓を持ち、きれいに着飾った鎧を着て、戦場に行くのです。縄文人にとっても、動物の命を奪うことになる狩猟は神聖なものだから、きちんとした道具を使うと考えても不思議はありません。実用品は飾ってないというのは、現代人の発想なのです。

(3) 石鎚の形態分類

次に、先ほどお話しした頭無遺跡の石鎚を詳しく見ていただきたいと思います（スライド 28）。

いろいろな形の石鎚を形状別に整理して並べてみました。石鎚は大きく分けて、中子（茎）の有無で無形鎚と

有茎鐵があります。さらに基部の形状の違いから平基・凹基・凸基に分類されます。これを組み合わせて平基無茎鐵とか凸基有形鐵というように呼びます。したがって、先ほど説明したような三角形の石鐵（スライド 28 左上）は、平基無茎鐵ということになります。これは早期にも多い形態なので、陥穴を作っていた縄文人が使っていたのは、これらの石鐵です。

また、縄文時代で最も一般的なものは、スライド 28 右上にたくさん並べてあるハート形の凹基無茎鐵です。最初に形状と石材によりある程度時期が分かると言いましたが、凹基無茎鐵はどの時期にもあるので、時期を決めるのが難しい一群です。それでも、基部が真っ直ぐな鉢形鐵（早期押型文土器段階）や、抉り込みが深い長脚鐵（草創期爪形文土器段階）、基部が研磨されている局部磨製石鐵（後・晚期）などの特徴的な形態のものは、時期を決めることができます。

また、有茎鐵は後期になって関東地方で使用され始める新しい形態です。したがって、有形鐵は後・晚期のものであることは確定することができます（スライド 28 右下）。頭無遺跡は本来早期～前期を中心とした時期の遺跡です。しかし、スライド 15 左の頭無遺跡の土器分布図を見ると第X群土器というのがあり、これは後期の土器です。したがって、有茎鐵が存在していることは矛盾しません。

次のスライド 29 は柳久保遺跡のものです。やはり、三角形の平基無茎鐵がまとまって出土しています（スライド 29 左上）。これらは早期のものでしょう。また、スライド 29 左下の凹基無茎鐵には基部に矢印が付いています。これはこの方向から押圧剥離が施されたことを示すものです。通常はこうした方法で抉り込みを入れることはありません。これらは非常に特殊な技術で製作されたものであることが分かります。また、用いられる石材はほとんどが信州系の黒曜石です。専門的な話になりますが、私はこの一群に「柳久保型」という型式名をつけています。これらは早期中葉～後葉の石鐵と推定されます。

スライド 29 中・右上はハート形の凹基無形鐵の一群です。注目されるのは、上段の特別大形の一群です。一般的な石鐵が 1 g 前後であるのに対し、これらは 3 g 以上もあります。なぜこのように大きな石鐵が作られたのか、理由は分かりません。以前、冗談半分でクマ用と言っていたことがありました。それも根拠はありません。儀礼用の可能性だってあります。

その反対に、非常に小さな石鐵もあります。私は 0.2g

以下の石鐵を極小石鐵に分類し、区別しています。頭無遺跡でも柳久保遺跡でも意識してよく見ると、非常に小さい石鐵があることが分かるかと思います（スライド 28・29）。こんな小さな石鐵は、普通の矢に直接装着することはできません。木や骨角器で作った根拠みを付けば、普通の矢柄に着けることは可能ですが、早期ではまだ根拠みも存在していないかったと考えられます。そうすると、どのような矢柄に着けたのでしょうか？

極小石鐵を直接矢柄に着けようすると、竹串ほどの細い柄にしか着けられません。そこで、最初にお話したスライド 1 右の図を見てください。このように仕掛け弓として使用的民族事例です。どうも、極小石鐵はこうした尾のバージなのではないかと考えています。野ネズミとかイタチのような小動物の通り道に仕掛けていたのでしょうか？

先ほど特徴的な石鐵として、局部磨製石鐵を紹介しましたが、これも普通の弓矢ではないと考えられる石鐵です。抉れた部分を磨いてザラザラにしています。後・晚期のものはほとんどが黒曜石製です。頭無遺跡にも柳久保遺跡にも数点ずつ出土しています。これは接着剤がよく着くようにわざとザラザラの部分を作るのです。これらは棒状の砥石で縦方向に研磨しています。関東で出土するものはほとんど縱磨きです。これを私は関東型と名付けています。この局部磨製石鐵は後期から晩期にかけて千年以上も作られ続けていることも判明しています。そして、局部磨製石鐵が石鐵全体の 10% を超えることありません。どの遺跡でも数%です。私はこれはヤヌの先に装着した石器だと考えています。水中でも脱落しないように水に強い接着剤でしっかりと接するためにザラザラに研磨しているのだと思います。普通の弓矢のように空中で発射するなら、それほど強力な接着剤はいらないからです。おそらく研磨した部分に骨角器製の根拠みが付いているのだと思います。

東北地方では局部磨製石鐵はほとんどありませんが、研磨する部分に天然のアスファルトが付着しています。天然のアスファルトが秋田から新潟にかけての日本海側で採取できます。アスファルトは天然の油性接着剤ですから、水中でも溶けてしまうことはないのです。そのため、鉛や釣針・石錐などの漁具用の接着剤として広く利用されています。

しかし、関東地方ではアスファルトは採れないし、東北地方からあまり流通して来ません。そのため、別の糊が着けられていたのだと考えています。おそらく、秘伝の糊があったのでしょう。

そして、関東型局部磨製石織がどこに多いか調べてみると、群馬県です。中でも藤岡市と前橋市が最も多いです。したがって、この辺りで製作していた可能性が高いのです。それが関東中に流通して行くのです。私は、これを「上州屋」のヤスと呼んでいます。「縄文時代の上州屋」です。この秘伝の糊が企業秘密のように扱われていたのではないかと考えています。千年以上も同じ製法で局部磨製石織は作られていたのです。

このように、石織は全部弓矢だということにはならないのです。

スライド 29 左下は有茎織の一群です。これも後、晩期のものです。土器が出土していないくとも、有茎織が出土しているれば、ある程度時期を決めることができます。

冒頭で言いましたように、このような「モノ」の分析が考古学者は得意です。私は石織が専門なので、つい詳しく説明してしまいました。

(4) 狩猟の場所

しかし、先ほど言ったように、どういう弓矢でどういう狩りをしているかといった「コト」については分かりません。

また数量も、ここだけで 100 点以上出土しています。「ねずみ一匹百四理論」でいけば、発掘調査で取り逃した石織は、数千点ということになります。すなわち、標高 100m の柳久保遺跡群では、相当数の矢が存在していて、その狩りの中心地であったと言えそうです。もっとも、どこが獵場であったのかは分かりません。

そして、石織を使った弓矢猟は時代が下り前期になつても、やはり狩りの中心地、すなわちベースキャンプで有り続けたようです。この場所から獵場へと出掛けていたのでしょうか。

まず、藤山龍造さん（明治大学専任講師）の研究を紹介します（スライド 30）。これは慶応大学藤沢湖南キャンパス内遺跡の事例です。広範囲を面向いて発掘調査した遺跡です。そして、バラバラとしか出土しない槍先形尖頭器（突き槍）や有舌尖頭器（投げ槍）といった狩猟道具が単独で出土する場所を調べた研究です。すると、いくつもの場所にまとまりがあることが分かりました。通常、居住場所（狩猟キャンプ）では複数の石器がまとまって出土するので、このように単独で石器が出土する場所は、居住場所とは考えにくいわけです。おそらく、このような場所が実際の狩りの場所であると推定したのです。

同じような研究を多摩丘陵から港北ニュータウン遺跡群を中心とした地域で行っています（スライド 30 右下）。

先ほどお話をした早期の炉穴と隙穴の研究が行われた地域です。今度は草創期の狩猟のようすを狩猟具を用いてによって調べているわけです。そうすると、単独出土する場所が一定の傾向をもっていることが分かりました。そして、槍先形尖頭器を使っていた時期（Phase 1）と有舌尖頭器・石鍬を使っていた時期（Phase 2）では、狩猟場所や狩猟方法が違っていたようです（スライド 30 右上）。槍を用いていた時期では、台地の上を平行して移動しながら狩猟していたと推測しています。それに對し、有舌尖頭器や石鍬を使うようになると、台地に刻まれた谷を谷頭に向かって垂直に移動しながら狩りを行っていたと推測しています。

最後にケニアの南部の現存する民族の民族事例から狩猟の場所を推定するというアメリカ人の研究を紹介したいと思います。現代でも未開社会の状態で生活しているムラに入り込んで調査を行っています。そして、一どこに何があるのか詳細に記録して行くのです（スライド 31）。

そうすると、左図のように、真ん中に生活拠点のムラがあり、周辺部には野営地という狩猟の際に短期間滞在する場所があります。そして、主たる狩猟の場や、動物の移動ルートなども図の中に示されています。つまり、これは「コト」の図なのです。

そして、右図は、残されている生活廃棄物、つまり現代の遺物の分布状況を示したもので。我々考古学者が遺跡で眼に見るのは、このような状態の遺物分布図なのですね。縄文時代であれば、土器とか石器です。つまり、「モノ」の図です。

今日の私の話は、遺跡の発掘調査により、苗ヶ島大畑遺跡や柳久保遺跡群の遺物分布図「モノ」からベースキャンプや狩猟の場所などといった「コト」を復元してきたわけです。「コト」についての解釈が適切かどうかについて、判断するためには、こうした民族考古学の研究が重要なのです。

私の今日の話はこれで終わりにさせていただきたいと思います。皆さんご静聴ありがとうございました。

【質疑応答】

Q1 2つ質問です。余談ですが、私は柳久保遺跡群の上に住んでいます。1つは、縄文土器ですが、底が尖がっていますね。煮炊きするときにバランスが悪く、ひっくり返ってしまうような気がします。どのようにして火を焚いて煮たのか、ということをお聞きします。それともう1つは、弓弦の材料は、木の皮か何かから作ったの

でしょうか？

A1 尖底土器は、地面に突き刺して、周りに薪を置くと結構安定して、のまま上手く煮炊けできます。前原さんにお聞きしたのですが、大室公園の真ん中の石がある場所は、縄文時代のストーンサークルをイメージしているそうです。ですから、そこで縄文土器を使ってイノシシ鍋やれるといいですね。実際に尖底土器をここで作って、実際に使ってみれば、いろいろなことが分かると思います。縄文土器は上が大きく、下は小さくて、だいたいアンバランスでひっくり返るような不安定な形をしています。底があっても小さすぎるんで、普通においていた場合には、すぐひっくり返っちゃいます。でも、煮炊きする場合には、周りに薪を置くと、それが支えになってひっくり返ることはあります。私も毎年実験的に縄文土器で煮炊きをしていますが、ひっくり返ったことはないですね。ですから尖底でも充分使えると思います。違うのは料理をのまま残しておかなかったと思います。残しておかないと全部食べかねるということです。それが縄文の食べ方だと思います。

もう1つの質問ですが、弓弦の材料についてですが、これは遺跡から検出されることはないものですから、お答えすることが難しい質問です。私も実験考古学的に弓矢を作ったことがあります、植物ではやっぱりフジ蔓が強くてうまく弦として使えました。あとは、動物の腱が使われていた可能性もあります。動物を解体しているわけですから、その動物の腱を使って弦にしたと考える脱があります。

おとし穴と弓矢の狩り



著者、アーティスト：高橋義典

今村吉喜



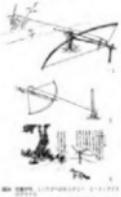
佐藤孝好



山本雅之

大工原 豊
(慶應義塾大学兼任講師)

No.1



苗ヶ島大畠遺跡

所在：前橋市苗ヶ島町（クローネンベルク）
標高：443～485m
時期：縄文時代早中期中葉～後葉
遺構：住居址・堅穴状遺構……2
炉穴（ファイヤーピット）……5
窓穴……96
土坑……約80
集石土坑……1
斜め柱穴（置の一部）……2

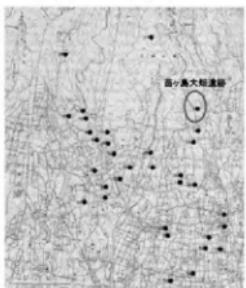
柳久保遺跡群（頭無遺跡）

所在：前橋市荒子町
標高：107～110m
時期：早期中葉～後葉を主体（前期～後期もあり）
遺構：窓穴……33
土坑……8
集石……7
積土跡……4
石器配置遺構……2

No.2



苗ヶ島大畠遺跡の位置

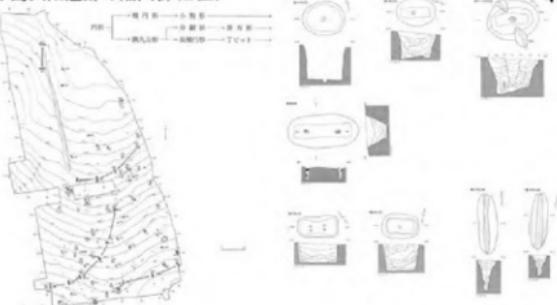


（著者撮影）

No.3

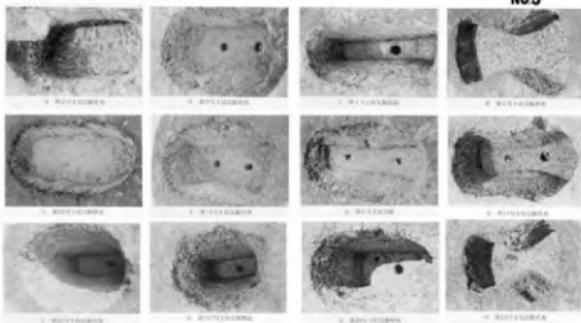


苗ヶ島大畠遺跡の窓穴群（B区）

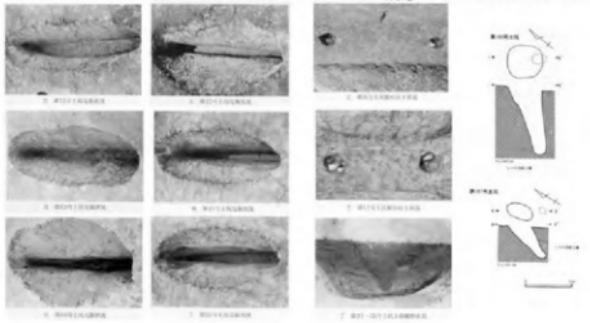


4

苗ヶ島大畑遺跡の陥穴(1)

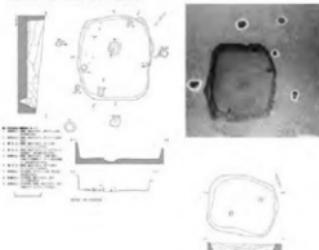


苗ヶ島大畑遺跡の陥穴(2)



苗ヶ島大畑遺跡の居住関連造構(1)

住居址・竪穴状造構



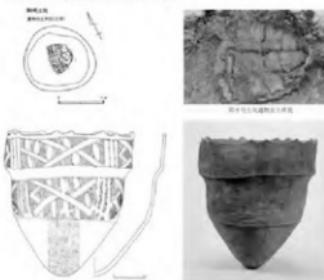
No.7

1号住居址出土遺物



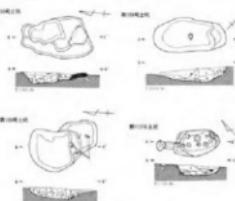
苗ヶ島大畑遺跡の居住関連造構(2)

土坑内に遺棄された土器



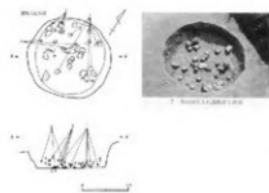
No.8

炉穴

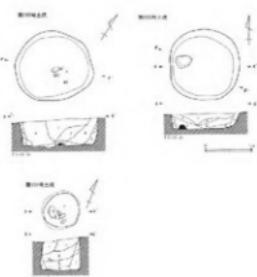


苗ヶ島大畠遺跡の居住関連造構(3)

集石土坑

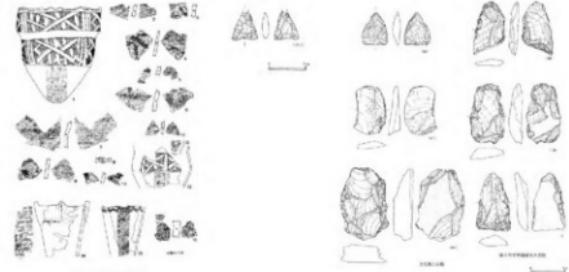


土坑



No.9

苗ヶ島大畠遺跡で使用された道具



No.10

柳久保遺跡群の位置



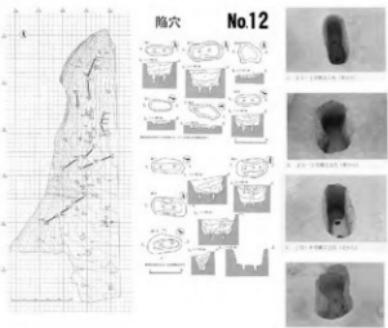
No.11



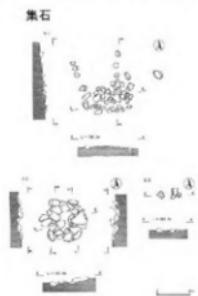
柳久保遺跡群・頭無遺跡



No.12
隙穴

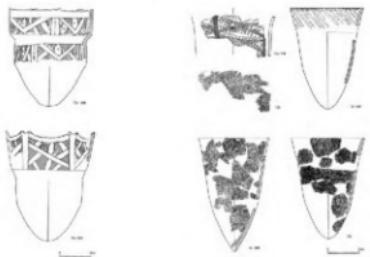


頭無遺跡の居住関連造構



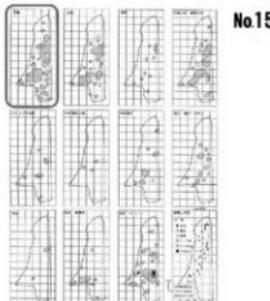
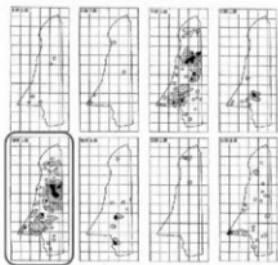
No.13

頭無遺跡出土の早期後半の土器



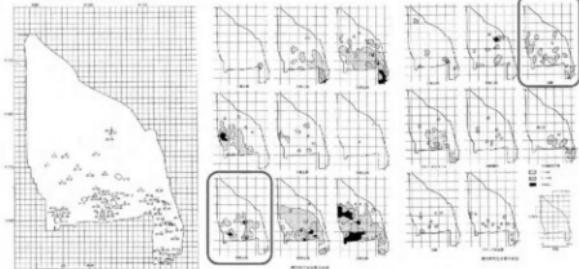
No.14

頭無遺跡の遺物分布



No.15

柳久保遺跡群・下鶴谷遺跡
純文時代の造構と遺物分布



No.16

下鶴谷遺跡出土の早期後半の土器



No.17

弥生時代後期～古墳時代前期の陥穴
－水沼寺沢遺跡(高崎市倉渕町)－



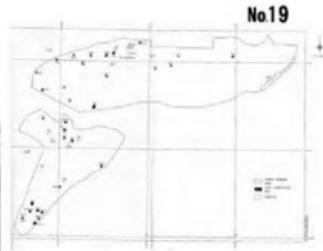
高崎市教委 2013

No.18

— 19 —

水沼寺沢遺跡の陥穴群

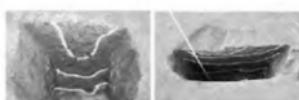
・数基の陥穴が列状に配列している



高崎市教委 2013

No.19

水沼寺沢遺跡の陥穴

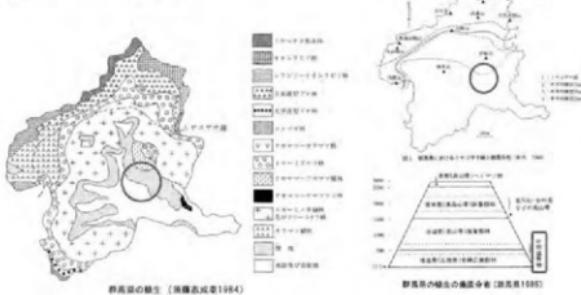


高崎市教委 2013



No.20

群馬県の植生と積雪量



No 21

群馬県のシカ・カモシカの生息域



No22

陥穴に関する研究

今村啓爾の研究

- ・糞ヶ丘遺跡の頭蓋に基づき深い土坑を
竪穴(おとし穴)と推定し、形態分類を行う。
(1973年)
 - ・全国各地の類例と民族誌の傾向を紹介(1983年)



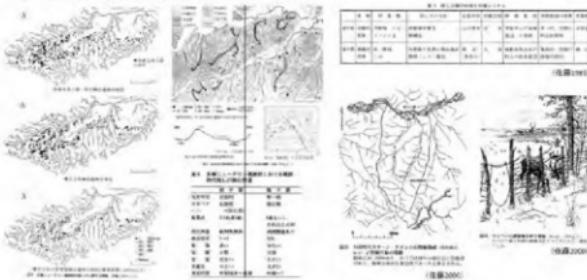
No 23

港北ニュータウン遺跡群の研究

- ・ 旱期の炉穴と略穴の分布域は移動的関係にあり、地域集団の空間利用の在り方がよく分かる。(宮澤寛・今井康博1976、石井寛1988)

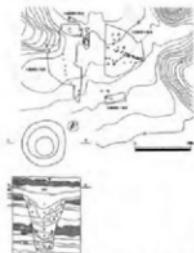


- ・多摩ニュータウンの陥穴郡の立地と分布の関係を明らかにする。(1984~1986~1987~1988~1989年等)
 - ・純帝時代前半と後半前半では陥穴郡の性格と御屏システムが異なる。(1989~2000年)
 - ・北方狩獵民の民族論との比較研究(1988年~1998年~2000年等)



No 24

旧石器時代の陥穴



古物研究室・地質課の遺跡図石器時代の探しと判別
（監修：山本和也）
（著者：山本和也、下川信一郎）に付する河原田謙子
（監修：山本和也）による注釈

陥穴の層位的検出事例



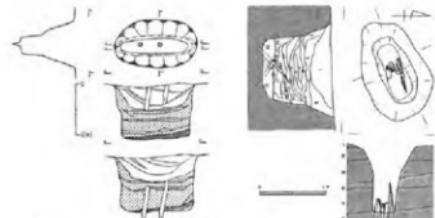
追い込み獣の陥穴群 25



湧水点付近の陥穴群



底面に杭・逆茂木の確認された事例



古小林市菅原町・高瀬の陥穴で見られた杭跡（右図）
（監修：山本和也）
第1番に記すものは、逆茂木であった可能性を示す。
ただし、同じくこのような逆茂木の場合はも認可能である。

No26

縄文時代草創期・出現期の石鏃—投槍から弓矢へ—



古物研究室
1-6. 佐賀山遺跡、4-6. 佐賀山遺跡、7-8. 美之山遺跡、10-12. 深川遺跡、13-15. 関宿遺跡、
16-18. 伊勢遺跡、19-20. 佐賀山遺跡、21-22. 丸ノ原遺跡、25-28. 三河一子子山遺跡
(種田 2009)

No27



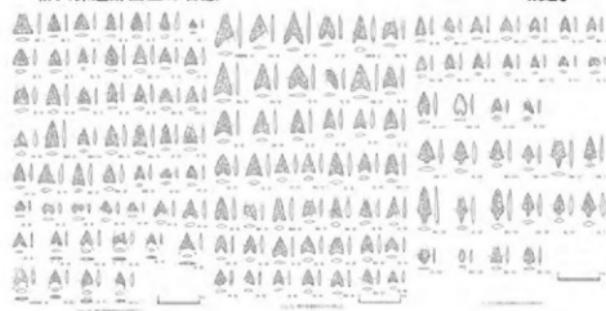
古物研究室

頭無遺跡出土の石鏃



No28

柳久保遺跡出土の石鏃



No29

狩猟する場所

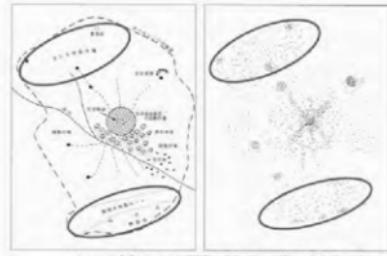


No30

現存する民族から狩猟の場所を推測する

No31

ケニア南部Amboseli盆地の例



Amboseli 盆地における空間利用の復元（左）と遺物の配置状況（右）
(Foley 1981)

前二子古墳と多田山古墳群のもがり屋

深澤 敦仁（群馬県教育委員会）

はじめに

皆さんおはようございます。群馬県教育委員会の深澤です。よろしくお願ひします。

本日のテーマは『前二子古墳と多田山古墳群のもがり屋』ですが、タイトルにもある「もがり屋」というのは、古代に行われた葬送儀礼のことです。それは、人が亡くなった後、本葬されるまでの一定期間、遺体を仮安置しておいて、その間に様々な儀礼を行うことであり、「もがり屋」とは、その儀礼行為に伴う施設のことです。古事記や日本書紀には、天皇に関する「廣（ひん）」（=もがり）の記載があり、のことから古代におけるその存在が明らかなものとなっています。

ところで、西洋医学の発達する現代に生きている私たちにとっては、お医者さんによって「ご臨終」が告げられると、その人の肌艶が生きているとき変わらない状態でも、周囲の人々はその人の死を認識するわけです。ところがこうした西洋医学が存在する以前、ことに今回テーマとする古墳時代においては、今でいう「死」を告げられたばかりの人の状態に遭遇した場合、「目も開かず、呼吸もしないまま、しばらくいるけれども、もしかしたらこの人はまた目を開き、息を始めるのではないか、どうなんだろう？」、そう思い、逝ったかどうかがなかなか判らなかったのだと思うんですね。ですから、いつか生き返ってくれるんじゃないかと言うことで、おそらく何かよみがえりの儀式などを行ったりするわけです。ところが、当然死んでいるわけですから、だんだん腐敗していくわけですね。そして、その時に初めてこの人が自分たちとは違う姿になった、つまりもう私たちとは違う世界に行ってしまったんだということを認識するということがわかるわけです。そういうことを認定する場所あるいはそういうことを内外に示す場所というのが「もがり屋」であったと考えられています。

もがりについて

ところが、日本全体を見渡せば、お墓である古墳は20万基以上あるといわれていますが、古墳に埋葬される遺体を仮埋葬した痕跡、つまり「もがり」を行った施設がどんなものか、その明確なものはありませんでした。「大

化葬葬令」においてそれぞれの身分の人々すべてにおいて「もがり」を禁じられる記述があるのですが、このことは逆に読めば、それ以前において広く「もがり」が行わっていたことを意味するものであります。したがって、「もがり屋」的な施設の存在は古くから注目されていたのです。しかし、「これだ！」という決定的なものは明らかにされず、例えば「古墳の近くの堅穴住居をもがり屋なんじゃないのか」とか、「古墳がたくさん存在する中に堅穴住居がある場合、これはもがり屋なんじゃないか」とか、類推を重ねた上で「もがり屋」の姿を明らかにしようとした研究はあったのですが、決定的なものはなかなか現れなかつたのです。そんな状況の中で、今から14年前に「多田山古墳群のもがり屋」が発見されたのです。発見当初は、広く知られることはなかったのですが、次第に、研究者の方々が古墳時代のもがりを論じる際に、「多田山古墳群のもがり屋」を取り上げてくれるようになりました。こうした状況のもと、今回のお話をさせていただきます。

タイトルが示すように私は、前二子古墳と多田山古墳群の「もがり屋」が関係ありますよ、と最後に結論づけるのですが、まず群馬県の古墳の中で前二子古墳がいったいどういう位置にあるのかということを考えていきたいと思います。

群馬県内の古墳変遷

この図1は、群馬県全体の古墳を古いものから新しいものに並べたものです。この図について感じていただきたいことは「群馬県はたくさんある古墳が西暦300~700年の間、県内各地に分布していた」ということです。それが古墳時代における群馬県の特徴です。

4世紀の古墳

それではそのことを簡単に振り返ってみたいと思いますけれども、西暦300年前後から群馬県では古墳が造られ始めますが、前橋八幡山古墳、高崎の元島名将軍塚などの前方後方墳、前橋天神山古墳や太田の朝子塚古墳などは、墳丘長100mを超える大型前方後円墳です。右下にあるのが三角縁神獸鏡です。卑弥呼の鏡に比定するか

については今も賛否がありますが、いざれにしても、非常に貴重な鏡でして、この鏡が東日本で最も多く出土している地域が群馬県なのです。

5世紀の古墳

時代が西暦 400～450 年になってきますと、古墳の規模は大きくなっています。その一つが、左上の墳丘長約 170m の渡間山古墳です。そして、右上は石製模造品という蛇紋岩で作ったミニチュア器物であり、当時の古墳副葬品としては価値の非常に高いものでした。その後、東日本で最大、墳丘長 210m の太田天神山古墳が、太田に造られるわけです。右下は伊勢崎市にある、お富士山古墳の長持形石棺です。長持形石棺というのは、「王者の棺」といわれているものであります、おそらく近畿地方の大王級の人々が製作、採用することを許された棺といわれています。そして、東日本で明らかな長持形石棺は太田天神山古墳とお富士山古墳の 2 つしか確認されていません。西暦 450～500 年くらいになると、埴輪がかなり豪華に飾り立てられるようになります。その代表的な古墳群が高崎市にある保渡田古墳群です。右上はそこから出てきた様々な埴輪ということになります。

6世紀の古墳

そして西暦 500 年を越える頃になりますと、藤岡には墳丘長 145m の前方後円墳である七興山古墳が造られ、安中には墳丘長約 80m の前方後円墳である築瀬二子塚古墳が造られます。特に、築瀬二子塚古墳で横穴式石室が採用されることが明らかにされており、それまでの竪穴系埋葬施設とは異なる新たな埋葬原理である、横穴式石室が、東日本でいち早く採用されることになります。そして、前二子古墳は、この時期の古墳ということになります。つまり、前二子古墳というのは、横穴式石室が採用された初期の段階、こういった段階に位置づけられる古墳ということが分かります。その後、西暦 550 年頃になりますと、墳丘長 97m の前方後円墳である綿貫音山古墳が高崎の地に造られるわけです。この古墳の副葬品には大陸系の青をはじめ、さまざまな中国大陸、朝鮮半島との関係を知るような文物がたくさんあり、群馬のみならず、日本を代表する古墳として広く知られています。西暦 600 年に近い頃には、墳丘長約 105m の前方後円墳の八幡觀音塚古墳が造られます。巨大な横穴式石室は、「群馬の石舞台」といわれています。

7世紀の古墳

その後、西暦 600 年を過ぎ、650～700 年になります、

前方後円墳という古墳が採用されなくなり、方墳がもともと有力な人物の墓の形として採用されるようになります。その代表例は前橋の總社古墳群です。總社愛宕山古墳、宝塔山古墳、そして蛇穴山古墳という順で、県内屈指の大型方墳が造られています。ちなみに、同時期に吉岡町では三津屋古墳という八角形墳が造られます。八角形墳は、一般的には所謂天皇陵に採用される墓の形と言っていたのですが、これと同様の形の古墳が群馬県の吉岡町に出てきたわけです。どう理解するか、実はまだ明確な説は出されていません。ですが、こういった古墳の存在などからも、この地が中央との強い繋がりをもっていたことが想定されます。そして、西暦 700 年頃をもって、古墳は造られなくなっていくということになります。

今回話題になる前二子古墳は先ほど申し上げた通り、新たな埋葬原理である、横穴式石室が群馬のみならず、東日本の中において、いち早く採用された古墳になるわけです。それまでの埋葬施設が竪穴系埋葬施設であったことが横穴式石室に変わることは、単に、埋葬施設の中に遺体を上から入れるのか横から入れるのかという違いではなくて、古墳の造り方にも大きく関わってくるわけです。つまり、群馬県には 1 万基以上の古墳があるといわれていますが、この前二子古墳はその中でも大きな画期性を持っている、重要な古墳のひとつだということを、まず知っておいていただきたいと思います。そこで、前二子古墳が造られる画期性について、少し話を進めます。

A～Eの地域区分

これは群馬県です。皆さんですと、だいたいどういう地域かというのはお分かりかと思いますが、なぜ私がこういうものを出したかっていうことを説明します。私は以前、横穴式石室の論文を書く機会を与えられて、いろいろ分析した結果、横穴式石室はこの九つの地域に特徴が分かれるという風な事を導き出しました。そして、今回話題になるのは B1 という、今私たちが居る、赤城山南麓地域です。そして、A1 というのは、碓氷安中地域です。さらに、C というのは、前橋北部から渡良川地域一帯です。実は、この三ヶ所にいち早く横穴式石室が採用されたということが分かりました。ほかの地域にも大きな古墳や小さくても副葬品が非常に豪華で充実した古墳というのは多くあるのですが、最初に採用される地域は A1、B1、C 地域に限定されるということが分かりました。ちなみに E 地域は東毛地域であり、最も群馬県の中で横穴式石室の採用が遅れる地域ですが、遅れるといつても東日本

の他地域における導入時期と同時期ですから、決して後進地域ではないことを付け加えておきます。

ところで、横穴式石室が採用される前、つまり前二子古墳が成立する以前というのは、平地部にたくさんの人々が住んでおり、そこで稻作をどんどんする、米作りをたくさんすることに最も価値を見出していた時代です。ところが、横穴式石室が採用される西暦500年をすぎますと、むしろ若干山麓地帯の方に人々は生活の新しい領域を探しあげています。ですから、私たちが居るこの地域というものは、まさに横穴式石室が採用される時期においては、非常に適地ということなのです。

「土」「木」「石」の3つのキーワード

では、なぜ、ある時期から、こうした山麓地帯に人々は生活領域を求めていったかということなのですが、これをひもとくキーワードとして3つをあげます。それは、「土」「木」「石」です。

「土」は縄文時代以来、土器作り等をしているという意味では、必需品でした。

「木」についても、火を焚くという行為が始まって以来、人類の中では欠かせない材料でした。

「石」もそれこそ旧石器時代以来の必需素材で、古墳時代に改めて必要になったものではありません。

ところが、それまでの時代とは使われ方が異なるのです。まず、「土」と「木」。古墳時代では埴輪や須恵器をある時点から、社会がたくさん求めるようになってきたわけです。そうすると良い「土」がある場所を人は狙います。さらに、それらを作るためには燃料が大量に必要ですので、その原料としての資源、つまり「木」というものを積極的に取り入れようとしています。そして、「石」をいるのは、大きな石室を作ったり、石製模造品というミニチュア副葬品や転轍車などを造ったりするために欠かせない原料等となってくるわけです。

つまりこういった「土」「木」「石」というものが、当時の社会にとって、非常に重要な材料になってくるという時代がこの古墳時代であり、特に横穴式石室の採用される段階、あるいは、その前後から社会が欲するわけですね。そうすると、やはりそういうものを取り仕切ろうという人たちが出てくるわけです。おそらくそういった人々は、社会が欲する資源を産する場所を押さえにかかるはずです。そういう魅力ある地域として、当時の有力者が着目したのが山麓地帯であり、故にそこに首長の古墳が造られたのではないかなどと思っています。前二子古墳もそういう社会の動きの中でこの地に造られたのではないかと思うのです。

渡来人がもたらした3つのもの「墓」「器」「馬」

さて、これは朝鮮半島と中国大陆を一部含んだ地図です。前二子古墳が造られる前後のころ、今の日本の大半の地域を指して「倭」と呼ばれていました。朝鮮半島は三国時代と呼ばれ、高句麗、百濟、新羅そして伽耶が勢力争いを繰り広げていました。そうした時期、それは西暦400年くらいからのことですが、朝鮮半島の人が海を渡ってきているのです。この人々を歴史上、「渡来人」と呼んでいます。そして、渡来人はそれまで「倭」には存在しなかった様々な技術や文物を「倭」にもたらしているのです。

そこで、ここでは渡来人がもたらしたもの3つをあげます。それは「墓」「器」「馬」です。新しい形のお墓、新しい作り方の土器。そして、新しい動物、馬です。それまでの倭人が見たこともないこの3つを、渡来人はもたらしたのです。

この3つの中で、赤城山南麓地域において最も象徴的に渡来文化を示しているものはやはりお墓になるわけです。そこで少しお墓、特に埋葬施設の変化についてお話をします。ここでは5世紀後半と6世紀前半とに分けましたが、これは、つまり、横穴式石室が採用される前と後ということを示します。これは、その時代の古墳の所謂ランクインです。一番偉い人は前方後円墳。そして、中くらいの人は大きな円墳。そうではない方たちは小さな円墳というように、墓のカタチや規模によって、階層があったと考えられています。さらに、それぞれの階層の人々が、どんな埋葬施設を採用したかというと、こうなります。5世紀後半には、一番偉い人たちは舟形石棺という石棺に葬られていました。そして、中くらいの人たちは箱式石棺。そして、そうではない方たちは所謂、竪穴式小石棺っていう人一人がやっと入るくらいの小さい石室やあるいは木棺。さらにそうではない方たちは直埋葬されていたと言われています。ところが6世紀前半、西暦500年を過ぎたころになり、横穴式石室が採用されると状況がかわります。一番偉い人たちは、横穴式石室でも両袖型という横穴式石室。そして中くらいの人は無袖型という横穴式石室。そして、そうでない方たちは前と変わらず竪穴式小石棺。あるいは木棺直葬。さらにそうではない方たちは直埋葬されていたと言われています。つまり上から半分くらいがどんどん変わっているというのが大きな特徴です。新しい埋葬方法である横穴式石室は階層が高い人から採用されていったということが分かります。それと、先ほど、両袖型とかあるいは袖無型と申しあげましたが、これは、石室の平面形状の特徴を示して石室を分類する用語です。袖無とか両袖とかいうの

は、このように着物の袖が有るか無いかという言葉が語源になっているようです。つまり、石室を上から見た平面図において、袖が無いから袖無、袖が有るから両袖ということです。

前二子古墳の石室について

そこで、この前二子古墳なのですが、初期の横穴式石室で、両袖型の石室になります。この古墳は、冒頭で私をご紹介してくださった前原さんが、まさに研究者生命をかけて発掘調査されて、今もその追跡調査をされている古墳であるわけですが、その研究成果のおかげで、いろいろな事が明らかになってきました。

そのひとつは、前二子古墳がある地域というのは、横穴式石室が重層的階層において造られる地域ということです。いち早く横穴式石室が採用される地域は3つあると言いましたが、そのうちの渡川山地城を除くこの2つの地域、碓氷安中地域とここ赤城山南麓地域っていうのは非常に特徴的な様相を示しているということが明らかになりました。一番大きい古墳には両袖式の石室を作る。そして、ちょっと小さめのところでは袖無型を作る。そして円墳にも袖無型を作るという具合です。

つまり今まで、小さい古墳には伝統的な昔ながらの埋葬方法をした地域というのが常なのですが、この赤城山南麓地域というのは階層的に上から下まで横穴式石室を採用するという非常に先進的な地域だっていうことが分かってきました。この状況と同じ地域が碓氷安中地域ですけども、ともに新しいものを積極的に受け入れる気質があった地域だったのではないかなど私は思っています。

さらに、この重層的な古墳の中で最も上位にある前二子古墳については、非常に注目すべき研究がされています。宮崎大学の柳澤一男先生は、ご自身の研究において、「前二子古墳の平面形は朝鮮半島の南部の横穴式石室と規格が非常に類似する」という分析をされました。そして、両者の技術的な関係性を指摘されました。つまり、この地域のいち早く横穴式石室の採用は、この地域がいち早く、朝鮮半島南部の渡来人の技術を直接的に受け入れたことを知る手がかりとなります。そして、重要なことは、新しいものを取り入れる、新しい文化を取り入れるという気質が、この地域を治める人にあったのだと思われることなのです。

先ほども申し上げましたが、前二子古墳における横穴式石室の導入は、東日本の中でもいち早く先進的なものであります。横穴式石室の導入は、後の倭社会の中では標準化していくわけですので、その標準をいち早く導入

したことこそ、前二子古墳がこの地に築造された、大きな歴史的意義があると考えています。

～休憩～

多田山古墳群と69号竪穴について

では、多田山古墳群と69号竪穴について説明をしていきます。図4はこの地域を示した地図です。今私たちが居る場所は、この辺りです。そして、今回話題の多田山はここです。平成9年に、この多田山丘陵を開発するという事で事前の発掘調査に入ったわけです。これは平成9年当時の航空写真です。赤い部分が今私たちの居る場所、所謂大室古墳群一帯です。そして、青い部分が多田山古墳群ですが、今はこの姿はほとんどなくなってしまいました。ちなみに、黄色の部分は赤堀茶臼山古墳です。

今回話題となる箇所は、この星印の位置、今でこそ丘陵はありませんが、この丘陵上の一角落にあった竪穴の話をします。これは多田山古墳群の33万m²という広大な調査範囲をしめたものです。33万m²という広大な面積に古墳群の呼称がつけられている場合、一般的には100基あるいはそれ以上の数の古墳があつてもいいのですが、多田山古墳群は発掘調査の結果、約150年間にわざか21基しか造られなかったという非常に厳選された古墳群であることが分かってきました。さらにその21基の古墳のうち最も古い段階の古墳と考えられる多田山3号墳でも西暦500年くらいのころの築造であることがわかりました。ところがもがり屋と推測する69号竪穴は西暦500年よりもちょっと前に作られたということが判明しました。どうしてそのように判るのかということは後で説明しますが、ここで重要なのは、もがり屋と想定している69号竪穴が機能していた時、この多田山丘陵には一つも古墳が無かったと言うことなのです。つまりこの竪穴は、古墳が群がる中にあったのではなくて、何にも無い丘陵の上に忽然と存在していたということなのです。

69号竪穴について

次に、竪穴の詳細な説明をします。これは竪穴の平面図です。そして、これは断面図ですが、この断面図からはこの穴がどのよう土で堆積しているかということが理解できます。このうち一番上に堆積している層、この層は西暦500年前後に榛名山が噴火した際に降下したFAと呼ばれる火山灰が大量に含まれている層なのです。つまり、この断面図で何が分かるかというと、この竪穴がその機能を終えて埋没はじめたのは、このFAが降下するよりも前だったということなのです。一方、多田

山古墳群で発掘調査された 21 基の古墳群は、FA 後から造営が開始されることから、「69 号竪穴が機能していた時、この多田山丘陵には一つも古墳が無かった」といえるのです。

これがその 69 号竪穴です。一边が約 3m の竪穴で、柱穴は竪穴内ではなく、竪穴の周囲にこういう形で存在する事が分かりました。実は、発掘調査着手時にはこの竪穴は住居だと想定していたわけです。発掘調査を進めていくと、須恵器や土師器がでてきました。これらの土器の特徴から、だいたい西暦 500 年よりも少し古い年代が推定され、この竪穴がその年代のものであることが判ってきました。この年代の竪穴住居というのは基本的に竪穴内の床面に柱を 4 本立て、壁際にカマドを付設するのです。ところがこの 69 号竪穴には、柱を設置した痕跡である柱穴が一つもありませんでした。さらに、カマドが付設されていませんでした。この時点で、「この竪穴は住居ではないのでは?」と考える必要が生まれてきたわけです。さらに、発掘調査を進めると、床の構造にも住居としては理解しづらい痕跡が見つかりました。まずひとつは、床の真ん中の部分に白い粘土が存在する事でした。竪穴の中央部分に長さ約 2m ちょっと、幅約 50cm 程度の範囲に粘土を薄く張っていることが判ったのです。もうひとつは、この粘土の上に直接のるような状態で炭化材はほぼ等間隔に 3 カ所検出されたことでした。おそらく、何かを置くための根太です。

ところで、少し専門的なことになりますが、西暦 500 年前後の頃、この地域でこのように粘土を底に敷く行為、粘土の床なので「粘土床(ねんどじょう)」と呼びますが、この「粘土床」がどんなところに使われているかといふと、それは埋葬施設なのです。石室を設置する前に、設置箇所の底面に粘土を敷くという行為は古墳造りの際に、比較的頻繁に行われます。つまり、この竪穴の粘土床は、古墳そのものではないけれど葬送に関わるものではないかと考えられるのです。さらにこの竪穴内部は焼けていることが確認され埋没土のあり方も踏まえると、何らかの機能が終わった後にこの竪穴は焼かれたと考えられるのです。

69 号竪穴の出土品

次に、出土品について説明していきたいと思います。これは皆さんの資料にもある図でみるとよくわかりますが、様々な場所から須恵器や鉄製品が出てきました。そして、注目すべき土器のひとつが、図 9 上の須恵器です。この須恵器は、この竪穴の年代を決めるために重要なことはもちろんですが、もうひとつ重要な情報を持つ

ていました。それは、焼けた痕跡があるということです。しかもほとんど使用痕跡が少なく、日常用品として使い込んだ雰囲気が感じられません。故に、限定期的な使われ方をされた須恵器だと考えられるのです。

統一して、この金具で、盾隕金具とフック状鉄製品です。ともに、皆さんの手の上に乗るくらい小さな金具ですが、これらがほとんど銷びていないのです。発掘調査時は、あまりに銷びていないので、「これは最近のもんじゃないのか?」とも考えられがちですが、先ほど申し上げたように、FA を多く含む土層より下位の層から出土しているので、後世のものが紛れたという事はないです。1500 年ほど前のものが、どうして部分的な銷びだけであとは銷びがないのかということなのですが、自然科学の研究者にお聞きすると、「火を受けて焼けると、銷びの進行が止まることがある。」ということなのです。

これが盾隕金具です。この盾隕金具というのとは、69 号竪穴で出土するまでは各地域の大型前方後円墳の副葬品として出てくるようなものです。つまりこれはそんじよそこらの人が持っているのではなくて、その地域の首長墓、たとえば 100m 級の前方後円墳の被葬者が副葬品として保有しているものとして、今まで古墳時代研究者には知られていたものなのです。そういうものが、小さな竪穴から出土するということは大きな問題なわけです。この盾隕金具は、一枚板を部分的に切断し、折り曲げて紙で留めるという技法で造られていることが観察の結果判明しました。さらに、金具の内部には木質の抜け盤が、銷びが染み込んだためにかろうじて残ったので、この組織の構成をその専門の先生に見ていただいたら、この種類はモミだということが判りました。モミといふのは、非常に柔らかい木で、加工がしやすい木であるということはお分かりだと思いますけれども、弥生から古墳時代のものとして出土する盾には、このモミが多いということがわかりました。柔らかいということは、実戦用とは考えられず、おそらくは何か儀式の時に使ったものだろうと考えられています。だから、この 69 号竪穴から出土した木質(の抜け盤)がモミだっていう事からすると、木製の盾の一部だろうと、そうしてそれに伴う盾隕金具なのだろうという事が推測できます。さらには、盾隕金具の角度が 90 度ではなく、もう少し銳角ということからは、写真の左側の所謂「石見型盾」と類似する盾ではないかと推測できるのです。「石見型盾」というものは非常に限定期的に出土し、東日本ではほとんど出土しませんが、その石見型盾の変形と考えられる埴輪が前二子古墳から出土しているのです。この限られた資料の特徴を具現化した埴輪が前二子古墳から出土しているという

ことは、非常に示唆的です。つまり、69号竪穴にはどうも実際の盾、さらには石見型を模した盾があそこにはあった可能性が考えられるのです。

次に、これがフック状鉄製品です。このフック状鉄製品は大きさが15cm位の鉄製品です。なんだか兩極のささえみたいに見えますが、明らかにFAとの関係でこれが西暦500年以前のものであることが明らかにされています。

69号竪穴の復元

つまり、今までお話をした情報をまとめると、おそらくこの69号竪穴というのは、機能的には次のような状態だったと想像されます。まず、「地面上には、竪穴を囲むように柱が立っており、竪穴内部には中央部に座みがあり、粘土が敷いてあって、ここに根木があって、上になにか置いていた。そしてその傍らには土器が据えてあった」。さらにはフック状鉄製品が出ているという事からは、おそらく「フック状鉄製品はこういう風に掛けられていて、繩か何かをはっていた」のではないかということです。幕の存在については、右島和夫さんのご研究の中で、前二子古墳や鶴賀觀音山古墳、県外では藤ノ木古墳においてその存在と機能が指摘されており、葬送行為の演出に使われていた可能性を論じられています。

したがって、69号竪穴についても、同様の鉄製品が出土しているということは、この竪穴が何かの葬送行為に伴う施設の可能性が考えられるわけです。だけれども、最終的には廃棄されていることからは、古墳のような恒久的な遺体安置施設ではなくて、一時的に安置した場所である可能性が考えられるのです。それ故に、遺体を違うところへ運び、その役目を終えたからこそ、用はなくなったので焼き払ったと考えられるわけです。多田山の丘陵で、西暦500年頃にまだ古墳も築かれていない頃、その一角に「孤高の屋」として69号竪穴が存在し、そこで恒久的でない葬送行為に関わる行為が行われていとう、当時の姿が次第に浮かび上がってくるわけです。

前二子古墳と多田山古墳のもがり屋の関係性

そこで最後に、前二子古墳と多田山古墳のもがり屋の関係性について話をしてまとめていきたいと思います。

冒頭にお話したように、殯（もがり）は古代の日本で行われていたということが歴史書の中で明らかなわけですが、その実態がよく分からなかったわけです。ところが、今回この多田山丘陵の中で発掘調査された69号竪穴は、一般的な住居としての機能を持たず、粘土床、根本、限定的使用の痕跡のある須恵器や土器類、火を受け

た痕跡のある盾形金具やフック状鉄製品の存在から、葬送行為の関連する施設であることが判つきました。さらに、火災を受けた状態や埋没状況からは、仮設的な施設の可能性が高いと考えられます。こうした状況からは、この69号竪穴を本葬の前に遺体を置くための施設、つまり「もがり屋」と推測したわけです。

それでは、この69号竪穴で仮埋葬された遺体はどこに本葬したのかという事です。そこで考えられる古墳としては、この竪穴のある場所から約西に1kmの位置にあり、竪穴とほぼ同じ時期、あるいは若干後出する時期に比定される前二子古墳が候補に挙げられるわけです。つまり私は、多田山のものがり屋に仮埋葬された人物というのは、前二子古墳に本葬された人物ではないかなと考えています。今後は、こうした事例が発掘調査や調査研究によってさらに増加し、具体的な研究が比較検討をもって進展することを願っております。

以上で私の話を終わります。ご清聴ありがとうございました。

【質疑応答】

Q1 古墳の石室には、いっぽい大きな石を使ったりしているんですけども、前二子古墳の石はどこから持ってきたと考えられるか？また、どうやってその大きな石を運んだのでしょうか？馬を利用して運んだものか、あるいは人間が丸太をやって転がして、引っ張ったり押したりしたのでしょうか？

A1 前二子古墳の石室の中に凝灰岩の石がたくさん敷いてあるわけです。この凝灰岩の産地としては、ここから8km位東にあります、みどり市笠懸の天神山丘陵が候補としてあげられるわけです。おそらくは、そうした産地から切り出したものを運んできたと思われます。前二子古墳の場合、ひとつあたりの石材が大きいですから切り出した石材の運搬も大変だったでしょうが、地域の首長が地域の一大イベントとして、皆で協力して運び出したと想像できます。

Q2 前二子古墳は横穴式石室については、群馬県の中では先進的だということですが、日本全国で見た時には、その位置づけとしては、九州なり近畿の方は早めに横穴式石室ができてきましたか。

A2 はい。そのとおりです。前二子古墳の横穴式石室の導入は東日本で最も古い段階のものというわけです。

Q3 「もがり」は葬式とかの関係で、宗教的なものがありますよね。仏教はまだ来てないかと思うんですけど、

天皇家なんかで行われている「もがり」とかと同じようなものがこちらでも行われていたっていう事なのですか。

A3 それは「もがり」がいつから始まったかっていうのに関わるわけです。冒頭でも申し上げたように、「もがり」

は人の死を認定するために一定期間、遺体を仮安置し、様々な儀礼行為を行うことあります。記紀には天皇の

殯に関する記載のみがあるため、そういうごく限定期的な階層の人の儀礼と思われるがちですが、「大化薄葬令」における「それぞれの身分の人々についてもがりを禁ずる」

という記述からは、それ以前では各階層の人において広く「もがり」が行われていたことを意味するものであります。おそらく、偉い人においては仰々しく行われてい

たでありますし、そうでない階層の人においては、それほどでもなく行われたと想像されます。

講座・赤城南麓の考古学 2014 ～赤城南麓の歴史遺産～

前三子古墳と多田山古墳群のもがり屋

深澤敦仁（群馬県教育委員会）

- 1 群馬の古墳 概観
 - 2 前二子古墳が造られることの画期性
 - 3 多田山古墳群と 69 号竪穴について
 - 4 前二子古墳と多田山古墳群のもがり屋

1 群馬の古墳時代 概観

図1 群馬県の主な古墳編年

2 前二子古墳が造られることの画期性

埋葬施設の変化

5世紀後半

- 舟形石棺
- 箱式石棺
- 竪穴式小石槨
木棺直葬

6世紀前半

- 横穴式石室
(両袖型)
- 横穴式石室
(袖無型)
- 竪穴式小石槨
木棺直葬

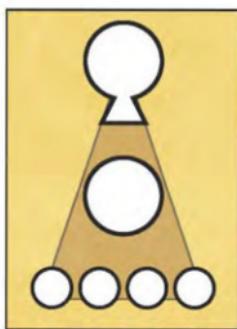


図2 埋葬施設の変化

重層的な横穴式石室の採用

A 1 地域

- 築瀬二子塚
(両袖型)
- 的場E号
(袖無型)
- 少林山台12号
(袖無型)
- 後閑3号
(T字型)

B 1 地域

- 前二子
(両袖式)
- 轟山A号
(袖無型)
- 洞山西北
(袖無型)

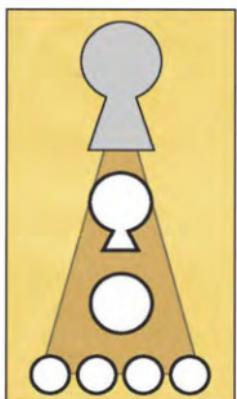


図3 重層的な横穴式石室の採用

3 多田山古墳群と 69 号竪穴について



1. 多田山古墳群69号竪穴 2. 前二子古墳 3. 梅木遺跡 4. 赤堀茶臼山古墳 5. 中二子古墳
6. 後二子古墳 7. 小二子古墳 8. 内堀M4号墳 9. 内堀M1号墳 10. 毒島城址

図4 大室古墳群と多田山古墳群

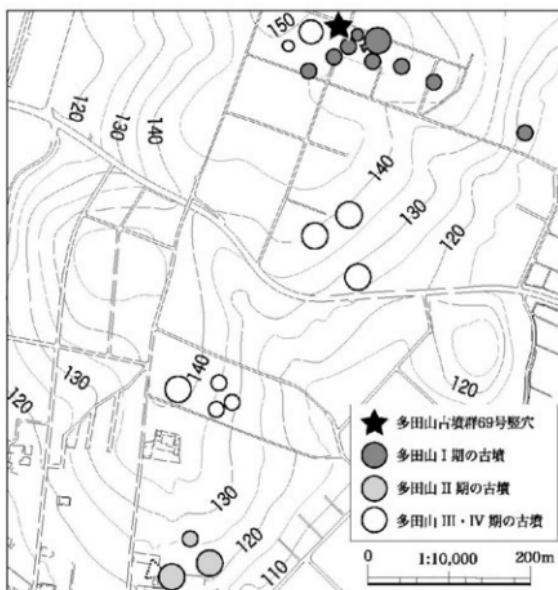


図5 多田山古墳群における変遷

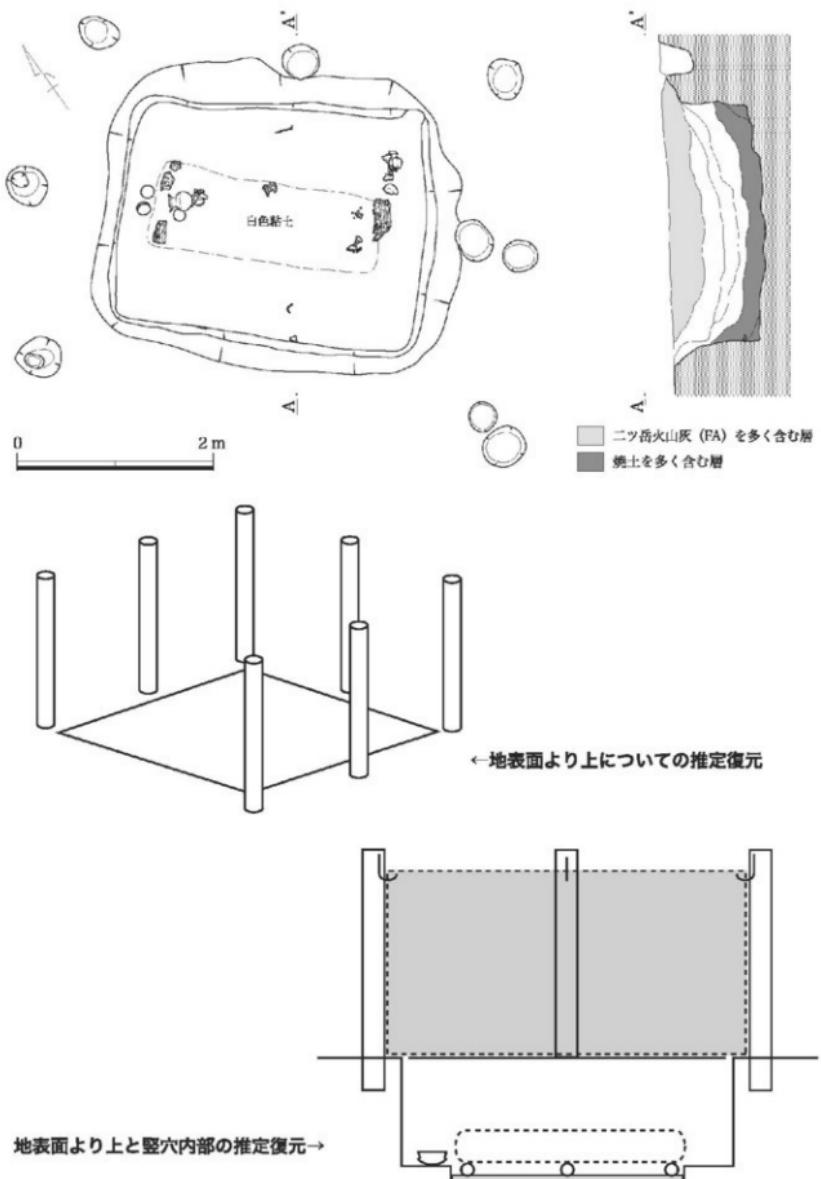


図6 69号竪穴の全体図と推定復元図

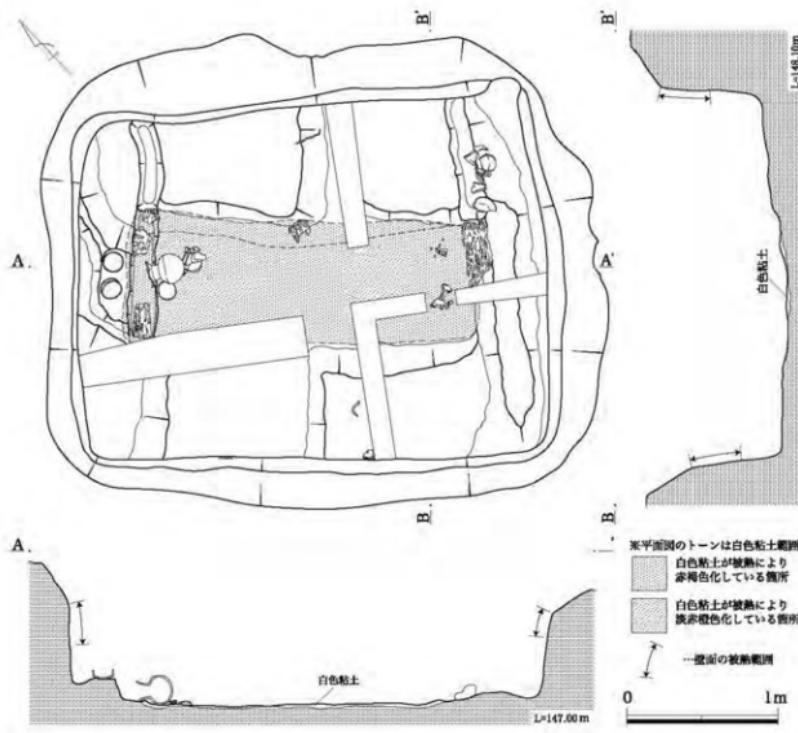


図7 69号竪穴の床面の状況

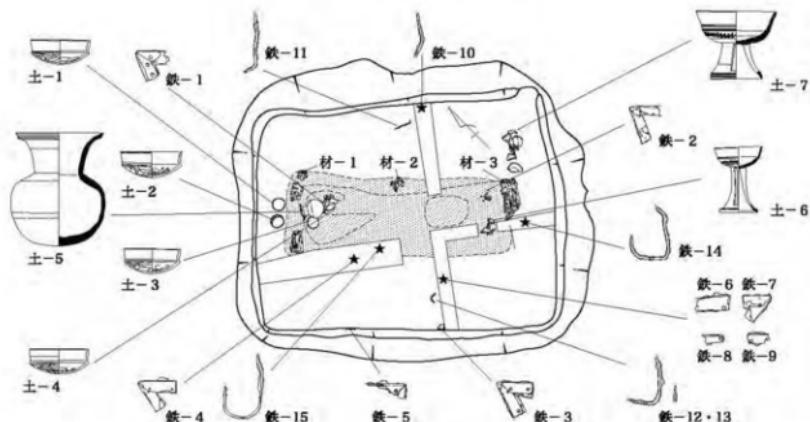


図8 69号竪穴の遺物出土位置

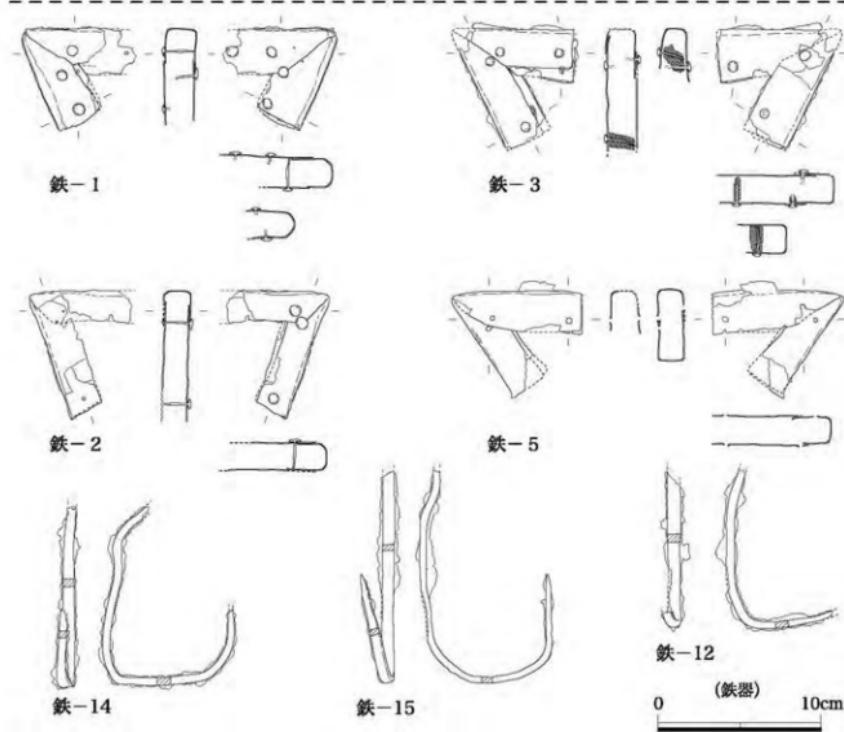
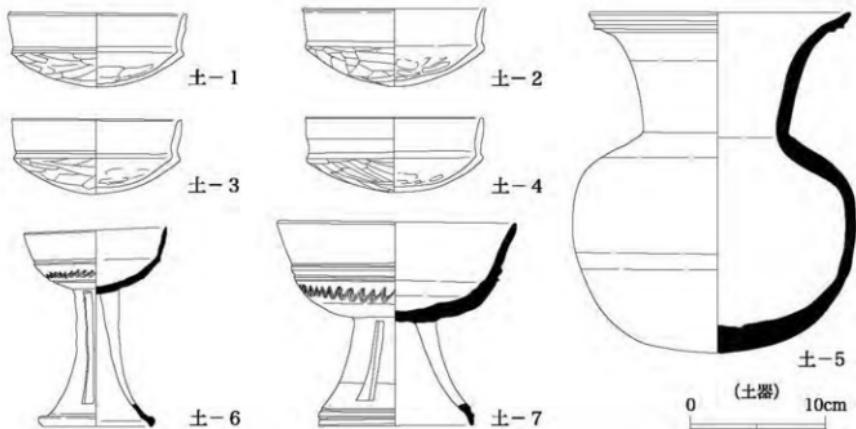


図9 69号竪穴の出土遺物

藤岡でつくられた前二子古墳の須恵器

藤野 一之（坂戸市教育委員会）

はじめに

改めましておはようございます。埼玉県坂戸市教育委員会の藤野一之と申します。今日はよろしくお願ひします。座って始めさせてもらいます。

この講座を何回も受けている方は、分かると思いますが、他の方皆さんもう大ベテランというか、すごい研究者ばかりで、今日はこんな若造が講師かと思って残念かもしれないんですけど、私も前原さんに頼まれたら、断れないものですから、喜んでお引き受けました。

先ほどのご紹介にもありましたように、私は駒澤大学でずっと須恵器の勉強をしていました、縁があつて、群馬県の地域を研究の対象として、色々と須恵器を見てきました。学生の時は本当にお金が無かったものですから、大宮駅から電車に乗って、高崎駅ですとか、前橋駅で、いろんな電車に乗り換えて、安中に行ったり、富岡に行ったりありとあらゆる群馬の電車を乗ったような記憶があります。その度に、なかなか本数がないものですから、夏は暑く冬は寒いホームの中で30分、1時間待ちながら各市町村の担当者を頼って実物を見せていただいて、本当にありがたいなと思いました。

前二子古墳の須恵器も私が大学院の1年生の頃に見させていただきました。そういう縁もありますので、このような形で皆さんの前で発表させていただける機会があり、本当に嬉しいと思っております。

1 須恵器とは

では、講座の方に入らせていただきます。まず、須恵器とはなんだろう。皆さんご存知かもしれないんですけど、改めて振り返ってみたいと思います。須恵器というのは、大きく二つの特徴があります。

まずは、輪轂ですね。回転台ではなくて、もっと惰力の強い輪轂を使って作るというものですね。1mくらいの大きな盤はちょっと作れないんですけど、高杯ですとか、小型のものは輪轂を使って作ります。

もう一つは、窯窓ですね。窯窓を使って、1000度から1200度の温度で還元焰焼成する。灰色で硬い焼き上がり

になり、水漏れも心配ないような、叩くと金属音のするような焼き上がりになります。これが、縄文土器以来の弥生土器とか、古墳時代の土師器といった赤褐色、褐色の土器とはまったく製作工程が異なるのが大きな点になります。これが窯窓の写真ですが、寄居町の末野窯跡群ですね。だいたい6世紀の終わり頃から、7世紀の初めくらいの窯で、ここはもう天井が崩落しちゃっていますが、一部残っていますね。トンネル状に掘りぬいて、その中に製品を置いて焼成します。

では、土師器とは全く作り方が異なる須恵器とはどこからきたのか。それは、朝鮮半島の陶質土器という土器の影響を受けて作られたというのですが、最近の研究でどんどん分かってきました。朝鮮半島の南部の方ですね、ちょうどこの辺りが釜山になります。伽耶ですか、一部こちらの百濟の方の地域の影響もありますが、そういう所で作られていた陶質土器の技術が日本列島にも伝わってきたということが分かってきました。単に情報だけではなく、朝鮮半島南部の地域の人が日本にやってきて作り始めたようです。

この技術が朝鮮半島から日本列島に伝わってきたのが、だいたい4世紀の終わり頃という考えが今のところ主体です。最初の頃の須恵器生産というものは、西日本の様々な地域で、大規模ではなく比較的小規模な生産で、行われておりました。その後、5世紀の中頃くらいになると、大阪府の今でいうと堺市周辺の大きな丘陵に展開する陶邑窯跡群に生産が集約されて、大規模に生産を行うようになりました。この陶邑で焼かれた製品というのは、本当に広域に流通しています。大阪府だけ使ったものではなくて南北は鹿児島の方から北は一部北海道まで行っているのではないかというぐらい広域に流通しています。

当然、この群馬の地にも陶邑の須恵器が出ていますが、5世紀の後半頃、前二子古墳が作られるちょっと前くらいになると、関東地方でも多くの陶邑の須恵器が出土するようになってきます。これが、5世紀の初めの頃の須恵器の窯の分布です。九州から瀬戸内海沿岸と大阪辺り

に点々と須恵器の窯が作られていますけども、最終的には陶邑と呼ばれる地域で大規模に生産が始まるようになります。陶邑の製品が日本列島の色々な地域に流通したと先ほどお話しましたが、それ以外に須恵器を作る技術も陶邑の方から各地域に工人が行ったのか、教わりに行つたのかちょっと分からぬのですが、各地域に伝わるようになります。それは、今回お話する藤岡も同じですね。5世紀の中頃から後半あたりにかけて、須恵器の生産技術がこの赤い丸で示しました陶邑から、各地域に伝わります。

では、なぜ陶邑から伝わったのか分かるのかといいますと、この上の図と下の図にあるように、陶邑で作られる須恵器の形はほとんど共通しています。土器器というものは、地域色がありまして群馬県内でも3、4グレードくらいに分かれているような小地城ごとに特徴のある土器なのですが、須恵器は土器器と違って、陶邑と形が類似します。そういう所から須恵器が一体古墳時代の中でどちら辺の時代なのか、5世紀なのか、6世紀なのか、そういうことがある程度分かるということで、須恵器というものはよく年代の基準として使われます。

こちらちょっと細かいのですが、須恵器も時代を経ることに形が少しずつ変わっていきます。こういったものが変化ですね、このちょうど赤く開いたMT15型式というのが前二子古墳の造られた時代くらいになるのですが、なぜそれがその時代か分かるのかっていいますと、その前段階のここオレンジ色の枠を見てください。こちら左側、これが高坏と呼ばれる器種ですね。それが新しくなると、この脚部と呼ばれる部分が少し伸びて、こちらが短くこちらは長くなります。こちら右側がハソウと呼ばれる液体を注ぐ器ですが、このハソウもこちらを見ると、この上半分の首の部分がここは短く、ここは長くなります。そういう感じで、時代を追って少しずつ形が変わったり、全体的な大きさも大きくなったり、小さくなったりと、そういうような変化を持って、須恵器の形が変わっていきます。このことから、例えば大室古墳群から出土した須恵器はこの陶邑で作られた須恵器の中で一体どの辺りになるのかなという風な事が分かります。

こちらの編年の表を見ていただくと、須恵器には様々な形がありますね。古墳時代に作られた須恵器の種類というものは、様々ありますが、ここに一例を図で示します。こういった小型の種類ですね、こういったものは、壺ですか高坏と呼ばれていますが、こういったものは飲食器ですね。他には、液体を入れる用途のハソウですか提瓶ですか、壺や壺ですね、そういう様々な用途の

器が焼かれています。ハソウというのは、ちょっと分かりづらいかもしませんが、ここの中の部分に丸い穴が開いています。この穴に、急須の注ぎ口みたいなものを竹で作って差し込んで、液体を注ぐという用途になります。

あとは、今回色々とお話をさせていただきます器台という形の器があります。高坏形の器台と筒形の器台の2種類があります。高坏形の器台というのは、大きさは器台の方が大きいのですが、こちらの高坏の形に似た器台。ここが筒状になっているのが、筒形器台と私たちは呼んでいます。では、この器台は何のために使うのかといいますと、小型の壺を載せたりするための器になります。これ自体意味があるかと言いますと、あんまりないですね。壺などを載せるための器になります。このような様々な形の須恵器は前二子古墳からも多く出ていますね。それは、全国的にも同じようとして、4世紀の終わり頃に日本列島で須恵器生産が始まりますと、古墳ですね、人を埋葬するお墓でも非常に多くの須恵器が使われるようになってきます。

2 古墳出土の土器

次に、古墳から出土する土器について、お話をさせていただきます。お墓で土器を使用するという事は、古墳時代だけではなくて、縄文時代からもしかすると現代まで、私たちもお墓の前で、私のおじいちゃんお酒が好きだったから、お墓にお酒を置こうという方もいらっしゃるかもしれませんね。あとは、おはぎが好きだからおはぎを、そういう時はそのままおはぎをお墓の所にポンと置かずにちょっとしたお皿などに置いたり、お酒は液体ですから、液体をお墓にジャバジャバかけるわけにはいかないのでコップに入れると、今はもう土器ではなくて、ガラスの器でしたり、陶磁器とかになっていますけど、そういういった容器ですね、そういう用途でお墓に供えるというのには、今でも行なっています。

そういうなかで、お墓から土器が出土するという用途は、まず一つは副葬品ですね。個人が愛用していたものを一緒に供えようというような目的での用途。二つ目は、先ほど話しました通り容器ですね。食べ物ですか飲み物を供えるために土器を使って、一緒にお供えする容器の目的として使用する場合。あとは遺体ですね。火葬した場合は人骨になりますけど、そういうものを収めるために使用した用途などが考えられます。今でも骨は容器に入れてお墓に入れますけど、現代だけではなく奈良時代にも須恵器の壺や壺に人骨を入れて、お墓に入れるというような事はあります。ひとくちに古墳から土

器が出ると言っても、さまざまな用途が考えられます。このような土器がどうやって使われたのかな、というのを考えるのも結構楽しくて、私は最近そういう事を考えるようになってきました。お墓から土器が出るというのは、いつの時代でも認められますが、古墳時代がやはり一番多いかなと。一つのお墓から土器がたくさん出るという事は古墳時代の特徴かなという風に考えられます。

では、古墳から出る土器の着目点についてお話しします。まず一つ目は出土位置、土器が出る位置ですね。古墳のどこから出るのか。古墳というのは様々な施設が複合して出来ているものです。まずは墳丘と呼ばれる画面で緑色の部分、塚の部分ですね。この墳丘と、墳丘をめぐる堀、大きい古墳になりますと、ここに中堤と呼ばれるものがあって、その外側にまた掘りがあります。あとは埋葬施設、そういった所から出ています。あとは、これが横に張り出すのですが、これは造出しと呼ばれています。こういった造出しからも出土します。その出る場所によって、用途も少し変わっているのかなという風に考えられます。このような、出土する場所による違いですね。

二つ目は、出る土器の構成ですね。須恵器も様々な形があります。土師器も須恵器と同じように壺と呼ばれるものや、高杯、あとは壺、甕など、土師器もバリエーションが色々ありますが、どのような器の種類がいるのか。例えば飲食器の壺や高杯が非常に多く出ると、液体を貯蔵するための壺や甕がたくさん出る。そういう割合のようなものですね。あとは、須恵器が多いのか土師器が多いのか。そういう種類の違いですね。それが古墳のどこからどういった、どのような須恵器や土師器が出るのか、そういうものを着目したりすると面白いですね。

三つ目は土器の産地ですね。土師器はあまり遠隔地には流通しない土器ですが、須恵器は先ほど来からお話ししていますとおり、大阪で焼かれた須恵器が群馬にもやつてくるとか、東海地方の須恵器が埼玉や群馬、あとは東北地方まで行ったりというのが、最近どんどん分かってきています。そういう所で、この須恵器はどこで作られたのかな、そういうものが分かれば、その地域と交流があったから、入手が出来ると思うのですが、そういう風に、色々な地域間のネットワークも復元することが出来るというのが須恵器の面白さです。

では、ちょっと具体例を挙げてみます。こちら、皆さんもご存知だと思いますが、高崎市の井出二子山古墳、保渡田古墳群の所にある最初に造られた古墳ですね。5世紀後半頃に造られた、こちらも前二子古墳と同じよう

に前方後円墳と呼ばれる古墳の形ですね。丸と四角が組み合わさったような前方後円墳があるのですが、どこから須恵器が出ているのか、土師器が出ているのか。調査では、全部掘ってないので分からぬ部分が多いですが、丸いボッチの部分の中島と呼ばれる所から比較的多く出るというのが分かっています。あとは墳丘からも土器が少し出ています。しかし、埋葬施設ですね、遺体を入れた石の棺がこの古墳から出ていますが、その棺の中からは多くの副葬品が納められています。金属製品ですか、非常に多くのものが出ていますが、実はそこからは土器は出ていません。棺には土器は入れなかつたと。棺には土器を入れずに、視覚的に見える所ですね、外から見える墳丘ですか、中島と呼ばれる所に、おそらく須恵器を並べていたのだろうと考えられます。

次に先ほどの井出二子山古墳と同じ時期、5世紀後半に造られた埼玉県行田市の有名な埼玉古墳群の中で最初に造られた稲荷山古墳ですね。鉄劍が出てる有名な古墳ですが、こちらとも比較してみると、井出二子山古墳と同じように墳丘ですか、目に見える所に土器が出てるようです。こちら、この所に須恵器の高杯などが出てるのが、造出しと呼ばれる所ですね。そういう所から多く出でています、あとは中堤の造出し、ここの張り出す部分。色々な所から数多くの土器が出てます。でも、井出二子山古墳と同じように、ここの前方後円墳の丸い部分の中心に遺体を収めた埋葬施設がありますが、土器は出ていません。やはり5世紀後半、各地で前方後円墳が多く造られる時代ですが、埋葬施設の中には土器は入れないというのが当時の風習と考えられます。その代わり、生きている人が外から古墳を見ると、色々な所に土器や埴輪などが並んであると。視覚的に見えるという所に土器は置かれていたようです。

一方、群馬県では6世紀以降になりますと、今まで遺体を納めていた埋葬施設の形が大きく変わります。横穴式石室と呼ばれる石室の形になりますと、群馬県では有名な高崎市の絶賛觀音山古墳ですね。そういう古墳でも、埋葬施設が横穴式石室というものに変わっていきます。何が一番大きくなつたかと言いますと、井出二子山古墳の石棺ですか、稲荷山古墳の埋葬施設は、堅穴系の埋葬施設ですので、一人一つの棺で、その上にまた土を盛るので、何回も使用することはできません。しかし、横穴式石室は墳丘の横から出入りできるようになつていて、何回も追葬することが可能という事になります。そのように埋葬施設が大きくなつたと、その中から土師器や須恵器も出土するようになります。ここが遺体を置いていた場所ですけども、それ以外の空間の

所に、馬具ですかと、須恵器とか置かれています。これは前二子古墳とも共通する点になります。こちらが綿貫
綿音山古墳の石室の写真ですね。奥から入り口に向かって撮っています。こういったように入り出来る空間があります。須恵器はここから出ているという事になります。これは愛媛県の古墳ですが、横穴式石室の中から筒形器台ですか、色々な須恵器が出ています。そういった埋葬施設の変化が、古墳における土器の使用にも大きく関わっていたという事が分かると思います。

3 前二子古墳出土の土器

ここから、本題に入りたいと思います。前二子古墳から出土した土器という事で、前二子古墳も色々な所から土師器や須恵器が出土していることが調査によって分かっています。最も有名なのが、前二子古墳の横穴式石室から出土した土師器と須恵器になります。こちらの方は、皆さんご存知だと思いますけど明治 11 年に調査されまして、その際、横穴式石室と呼ばれる遺体を入れる埋葬施設、そこから数多くの副葬品が出土しました。馬具ですかと、その他、豊富な副葬品ですね。その中に、土師器と須恵器も出土していますが、正確な場所からどう出たかという事が不明な点も多いんですけども、当時の記録からですね、ある程度この土器群が石室のどの部分から出たのかという事が、復元する事が可能になります。

向かって右側のこちらですね、こちらの絵図と言いますか、図面がその明治 11 年の石室が調査された際に書かれた図面です。左側が、前二子古墳の石室の図面になります。石室の色々な所に絵で出たものが書かれていますね。前二子古墳の横穴式石室にある、仕切りの石がちょうど一番奥のこの辺りにあって、遺体を埋葬する場所になるのかなと考えられますが、こういった遺体の近くには、馬具、杏葉と呼ばれる馬を飾るための金属製品などがあります。

では、須恵器はどこかと言いますと、石室のちょうど真ん中辺り、ここ辺ですかね。遺体の近くではなく、ちょっと離れた所ですけども、こういった所から土師器や須恵器が出てるという事が、この絵図が残っているお陰で、ある程度復元することが出来ます。そして、ここが境になりますて、下半分が隧道と呼ばれる場所ですが、こういった所からはあまり出でていないようですね。やはり横穴式石室の玄室と呼ばれる場所に土師器と須恵器が集中して置かれているという事が分かると思います。こちらですね、少し拡大した図面、おそらくここ辺に

遺体を埋葬したと考えられますが、そういった近くには馬具ですね、ちょっと離れた所に須恵器や土師器が置かれています。これは、前二子古墳に限ったことではなくて、先ほど例に挙げました高崎市の綿貫綿音山古墳でも、実は須恵器は少し遺体とは離れた場所に置かれています。それ以外にも、多くの横穴式石室から出土する土器の出土状況の傾向として、前二子古墳と同じように遺体からは離れた場所に土器は置かれていたという事が分かっています。

前二子古墳の土器の出土状況で注目したいのは、だいぶ拡大して分かり難いかもしれません、こちらが筒形の器台になります。ここに同じようなものが二つ並んでいますが、これが高坏形器台ですね。前二子古墳からは、2 点出土しています。そこに、提瓶と呼ばれる液体を貯蔵する用途のものが、一緒に描かれていますね。これは一つの特徴になります。それ以外に、周りに土師器の壺や須恵器の高坏や壺ですかね、こちらも高坏が描かれているので、石室のどの辺りからどういった器種が出ているのかというのが分かります。これは、なかなか忠実に描かれていますので、今現存している前二子古墳から出土した須恵器や土師器を照合することも可能という事になっています。

では、この高坏形器台に提瓶が載せられているのが特徴とお話をしましたけれど、通常写真のように高坏形器台には壺が載せられています。提瓶も同じ液体を入れる用途の須恵器になるんですけども、多くの事例では高坏形器台にはこういった少し首の長い壺を載せるのが一般的になります。なぜ前二子古墳で高坏形器台に提瓶が載せられていたのか、というのは分からないです。

こちらの図面に掲げましたものが、前二子古墳の横穴式石室から出土した土師器と須恵器の図面になります。現存しているものとしているものがあるようですが、上が土師器と呼ばれる赤い素焼きの土器ですね。その下が須恵器と呼ばれる灰色で硬い土器になります。土師器から見ていきましょう。まずは壺と呼ばれる今で言うとお茶碗のようなものですね。片手で持てるくらいの大きさの壺。あととは、お茶碗に足が付いたような高坏ですね。土師器にも須恵器にも壺や高坏と呼ばれる器種がありますけども、土師器の高坏も 4 個体出土しています。

あとは、珍しいものは壺ですね。壺にも高坏と同じような脚と呼ばれるもののが付いています。この脚の付いた壺というのはなかなか類例がない、私が知らないだけかもしれません、少し調べてみても、なかなか見当たらないな、という珍しい形の壺になります。下段は、今は残っていないようですが、須恵器の高坏が 3 点。あとは

ハソウ。こちらも真ん中に穴が開いています、そこに竹の筒を入れて、液体を注ぐという器種ですね。その鱗が壺ですね、液体を入れる壺。他には先ほどお話ししました高环形器台に載せられていた提瓶。あと、その提瓶を載せていました高环形器台が2点。そして、一番前二子古墳を象徴するような須恵器の筒形器台になります。これらの前二子古墳から出土した須恵器というのは、最初にお話しました大阪府の陶邑という窯跡群で焼かれた土器の形態変化の編年図に当てはめますと、大体MT15型式と私たちは呼んでいますが、そのような時期です。6世紀の初めの頃に作られた須恵器の形態とよく似ているなという所で、この前二子古墳に納められた須恵器とほぼ同じ、並行する6世紀初めの方の須恵器ということ方が分かれます。

もう一つ大きな特徴になるのが器台ですね。高环形器台が2点、筒形器台が1点出ていますけども、群馬県から出土する器台類を集めてみると、古墳から出る場合は前方後円墳から比較的多く出土する傾向があります。その下のランクと言いますか、下位層の円墳から出るというのになかなか無いです。あとは、豪族居館と呼ばれる、前方後円墳に葬られた被葬者が住んでいたお屋敷みたいな所ですね。そういう所からも出ることがあります、あまり一般的に出土しない器種になります。ただ、群馬県と言いますか、関東地方全体的に見てもそうなのですが、あまり器台というのは定着しなかったようですね。5世紀から6世紀にかけて少し出るようだけど、あまり定着はしなかったようですね。器台が定着しなかったのか、器台に物を載せることがあまり定着しなかったのか分からぬのですが、群馬県の場合、6世紀の前半くらいまで器台は出土するのですが、それ以降の6世紀後半、例えばですね、先ほどお話ししました綿貫音山古墳からは出ていないですね。大阪や奈良、他の地域を見ると、6世紀の終わり頃までは器台がずっと作られ続けてですね。古墳からも出ますが、群馬県ではあまり定着しなかったというのが一つの特徴になると思います。

あと、もう一つですね、こういった横穴式石室からは須恵器以外に土師器も出ていますね。先ほどお話ししましたように、脚の付いた壺の類例はあまりありません。須恵器がメインですが、どの古墳を見ても少なからず土師器が出土することはあります。そういうもののなかには、前二子古墳の脚の付いた土師器のように、古墳に入るために作られたような土師器も存在しています。以上のことから分かることは、須恵器が主体ですけども古墳で行う儀礼ですね。色々な儀礼が行われていた可能性がありますが、そういう儀礼の道具が須恵器だけで

はなく土師器も必要だったという事が前二子古墳から出土した土器でも言えるのかなと。須恵器ばかりではなく、土師器も少し注目して全体的に見ていくのが必要かなと考えています。

～休憩～

4 藤岡産須恵器について

今回のテーマ、藤岡でつくられた前二子古墳の須恵器という事ですね。このテーマで皆さんにお話しようすると、2時間はちょっとネタが持たないので、時間稼ぎで前半色々と横道に逸れながらやってきました。

藤岡地域ですね、群馬県の南西部、埼玉県の本庄児玉と接する地域で古墳時代に須恵器生産が行われていたであろう、なんで“であろう”なのかと言いますと最初にお話しました須恵器は埴輪で作って、登り窯のような齊窯で焼成すると言いましたけども、その生産地に絶対ある跡跡が実はまだ分かっていません。埴輪の窯跡はいくつか見つかっています、藤岡で埴輪も作っていたというのは古くから有名ですけども、私は藤岡の周辺の地域で須恵器も作っていたであろうと考えています。ただの当てずっぽうではなく、理由がいくつあります。

なぜ、藤岡の地域で須恵器が作られたというのが分かるかと言いますと、須恵器の胎土と言いますか、器表面とかですね。よく見ると、海面骨針化石と呼ばれるものと結晶片岩というものが二つ含まれています。1mmくらいの小さなものですけども、こういった海面骨針化石と結晶片岩の二つが入るというのは、藤岡で作られた埴輪にも同じような胎土の特徴があるので、共通しています。埴輪の方は、窯跡が発見されていますので、それと同じ土の須恵器は、同じような所で作られていたんだろうと考えました。

海面骨針化石と呼ばれるのは藤岡の地域だけではなく、様々な地域の土器に入っています。一番近い所で、私の勤めている坂戸市の隣の鳩山町と呼ばれる所ですね。鳩山町も奈良時代になると大規模に須恵器を焼く窯跡が多く発見されています。埼玉県というか、武藏ですね。埼玉・東京と神奈川の一部で奈良時代に使われた須恵器の大部分が鳩山で作られていたと言っても過言ではないくらいの大きな窯跡群で、鳩山の須恵器には海面骨針化石が入っています。ですが、結晶片岩というのに入っていません。結晶片岩というのは埼玉で言うと長瀬の方の青石ですね。板碑で使われているような、そういったものが結晶片岩ですが、ああいうものは日本の中でも高知県から和歌山通って三波川の地域と言いますか、

そういった所で埼玉だと寄居ですか、長瀬小川方面に行って、藤岡に、そういうもので、本当にごく限られた地域でしか取れない石ですので、鳩山町で焼かれた須恵器には、海面骨針化石は入るけど結晶片岩は入りません。もう一つ結晶片岩と言いますか、綠泥片岩が入る須恵器は寄居町の末野窯跡群で生産された須恵器には、綠泥片岩が入ります。しかし、海面骨針化石と結晶片岩の二つが入っている須恵器は、埴輪もそうですし須恵器も同じような所の粘土を使って作られたという事ですね。藤岡で生産された、須恵器の大きな特徴として取り上げられると考えておきます。あとで写真をお見せしたいと思いますが、この藤岡の地域、窯は分からぬのですが、藤岡の須恵器はこういった土の須恵器ですね。また、藤岡にしか見られないような形態の特徴の須恵器というものが作られています。

では、一体藤岡で須恵器はいつ頃から始まつたのかといいますと、5世紀の後半頃、前二子古墳が造られる少し前の時代、井出二子山古墳が造られた頃の5世紀後半の頃から生産が始まりまして、奈良・平安時代まで生産が続いていたと考えられます。古墳時代の窯跡はまだ発見されていませんが、奈良・平安時代になると窯跡が発見されていまして、たくさんの須恵器が出ています。

これは、先週深澤さんが講義されたと思います。多田山古墳群69号竪穴から出土した須恵器の高坏の写真です。この青い丸印の中にある白く無いのが海面骨針化石というものになります。本当に微細ですので、私もルーペで拡大しながら探しています。また、藤岡で作られた須恵器の特徴の大きなものとして、この壺の一一番先端の部分ですとか、高坏の脚部の地面に接する部分、その形が非常に特徴的で、三つの盛り上がりが見えます。ここが二つ重んでいるので、2本組みをやって三つの膨らみを作るという形ですね。この形が、藤岡特有の特徴として捉える事ができます。通常の須恵器の高坏の脚部の先端の部分とは違う、といったものが藤岡地域で生産された須恵器の特徴になります。あと、最初に須恵器とはなんぞやというのでお話して、須恵器とは窖窯で還元焰焼成されるから灰色だと言いましたけど、こちらは灰色ではないですね。土師器じゃないかと言われるかもしれないですが、一応須恵器ですね。藤岡のもう一つの特徴として、意外に焼成が良くないものが、藤岡の古墳時代の須恵器の特徴になります。奈良・平安時代になりますと、非常に良く焼けているので、これは古墳時代の頃の特徴の一つになります。

また少し細かい話ですが、こちらが藤岡地域で生産さ

れた須恵器の編年表です。ここの一一番上の段、こちらが藤岡で生産が始まった頃の須恵器になります。これが大体5世紀の後半頃。FAと呼ばれる火山灰が降る前。その噴火が始まる前の段階が、まさに藤岡で須恵器が始まった頃になります。そのあと、前二子古墳が造られる頃になりますと、この辺りまでが6世紀の前半で、下の方になると6世紀の後半頃になります。このようにですね、5世紀の後半から須恵器が始まって、意外に途切れる事はなかったようですね。途切れる事はなくて、6世紀いっぱいずっと生産している。おそらく7世紀も作られていると思いますが、大規模な生産とは言えないものの、連続と須恵器生産が続くのが藤岡の特徴になります。なぜ、須恵器生産が途切れずに続いたのかと言うと、一つはやはり大きな点として、この前二子古墳に代表されるように、横穴式石室と呼ばれる埋葬施設が古墳に取り入れられると、そこに須恵器を入れる儀礼も導入され、須恵器も必然的に必要になってくると。そういうことも含めて、須恵器が生産される要因があったのかなと考えています。

その藤岡で焼かれた須恵器は、どの辺りにまで広がっているのかと言いますと、こちら、中央や左側が藤岡の地域になるのですけども、おそらく生産地はこの辺り、その焼かれた須恵器は群馬県の富岡市周辺や安中市、この7番。あとは、こちら星印の16番が前二子古墳になります。北は渋川市の方からも出ていますね。あの有名な黒井峠遺跡からも出ています。あとは藤岡と川を挟んでお隣の本庄児玉の辺りですね。この辺りも比較的多く入っています。実は群馬より多く入っているのではないかというくらい、一つの地域囲いだったのかもしれないんですけども、本庄児玉は基本的に恒常的な供給圏と言いますか、藤岡の須恵器が出る地域ですね。で、利根川をずっと下っていくと、この32番というのが埼玉県の北川辺町ですね。その辺りからも出ています。

そして、ここが東松山市と私が勤めている坂戸市ですが、ここからも藤岡で焼かれた須恵器が実は出ています。という事で、坂戸は群馬と意外と繋がりがあるのかな、というのが分かる事例ですね。このように、広域に広がっているのが藤岡の須恵器の特徴になります。それはいつの頃かと言いますと、藤岡で須恵器生産が始まる5世紀後半から前二子古墳が造られる6世紀前半の頃ですね。その時期に、広域に藤岡の須恵器が広がるという事が特徴になります。東松山、坂戸、あとは一番右端の32番の北川辺町というのは、藤岡からだいたい半径で40kmくらいの圏内になります。その地域まで広がるというのが非常に大きな特徴になります。

関東地方では、古墳時代の須恵器の痕跡というのが見つからないのですが、藤岡と同じようにこの地域で作られていたのかな、という須恵器はあります。しかし、そういう須恵器は、その地域の周辺にしか広がりを持たないようです。藤岡のように、群馬県内の各地域から出て、一部は埼玉の中央部の方まで広がるというのは、関東地方の古墳時代の須恵器の中で、非常に特徴的な点として取り上げられます。実はこの木生丸玉を抜けて、東松山や坂戸と、こういったルートが存在していたのかなと最近は考えています。この外祖父の山地がありますが、こういう山地や丘陵の縁を行くような、こういった川を使わないルートですね。河川交通だけではなく、群馬と埼玉を結ぶ陸路のようなものもあっていいのかなと考えています。

5 藤岡でつくられた前二子古墳の須恵器

では、藤岡で作られた前二子古墳の須恵器、今日の一番の本題となります。大学院の頃に見させていただいて、前二子古墳から出た須恵器の大多数は藤岡の地域で焼かれた須恵器でいいのかなと考えました。また、現存しない高坏がありますが、この残された縁をよく見ると、段がありますね。この脚の所に、三つの膨らみがあって、二つの窪み。これは、先ほど写真でお示しました藤岡で焼かれた須恵器の高坏の脚端部の特徴と実は似ているのではないか。もしかすると、この高坏も藤岡なのかなという気もします。これは、写真が非常に良くなくて申し訝ないのですが、前二子古墳の筒形器台の一番上の部分を撮った写真です。ここに2本の窪みがありますね。藤岡の壺の口の部分にも、こういった2本の窪みが入っているというのを先ほどお話しましたけど、こういった特徴が筒形器台にも見えています。これは非常に特徴的な部分です。そして、こちらですね、器台の脚部の所に丸や四角の透かしと呼ばれるもの、穴を開けるのですが、なぜか貫通していない。あとはヘラで書いたような線が見えますけども、なかなか他に例を見ないような記号なので、こういったものが何になるのかこれからもう少し勉強しないといけないと思っています。

こちらの写真が、高坏形器台のうちの1点の口の部分に、こういう波の模様がありますね。その下にも、波の模様がありますが、この波の形をしたのを波状文と呼んでいます。波の文様ですね。この口に波状文を付けるというのは、須恵器では一般的ではないですね。藤岡だけではなく、群馬県ではその他に太田市の方で、窓跡が見つかっています。あとは高崎の方でも須恵器焼いているのではないかと考えていますが、群馬県内で焼かれる

須恵器には、なぜかこの口のところにも波状文を施すというのが一つ大きな特徴となっています。高坏形器台の口唇部にもこういった波状文が付けられるというのは非常に特徴的ですね。

こちらのアップの写真は高坏形器台に載せられた提瓶の把手です。一般的な提瓶の把手は、粘土の紐を環状にして作りますが、前二子古墳から出ている提瓶見ますと、把手の部分に痕跡が見られますね。おそらく粘土の紐ではなく、板のようなものを付けて、ポールペンのような棒でスッパって刺した痕跡が、この部分の痕跡。あまり見ない技法ですね。棒で刺して穴を開けるというのが、この提瓶の特徴になります。その他にも、やはり重量感がある、重たいですね。そういうものも藤岡といいますか、前二子古墳の須恵器の特徴になります。

あとはですね、一番の特徴は筒形器台に付けられた動物の小像ですね。筒形器台の脚部の所に付けられていましたが、この埴物の裏の所に前二子古墳から出た土器類のレプリカが展示されているので、よければそれを見てください。そこには、亀や鳥、蛇、この小さいのが蛙で、蛙を追う蛇。こういったものが付けられているという事ですね。全国的にもほとんど例はありません。須恵器自体に動物などの装飾を付けるのも前二子古墳が造られた頃だと、あんまり無いですね。須恵器の技術が伝わってきた朝鮮半島の方を見ると、朝鮮半島の新羅に多く、伽耶っていう地域にも若干あると。なぜ、このような特徴的なものが藤岡の地域で作られて、前二子古墳に供給されたのかと、これが一番の問題点になります。筒形器台には小像が付くなどの、上手いといいますか、特徴的ですけども、その他はあまり上手くない人が須恵器を作っているというのが前二子古墳の須恵器の特徴ですね。

ということで、そろそろ終わりに近づいてきました。前二子古墳から出土した筒形器台について考えていきたいと思います。まず、須恵器が焼かれた藤岡という地域は、古墳時代はどんな地域かといいますと、須恵器生産よりも活発に埴輪を作っています。そこで、藤岡で作られた埴輪は高崎市の保渡田古墳群に供給したり、もっと広い範囲に供給しています。これも藤岡の須恵器と同じような特徴で埴輪も群馬県内の色々な地域の古墳に供給されているということですね。そして、もう一つ、先週深澤さんの講座を聞かれた方はお分かりになるかと思いますが、多田山古墳群69号竪穴という所ですね。モガリを行ったような遺構が発見されていまして、その中から土器が出ています。上段の、オレンジ色で括ったのが土師器の壺ですね。下段が須恵器の高坏が2点と壺が1点出ています。この須恵器のうち1点の細い体型の、すら

つとした高坏は藤岡ではない地域のもので、他の高坏と
窓が藤岡で生産された須恵器になります。

実はですね、土師器も須恵器と同じような胎土の特徴
がありますので、須恵器と土師器がセットとして藤岡か
らもたらされて、このモガリを行ったであろう所に納め
られたのかなと考えています。須恵器だけではなく土師
器も一緒に、儀礼に必要な土器一式が、もしかしたら藤
岡から供給されていた可能性が考えられます。こちらが
その写真ですね。上段の灰色のままで須恵器というのは
藤岡ではない地域、どこで焼かれたのか分からないです
が、まあ藤岡ではない。この橙色の2点の須恵器が藤岡
の地域で焼かれた須恵器になります。ということで、埴
輪以外に須恵器も焼いていて、土師器も当然ながら作
っている。土師器と須恵器が古墳の色々な儀礼の中で必
要だという所で、意外に広域に供給されているというの
が特徴になります。

もう1点、藤岡の地域の特徴として渡来系の人々、朝
鮮半島が出身の人々がもしかしたら藤岡にも住んでいた
のかなという資料があります。これらの土器ですね、こ
れは波川市の吹屋粧屋遺跡という遺跡から出てきた土器
ですが、よくよく見ると普通の土師器とはちょっと違う
部分があります。この部分に四角い痕跡がありますが、
叩き具という道具で作っている。こういったものが、通常
の土師器ではなく朝鮮半島の方で作られる軟質土器、
朝鮮半島では軟質土器と呼びますが、そういった土器の
特徴を持つ土器がこの波川の吹屋粧屋遺跡から出土した。
この土器の胎土を見ますと、やはり藤岡の須恵器や埴輪
と同じように海面骨針化石と結晶片岩という二つのもの
が入っています。そういう所だから、この軟質系土器も
藤岡で作られたのかなと考えられます。ただ、少し注意
したいのは、朝鮮半島で作られたそのものばかりの軟質
土器の形ではない。ここに縦線が見えますが、ハケを使
用するなど土師器の作り方と融合しているという事で、
そのものばかりの朝鮮半島出身の人が作っているわけ
はなさうですね。もしかしたら、2世3世ぐらいの可
能性もあります。こういった軟質土器ではなく、軟質土器
の特徴を含んでいる土器も藤岡で作られているとい
う事になります。

まとめ

以上のことをまとめますと、藤岡地域というのは、古
墳時代に手工業生産が活発だったようですね埴輪や須恵
器は、窖窯で焼いていると、あと、土師器も含めて、群
馬県内の色々な古墳に供給していると。もしかしたら、
古墳で行われる儀礼に必要な道具を、藤岡で作って色々

な地域に供給していたという可能性があります。あとは、
先ほど写真でお見せしました吹屋粧屋遺跡から出た軟質
系土器ですね。普通の土師器の工人、日本人は作れな
い土器ですので、もしかしたら渡来系の人々が住んでい
たと。ただ1世ではなく、2世以降の人の可能性があり
ます。

という所で最後ですね。もう一度振り返って、前二子
古墳の筒形器台に付けられた蛇や蛙などの小像です。朝
鮮半島の方に見られる、そういう像がなぜ藤岡で作ら
れたのかなということになりますと、前二子古墳の石室
は、最近の研究で朝鮮半島の南の方の地域と関係がある
のではないかと指摘されています。ということは、前二子古墳
に葬られた被葬者は、もしかしたら朝鮮半島で小像の付いた
陶質土器を見ていた可能性があります。そして、藤岡の地域でこういったものを作ってくれないかと言
って生産させたという可能性がまず1点あります。た
だ、こういったものを作ってくれと言わざりとも、見たこ
とのないものを上手く作れるのかなという疑問がありま
すね。しかし、藤岡の地域の中に渡来系の人々が居住し
ていて、その人がもしかしたら須恵器生産も関わっていた
かもしれないですね。そういうなかで、自分たちの
ふるさとの方のそういう小像を知っていたから、前二子古墳
の被葬者の人から依頼されても作ることができたの
かなと。まあ色々な可能性が考えられますが、上手く結
論はまだ出せません。日本から出る筒形器台の中では、
あのような小像が付けられているのは、ほとんど例があ
りませんので、そういうことも含めて、この筒形器台を
今度どう解釈していくかというのが、検討課題にな
ります。

お後がよろしくないのですが、この辺で私の発表は終
わらせさせていただきます。ありがとうございました。

【質疑応答】

Q1 藤岡市の木郷で登り窯が発見されていますけれど
も、あれは須恵器を焼いた窯ですか？

A1 藤岡で発見されている登り窯は、埴輪を焼いた窖窯
以外に、下日野と呼ばれる地域で、須恵器の窯が見つか
っていますが、それは奈良・平安時代の須恵器の窯です
ね。古墳時代の須恵器を焼いた窯はまだ見つかっていない
と思います。

Q2 壺に穴を開けたっておっしゃっていましたけど、上
から水を入れてというそういう発想ではないんですか、

液体を入れるのに穴を開けたなんですか？

A2 穴が開いているのはハソウですね。埴輪のなかでハソウを持っている人の埴輪が出土しています。その埴輪を見ると、ハソウの穴が開いている所に、竹かは分からぬんですが、筒を入れて持っている。という像がありますので、今でいう急須みたいなもので、注ぐ穴ですね。

Q3 前二子古墳の被葬者の方は渡来人の可能性があるとそういうことですか？

A3 可能性として、あるかもしれません。朝鮮半島の人と繋がりがあるっていう考え方もあるし、そのものずばりではないかなと思いますが、石室以外にも馬具などは朝鮮半島との繋がりがあるようなものも出でたりしますので、もしかすると何らかの交流があったかもしれませんですね。

Q4 軸轆というのは発見されているんですか？

A4 ほとんど見つかってないです。木製ですので、なかなか残りづらい。軸轆の軸棒を差し込んだ、ちっちゃい穴みたいなものは須恵器を作った工房のような所から発見はされたりしています。

参考文献

藤野一之 2007 「古墳時代における藤岡産須恵器の基礎的研究」『群馬考古学手帳』第17号 群馬土器研究会 15-34頁

藤野一之 2013 「古墳時代における藤岡産須恵器再考」『埼玉考古』第48号 埼玉考古学会 41-54頁

藤岡でつくられた前二子古墳の須恵器

埼玉県坂戸市教育委員会

藤野 一之

はじめに

1 須恵器とは

須恵器とは、①ロクロによる製作、②窯窓(あながま)による還元焰焼成、が基本。そのため、灰色で硬質の焼き上がりとなり、土師器とは大きく異なる。

須恵器生産の技術は、古墳時代中期(4世紀末頃)に朝鮮半島南部の地域から日本列島に伝來した。初期の須恵器生産は、西日本の各地で小規模に行われたが、5世紀中頃からは大阪府陶邑(すえむら)窯跡群で大規模に生産される。また、その技術は陶邑から各地域へ拡散し、陶邑と同じような形の須恵器が生産されるようになる。そのため、須恵器は遺構の年代を知る手がかりとして取り上げられることが多い。

2 古墳から出土する土器

墳墓から土器が出土することは、古墳時代に限らず縄文時代から中・近世、あるいは現代に至るまで広く認められるが、すべての時期を通じて墓から最も多くの土器が出土するのは古墳時代か。墓から出土する土器の用途としては、①副葬品としての土器、②容器としての土器、③遺体(人骨)を収めるための土器、などが考えられる。

古墳には、墳丘、周溝(周堀)、造出し、埋葬施設など複数の施設から構成され、土器もこれら様々な場所から出土し、場所により土器の役割も異なっていた可能性が考えられる。古墳から出土する土器については、①出土位置、②器種の構成、③土器のつくられた生産地、などに着目することで、当時の葬送観念や地域間のネットワークなどを復元することが可能である。

また、列島で須恵器生産が開始されると、古墳でも須恵器が多く出土する傾向が認められ、埋葬施設も竪穴系の埋葬施設から前二子古墳のような横穴式石室が導入されると、埋葬施設内に土器を入れる行為が認められる。

このように、古墳出土土器といつても時期によって変化する要素もあり、地域によっても様々な様相がみられる。

3 前二子古墳から出土した土器

前二子古墳は、墳丘長91mの前方後円墳であり大室古墳群の中で最初に築造された前方後円墳である。明治11年の石室調査によって、豊富な副葬品が出土しこの中に須恵器と土師器も含まれていた。石室内での出土位置は、当時の記録『古制微証』に

詳細に記されていることから、ある程度の出土位置を復元できる。

前二子古墳の石室内から出土した土器は、須恵器高坏3、ハソウ1、壺1、堤瓶2、高坏形器台2、筒形器台1、土師器坏1、高坏4、台付壺1など、器種・量とも豊富である。『古制徵証』によれば、玄室内から出土していることが分かるが、遺骸が置かれたであろう屍床付近からは出土していないようである。また、須恵器の器台は前方後円墳をはじめとする有力古墳に限って出土する器種であり、土師器台付壺については他に類例のない特殊器種として評価できる。

群馬県では、関東地方の中でも早くに横穴式石室を導入した地域であるが、それと共に埋葬施設内に土器を入れる行為も導入される。石室から出土した須恵器の中には、藤岡地域で生産された須恵器を代表に在地で生産された須恵器も一定量含まれていることから、横穴式石室の導入が須恵器生産の定着にも少なからず影響を及ぼした可能性が考えられる。

4 藤岡でつくられた須恵器

群馬県で須恵器生産が開始するのは、高崎市保渡田古墳群の造営が始まる5世紀後半頃である。生産地となる窯跡は発見されていないが、古墳や集落から在地産の須恵器が出土するようになる。生産地の候補としては、藤岡市域や高崎市域など複数が考えられる。

(1) 藤岡産須恵器の特徴

それらの在地産須恵器の中で、胎土中に海面骨針化石と結晶片岩が含まれる須恵器が存在する。このような胎土の特徴は埴輪にも認められ、藤岡市猿田埴輪窯跡や本郷埴輪窯跡で生産されたことが分かっている。以上のことから、海面骨針化石と結晶片岩の両者が含まれる須恵器は、窯跡が発見されていないものの藤岡市域で生産されたものと考えられる。

また、高坏脚部や壺の口唇部に藤岡産に限って認められる形態が存在する。

(2) 藤岡産須恵器の生産時期

藤岡市域で生産されたと考えられる須恵器は、群馬県内で須恵器生産が開始される5世紀後半頃から認められ、継続した生産が行われるようである。また、奈良・平安時代では下日野金井窯址群で生産が行われている。

6世紀前半になると、提瓶や器台などの新たな器種の生産が始まると一方、在地化した様相も認められる。

(3) 広域に分布する藤岡産須恵器

胎土に特徴をもつ藤岡産須恵器は、古墳や集落で出土したとしても認識することが可能であり、時期ごとに分布範囲(流通範囲)を捉えやすい。

5世紀後半 藤岡市域で須恵器生産が開始される時期。Hr~FA降下前。

藤岡市域をはじめ、隣接する本庄・児玉地域、高崎地域に加え、埼玉県北川辺町や東松山市などでもわずかながら出土が認められる。北川辺町や東松山市は、藤岡市から直線で約40km離れている。

6世紀前半 前二子古墳が築造される時期。Hr-FA 降下後。

5世紀後半と比較して出土量が多くなり、群馬県内の各所から出土が認められる。前二子古墳や安中市篠瀬二子塚古墳、高崎市保渡田薬師塚古墳など、前方後円墳へも供給し、その中に器台が含まれているのも特徴。埼玉県内では、本庄・児玉地域や熊谷市、坂戸市でも出土が認められ、5世紀後半に継続して広域供給が行われている。

また、前二子古墳と関連する多田山69号竪穴から出土した土器も藤岡産である。

6世紀後半 高崎市綿貫觀音山古墳が築造される時期。Hr-FP 降下後。

生産は継続するが出土量が少なくなり、広域供給も認められなくなる。

このように藤岡産須恵器は、①5世紀後半から6世紀前半にかけての広域供給(半径40km圏内)、②前方後円墳への供給と器台の生産、などが大きな特徴である。

5 藤岡でつくられた前二子古墳の須恵器

前二子古墳の石室から出土した須恵器のうち、大部分が藤岡産須恵器と考えられる。全体的に焼成は良く、提瓶は在地化した様相がみられるが、高坏形器台や筒形器台は注目される。

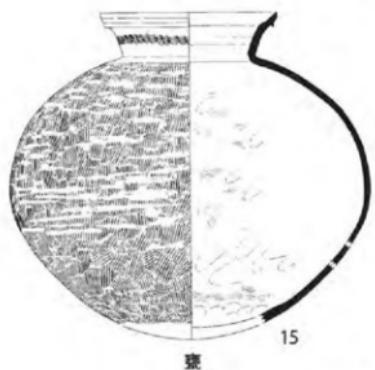
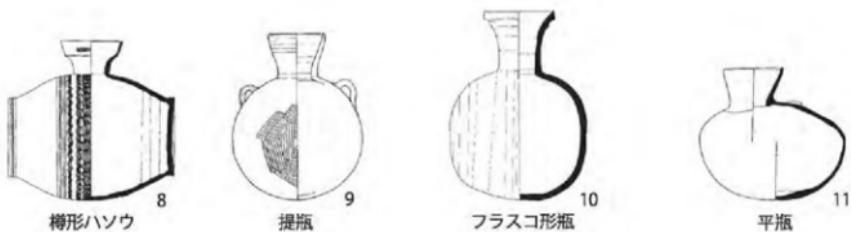
高坏形器台の脚部には、円形、長方形、三角形の透かしが直列に配置され、群馬県内で出土する器台の透かしと共通している。また、うち1点は口唇部に波状文が施されるのが特徴である。筒形器台の形態は、全体的に列島で生産された筒形器台の形態と共通するが、口唇部に巡らされた2条の沈線は藤岡産須恵器の特徴である。また、亀、鳥、蛇、蛙の小像が付けられているのが最大の特徴であり、朝鮮半島との繋がりが伺える。

一般的に高坏形器台、筒形器台とも集落からは出土せず、古墳や豪族居館から出土する器種である。そのため、前二子古墳出土の藤岡産須恵器は前二子古墳のために生産され、供給した可能性が高い。

すでに広く知られているように、古墳時代の群馬県には渡来系の人々が居住し、様々な文物にも朝鮮半島との繋がりが伺える。前二子古墳の石室も朝鮮半島との関連で考えられており、小像付の筒形器台も前二子古墳の被葬者がつくらせた可能性も考えられる。

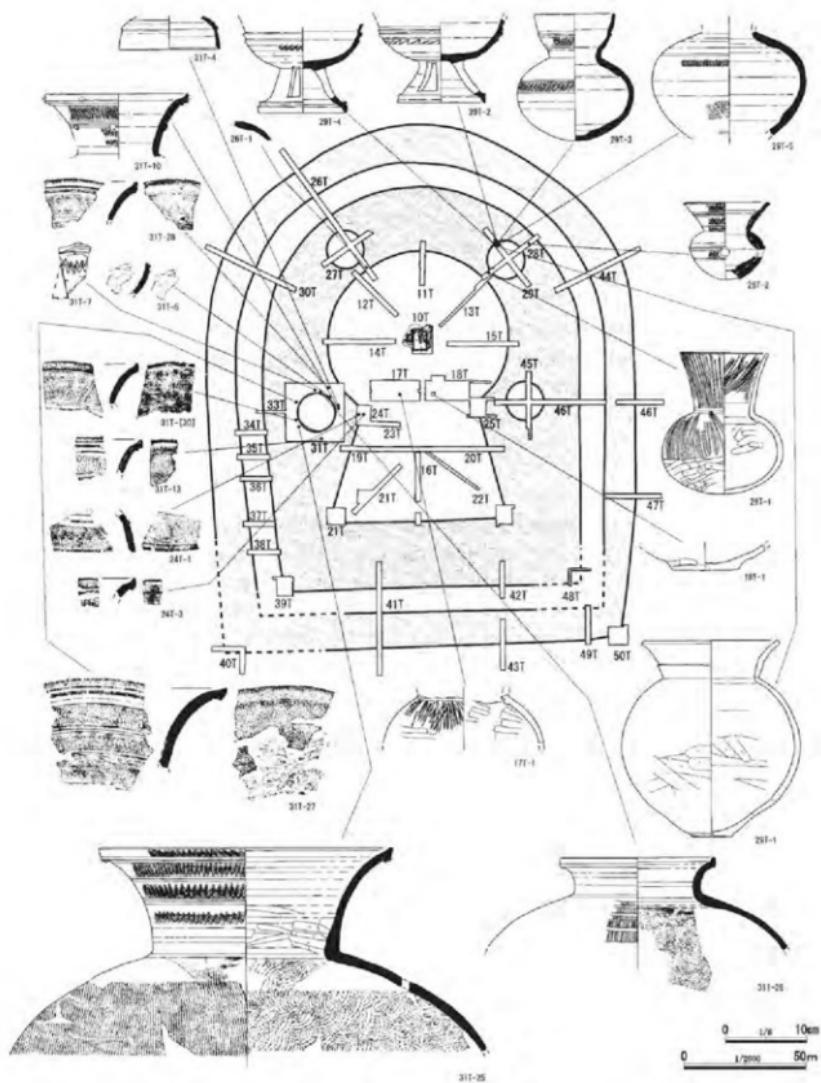
しかし、あのような小像は故地のものを知らなければ製作することはできない。渋川市吹屋糀谷遺跡からは、Hr-FAの下から軟質系土器が出土しており、胎土の特徴から藤岡地域で製作されたものと考えられる。このため、古墳時代の藤岡地域にも渡来系の人々が居住していたと考えられ、須恵器生産体制の中に渡来系の人々も加わっていたとも考えられる。

今後、どのような経緯で前二子古墳の筒形器台が藤岡地域で生産されたか、さらなる検討が必要である。

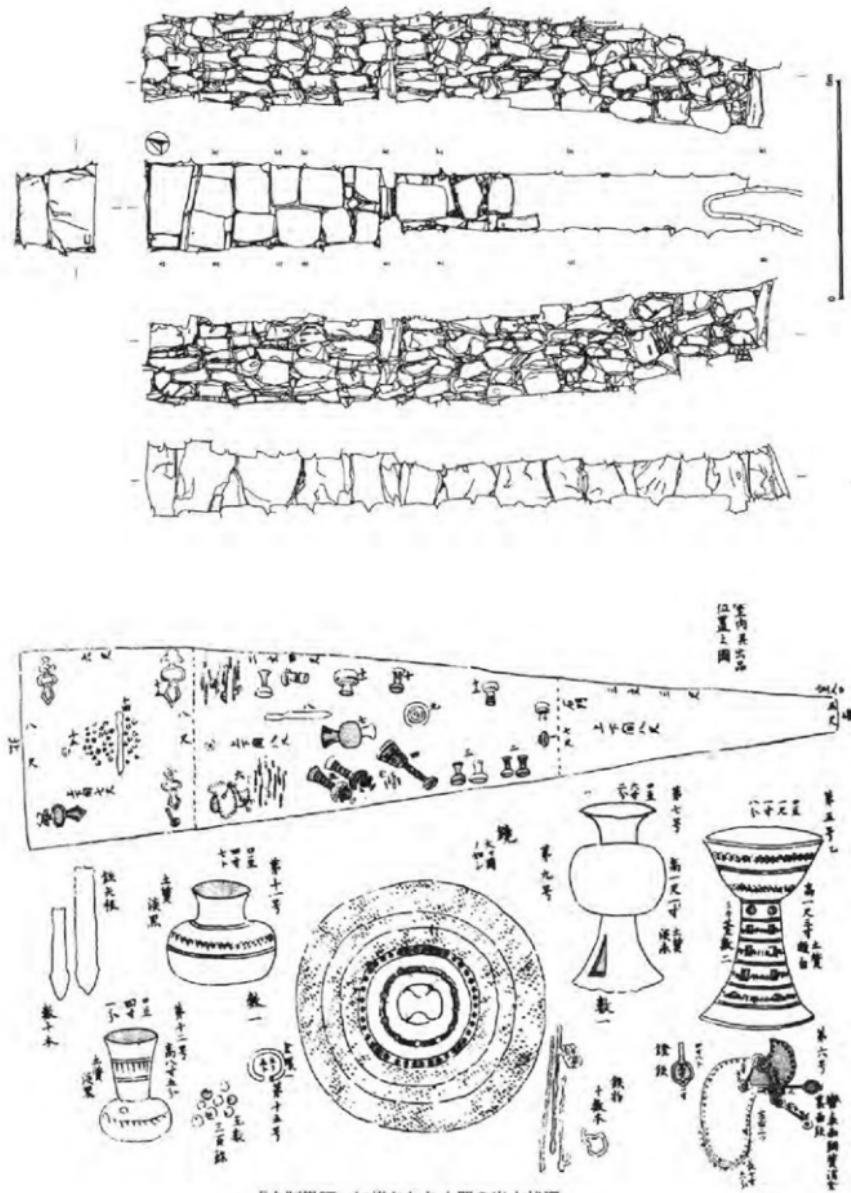


- 1・2：大阪府和泉市TK47号窯 3・4・11：TK217号窯
 5～7・13：大阪府柏原市高井田山古墳 8：TK208号窯
 9：群馬県高崎市八幡觀音塚古墳
 10：静岡県長泉町原分古墳 12：奈良県斑鳩町藤ノ木古墳
 14：石川県寺井町和田山23号墳
 15：静岡県浜松市郷ヶ平3号墳

第1図 古墳時代の須恵器 (S=1/6)



第2図 井出二子山古墳土器出土状況



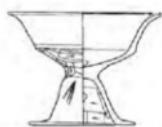
『古制微証』に描かれた土器の出土状況

第3図 前二子古墳の横穴式石室と土器の出土状況

土師器



坏



高环



脚付壺

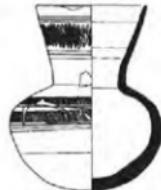
須恵器



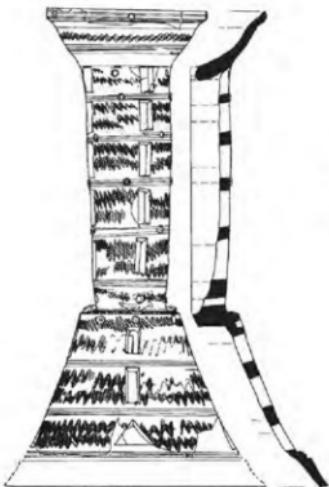
高坏



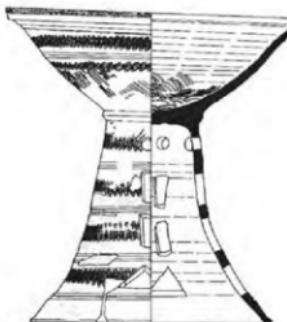
ハソウ



壺

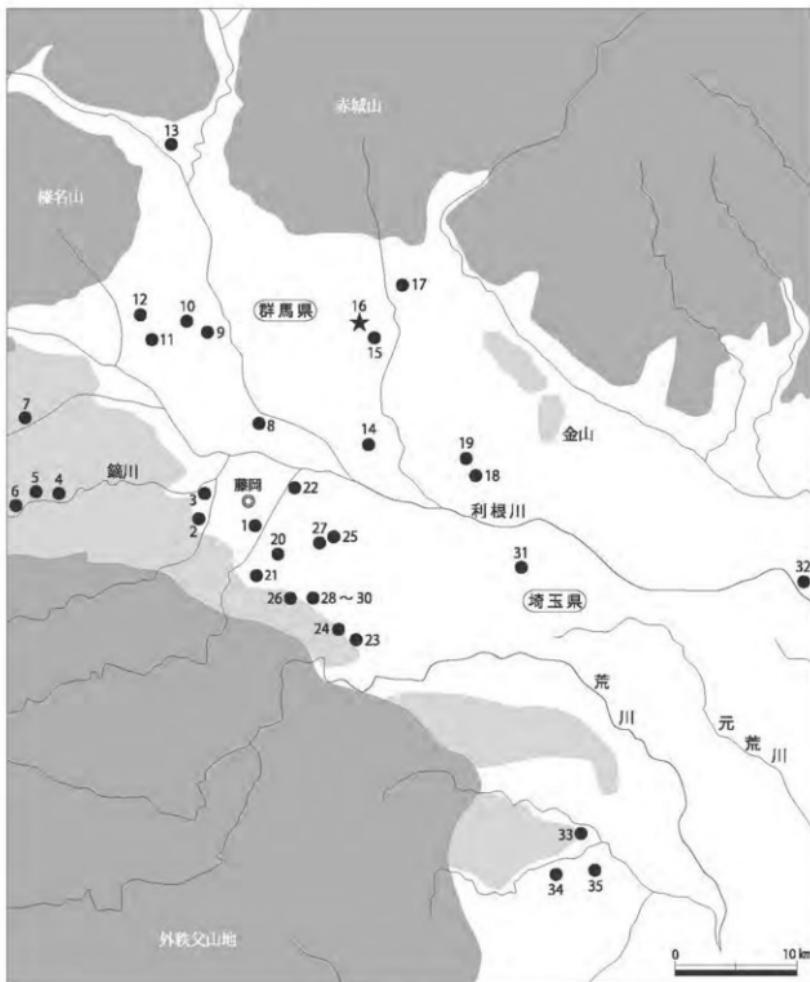


筒形器台



高环形器台

第4図 前二子古墳出土の土器 (S=1/6)



第5図 藤岡産須恵器の供給範囲

- 1: 須ノ内遺跡群 2: 柏沼遺跡 3: 平井地区1号墳 4: 久保遺跡 5: 富岡5号古墳 6: 本宿・郷士遺跡 7: 藤原二子塚古墳
8: 高崎情報団地II遺跡 9: 烏鳥遺跡 10: 西園分II遺跡 11: 保渡田藤築塚古墳 12: 生原・善龍寺前遺跡 13: 黒片峯遺跡
14: 越切遺跡 15: 多田山古墳群 16: 前二子古墳 17: 白藤古墳群 18: 尾島工業団地遺跡 19: 小角田前遺跡
20: 中道遺跡 21: 青柳古墳群 22: 東猿見堂遺跡 23: 鎌治屋峯遺跡 24: 白石古墳群 25: 後張遺跡 26: 長沖古墳群
27: 川越田遺跡 28: 秋山大町東遺跡 29: 秋山御防平遺跡 30: 秋山大町遺跡 31: 一本木前遺跡 32: 飯坂遺跡
33: 反町遺跡 34: 泰原遺跡 35: 新田前遺跡

寺と役所

出 浦 崇（伊勢崎市教育委員会）

はじめに

伊勢崎市教育委員会文化財保護課に勤務します出浦崇と申します。これから「寺と役所」と題しまして、赤城山南麓の律令期について、すこしの間お話をさせてください。

いずれの地域でもいえることですが、その地域の有力者の地方豪族が律令国家になっていきますと、役人に変化していきます。地方を仕切る役人になった人たちが、役所や古代のお寺を造って、地域のトップに向かっていくというような流れが一つあると思います。この様な事を踏まえてこの辺の話を今回詳しくお話をさせていただければなというふうに思います。

最初に、古墳から律令国家へという事で、ちょっと前半は、遺跡の写真等あまり出てこなくて、文字ばかりになってしまいますが、歴史の勉強だと思って聞いていただければと思います。

まず中央、中央というのは奈良とか大阪などの関西になりますが、中央では一足早く7世紀になると古墳時代は終わりを迎えます。古墳時代が終わり、聖德太子や蘇我氏などを中心とした時代になってきますが、この時代には中央では古墳がほとんど造られなくなります。中央では、天皇を中心とした国づくりを推進するというような時期になってくるわけです。西暦でいうと600年代がその国づくりを推進した年代になってくるかなと思います。有名なところでは聖徳太子の政治ですか、蘇我氏の政治、それが7世紀の前半くらいと考えただければと思います。

乙巳の変（645年）

645年、乙巳の変、有名な「大化の改新」になりますが、この大化の改新を境にして日本の政治というのは大きく変化していきます。皆さんもご存知のように645年の大化の改新、これまで専制的な政治を行っていた蘇我氏が滅亡します。これが大化の改新ですが、この大化の改新を機に、日本という国は律令という法律を基にした中央集権国家の建設にまい進して行くと言われています。645年に大化の改新で蘇我氏が滅亡いたします。この大化の改新の功労者が中大兄皇子と中臣鎌足という、

皆さんもよくご存知の人物ですが、この大化の改新の後中大兄皇子と中臣鎌足が政治の実権を握り、日本を動かしていくという構団が出来上がってくるわけです。中大兄皇子というのは天皇でいうと天智天皇になります。

白村江の戦い（663年）

大化の改新後、天智天皇の時代に大きな事件が起こります。それが663年に起こった白村江の戦いという、中国の唐と新羅の連合軍に日本がコテンパンにやられてしまいます。この事件が起きたことによって、前述の天智天皇たちに危機感というものが生まれてきます。今まで日本は強い国だと思っていましたが、中国、朝鮮半島の国と力の差をさまざまを感じさせられまして、このままだと列強諸国に日本は滅ぼされてしまうのではないかと考えるようになったのです。

白村江の戦いの敗北で、日本は朝鮮半島の百済という国を応援していたわけですが、結局この白村江の戦いで日本が連合軍に負けたことによって、百済は滅亡します。

壬申の乱（672年）

前述の白村江以来、対外的緊張感というのが、非常に高まったと言われています。この百済が滅亡したことによって、朝鮮半島においては新羅、中国では唐が非常に台頭してきます。そんなときに、また日本でも一つ大きな事件が起ります。それが672年に起きた壬申の乱と言われる戦です。おそらく古代史上最大の戦いだったのではないかと言われています。この戦いは、天智天皇の後裔をめぐって起った戦いになりますが、天智天皇の息子と弟による戦です。天智の弟である大海人皇子が結局は勝ちまして、その後、天武天皇として即位します。この天武天皇の頃から、これまで敵対関係にあった朝鮮半島の列強諸国、なかでも唐を手本にして、強い国を造っていかないといけないという考えに変わって来ます。

藤原京遷都（694年）

その後、694年、初の唐風都城である藤原京に遷都します。これは持統天皇の時期です。持統天皇というのは天武天皇の妻になります。よく古代史の中では天武持統

朝と言っていますが、この天武、持統天皇の代に色々な改革が行われていくわけですが、その一番のものが、中國書にならった國の仕組みを作るということであり、この藤原遷都はそのもつとも大きな事業でした。

大宝律令の発布（701年）

その後に、文武天皇、これは天武持統の息子になりますが、その文武天皇の時代、701年に有名な大宝律令が発布されます。この律令というのは法律のことです。当時の唐では、すでに律令国家の完成形ができあがっており、唐の仕組みを手本にし、大宝律令という日本初の本格的な法律を作り、この法律をもとにした政治を行っていくようになります。これが律令国家と呼ばれるもので大宝律令が発布された701年から奈良時代というものが始まると言われています。

平城遷都（710年）

これもまた有名な所なのですけども、710年、大宝律令が発布されてから9年後の710年に平城遷都が行われます。これは、唐の長安という都を真似た都城になるのですけども、これは元明天皇の時代になります。

その後、718年に養老律令というものが制定されるんですけども、基本的に710年の平城遷都をもって日本の律令国家は完成したと言われています。簡単に流れを見ていきますと、基本的に白村江の戦いで危機感が生まれたことによって、当時の強い国であった、唐を模範にした、律令という法律を基にした、強い国を造っていくこうということを天智天皇とか持統天皇とかそのくらいの時期に考えをチェンジして徐々に日本の国が生まれ変わっていくという状況で、701年の大宝律令の発布、それから710年の平城遷都によって完成するというような流れが一つ出来上がってくるかなと思います。

律令国家について

次に、律令国家とよく耳にすると思いますが、その律令国家とはどのような国家なのかという事を簡単にお話させていただこうと思います。

簡単に言いますと、天皇中心の中央集権国家であり、前述したよう律令をもとに政治を行っていきます。この律令国家には大きな柱が4つあります。

一番目に、公地公民制というものがあげられます。これは土地と人民支配に関する制度で、日本全国の土地と人民というのは全て天皇のものというような思想が根底にあるわけです。例えば前橋にはどのくらい人がいるかを把握するため戸籍を作成します。その戸籍を基に耕作

地を住んでいる人に与えます。そこを耕してもらい、米等の収穫物を税金として集める仕組みを確立させました。これが公地公民制になります。基本的に公地公民制というのが律令国家の一番大きな基盤になっていると思います。

二番目としまして中央官僚制。二官八省、官位十二階などの言葉をあげさせてもらっていますが、今も日本というものは官僚制です。その官僚制というのはおそらく奈良時代に出来上がったものだと思います。このような中央官僚制度というのが出来上がったのもこの時代になります。

三番目としまして、地方を支配する仕組みになりますが、国郡里制があげられます。この制度は日本全国を国、郡、里というような行政単位に分けて日本を支配していくという地方行政組織になります。詳細は後述します。

四番目としまして、本日のタイトルにも関係しますが仏教です。仏教の熾盛という事で、朝鮮半島から伝来した仏教は当時の有力者たちに取り入れられ、豪族たちは競って仏教寺院を造営するようになります。律令国家が完成する頃には、政治と仏教の結びつきというのは非常に高くなっています。顕著な例としては聖武天皇によって打ち出された国分寺制度です。全国に国分寺、国分尼寺を造れという命令が出されるわけですが、これは仏教の力で国を守っていこうという思想、傾覆国家思想といいます。このように国家自体が仏教を非常に熾盛するということが起こってきて、律令国家では仏教というものが強く政治と結びついていたと考えられています。

この律令国家も中世になると、荘園という制度が発達してくるに伴い、崩壊していきます。荘園制というのは新たな土地制度であり、律令国家の屋台骨を支えた公地公民制が、この荘園制の出現で崩れ、律令国家も崩壊していくと考えられます。

平城宮大極殿の高御座

これは平城宮の中に復元された大極殿の写真になります。この中に天皇がいて、各地に命令を下していたと考えられますが、非常に立派な建物です。これは大極殿の中にあります高御座と呼ばれている天皇が座っていた椅子です。この後、三軒屋遺跡の八角形建物の話をしますが、高御座も八角形になります。

地方行政の仕組み

次に地方行政の仕組みということで国郡里制という地方行政の仕組みについてお話しします。本日は郡役所や寺院の話ををするにあたって、一番ポイントになってく

る制度でありますので、詳しく地方行政の仕組みについてお話をさせていただきたいと思います。

律令国家は、奈良にある都を中心に日本全国を治めていくわけですが、地方を支配するにあたって、まず、最初に全国を 60 近い国に分けます。現在の都道府県という風に考えていただければいいと思います。現在の群馬県は当時、上野国と呼ばれておりました。さらに一つの国の中を複数の郡という単位に分けます。現在の市町村と考えていただければと思います。上野国は全部で 13 の郡があったといわれていますが、711 年に多胡郡が新たに置かれますので、全部で 14 の郡があったと言われています。伊勢崎市は、当時の佐位郡と呼ばれておりました。今日、皆さんいる大室古墳周辺は、当時勢多郡と呼ばれていた地域です。勢多郡は非常に大きくて、この辺りが全て勢多郡になります。前橋市の總社付近、利根川の向こう側ですが、高崎市にかけての地域は群馬郡と言わされている地域になります。

更に郡の中、例えば佐位郡を例にとると、いくつかの里に分けられています。小さい村の単位と考えていただければいいと思います。

国都里制の話をしましたが、その上にもう一つ大きな枠組みがあります。それが五畿七道と呼ばれているもので奈良を中心とした五畿、そしてその周りに広がる地域を 7 つの道に分けていました。上野国は近江、飛騨、信濃、下野、陸奥国とともに当時の東山道という道に属しています。東山道というと、道路のことを皆さん想像すると思いますが、古代においては行政の一つの大いな括りのことを意味します。この道ごとに幹線道路が整備されますが、これが駅路と呼ばれるものです。東山道を例にとると奈良の都を出発し、東山道の国々を通過し、陸奥国に所在する多賀城まで現在の高速道路のように整備されていたと考えられており、東山道駅路と呼んでいます。

群馬県内の東山道駅路

上野国も当然、東山道駅路というのは通っていたわけですが、上野国の道路事情は少し特殊です。7 世紀後半～8 世紀前半に駅路の整備がされたと言われていますが、上野国はルートの造り替えを 2 回していることが分かっています。最も古いものは牛堀矢ノ原ルートというものになります。各地の駅路をみると國の役所である國府を通るのが一般的ですが、牛堀矢ノ原ルートは國府を通っていません。國府は前橋市總社付近にあったと考えられていますが、駅路は更に南方を走っているのが分かっています。その後、國府を通るようなルートに変わったと言わ

れていますが、それが國府ルートと言われるものです。近年、その間にもう一本道があったことが分かりまして、太田市に所在する新田郡の役所である新田郡守という國指定史跡の調査で新たな東山道駅路と考えられる道路が見つかり、下新田ルートと名づけられました。最古の駅路が牛堀矢ノ原ルート、その次が下新田ルート、最後に國府ルートが出来たのではないかと今は言われています。

なぜルート変更が行われているのかは難しい問題ですが、上野国は特殊な事情があったのかもしれません。

古代の道路は両脇に側溝を造り、その中が路面として使用されます。この側溝間が約 13m を測り、非常に立派な道路であったことが分かります。駅路は一直線に設置されるのが一般的であり、旧境町（伊勢崎市）から旧新田町（太田市）まで、延々と直線で見つかっていることが判明しています。

地方政府の仕組み

地方政府の仕組みの話に戻りますが、今日のテーマでもある役所の話に移っていきたいと思います。地方政府ということで、本日お話をさせていただくわけですが、先ほど言ったように当時、国都里制というものがひかれていますが、日本全国が 60 近い国に分けられたという話をしました。國の中は更に細かい郡に分けられたという事も分かっていますが、これに伴い、國には國の役所を設置します。國衙とか國府と呼ばれているものです。上野国は前橋市總社付近にあったと言われております。前橋市教育委員会が國府を確認しようと、ここ数年、調査を進めていますが、なかなか手がかりがつかめない状況です。一方、郡にも郡の役所を造っていきます。それが郡衙、郡家とも呼ばれているものです。郡役所を造り、郡内を監督していくわけです。

それぞれの役所には役人を置きます。まず國府には國司という役人を置きます。縣知事という風に思っていただければいいと思います。この國司については、中央政府から派遣をされてきますので、中央の役人が國司に赴任して、その国内を治めていくというような図式が一つ出来上がります。次に郡にも役所が置かれるわけですが、その郡役所にも郡司と呼ばれる役人が置かれます。國司と違うのは、郡司というのは地域の有力者を任命するという点で、國司とは大きく異なります。地域の有力者である郡司を中心として、郡内を支配をしていくというような図式も出来上がります。日本のトップには平城宮にいる天皇、その下にいくつもの國があり、そこには國衙という役所が置かれ、國司という役人がいる。さらに下の郡には郡衙という役所が造られて郡司という役人

がいる。そういった縦割りの社会が出来上がっていったと考えられています。

上野国には14郡あったことは前述の通りですが、確実に判明しているのが佐位郡、新田郡の役所の2例のみです。近年、高崎市で多胡郡の役所を見つけようとして、有名な多胡碑の周辺で発掘調査を進めていますが、まだ確実に役所と言えるような遺構はみつかっていません。群馬県内は非常に古墳が多い地域として著名ですが、それに比べると郡の役所というのは県内に14しかないとになります。それを見つけるというのは簡単なことではありませんが、今後、役所の跡が見つかるといいと思います。

郡衙、郡役所の仕組み

続きまして、郡衙、郡役所の仕組みについて簡単にお話をさせていただきます。郡の役所というのは今の市役所と考えていただきたいと思います。今の市役所も市民課や税務課など、多くの課や施設があって、1つの市役所が出来上がっています。当時の郡役所についても同じであり、基本的には4つの施設が中心となって一つの役所が出来上がっていったという風に考えられています。

まず、一番目が郡庁です。郡の政務や儀礼の場である郡庁。ちなみに県内で見つかっている郡庁は前述の太田市の新田郡庁跡が著名です。

次に二番目としまして、正倉院。正倉というものは、先ほど公地公民制の所でもお話をしましたが、当時は税金として、お米を集めます。その集めたお米を保管しておく倉庫群、この倉庫群を正倉院と呼んでいます。

三番目としまして、館、館については、国内を巡回する国司、国の役人等の宿泊施設。この施設は宿泊以外にも接待をする施設も兼ねていたようです。

四番目としまして厨屋という施設があったことが分かっています。役所内の食事や食器の管理をしていた施設だと言われています。当時の郡の役所には、何人も役人が勤務しており、給食が出ていました。そういった給食を作ったり、食器を管理したりする施設が厨屋と言われています。

このように郡庁、正倉、厨屋、館、この4つの施設を中心にして一つの郡役所が出来上がっていと言われています。ちなみに三軒屋遺跡では、この施設の中の正倉院と呼ばれる施設が見つかっていますが、正倉院だけでも6万平米あります。まだ佐位郡の場合は郡庁や館、厨屋が見つかっていませんので、他の施設が見つかること相当広い範囲に郡の役所が存在していたという事が分かります。

東大寺の正倉院

最後に東大寺の正倉院を見ます。私が郡役所の話で、正倉院、正倉院という言葉を使っていますが、おそらく皆さんは東大寺の正倉院を思い浮かべると思います。本来、正倉院とは、倉庫群全体を指す言葉です。その正倉院の中にある建物（倉庫）を正倉と呼びます。東大寺の正倉院と呼ばれているものは、厳密に言うと、正倉院ではなくて、正倉になります。おそらく東大寺の正倉院、残っているのはこれだけなのですが、これ以外にも周りに高床式倉庫がたくさんあったのだと思います。それをひとまとめにして正倉院と本来は呼びますが、現の東大寺には、これしか残っていませんので、正倉院と呼んでいるわけです。本来の使い方とすると、この正倉の全てのまとまりを正倉院と呼ぶのです。

地方の役所の正倉院には、おそらくお米が入っていますが、東大寺の正倉院には聖武天皇ゆかりの宝物が数多く入っている倉になります。

～休憩～

掘立柱建物

次に郡役所でみつかる建物について見ていくたいと思います。こちらは地面に直接柱の穴を掘り、そこに柱を立てて屋根を掛けた建築するというものであり、掘立柱建物と呼ばれています。掘立柱建物は普通の集落でも見つかりますが、郡役所や寺院で見つかる掘立柱建物は、柱の規模が非常に大きく、柱の並びも正確に並び、柱と柱の間、柱間という風に呼んでいますが、それも一定の間隔で並んでおり、一般的な集落で見つかるものとは全く違うということが分かります。

礎石建物

こちらは礎石建物という建物。こちらの礎石建物については、基本的には郡の役所か寺院の跡でしか見つかりません。よって、礎石建物が見つかると郡の役所か寺院かどちらかということになるのです。

礎石建物については、建物の下層に地盤改良工事を施し、その上に礎石という巨石を置き、その上に柱を立てて建築するという構造になっています。建築しようとしている建物の下層を一回り大きくくりぬいて、そこにロームや黒色土などを交互に突き固めながら、埋め戻し、建物下層を非常に強固な地盤にし、その上に礎石を置いて、建物を建てるという方式になります。これは下野国分寺の礎石ですが、礎石は調査をしても、そのまま残っていることはほとんどありません。

こちらが多賀城の正殿。これは 2 年前くらいに調査した時の写真ですが、これが礎石になりますて、下にそれを支える栗石がみられます。実はその礎石建物の前には掘立柱建物があり、掘立柱建物を礎石建物に建て替えたという事例です。

掘立、礎石、両者に共通しますが、古代の建物は柱配置によって、総柱建物と側柱建物という二つに分けることが出来ます。

総柱建物

総柱建物をいうのは、写真を見ていただきたいのですが、こちら三軒屋遺跡で見つかった掘立ですが、外周りと内部にも基盤目のように柱があるのが分かるかと思います。総柱建物は上屋建物を復元すると、おそらく高床式倉庫になったと言われています。総柱式がよくみつかるのが郡衙の正倉院、米倉です。こういった規模の大きな高床式倉庫を見つかると郡衙正倉院の可能性が高いことがわかるのです。

側柱建物

一方こちらの側柱建物、これも三軒屋の写真ですが、こちらは総柱建物と違って、外周りしか柱がないことが分かるかと思います。建物内部には全く柱がありません。こういった建物には外側に庇用の柱が配置されているものもあります。こちらの例は庇がない建物ですが、こういった建物が良く見つかる例としては、郡庁や国庁、正倉院でも見つかりますが、正倉院例ではおそらく低い床張りの倉庫と考えられています。

一方、庇が付く例は、身舎の四面すべてに庇が付くものを四面庇建物、片側だけだと片庇など、多くの種類があります。庇の付く建物はやや格式が高い建物であり、役所であれば正殿等、中心の建物になる可能性が高いです。先ほどの平城宮の大極殿は、まさに正殿であり、このような形式で造られています。寺院でもみられ、金堂や講堂に使われることが多いという事が分かっています。

この総柱、側柱の違いというのは、掘立柱でも礎石建物でも一緒ですが、このような二種類の建物があるという事も一つ特徴として挙げることが出来るかと思います。

新田郡衙

こちら有名な新田郡衙、太田市で見つかっている、上野国新田郡跡という国の史跡になった遺跡です。

こちらが新田郡庁の遺跡になります。これが調査した時の全体写真です。中央に正殿と呼ばれる礎石建物が

配され、正殿を囲むように脇殿と呼ばれる長屋建物が確認されています。長屋建物は柵列で連結されており方形の院を形成しています。この郡庁は全国最大規模の郡庁であり、一般的な郡庁の大きさは一辺 50m ほどですが、この新田郡庁は一辺が 100m 近くあり、通常の郡庁の 2 倍の大きさを誇っています。

その大きさの比較をしてみると、郡役所ではなく、国の役所で見つかる国庫クラスの大きさになるのです。何故そんな大きいものが造られているのかというの、分からぬ部分もありますが、郡庁の南には東山道駅路が走っており、南の武藏国に伸びる東山道武蔵道への分歧点もこの周辺だったと考えられています。このように交通の要所であり、新田郡衙は、その立地的な問題から大きな郡庁を造ったのではないかという事が一つ考えられていますが、明確な答えはでていません。

こちらが新田郡衙の全体図です。新田郡衙の場合はやはり特殊な配置をとっています。普通は郡庁、正倉院、館、厨家と施設ごとに一つの区画を持つような例多いですが、新田郡の場合は中央に郡庁があり、郡庁の周辺には正倉院が確認されています。その南に東山道駅路（下新田ルート）が東西に走っており、駅路を南限にし、郡庁や正倉院を囲む溝が東、西、北で見つかっており、ここはどうも郡庁があって、周りに正倉院があって、それを大きい溝でぐるりと囲むという、ちょっと特殊な形態をとっていることが分かってきています。

まだ、新田郡衙については、館とか厨家についてはまだ見つかっていないという状況で、今後も調査を続けていくという状況のようです。

上野国交替実録帳について

群馬県には有名な『上野国交替実録帳』という記録が残っています。この上野国交替実録帳というのは 1030 年に書かれたものですが、その中には上野国 14 郡について、その郡役所にどういう建物があったのかということが、細かく書かれています。この実録帳というのは、当時の国の役人である国司の任期が終わって交代する時の引継ぎ文書です。この中には当時、各施設にどういう建物があったかが書かれていますが、これは当時壊れてなくなってしまったものが書かれています。国司が交代する際に、例えば新田郡だと正倉のこういう建物がすでに消失しているので、修理しなさいといった意味合いがあったのだと思います。おそらく国司交代の引継ぎ文書というの全国にも当然あったはずですが、残っているのは上野国だけです。よって、これまで郡の役所を研究する時に、この実録帳が取り上げられ、比較したり色々さ

れていましたが、該当する上野園の郡役所が見つかっていなかったため、本当に正しいことが書いてあるのかとも言わっていましたが、今回お話しする佐位郡や新田郡で役所がみつかり、例えば新田郡守の場合、郡守の部分で東長屋、西長屋、南長屋等の建物名が書いてあります。発掘調査から、それと同じような形で郡守が見つかりました。これらのことから実録帳の記載は、かなり信憑性が高いという事がわかつきました。

三軒屋遺跡

続きまして、伊勢崎市の三軒屋遺跡、私がずっと調査を担当してきた遺跡ですが、こちらは佐位郡の正倉院になります。正倉院は大溝で囲まれた中に数多くの倉庫を規則正しく並べて建てるというのが全國的にも一般的です。三軒屋遺跡でも、やや形が歪なのですが、大溝で囲まれた中に倉庫が数多く検出されています。その内訳は礎石建物 20 棟、掘立柱建物については 50 棟から 60 棟ほどが確認されています。

確認された建物が同時に全て建てられていたわけではなく、三軒屋遺跡の場合は 7 世紀後半から 10 世紀前半くらいまでの間に、使われていたことがわかつています。その長い期間の中で、建て替えを繰り返しながら正倉院として機能していたと考えています。発掘調査をすると造られていたものが全て遺構として見つかってきますので、かなりの数に上りますが、おそらく時期ごとに 10 数棟の建物があったような景観が、何百年も続いていくというような状況が分かってきています。

三軒屋遺跡では大溝によって囲まれた広大な敷地を持っていたことがわかつており、この区画の中だけでも 6 万平米以上ありますので、おそらく全国でもトップクラスの規模を誇る正倉院だという事が分かってきました。

こちらは三軒屋遺跡で見つかりました八角形倉庫になります。これは殖産小学校の中で調査をした際、見つかったもので、全国でも初めての発見になります。八角形倉庫は礎石建物であり、外側の白いラインが掘り込み地業をした範囲になっています。その内部を地盤改良した後、この小学生が立っている小さい丸、ここが礎石が据えた跡という事が分かっていますので、ここに礎石が据えられて、その上に柱を立て建物を造ったという事が分かってきます。

前述しました「上野園交替実録帳」の佐位郡正倉の部分に「中南行第一八而甲倉」という記載が見られます。これは八角形をした甲倉、甲倉というのはおそらく校倉造りのことで、史料から校倉造りの高床式倉庫だということがわかります。それが調査で見つかった八角形礎石

建物のことだらうということで、八角形倉庫自体も全国で始めて見つかったのですが、更に実録帳の記載と一致し、古代の文献に書かれている特定の建物が発掘調査で見つかった事例としても、非常に注目された遺跡です。八角形倉庫の床面積は 182 平米あります。三軒屋の中でも見ついている倉庫中では最大規模になりますので、正倉院の象徴的な建物として造られたという事が考えられています。

実録帳の佐位郡正倉にはそれ以外にも多くの倉庫の記載があります。今回、その特定の建物が遺構として発見されたことで、その他の実録帳の記載から佐位郡の正倉院というのがどういう建物配置をしてきたかという点が徐々にわかつてきました。実録帳の記載をもとに正倉配置の模式図を作ってみました。この模式図からは佐位郡正倉は倉庫を横並びに数棟造り 1 つの列をなします。そして同様の列が複数あるということが、こちらの実録帳の記載から読み取れます。次に各倉庫の記載には中南、中、北など、いくつかのグループに分けられているようです。これを発掘調査の内容と照らし合わせてみると、八角形礎石建物の西には、礎石建物 5 棟が一直線に並んで造られているのが分かると思います。正倉院の中はどこを掘っても倉庫が東西に並んで見つかっています。このような列が複数あるという事が調査でも分かってきておりますので、先ほどの実録帳の記載というのは、かなり信憑性が高いということが分かってきています。

八角形の倉庫というのは全国にも例がありませんし、非常に特殊な倉庫です。なぜその八角形の倉庫が伊勢崎の地に造られたのか、まだ明確な答えは出ていません。古代の八角形という形を考えた際、まず 1 つ天皇家との関連があろうかと思います。前述の大極殿にある高御座は八角形です。さらに当時の天皇、天智天皇、天武、持統などの天皇陵というのは全て八角墳なのです。

次に仏教との関連です。これは有名な法隆寺の夢殿の写真になります。八角形建物で現存しているものは、寺院の中に造られているものが多く、法隆寺夢殿、興福寺北円堂、南円堂などがあります。このように仏教寺院に見られるという事から、仏教関連ということも一言われています。おそらく天皇家との関連、それから仏教との関連、いろいろな要素が絡み合い、八角形の倉庫は造られたのかなと考えています。

仏教の関連は佐位郡の中にも寺院が造られ、仏教をかなり取り入れていますので、なんとなく分かりますが、天皇家との関連が佐位郡にあったのかという事についてお話しします。佐位郡の郡司、郡の役人は檜前部君氏という事が史料の中にも出てきますので、檜前氏が佐位郡

の郡司であったことがわかっています。また、古代には采女という制度がありまして、これは郡司等の姉や娘など一族の女性を天皇の所に仕えさせるという制度です。佐位郡司である椿前一族からも采女として老刀自といふ人物が中央に赴任しています。老刀自は孝謙天皇といふ女帝に仕えていたんですが、非常にその天皇に気に入られて出世をします。地方の役人ではもらえないような官位をもらったことがわかっています。このように天皇に寵愛され中央で異例の出世をしたという事が分かっておりまして、それが8世紀半ばくらいの話です。

これと直接関係するかどうかはまだ分かりませんが、佐位郡と天皇家、中央政府とかなり太いパイプがあったという事が一つ考えられ、そういう事から八角形の倉が造られたのではないかとも考えられるのです。

古墳から寺院へ

古墳から寺院へという事で寺院の話に移っていきたいと思います。6世紀半ばに仏教が日本に伝わりますが、当時の有力者たちは競って寺院を造るようになってきます。これまで古墳を造っていたような有力者が権威の象徴として古墳に代わり寺院を造るという流れに変わってきます。

飛鳥寺が日本で最初に造られた寺院ですが、これは蘇我氏が作った寺院だという事が分かっています。聖德太子は法隆寺を造ります。寺院の造営推進を示す史料として、624年には寺院が46カ所しかなかったという記録がありますが、692年になると日本全国で545に増えたとあります。実際はもっとあったと思いますが、律令国家が出来上がってくにつれ、寺院の数も非常に増えています。

上野国にも初期寺院、7世紀後半くらいに造られたと言わわれている寺院がいくつあります、それが前橋市にある山王庵寺、伊勢崎市にある上植木庵寺、新田郡の寺井庵寺、吾妻郡の金井庵寺。おそらくこの4つが群馬県では古い部類の寺院だらうと言われています。もっとも古いのが山王庵寺、やや遅れて上植木庵寺、寺井、金井という順で統くと考えられています。初期寺院が造られ、その後の国分寺制度、先ほど言いました鎮護国家思想が出来上がり、国家仏教というものが非常に盛んになっていくわけです。国分寺が創建された頃には上野国でも各郡に多くの寺院が造られるようになってきます。その代表的なものとしては伊勢崎にある十三宝塚遺跡、勢多郡の上西原遺跡、宇通遺跡、このような中小寺院が数多く造られるようになってきます。

山王庵寺

県内最古と言われているのが山王庵寺になります。山王庵寺は、近年、発掘調査を進め、新たな知見が加わり、その全貌がかなり明らかになってきました。講堂、それから金堂と塔があつて、それを回廊で囲むという伽藍配置をとっております。こちらはちょっと写りが悪いですが、塔基壇、先ほど言った掘り込み地業跡です。塔基壇は、五重塔など大きい建造物が建ちますので、他の建物に比べると掘り込みというのは非常に深くなります。1m、時には2m深く掘り込み地業をする寺院も確認されています。

古代寺院というのは基本的には屋根に瓦が葺かれます。日本で屋根に瓦を葺くという事は仏教が日本に伝わって、寺院を造るようになって初めて生まれた技術という風に言われており、山王庵寺でも多くの屋根瓦が見つかっています。こちらが出土した瓦になりますが、この文様が蓮華文と呼ばれ、蓮の花を模したもので、寺院の年代考えていくときに一番重要なのが瓦の年代を押さえることです。瓦の文様である程度の年代が分かってきます。この山王庵寺のものはかなり古いという事が分かっています、県内でもおそらく7世紀第三四半期くらいで、もっとも古い寺院になってくるかと思います。

山王庵寺下層遺構

山王庵寺の場合は寺院の伽藍が造られる以前にどうやら掘立柱で構成される何かしらの施設があったという事が発掘調査で分かってきます。下層で確認された掘立柱建物ですが、すべて同じ方向を向いているのがわかります。可能性としては寺院を造る前に、郡、ここは群馬郡になりますが、群馬郡の初期の役所跡の可能性が指摘されています。古い寺院の下層に、その前身施設、特に郡役所でも古い段階の施設が造営され、その後に寺院に変遷していくという事例が全国にもいくつかあります。当初は群馬郡の役所施設などが造営され、その後、この地が山王庵寺になった、それに伴い郡役所自体は別の所に移った、そういう可能性が一つ考えられます。

上植木庵寺

上植木庵寺は伊勢崎市にある初期寺院です。佐位郡正倉跡である三軒屋遺跡の北1kmくらい、非常に近い所に造られている寺院です。律令国家において政治と仏教は非常に結びつきが強かったという事が言われていますので、全国的に見ても郡役所と寺院がセットで造られることが非常に多く見受けられます。佐位郡の場合もやはり役所のすぐ北側にこういった寺院を造っているという事が分かってきます。上植木庵寺は発掘調査も進んで

おり、講堂、金堂、塔などで構成される伽藍配置が分かっております。741年に、国分寺を造りなさいという命令が日本全国に出来まして、一斉に国分寺が造られるようになりますが、上野国分寺を造るにあたり上野国14郡すべてが協力をして造営していくたといいう事が一つ分かつてきています。何を協力するかというと、やはり瓦生産等が主要な協力手段になります。おそらく国分寺を造るのに屋根瓦が非常に多く必要になってきますので、各郡で分担して瓦生産にあたり、それを国分寺に供給するというような体制が出来上がっていたようです。国分寺造営に協力をした郡、上野だと全郡が協力しているわけですが、協力の見返りに官位を賜ったり、国分寺で使用している瓦、例えば郡内で新たに寺院を造る際に国分寺の瓦を使用してもいいですよという許可のようなものがあったようです。このような経緯で造営されたのが伊勢崎市の十三宝塚遺跡、こちらが伽藍想像図になりますが、国分寺で使われている瓦と同じ瓦が数多く見つかっています。おそらく佐野郡が国分寺造営への協力に伴って新造された寺院と考えられています。その他にも群馬県内で国分寺造営前後に十三宝塚遺跡のような中小規模の寺院が数多く造られるようになります。

佐野の十三宝塚遺跡

十三宝塚遺跡は特殊な寺院でありまして、この中心伽藍は回廊状の掘立柱列に囲まれた中に礎石建物、おそらく金堂的な建物、塔的な建物があつたんだろうと考えられています。中心伽藍の周りには竪穴建物や掘立柱建物が数多く見つかっています。伽藍の周りにもある程度そういったものは造られるケースが多く、寺院を管理する建物などが例としてあげられます、それに比べてもあまりにも多すぎる建物が伽藍周辺で見つかっているのです。竪穴建物も数多く見つかっていますし、掘立柱建物も郡役所で見つかるような規則的な配置をとっており、郡役所ではないが、その別院等の施設になる可能性も考えられます。竪穴建物が見つかっている部分でも鍛冶工房があつたり、手工業生産に関わるような痕跡がかなり見つかっています。このように複合施設になっている状況が、十三宝塚遺跡では分かってきます。これらのことから十三宝塚遺跡は発見当初、佐野郡衙ではないかと言われていましたが、仏教遺物も非常に多く、現在は寺院として考えています。その後に三軒屋遺跡も見つかったので、郡役所の本体は向こう側で、ここは基本的には寺院だろうと言われている遺跡です。

勢多の上西原遺跡

勢多郡の寺院という事で、若干お話をさせていただきます。こちらが上西原遺跡という遺跡になります。中心伽藍ですが方形に溝で囲み、その内側に掘立柱塀のようなものがあったと考えられています。このような区画の中に礎石建物がおそらく3棟くらいあつただろうという事が言われています。

遺跡の全体図をみると、寺院がありまして、周辺に掘立柱建物群や竪穴建物があることがわかります。先ほどの十三宝塚に非常に似ているのが分かるかなと思います。南側では更に溝で方形に区画された中に掘立柱建物がかなり規則的に何度も建替えをしながら造られているのが分かります。

遺跡の性格を考える上で、先ほどの十三宝塚遺跡と非常に共通する部分が多く、先ほどの十三宝塚遺跡も中央伽藍の中に建物が二つくらいしかなかったと思いますが、上植木廃寺や山王廃寺に比べると、若干、格が落ちる寺院になります。仏教施設があり、その周りに閑遊する集落や須恵器窯などの生産関連の遺構、官衛的な施設が造られるというように非常に十三宝塚と似た部分がある遺跡になります。

遺跡からは瓦も見つかっています、こちらも先ほどの十三宝塚遺跡と同様、国分寺を使ったものと同じ瓦が見つかっています。勢多郡自体も国分寺を造るに協力し、その見返りとして、この上西原の寺院にも国分寺の瓦が使われているという事が分かってきています。

山岳寺院・宇通遺跡

こちらも勢多郡の寺院の跡になりますが、宇通遺跡といわれる寺院跡です。時期的には、9世紀の終わりくらいになるでしょうか、平安時代の寺院になってきます。寺院は赤城山の中腹くらいに造営山岳寺院といわれる寺院です。写真を見てもらうとかなり山の中腹にあるのが分かるかと思います。かつて山火事の際に発見され、その際に礎石建物が見つかったため非常に有名な寺院になりました。尾根を利用して建物が複数配置されているという状況がわかっています。

山中に造られている寺院ですので、平地に造られた上植木廃寺や山王廃寺、十三宝塚遺跡などのように伽藍配置を整えて建てるというのはなかなか難しく、平場を利用しながら建物を造っていくという、これが山岳寺院の一般的な形態になります。平安期になると密教が盛んになってきて、山岳修験等、そういうものと関係して寺院が造られたものと考えられます。ここでは八角形の堂が見つかっています。群馬県では八角形建物というか、閣

連遺構が結構見つかっています。三軒屋遺跡の八角形建物、宇通遺跡の八角堂、新里にあります武井廃寺という石製骨蔵器をともなう八角墳のような遺構等も確認されています。

上植木廃寺の瓦

これは国分寺、上植木廃寺の瓦になりますが、先ほど瓦を見るとだいたい年代が分かるというような話をしました。もっとも古い瓦がこの一群の瓦ですが、この瓦が大和にある山田寺という寺院で使用されている瓦に似ていることから一般的は山田寺式などと言われているものです。厳密には同じではないですし、尾張地方の影響で成立したものと考えられています。

これは一本造りと呼ばれる特殊な造り方をする瓦で、おそらく国分寺が造られる直前の時期の瓦になります。こちらが国分寺式の瓦、上野国分寺で出土するのがこの瓦になるわけですが、上植木廃寺ではこの時期になりますと、国分寺と同じ文様の瓦が使われるようになります。このように瓦の顔つきを見ていくと大体の時期が分かってきます。ちなみにこの蓮の花の文様を模したものが蓮華文と言えています。

まとめ

最後に、今回、大室という地域、勢多郡でやっていますので、私のいる佐位郡と勢多郡の関係について、まとめて少しお話をさせていただきたいと思います。

最初に上植木廃寺の瓦ですが、上植木廃寺の創建期は寺院のすぐ脇に瓦窯を造って、生産していましたが、その後すぐに勢多郡にあります雷電山瓦窯という所に窯場が移ります。基本的には古い瓦は全て雷電山で焼かれ、上植木廃寺に供給されていましたが、窯がある場所が勢多郡になり、寺院遺跡に両者の関係性がうかがえます。

次に先ほども見ていただいたように十三宝塚遺跡と上西原遺跡の共通性があげられます。同時期、国分寺創建直後くらいに造営されたと思いますが、非常に似たようなタイプの寺院が勢多郡と佐位郡の両郡で造られています。上西原遺跡では須恵器窯があり、周辺でも平地的な箇所で須恵器窯が確認されています。同じような時期に佐位郡でも須恵器窯が構築されており、三和工業団地の一帯で8世紀終わりから9世紀にかけての平地での須恵器窯跡が複数見つかっています。このようなことも勢多郡と佐位郡共通する要素となっているのかなと思っています。

次に宇通遺跡で見つかった寺院と伊勢崎の旧赤堀町に川上遺跡という遺跡がありますが、この川上遺跡では集

落の中にお堂が造られる。所謂村落内寺院と言われている仏教施設が確認されており、宇通遺跡と川上遺跡では同じ文様の瓦が見つかっています。同じ文様の瓦が使われているという事は、それなりの関係があったという事が瓦の世界で言われておりますので、そういった意味からも勢多と佐位というのは近い関係性があったものと推定されます。

次に同属氏族の存在。上西原遺跡では墨書き土器がたくさん見つかっていますが、その中に、「檜」と書かれた墨書き土器が見つかっています。先ほど言いましたように佐位郡の役人というのは、檜前氏だったという事が分かっています。もしかすると、この勢多郡にも檜前氏と同属の氏族がいた可能性もそういう墨書き土器から読み取れるのではないかと考えられます。

古代において佐位郡と勢多郡というのは協力関係と言いますか結びつき強かったのかなという事が、遺構や遺物からも考えられます。

最後に出土瓦から見た東毛と西毛という事で、まとめになります。私は寺院や瓦が専門なので、どういう文様の瓦があるかというのを見ていた中で、まず群馬県の中心になる古代寺院というのは西毛にある山王廃寺、それから東毛にある上植木廃寺というのが、一番中心になる寺院になると思っています。

まず山王廃寺で見つかっている瓦を見ていくと山王廃寺の瓦というのは利根川よりも西の地域で非常にたくさん見つかっていますが、東毛地域ではあまり見つかっておりません。西毛地域では山王系の瓦というのはかなり見受けられますが、国分寺創建後には西毛地域でも中小の寺院が多く造られます。といった寺院を造る際に山王廃寺系の瓦を使って、創建していることが分かっています。

一方、東毛地域を見てみると、上植木廃寺で使われている瓦が、比較的多く分布しています。同じ文様のもの、造り方が全く同じものなどが見つかっています。東毛地域は上植木廃寺が中心となって、造寺活動が行われていることが指摘できます。

しかし、山王と上植木の間には一切交流がありません。山王の瓦は上植木には来ていませんし、上植木の瓦は山王では一切使用されていません。このことからも古代における東毛と西毛というのは結構違うという事が分かるかと思います。

そんな中で勢多郡はこの東の地域に入ります。勢多郡の中では上西原以外は本格的な寺院はまだ見つかっていないませんが、もしかすると、上植木廃寺のようなもう少し伽藍の整った寺院や郡役所の跡なんかもまだ見つか

つていませんので、そういうものが見つかってくると、よりこの佐位郡と勢多郡の関係性というのが見えてくるかなと思います。

この東毛と西毛の違いというのはどういう意味合いかというものは難しい部分もありますが、瓦を見ていくと東側と西側というのは大きく違うという事が一つ分かってきます。郡役所が造られる年代などを見ても、東と西ではどうも違うそだという事がおぼろげながらみえています。山王庵寺の下層では建物が見つかっていて、それがもしかすると古い段階の役所の跡ではないかというような事が考えられています。西の方は古い段階、考古学的には前期坪段階と呼んでいますが、東毛で見つかっている三軒屋遺跡ですか天良七堂遺跡はもうちょっと後の時代、後期坪段階になって役所が造られているのです。

そういうた役所が造られる年代も東と西では若干違うという事が考えられるかなと思っているのですが、その辺がなぜ違うのかということも含めて今後も調査研究を進め解明していけばと思っています。

最後のほうは分かりづらい話になってしまって申し訳ありませんが、これで私の講義を終わりにさせていただきたいと思います。

ご静聴どうもありがとうございました。

【質疑応答】

Q1 先生のご専門じゃないかと思うのですけど、この上植木庵寺で信仰する経典はなんですか。

A1 経典まではなかなか解説されていません。国分寺では金光明最勝王經や法華經がありますが、何を拝んでいたかまではなかなか難しいですね。記録としても、なかなかこの当時というものは残っていないので何かしらはあったとは思うのですが、その辺はちょっと考古学的に難しいかなと思います。

上野における役所と寺院

～佐位郡と勢多郡の事例を中心～

伊勢崎市教育委員会

出 浦 崇

はじめに

大小さまざまな古墳が数多く築かれた古墳時代が終わりを告げると、古代の幕開けである。飛鳥時代から奈良時代にかけ、天皇を中心とする律令国家が完成し、日本全国を統治していくことになる。律令国家は全国支配を行う手段のひとつに国郡里制をしき、全国を 60 余の国、さらに国内を複数の郡にわけ、統治を行っていく。国には国衙、郡には郡衙という役所を設置し、それぞれ役人を配置し、地方支配の礎を築いていくのである。群馬県は古代において上野国と呼ばれ、国内には 14 の郡が置かれていた。上野国府は群馬郡である前橋市總社に置かれていたと考えられており、周囲には上野国分寺や山王庵寺などが見つかっている。上野国における郡役所の発見はそう多くなく、佐位郡（伊勢崎市）、新田郡（太田市）の 2 例のみである。また、この時代、政治と仏教の結びつきが非常に強く、これまで大型古墳を築いていた有力者が競って寺院を建立するようになる。やがて仏教の力で国を護るという思想のもと、国分寺制度が発布され、国家仏教として花開くことになる。群馬県にも数多くの古代寺院が建立されている。

今回、群馬県でも佐位郡、勢多郡の役所や寺院を取り上げ、地域社会のひとつの様相を見ていき、律令体制下での地方の在り方の一端を探ってみたい。

1. 古代地方行政のしくみ

- ・律令国家誕生への道のり
　　大化の改新から天智・天武・持統の政治
- ・古代日本のしくみ
　　公地公民制　官僚制　国郡里制　仏教の奨励
- ・地方政治のしくみ
　　五畿七道　国衙（国司）一郡衙（郡司）　駅路の整備
- ・郡衙の構造

郡庁 正倉院 館 厨家

2. 佐位郡の様相

- ・三軒屋遺跡の発見
八角形倉庫の発見→「上野国交替実録帳」との一一致
- ・2つの古代寺院
上植木廃寺 県内屈指の古代寺院 東毛地域の中心?
十三宝塚遺跡 国分寺創建への協力 寺院以外の性格
- ・佐位郡の古代豪族
檜前部君氏の存在 老刀自（采女として異例の出世）

3. 勢多郡の様相

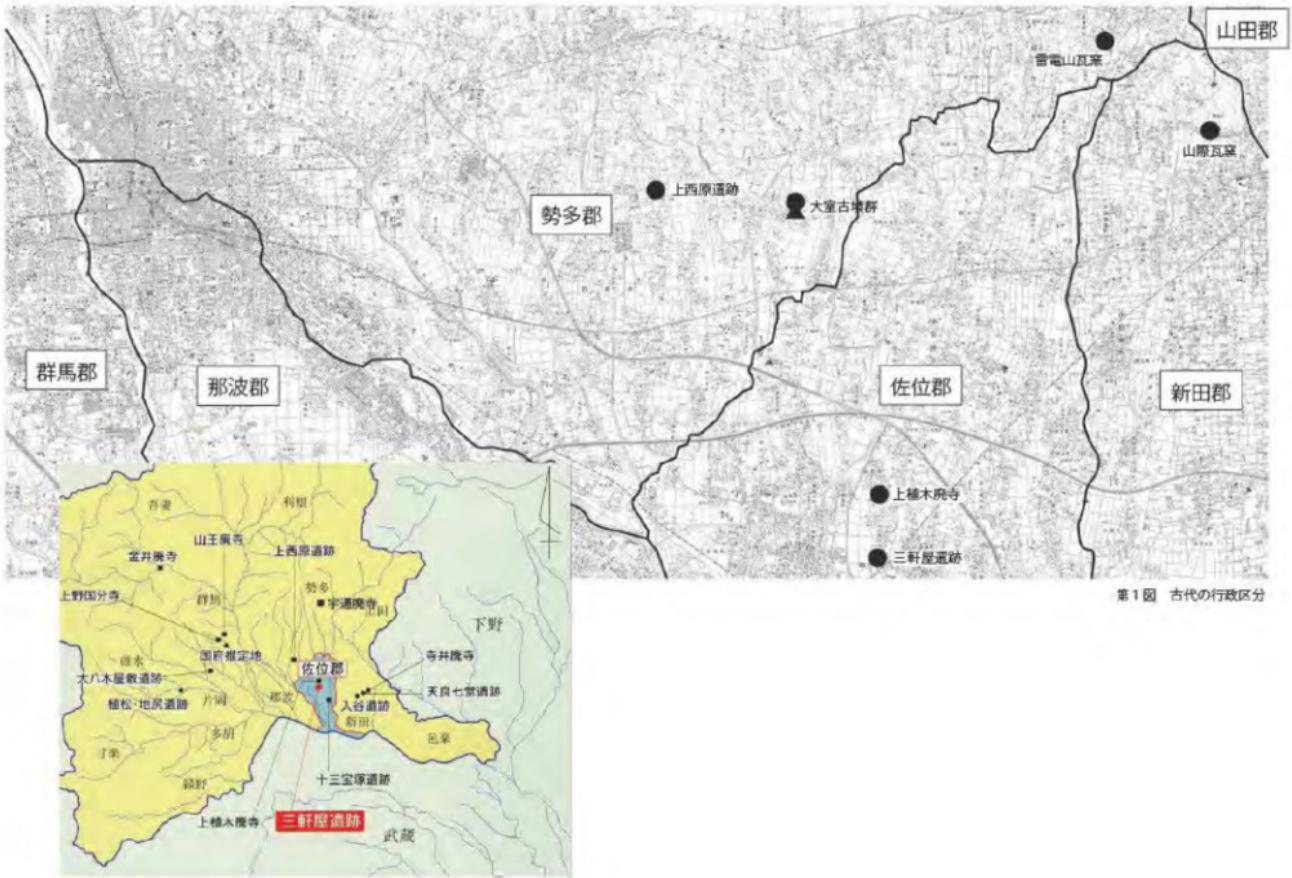
- ・雷電山瓦窯
上植木廃寺のメイン瓦窯
- ・上西原遺跡の寺院跡
十三宝塚遺跡の寺院との関連性
- ・山岳寺院の創建
宇通遺跡の寺院跡 平安期の仏教の様相

4. 佐位郡と勢多郡の関係

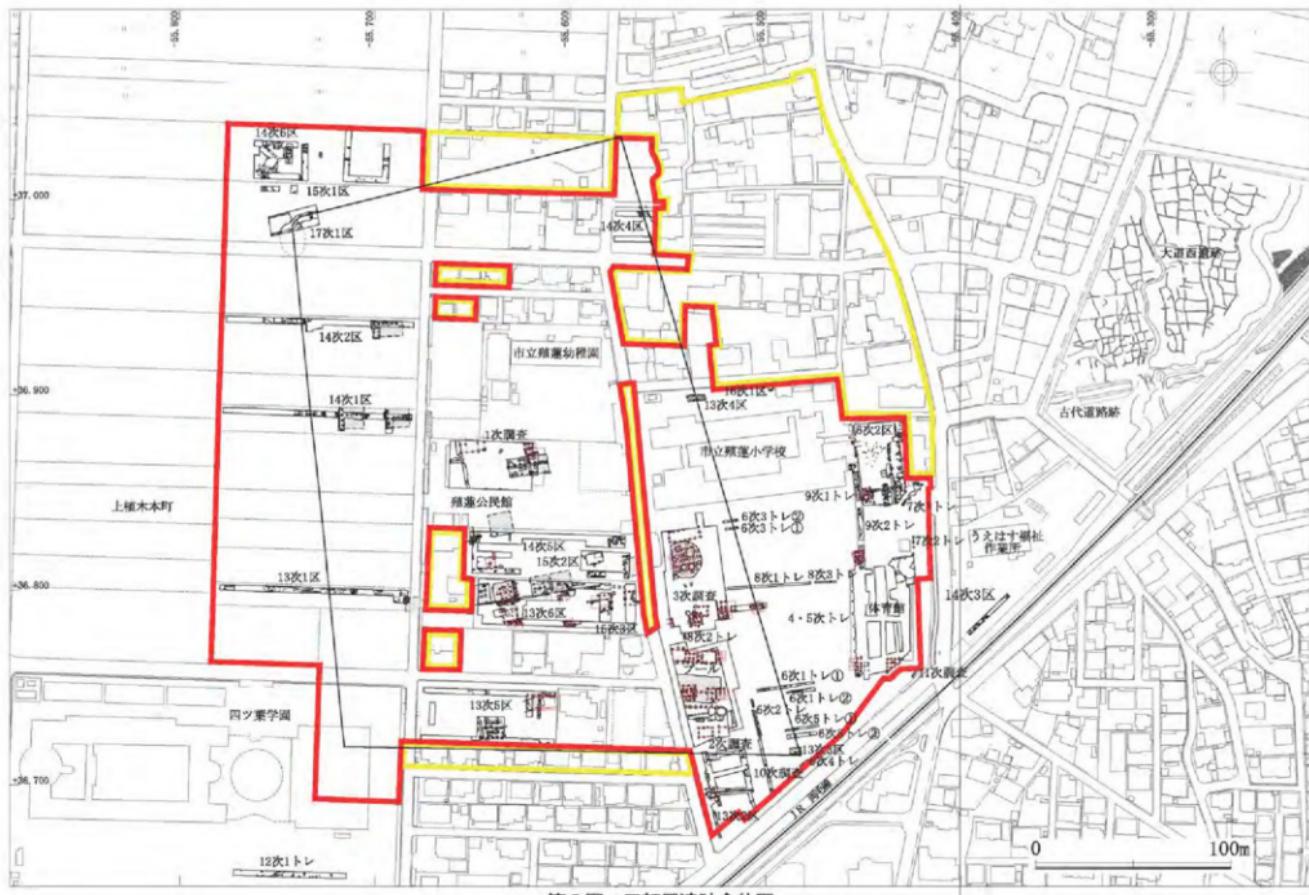
- ・上植木廃寺創建への協力体制と東毛での瓦の流通
- ・上西原遺跡と十三宝塚遺跡との共通性
- ・平地に築かれた須恵器窯
- ・平安期の仏教施設の繋がり
※ 古墳時代 小二子古墳と一ノ関古墳
◎今後の勢多郡衙や郡衙周辺寺院の発見に期待！

まとめにかえて

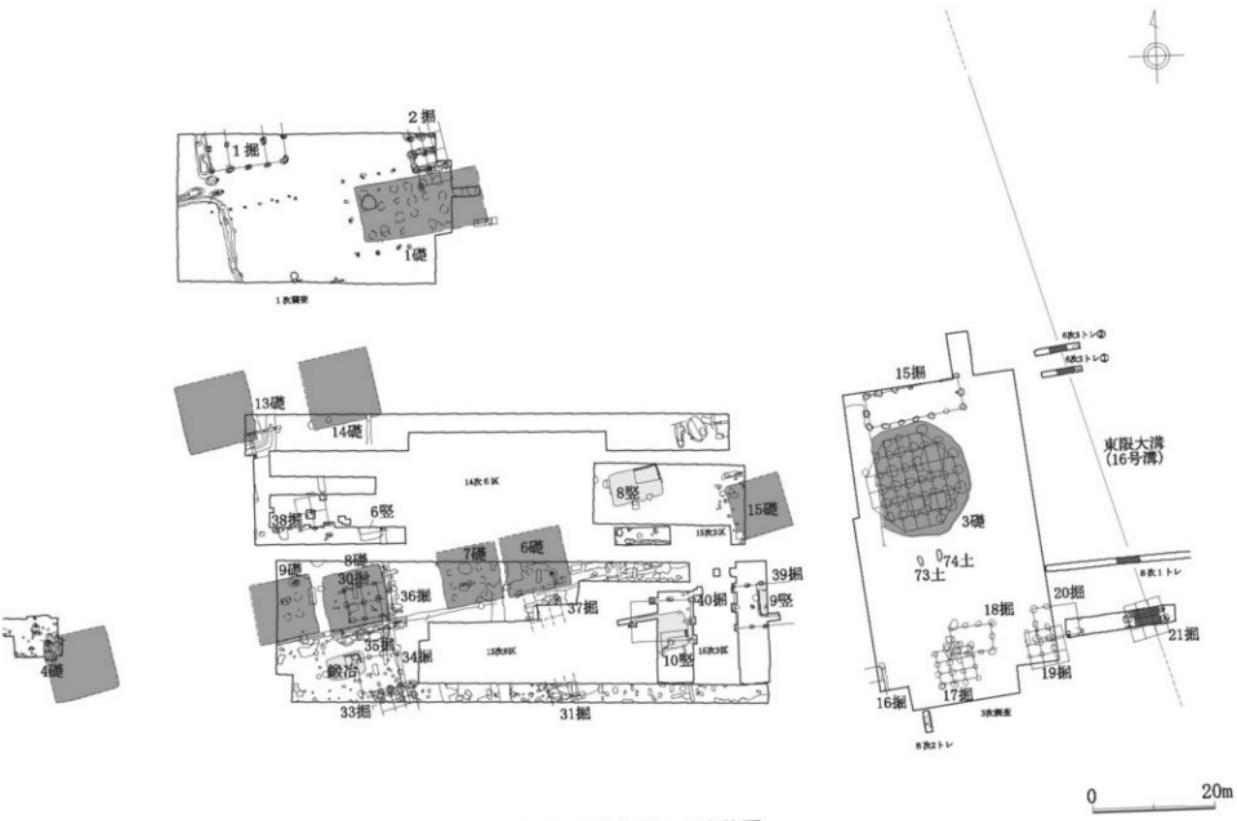
上野国は古墳時代から東毛地域と西毛地域に文化的な相違が指摘されていたが、古代寺院の存在形態や瓦の流れ、郡役所の設置年代など、古代においても依然、根強く残っている。平川南氏は陸奥国を事例にあげ、中央政府が地方を支配するにあたって、地域を複数のブロックに分け支配していくこともあるとの見解を述べている。上野国においても西毛地域と東毛地域をブロックとしてとらえ、国家がその支配体制下に組み込んでいった可能性も考えられる。もちろん、これは古墳時代から続く西と東の地域性の相異の上、成り立っていることは言うまでもないであろう。



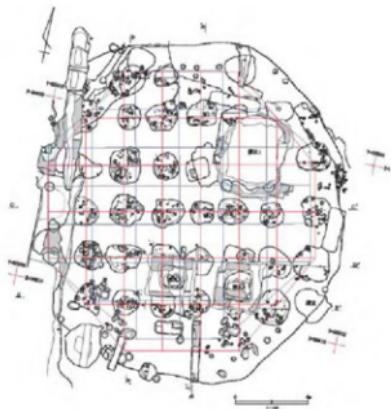
第1図 古代の行政区分



第2図 三軒屋遺跡全体図



第3図 正倉院中央ブロック全体図

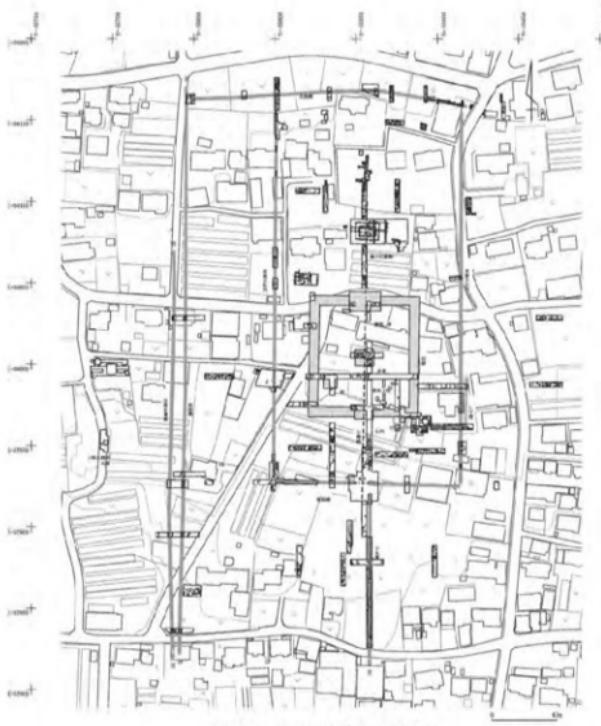


第4図 八角形礎石建物



第5図 佐位郡正倉模式図(実録帳より作成)

第6図 「上野国交替実録帳」



第7図 上植木庵寺全体図



A01a



A01b



N01

創建期(上植木庵寺瓦)

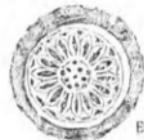


A03

創建期(雷電山)



A02



E01



F01



P02



N03

創建期(雷電山)

0 10cm

一本造り

国分寺式

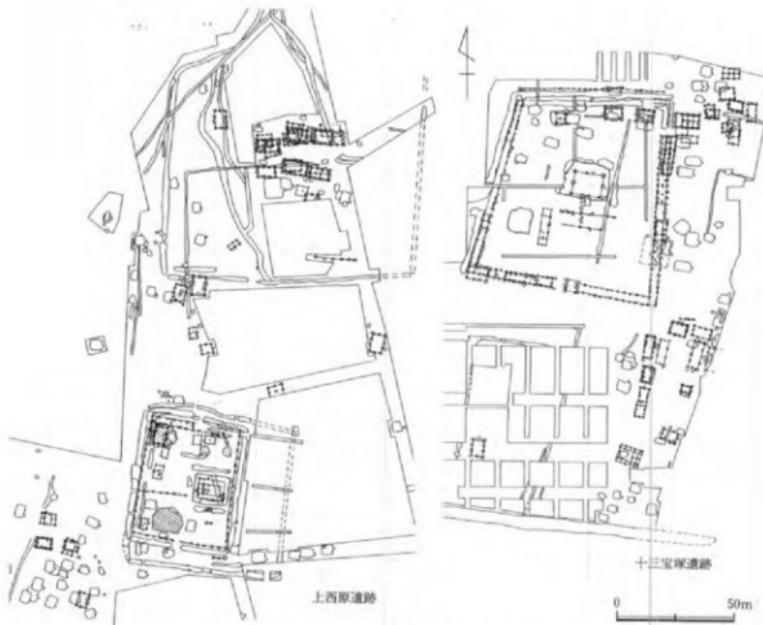
第8図 上植木庵寺出土瓦



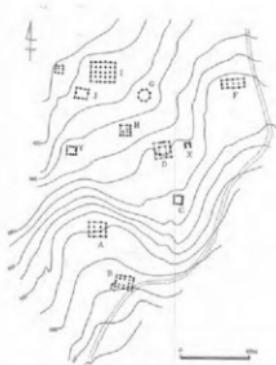
第9図 上西原遺跡の寺院跡



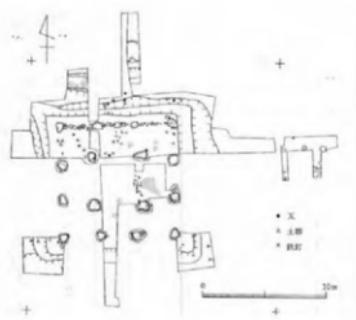
第10図 上西原遺跡出土墨書土器



第11図 上西原遺跡と十三宝塚遺跡の比較



第12図 宇通遺跡の寺院跡



第13図 建物D全体図



第14図 山王庵寺全体図

古代群馬の鉄生産

笹 澤 泰 史 (群馬県教育委員会)

はじめに

それではよろしくお願ひいたします。

これが太田市の峯山遺跡で発見された、今から1,300年前に砂鉄と木炭で鉄を作っていた製鉄炉の痕跡です。

今日は古代の製鉄についてお話をさせていただきたいと思います。

製鉄に必要な材料は砂鉄と木炭と粘土です。この3つの材料に製鉄技術があれば、鉄が出来ます。砂鉄・粘土・木炭は比較的多くの地域で用意できるので、製鉄の技術さえあれば、鍛・鍛先などの開発道具や武器・道具の素材となる鉄が大量に生産できる地域が多くあります。ですから、製鉄技術がどのように伝わったかという問題は、古代社会を考える上で非常に重要です。

製鉄・鍛冶・鍛造

砂鉄と木炭で鉄の塊を作る工程が製鉄です。製鉄でできた鉄の塊には不純物も多いですから、不純物を取り除く作業も必要です。不純物を取り除く工程を精錬鍛冶、製品を製作する工程を鍛錬鍛冶といいます。また、製鉄で出来た鉄を鋳型に流して製品を作る工程を鍛造と言います。

このように原料から鉄器が作られるまでには、原料から鉄の塊を作る製鉄工程、鉄の塊から製品を作る鍛冶や鍛造の工程があります。

たらたら製鉄

日本古来の製鉄技術は文献などで残っているわけではありません。師匠から弟子へ伝わる一子相伝の技術です。そのため、日本列島の古代の製鉄技術を考える上では、今に残る古米の「たらたら製鉄」を理解することが重要です。

鋼と鉄

鉄には銑と鋼があります。同じ鉄で一緒だと思われるかもしれません、金属を扱う技術者にしてみると、これらは違う金属を扱うのと同じくらいに性質が異なるそうです。

鉄は含まれる炭素の量によって大きく3つに分かれま

す。純鉄というのは炭素量が0.04%以下の鉄です。純鉄はすごく軟らかいです。鉄銑は純鉄であると言われています。炭素を0.04~3%含む鉄が鋼です。鋼は利器の素材になります。粘り強い特徴があります。鎌などの農具や刀などの武器は鋼が素材です。炭素を3%以上含む鉄は銑です。銑は硬いが脆いです。強度はあるけど削れてしまう特徴があります。銑は温度が低くても溶けるので鋳型に流して製作する鍋や仏具などの素材になります。

鉄文化の伝播

次に製鉄技術がどこから来たのかということを簡単にお話させていただきます。これはかなり古い話ですが、アナトリア高原という所にヒッタイトという製鉄の技術を持った帝国がありました。現在のトルコの辺りです。最初に製鉄技術を獲得した古代国家といわれています。

ヒッタイト帝国が紀元前1200年頃に滅びた事をきっかけにして、製鉄の技術が世界各地に広がったといわれています。東アジアには紀元前800年代頃に製鉄技術が伝わったといわれています。

文明の周辺地域には、鉄に関する文化が段階的に伝播したと考えられています。文明の周縁地域にある日本列島には、最初に、製品そのものが伝わりました。次に伝わるのは鍛冶の技術、最後に伝わるのが製鉄技術です。

そのため、東アジアの東端に位置する日本列島の製鉄技術を理解するには、中国や韓半島の製鉄の技術を理解する事が大切です。

中国の製鉄

中国の古代の製鉄炉は円筒形の高炉です。炉の素材はレンガです。鉄鉱石が原料で、初期の燃料は木炭です。宋代からは石炭を使用したといわれています。かなり大きな送風管を付けて送風しています。送風を炉の後ろから、津を前から出す製鉄炉の構造を片側送風・片側排滓と言います。大規模な背の高い炉で鉄作りをするのが中国の特徴です。国力があるのでレンガで巨大な製鉄炉を作り、大規模な製鉄が行えるのです。また、高炉による高温操業が可能なので、銑鉄を炉外に流して生成するこ

とができました。製鉄技術がない頃の韓半島や日本列島には、まず中国の鋳造鉄製品が伝わっています。

韓国の製鉄

次に韓半島の遺跡で見つかった製鉄炉を紹介します。石帳里遺跡の製鉄炉は4世紀、沙村遺跡の製鉄炉は5世紀から7世紀の製鉄炉と言られています。韓国の製鉄炉は中国のようにレンガ製ではなく、粘土製です。炉の高さは2mくらいと考えられています。送風管の口径も中国に比べるとかなり小さいです。直徑は20cm程度、L字に曲がっており、L字形送風管と呼んでいます。炉の後ろから送風管を入れて、送風管の先が炉の底に向くように設計されています。片側送風・片側排煙の構造で、中国と同じです。原材料は鉄鉱石と木炭です。鋳型の出土などから熟鉄を流していた可能性も指摘されています。諸説ありますが、韓半島の製鉄は遅くとも3世紀頃には始まっていたと言われています。

古墳時代前期までの鍛冶

3世紀中頃の弁韓・辰韓の製鉄の様子を魏が記した『魏書』東夷伝・弁民条という記事が残っています。

「国、鉄を産す。つまり弁韓・辰韓では鉄を生産している。韓、瀛、倭、皆が弁韓・辰韓の許可を得て（ここに従ってというのとは許可を得てと解釈されます）鉄をとる。市では中国でお金を使うのと同じように、鉄を用いている。そして、韓、瀛、倭だけではなく、魏（中国）の郡である楽浪や帶方までにも鉄を供給している。」と解釈されます。つまり、巨大製鉄炉を持つ魏に供給するほど韓半島の弁辰という地域は製鉄が盛んだったことがわかる記事です。

日本列島には弥生時代中期後葉から古墳時代前期にかけて、北部九州を中心に東日本では静岡、千葉などで鍛冶の痕跡が見つかっていますが、この頃はまだ列島全域に鍛冶工房が展開するほどではなさそうです。

古墳時代中期からの鍛冶

その後、5世紀になると社会が大きく変わってきます。瓦を焼く技術、須恵器を焼く技術など、韓半島から多くの新しい技術が入ってくるのが5世紀です。

群馬県地域でも、古墳時代中期（5世紀頃）になると確実な遺構として鍛冶工房が検出され始めますので、その中の一つ、富岡市の上丹生屋敷山遺跡の鍛冶工房を紹介します。

古代の鍛冶では、鞴から何らかの有機物でできた筒を使って小炭を盛り上げた鍛冶炉に送風していたと考えら

れています。炉にそのまま有機物を入れると焼けてしまいますので、先端に粘土製の羽口を取り付けます。羽口は粘土で専用に作ったものが時代を通して一般的ですが、古墳時代中期は、高坏の脚部を羽口に転用する事例もあります。こうした方法はこの時期の鍛冶では決して珍しいものではなく、北は東北地方から南は九州まで広く分布しているようです。上丹生屋敷山遺跡では、工房ごとに専用羽口、高坏脚部の転用羽口が出土しており、これが鍛冶工房ごとの工程の差、あるいは技術系譜の差を表しているかは今後の類例を待って検討が必要です。

楕形鍛冶炉は、鍛冶操業の時に炉の下に溜まる滓です。上丹生屋敷山遺跡の楕形鍛冶炉は粘土質のものが主体で、あまり鉄分が溶けていません。この頃の鉄は貴重で、鉄をそのまま炉で熱してしまうと鉄が酸素と結びついて少なくなるってしまうので、それを防ぐために鉄素材を粘土の汁に漬けてから熟したのではないかと推測されます。

この遺跡からは群馬県では唯一、東日本でも5例目という非常に珍しい鉄鋤が出土しています。鉄鋤は祭祀遺構から発見されており、祭祀儀礼に使われていたものであると考えられます。この頃、鉄素材は韓半島から来ていると考えられますが、鉄鋤が鉄素材であったかは今後の検討が必要です。鉄鋤は以前から鉄素材であると言わされてきたのですが、最近、研究者の間では鉄鋤は鉄素材としては薄くて素材に適していないのではないかという意見が出てきています。韓国の忠清北道にある彈琴台土城という遺跡では、厚さが2~3cmもある鉄素材が40枚もまとまって見つかりました。鉄鋤以外の鉄素材が韓半島で発見されてきたことで、日本列島にもこのような鉄素材が韓半島から流通していた可能性があると考えられるようになりました。その他にも、津混じりの鉄塊が鉄素材であったとする説などもあり、今後の研究成果に注目する必要があります。

今話題の金井東裏遺跡についても少し触れたいと思います。今までお話ししてきましたとおり、この頃は、まだ日本列島の中に本格的な製鉄をする技術がない時期ですので、金井東裏遺跡で出土した甲冑などの鉄製品は朝鮮半島の製鉄炉でつくられた鉄素材を使用していたと考えられます。金井東裏遺跡に隣接した金井下新田遺跡では鍛冶工房が見つかっておりますが、どのような鉄器を制作していたかについては今後の詳細な調査が待たれます。

日本列島の初期製鉄

日本列島の製鉄開始時期を弥生時代とする説もありますが、これまでに発見された製鉄遺跡を整理してみる

と、6世紀後半から本格化したという説が有力と言えます。また、6世紀中頃が、伽耶の地域が新羅に取り込まれた時期に一致することも重要です。「伽耶の製鉄地帯が新羅の支配下に入ったことで倭国の鉄素材の供給に大きなダメージがあり、日本列島の鉄生産を本格化させる契機となった。」という解釈につながる意味でも日本列島の本格的な製鉄の開始時期を6世紀後半とする説は納得しやすいものです。もしかしたら、それ以前にも列島内で製鉄にチャレンジしたことはあったかもしれません、それは列島の鉄器生産を支えるほど本格的なものではなかったと考えた方が妥当かもしれません。

鉄づくりには膨大な労働力が必要ですが、技術力が低ければわずかな鉄しかできません。それなら、その労力で得意なものを確実に生産し、交易によって鉄素材を得た方が安定的に鉄素材を得ることができます。国内製鉄の開始は、東アジアの混沌とした社会情勢を受けて、安定した鉄素材確保のためにやむを得ず行ったというのが実態ではないかと想像しています。

繰り返しになりますが、鉄は粘土と砂鉄と木炭さえあれば、無尽蔵に生産できます。鉄は、交易のアイテムとして非常にスペックが高いですから、鉄を持っていれば他の地域に対して優位に立てます。武器や開拓に使える農具などの鉄器は、国力を左右しますので、製鉄技術はおそらく厳しく管理されていたと思います。

こうした状況を鑑みれば、朝鮮半島の製鉄技術者が自らの意思で日本列島にやって来るということはないでしょう。製鉄技術の伝播にはもっと大きな政治的な力が作用していたと考えられるからです。

それでは日本列島の初期の製鉄を見ていきたいと思います。日本列島の初期の製鉄遺跡は現在の岡山県の地域で見つかっています。北部九州などにも一部見られますが、6世紀後半の初期の製鉄遺跡は岡山県地域が中心です。

岡山県総社市千引カナクロ谷遺跡は、現在までのところ日本列島で一番古い時期の製鉄遺跡の一つです。炉の平面形は方形です。製鉄炉の周りに溝を掘っていますが、上位から来る水を防いでいます。製鉄の周辺では灰窓も見つかっています。また、島根県の今佐山遺跡という製鉄遺跡の復元模型を見ると日本列島の初期の製鉄炉の形状がよくわかります。

韓半島と日本列島の製鉄炉は平面形状と送風方法に大きな違いがあります。韓半島は先ほど説明させていただいたとおり、片側送風片側排煙ですが、日本列島の初期の製鉄炉は淬を出したりする作業場は直線上に2方向あり、送風方向はその方向に対して直交しています。こうした製鉄炉の構造を直交送風片側排煙といいます。

送風の方法で比較すると、韓半島ではL字型送風管を使用しますが、日本列島の初期のものは送風管を使わずに炉に直接穴を開けて送風しています。よく「炉に直接、有機物の送風管なんか着けたら焼けるのではないか？」と疑問に思われる方がいらっしゃいますが、私も実際に立ち会うまで想像できなかったのですが、炉にある程度厚さがありますと、炉の表面は素手で触れても全く熱くないです。操業の時は炉にクラックが入りますが、クラックの中に素手で粘土を埋め込んで手は全く熱くないです。ですから、炉に直接、有機物の送風管を入れたとしても、焼ける心配は全くありません。また、当初の原料は鉄鉱石ですが、砂鉄に切り替わるということ、日本列島の製鉄の特徴といえます。

あらためて韓半島と日本列島の初期の製鉄炉を比較してみると、驚くほどその構造、つまり炉の構造から推測する製鉄技術は違います。このことから、おそらく、核心的な製鉄技術部分は朝鮮半島から日本列島に流出することはなく、今まで頼りきりであった半島からの鉄素材が入手できなくなったことで、ヤマト王権がやむにやまれず、断片的に製鉄を知る渡来人、あるいはこれまであった鍛冶の技術、もしかしたら実験的に行ってきた国内の製鉄技術を導入して開発した製鉄技術が日本列島の初期の製鉄技術であったかもしれない想像しています。

中央集権国家による鉄生産の能力戦

日本列島で本格的な国内の鉄生産が開始されてから約100年後の7世紀中頃、これまた新たな東アジアの國際情勢により、日本列島の製鉄の状況は大きく変化します。

7世紀中頃の白村江の敗戦が、中央豪族と地方豪族の連合国家であるヤマト王権を、中央集権国家へと大きく変化させます。もちろん、600年の第一回の遣隋使派遣の際に煬帝から一撃され、味わったカルチャーショックから、乙巳の変を経るなどして中央集権国家へ徐々にシフトしていくわけですが、最も大きな衝撃・画期はやはり白村江の大敗ではないでしょうか。この敗戦は、日本列島に古代最大の危機を招きました。日本が植民地になってしまいのではないかという恐怖。国家的な危機感がこの白村江の敗戦直後にはあったようです。それは幕末に黒船がやってきた時と同じような危機感。日本列島には富国強兵、中央集権国家を目指した改革が起ります。北九州の水城や瀬戸内海の朝鮮式山城の遺構は古代国家の危機感が表されている遺跡です。

こうした中央集権国家による列島改造は群馬県地域にも遺跡として残っています。富を集約して強力な国家を作る。地方に役所を配置し、道路網を整備し、税を徴收

し、中央へ集める。馬、陸路の整備。三軒屋遺跡、新田郡衙といった遺跡に見られる役所の跡や東山道駅跡などの遺構は古代の日本が中集権国家を目指した痕跡といえます。

この時、国内の製鉄も大きな変化があったことが、最近の研究でわかつてきました。長軸2mほどの大型の箱形炉が全国各地に配置されていたのが明らかになってきたのです。

古墳時代の初期製鉄技術はヤマト王権が拠点的な鉄生産をすることで管理していたと考えられます。鉄素材の地方への再分配。これがヤマト王権の連合国家というシステムを大きく支えた大きな要素であったと想像しています。古墳時代まで、ヤマト王権の体制を支えた鉄の再分配に寄与した製鉄技術ですが、その技術を放出してまで、国を挙げて鉄生産を行う構造に変化せざるを得ないほどの危機感が白村江の敗戦にはありました。

この時に配置された製鉄炉は、愛媛大学の村上恭通先生により国家標準型製鉄炉と提唱されました。製鉄炉は、設計図があったかのようにほとんど同じ形をしています。このあたりの大まかな流れについては皆さんにお配りした資料に新聞記事の資料を入れましたので、お読みください。

この講演の一番はじめにスライドで見ていただいた峯山遺跡の鉄アレイの形の製鉄炉が全国各地に配置された国家標準型製鉄炉の痕跡です。日本列島の初期製鉄炉と国家標準型製鉄炉を比較すると、国家標準型製鉄炉は日本列島の初期製鉄炉を長軸方向にそのまま大型化したことがわかります。

近年の国家標準型製鉄炉の検出状況を見れば、7世紀中頃から8世紀にかけて列島各地に製鉄炉を配置し、鉄生産の総力戦が行われたことがご理解されるかと思います。

滋賀県地域の国家標準型製鉄炉

滋賀県大津市野路小野山遺跡で発見された国家標準型製鉄炉を紹介します。9基がセットで2群検出されています。急速に拡大した鉄の需要を補うために短期間に鉄を生産するかのような大規模な製鉄遺跡群です。

鍬・鋤先などの鉄器は農具とされますが、実はインフラ整備にも欠かせない重要な道具です。7世紀後半には道路や役所を作ったりするためのブルドーザーなどがないので、鍬や鋤がないと平坦面が作れない。国家危機に対する鉄器生産という武器のイメージが先行しますが、農具とされる鉄器の生産が非常に重要であったと考えられます。

群馬県地域の国家標準型製鉄炉

国家標準型製鉄炉は関東地方でも多く見つかっています。群馬地域では、前橋市三ヶ尻西遺跡・同松原田遺跡・太田市峯山遺跡、同西野原遺跡の4遺跡が報告されています。この他にも近年、榛名山東南麓や前橋市国府周辺でも国家標準型製鉄炉が見つかっています。

峯山遺跡の製鉄炉の構造

最初に太田市峯山遺跡をご紹介します。

峯山遺跡は太田市猪戸にある遺跡です。遺跡は金山丘陵北端にあります。国家標準型製鉄炉は丘陵の北西斜面に1基、北斜面に2基の合計3基検出されました。北斜面と北西斜面の製鉄炉の間には鍛冶工房も見つかっており、製鉄から製品製作まで行ったことが分かりました。製鉄炉の時期は鍛冶工房の出土土器などから8世紀前半であるとされています。

3号製鉄炉は本体の地下構造に石が敷いてあります。石を敷いた上には炭混じりの土を入れ、湿気が上がらないように工夫しています。ビデオで見ていただいた「たら製鉄」にも大舟や小舟といったが下部構造があり、炉に湿気が入らないように工夫されていました。それと同様の工夫が、群馬県で発見された8世紀前半の製鉄炉にも見られるのです。

また、発見された製鉄炉の底は抉り取られたように瘤んでおり、操業の最後には炉の底に生成した鉄を取りだしていたことがわかります。また、山側の作業場はかなり大きく作っていますが、谷方向は作業場の幅は狭く、操業中に出てくる鉄滓を谷に落とす直線的な構造をしています。山側の作業場からは割られた鉄滓や細かい鉄が出土しているので、操業後に鉄を取り出したのは山側の作業場で行われていたと推測されます。また、谷側の作業場には溶岩のように流れ出た鉄滓がそのままで出土しました。これは操業の最後に出た鉄滓をそのままにして廃棄したことを示しています。

遺跡から出土した鉄滓を分類したのですが、一番多かったのが炉外に流れ出た流动滓の破片です。これが鉄滓全体の約7割を占めていました。

また、峯山遺跡では作業場へ倒された大型の炉壁片がそのままの状態で出土しました。出土した炉壁には送風孔が4つ確認できました。操業者の木原村下からは、底部から送風孔まで高さや送風孔の間隔が「たら製鉄」に驚くほど似ているとのコメントをいただきました。

東日本最古の国家標準型製鉄炉

次に、前橋市三ヶ尻西遺跡をご紹介します。この遺跡の製鉄炉は東日本最古級の国家标准型製鉄炉です。2基の製鉄炉が検出されており、炉の地下には棒状の木炭を長軸に平行して並べています。製鉄炉の周辺からは12軒の堅穴住居が検出され、ほとんどが鍛冶工房であることがわかりました。鍛冶工房から出土した土器から製鉄炉の操業は、7世紀中頃であったとされています。

三ヶ尻西遺跡の製鉄炉は、設置状況が特徴的です。検出された2基の製鉄炉は横持柱をもつ特殊な上屋構造がある堅穴状遺構に並んで設置されています。このような上屋の類例はありませんが、製鉄炉が2基セットで並ぶ構造は、福島県で検出された古い段階の国家标准型製鉄炉でも複数確認できます。これは地方へ配置された国家标准型製鉄炉の初期段階の特徴であると捉えることもできます。指導者と実習者が並んで操業した研修所のような施設であったかもしれません。

国家标准型製鉄炉と地方の対応

最後に太田市西野原遺跡を紹介します。八王子丘陵先端部の扇状地上で製鉄炉が4基検出されました。製鉄炉は、近くで検出された鍛冶工房の出土土器などから7世紀後半であると考えられています。製鉄炉から離れた地点でも鉄滓が大量に分布しており、遺跡の中には製鉄炉が4基以上あったのではないかと推測されています。

西野原遺跡で見つかった製鉄炉4基のうち2基は国家标准型製鉄炉ですが、他の2基は小型の箱形炉でした。製鉄炉は重複しており、小型の方が新しいことも判明しました。これは西野原遺跡の大きな成果ですが、国家标准型製鉄炉のすぐ後に、小型の箱形炉を操業していたことがわかったのです。

国家标准型製鉄炉の地下構造は前橋市三ヶ尻西遺跡と同様に棒状の木炭が並べられています。この地下構造は群馬県地域に設置された初期の国家标准型製鉄炉の特徴であるかもしれません。

小型の箱形炉の特徴ですが、2基とも炉の小口両脇から作業場の縁に石組みがありました。隣接する排溝場から出土した炉底塊の形状から、小型の箱形炉の構造がわかつたことも大きな成果です。製鉄炉の送風は片側3カ所、排溝孔は小口側に2カ所あることがわかったのです。

国家标准型製鉄炉から小型の製鉄炉への移行は、列島各地への標準的な製鉄炉の配置と、受け入れる地方側の対応という点で、非常に重要な意味があります。国家标准型製鉄炉は一齊に配置されたのですが、地方に適した製鉄炉を試行錯誤していた状況の一端が見えてくるのです。

国家标准型製鉄炉から堅形炉へ

8世紀前半になると、東日本的一部の地域で堅形炉という製鉄炉が出現します。堅形炉は8世紀中頃から10世紀までの約200年間、群馬県地域で一番長く使用された古代の製鉄炉です。

堅形炉には炉の後ろに踏み輔という送風装置がついています。炉の後背部から送風し、炉の前底部に滓を流し出す構造です。片側送風、片側排溝です。堅形炉は半地下構造になっていて、操業後、炉底に鉄の塊が出来ると、地下部分の炉の前側だけを壊して炉内の生成物を取り出すことができます。操業実験をしてみるとわかりますが、炉の上の方は操業が終わってもほとんど溶けません。グズグズに溶けるのは炉の下の方だけです。つまり、堅形炉は地下の内面を張り直すだけで、複数回操業出来る便利な炉です。国家标准型製鉄炉は、操業の度に生成物を取り出すために炉を壊さなければならないので、堅形炉の操業になってから、築炉のための労働力が大幅に削減できたといえます。

堅形炉は、国家标准型製鉄炉の構造とは大きく違い、韓半島の製鉄炉に近い構造です。堅形炉は東日本、特に関東地方で8世紀前半から10世紀後半あたりまで長く使用されています。

堅形炉が開発された8世紀前半は、歴史的には東国に渡来人が多く移配された時期に一致します。群馬県地域には7世紀中頃には東日本最古級といわれる三ヶ尻西遺跡の製鉄炉が配置されますが、西野原遺跡で見られるように7世紀後半には小型の箱形炉にアレンジした痕跡も見られます。炉が大型で送風孔の多い導入期の国家标准型製鉄炉は、送風孔一つ一つに対して原料や燃料の投入、通風や温度のコントロールをしなければならず、操業は非常に難しいと考えられます。国家标准型製鉄炉の操業には6世紀後半から島内で行われた箱形炉の操業技術者の存在が不可欠です。

関東地方では国家标准型製鉄炉から堅形炉に8世紀代にはシフトしていくますが、そこには国家标准型製鉄炉の技術伝承が難しく、片側送風片側排溝の製鉄に慣れた東国に移配された韓半島の製鉄技術者の関与があったことは想像に難くありません。

山陰の製鉄と地方製鉄の淘汰

11世紀頃になると、各地の製鉄が衰退していきます。森林資源、砂鉄原料に恵まれた中国山地の製鉄が本格化すると、採算性の悪い地方の製鉄は淘汰されています。山陰は降水量が多く、夏も冬も湿潤です。先日、ニュー

スで見ましたのが湿度に關係する美肌ランキングで島根県は日本一。群馬は47都道府県で最下位でした。年間を通して湿潤な山陰は、森林再生能力が高く、製鉄燃料となる大量の木炭を確保することができます。それが現在、「たら製鉄」として島根県奥出雲町に古代製鉄の技術が残る要因の一つではないかと思います。一方、からつ風の吹きすぎむ群馬県地域の山林を伐採したら、樹木が再生するのは容易ではないでしょう。森林資源の枯渇問題は、群馬県地域の古代製鉄を考える上で重要です。

群馬県地域では10世紀以降も小型の製鉄炉が営業されています。この製鉄炉は鍛冶羽口を使用した小規模な自立炉です。この製鉄は鍛冶工人が補助的に行った製鉄であると考えています。鉄素材を購入し、鍛冶だけを行い鉄器を製作するよりも、自ら原料を採取し、できる範囲で小規模な製鉄を行って鉄器を製作することを選択する鍛冶工人もいたのではないかと考えています。

まとめ

古代の日本列島の製鉄技術の導入と展開の背景には、國家の危機対応がありました。

第一段階として、ヤマト王權の生命線であった伽耶の鉄生産地帯が新羅の支配下になったことが国内生産開始の大きなきっかけになったのではないか。

第二段階として、白村江の敗戦を契機に、列島を挙げた製鉄が行われ、この段階で群馬県地域にも国家標準型製鉄炉が設置された。こうした製鉄炉の配置は言い換えれば「マニュアル的な配置」であり、地域によって異なる原料や炉の材料、森林資源の状況を配慮していません。大型の国家標準型製鉄炉を操業できる技術者による安定した製鉄を行うことは非常難しかったことでしょう。そんな中、関東地方を中心とした東国で8世紀前半には韓半島の製鉄技術に影響された可能性が高い豊形炉が使用されます。豊形炉の開発・操業には、東国に移配された渡来人の関与があったことが想像できます。その後、11世紀になると、山陰の製鉄によって、探算性の悪い群馬県地域の製鉄は淘汰されていきます。

ご静聴ありがとうございました。

大室古墳の教室連続講座
「講座・赤城南麓の考古学2014」

古代群馬の鉄生産
講演会資料

笹澤 泰史
(群馬県文化財保護課)

講演内容

前置き

古代群馬の鉄生産（今日の話）
鉄生産(製鉄)とは
日本古来の製鉄技術 たらら（ビデオ）

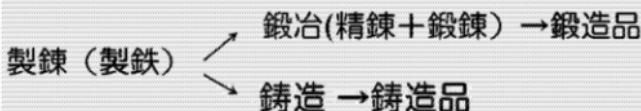
- 1 鉄生産技術はどこから
- 2 鉄生産技術がない頃の日本列島
- 3 日本列島の初期製鉄
- 4 中央集権国家による鉄生産の総力戦
- 5 群馬の製鉄遺跡

まとめ

平成26年10月4日
大室公園民家園「赤城型民家」

古代の鉄生産の工程

古代鉄生産の工程



製鍊 砂鉄や鉄鉱石から鉄塊

精鍊鍛冶 . . 不純物除去、炭素量の調節

鍛鍊鍛冶 . . 鍛打して製品に加工する

鋳造 鋳型に流して製品に加工する

鋼と銑鉄

炭素量による性質の違い

鉄(純鉄) . . 炭素 0 ~ 0.04 %

軟

粘り強い

鋼(はがね) . . 炭素 0.04 % ~ 2.1 %

硬

脆い

銑鉄(ズク) . . 炭素量 2.1 % ~

文明の周縁地域への鉄文化の伝播

製品 → 鍛冶技術の伝播 → 製鉄技術の伝播

日本列島の鉄文化の段階

第1段階 製品の伝播

第2段階 鍛冶技術の伝播

第3段階 在地の鍛冶と渡来人の鍛冶

第4段階 日本列島の初期製鉄(小型箱形炉)

第5段階 中央集権国家による国家標準型箱形炉の配置

第6段階 地域ごとの炉の選択

第7段階 製鉄の局地化と淘汰

中国と韓半島の製鉄炉の比較

中国	韓半島
円筒形の高炉	円形の堅形炉(直径1m未満)
レンガで構築	粘土で構築
鉄鉱石原料	鉄鉱石原料
当初は木炭→石炭(宗代～)	木炭
銑鉄	銑鉄の流し取りの可能性
大口径送風管	大口径(20cm)のL字送風管
片側送風・片側排滓	片側送風・片側排滓

韓半島の製鉄炉と日本列島初期製鉄炉の比較

韓半島	日本列島の初期製鉄炉(小型箱形炉)
円形の堅形炉(直径1m未満)	方形の箱形炉(1辺1m程度)
粘土で構築	粘土で構築
鉄鉱石原料	鉄鉱石原料
木炭	木炭
銑鉄の流し取りの可能性	滓混じりの鉢状の鉄塊か
大口径(20cm)のL字送風管	炉壁に複数の孔を空けて送風
送風と排滓が一直線	送風と排滓が直交

日本列島の初期製鉄炉と列島各地に配置された製鉄炉の比較

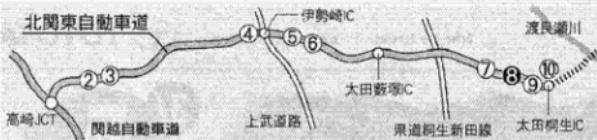
日本列島の初期の製鉄炉 (小型箱形炉)	列島各地に配置された製鉄炉 (大型箱形炉)
方形の箱形炉(1辺1m程度)	長方形の箱形炉(2～×1m程度)
粘土で構築	粘土で構築
鉄鉱石→砂鉄原料	鉄鉱石→砂鉄原料
木炭	木炭
滓混じりの鉢状の鉄塊か出銑	滓混じりの鉢状の鉄塊か出銑
炉壁に複数の孔を空けて送風	炉壁に複数の孔を空けて送風
送風と排滓が直交	送風と排滓が直交

韓半島の製鉄炉と堅形炉の比較

韓半島	堅形炉
円形の堅形炉(直径1m未満)	円～隅丸方形の堅形炉(直径1m未満)
粘土で構築	粘土で構築
鉄鉱石原料	砂鉄原料
木炭	木炭
銑鉄の流し取りの可能性	銑鉄の流し取りの可能性
大口径(20cm)のL字送風管	小口径の直線の送風管(孔)
送風と排滓が一直線	送風と排滓が一直線

白村江の敗戦と日本列島の製鉄技術

(25) 地域 2011年(平成23年)3月4日 (金曜日)



峯山遺跡

太田市上強戸町、緑町

九

走疾史歷

北関東道でタイムトリップ

古代国家支えた製鉄

出土した。

を過ぎた時期が少なく、地方に置かれた箱形船

インフラを整備し、国

ほど前の古墳時代後



(県埋蔵文化財調査
高麗山三五洞考古研究會

事務大臣調査研究会
篠澤泰史
北關東道開港記念展
一體失敗は、北関東大河の
動車道、ターミナルリ
ーは、19日から20日、8時
まで、茨城県土浦市北郷町の
盆橋橋頭で。21日以降、
陸の土曜、祝日休館。
問合せは、東京鐵道事業團(03)
249-5501、249-5502。

を起へて止めたのである。

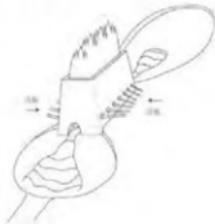
製鉄技術が伝わったのは、それより一千年ほど前の古墳時代後半期。鐵器を豪華よく増加させる製鐵技術は「ヤマト王權」に歴史として記録されている。律令国家は、製鐵技術を列島全体で共有するることによって、國家の富強を

(上毛新聞 2011年3月4日より)

関東地方の主な大型箱形炉(国家標準型)

大型箱形炉

炉床部の平面形が、
2~3×1 m程度の長
方形の焼土部や掘り込
みとして確認される。
炉体の長軸方向に複数
の通風孔が設置され、
通風と排滓方向を直角
に配置することを特徴
とする製鉄炉である。



(7世紀中頃～8世紀)

関東地方の主な豊形炉

豊形炉

円または隅丸方形の断
面形状を持つ。豊形炉の
特色は、1操業あたりの
生産量は低いが、複数回
操業に適している。高炉
であるため、炉内を高温
を保てるメリットがある。
検出状況から、8世紀前
半に、下総国で開発され
たと考えらる。前代の箱
形炉に比べると構造は韓半島の製鉄炉に近い。



(8世紀前半～10世紀)

上野国の主な製鉄炉

峯山遺跡の大型箱形炉



南原間遺跡の豊形炉



稻荷屋敷遺跡の自立炉



箱形炉(国家標準型)



古代群馬の製鉄炉 炉型変遷

時代 型	箱形炉 国家標準型	豊形炉 菅ノ沢型	自立炉 西浦北型
7世紀			
8世紀			
9世紀			
10世紀			
11世紀			

豊形炉(菅ノ沢型)



小型自立炉(西浦北型)



関係年表

600年 遣隋使 文帝一蹴
645年 大化の革新(乙巳の変)
663年 白村江の大敗
666年 百済人2000人を東国へ移す
689年 新羅人を武藏国、下毛野国
716年 高句麗人1779人を、東国の七 国に武藏国高麗郡設置

各炉型の操業の特徴

大型箱形炉の操業

大型箱形炉は、1回の操業でたくさんの鉄を生成することができるが、操業ごとに炉を構築する必要がある。

豊形炉の操業

豊形炉は、1回の操業での生産量が少ないが、複数回操業をすることが可能。

小型自立炉の操業

鉄素材の主体は山陰から。鍛冶技術を用いた補助的な製鉄か。

付 錄

「史跡散策 赤城山南麓の大室古墳群と赤堀茶臼山古墳を歩く」

(前原 豊:前橋市教育委員会)

二段につくられた前方後円墳です。この古墳は流れ山と後二子古墳に挟まれたせまい空間につくられています。

後二子古墳と同時期に方向を擡げてつくられていることから、後二子古墳とかかわり深い人物の墳墓と考えられます。石室は、石を抜き去られたため破壊を受けていました。さいわい入り口の部分は、壊されず残されていて、石室をふさぎた状態が良くわかりました。石室の前からは、墓前祭祀に用いた土器や火を燃やした跡が見つかりました。小二子古墳からはたくさんの埴輪が発見されました。人物・馬・家・轍・盾・大刀などの形象埴輪や円筒埴輪は、大きく後円部と前方部の二つのグループに分けられ、設置されています。

梅木遺跡は大室公園の南東隅、前二子古墳から東に五〇〇㍍のところにあります。この遺跡からは堀と柵列で区画された館跡が見つかりました。すぐ東に流れる桂川の氾濫によって主要な部分は削られてしましましたが、堀の辺は外側で八五㍍、面積七二〇〇㍍の正方形と推定されます。火山灰が堀の底に堆積していたことから、この館は五世紀後半につくられ、六世紀初頭まで使われたことが考えられ、前二子古墳に葬られた人物との関係がうかがえます。

⑥赤城型民家

園内にある旧開根家住宅は、前橋市指定重要文化財昭和六〇年指定で、赤城南麓地方にみられる典型的な養蚕農家です。もともとは市内鈴井町にあったものを大室公園内に移築復元したもので、この建物は、屋根の正面中央部が切り落とされました。赤城型民家で、養蚕をおこないやすいように二階の通風・採光をよくする工夫をしています。

二階の通風・採光をよくする工夫をしています。民家の土蔵を改装して開設した大室はにわ館には公園内の調査出土品や複製された埴輪類、教材として作成された3D映像で見る大室古墳群があります。

⑦古代住居

民家園に隣接して堅穴式住居、平地式住居、高床倉庫の古代住居群が復元されています。

⑧赤堀茶臼山古墳

大室公園の東五〇〇㍍に赤堀茶臼山古墳があります。時間に余裕があれば足を伸ばせてみてください。

一九二九年（昭和四）に帝室博物館（現東京国立博物館）によつて調査された古墳です。古墳の研究史上、全国的にも大きな意義を持つ古墳でもあります。

「明日への文化財」72号 2015年2月号
文化財保存全国協議会 一〇一五年二月一〇日発行 より転載

置をうかがうこともできる点もふくめて、全国的にも類例のない貴重なもので。

古墳は、帆立貝形の前方後円墳で、墳丘長六一㍍、前方部が長さ一八㍍と短く低いのが特徴です。後円部には二基の木棺桶があつて、木棺桶の内行人文鏡、短甲をはじめとする副葬品が出土しました。後円部上から出土した八棟の家形埴輪は、母屋や倉庫、囲いなどを「匂」の字に並べていたようです。

なお、大室公園の見学にあたつては、大室古墳の語り部ボランティアが古墳解説を行っています。是非、前橋市育委員会事務局文化財保護課（〇一七二八〇六五一一）までお連絡ください。

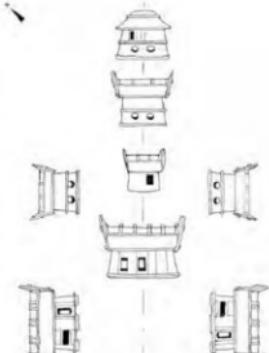


図5 8棟の家形埴輪配置
(小笠原好彦図)

古墳だと思われます。

②中二子古墳

中二子古墳は、大室古墳群の中で最も大きくて立派な古墳です。一九九三・四年の調査で、内堀や中堤、外堀が全周し、墳丘や中堤は葺石で覆われ、内堀に工事や儀式の時に通った「わたり」が存在することが分かりました。古墳の南側は溜池をつくるため、大きく削りとられてしまったので、その部分を復元して中堤が一周している様子を再現しました。復元された中堤の上には、古墳を外敵から警護するため立てられた盾持人埴輪と円筒埴輪が、密接して並べて復元されています。

この古墳からは、たくさんの埴輪が出土しましたが、その中から、円筒埴輪に人の顔が小さく表現された珍しい埴輪が見つかりました。また、形象埴輪のほとんどと円筒埴輪の一部に海綿骨針の化石と結晶片岩の砂粒が入ることから藤岡周辺で製作された埴輪が運ばれてきたと考えられます。

中二子古墳では石室が見つかっていません。どのような石室に、どのような副葬品が納められているかというロマンが残されています。墳丘長一三〇〇本が使われたと考えられています。さらに右見型埴輪は遠く関西のものと良く似ています。出土遺物には從来「四神付飾土器」と呼ばれた小像付簡形器台があります。朝鮮半島南部のものと共通した小像が付けられています。六世紀前半の

- 1 前二子古墳
- 2 中二子古墳
- 3 後二子古墳
- 4 小二子古墳
- 5 梅木塚
- 6 藤岡瓦窯跡・はにわ窯
- 7 古代聚落



図4 大室公園

一年に開けられました。今回の調査によって、築造方法にいくつかの工夫がなされていることがわかりました。地中を深く掘つて石室を低く造ることで墳丘の盛り土を節約しています。石室の前面部には、儀式に使われた煮炊きの跡や土器がまとまって出土しました。

石室は南に開きますが、古墳は北側からみた方が立派にみえます。円筒埴輪も南側は小さな埴輪が間隔をあけて設置されていましたが、北側には大きな埴輪がやや密に設置されていました。この古墳からは親子の猿がついた円筒埴輪などが出土しています。また、石室に出入りするために、石室の前に1mの深さ 幅2m、長さ12mにわたつて溝のように地面を掘り込んだ墓道があります。

一九九一調査で墳丘長八五m、高さ一mの一段築成の前方後円墳で、盾形に全周する周堀をもつことが分かりました。

前方部の北側から馬形埴輪に付けられた装飾部品が出土しました。この部品は、大阪府四天王寺の宝物館に収蔵されている人物がのる馬の部品とそつくりなため、四天王寺の馬と同様の埴輪が存在したと考えられています。六世紀中頃から後半にかけてつくられた古墳だと思われます。

④小二子古墳

小二子古墳は、全長三八mと小さいながらも、

の絵図や文書が県立文書館に残されています。また一八八〇年にはイギリスの外交官アーネスト・サトウが発掘の話を聞きつけ調査に訪れていました。彼は幕末に来日し、討幕運動に大きな影響を与えた人物です。この調査の中で彼は繪師・加藤竹齋を東京から連れて来て、精密な絵を描かせ、また石室内の赤い顔料のベンガラやガラス丸玉を持ち帰り、本国の化学者に化学分析を依頼しています。こういった調査の仕方はまだ当時日本では始めていませんでした。

一九二二年の調査によって周堀と外周溝の二重の堀や溝、幅の広い堤で区画されていることが確認されました。堤長は九四m、高さ一四mあります。墳丘は一段築成の前方後円墳で、上段墳丘には葺石がありました。従来から門や扉があり複雑な構造とされた横穴式石室は、床面に加工された



図2 筒形器台

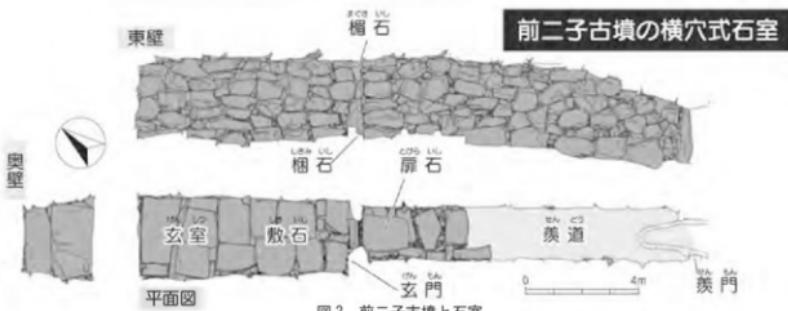
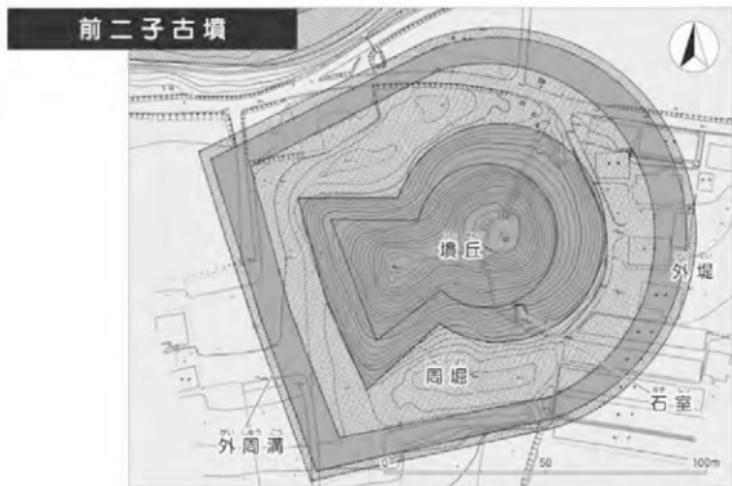


図3 前二子古墳と石室

赤城山南麓の大室古墳群と赤堀茶臼山古墳を歩く

前 原 豊

はじめに

赤城山麓の標高一二〇メートルの台地に築造された大室古墳群は、日本の古墳の中でも早い時期から学術的な調査が行われたことで有名です。

豊城入彦命の陵墓候補地に挙げられていた前二子古墳は、一八七八年には発掘調査が行われます。石室から発見された数多くの副葬品は、約一年間にわたって公開され、日本全国津々浦々から五十六名もの見学者が訪れ、世間の注目を集めました。

これらの古墳群を「大室公園」として整備する計画が昭和六〇年代から前橋市の公園と文化財の二つの部局によって進められました。実際の整備は、一九八九年に大室公園史跡整備委員会が組織され、一九九一年から発掘調査が始まりました。

現在、残念ながら資料館の建設が遅れていますが、二〇一四年十一月、「大室はにわ館」が出来ました。

出土品のほか市民ボランティアの皆さんのが復元した見事な埴輪が展示されています。是非、大室古墳群を見学の際にはお立ち寄りください。それでは大室公園の史跡と赤堀茶臼山古墳の史跡巡りをご案内いたします。

前二子古墳と小二子古墳、九年にまづ九一年に後二子古墳と中二子古墳、九年と九六年に小二子古墳と六年間にわたって調査が実施されました。南北五〇〇m、東西一〇〇〇mの広がりを持ち、公園内には国史跡の大室古墳群や豪族居館跡といった遺跡のほか、江戸時代末期の赤城型民家や小学生が参加して復元した古代住居が復元されています。また、二〇〇七年には日本の歴史公園二〇選に選定されました。

自然豊かで新緑や紅葉が美しいほか、秋にはコスモス畑が一面ピンク色に染まるなど、一年を通して家族連れや観光客でにぎわいます。



図1 大室古墳群と赤堀茶臼山古墳

①前二子古墳

明治十一年に石室が調査されました。全長十三㍍の狭くて長い石室は、まるで黄泉の国への入り口です。石室からは土器・装身具・鏡・金めっきされた馬の飾り金具などの副葬品が出土しました。また、一八七八年に発掘されたときの詳しい記録

が実施されました。南北五〇〇m、東西一〇〇〇m



大室公園案内図

史跡前二子古墳等歴史活き活き！史跡等総合活用整備事業

大室古墳の教室 考古学講演会・講座の記録 1

発行日 2016（平成28）年2月29日
 発 行 前橋市教育委員会事務局文化財保護課
 〒371-0853 群馬県前橋市總社町三丁目11-4
 電話027-280-6511

